
もっと側について (続・ネット恋愛)

佐藤梨緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もつと側において（続・ネット恋愛）

【Nコード】

N9668E

【作者名】

佐藤梨緒

【あらすじ】

前作「ネット恋愛」の続編です。ネットで知り合った「カオル」と別れ2年経った頃からの出来事です。憧れの人と付き合えたはずなのに、お互いの価値観のズレが生じて気持ちが変わっていく「まゆ」と、気持ちを残したまま再会してしまった「カオル」とのその後展開。

すれ違い（前書き）

前作の「ネット恋愛」を見ていない方でも、内容は理解できるように書きました。お時間がある人は前作を見ていただけると、もっと楽しめるかと思えます。

すれ違い

陽射しが強くなってきた・

助手席に座り左腕に日焼け防止の為にタオルをかけた。

「暑いなあ〜 北海道なのにこんなに暑いので住んでいる意味ないよね？」

運転席で同じように暑さに顔を歪める健吾を見た。

「だよなあ〜 この時期は南極くらい行きたいよな〜」

「いや。そこは行きたくない」

そんな冗談を言い合いながら仕事の打ち合わせの為に朝から車を走らせていた。

運転席の健吾は約4年前に別れた元彼。

けど、今では一番の仕事での理解者としていつも一緒にいる。

基本的に二人一組として進むこの仕事でのパートナーが健吾でよかったといつも思う。

冗談を言っただけだが、仕事の際は尊敬できるくらい真面目だし、この仕事に異動させてくれたのも健吾のおかげだった。

「で。どうなのよ最近は？向田さんとは」

付き合っつて一年半になる彼氏の直樹のことを聞かれた。

「別に相変わらず・・・かな？最近あんまり会ってないけど」

「なんで？同じ会社だものために顔合わすじゃん。俺だつて会うぞ」

「いや、顔は合わすけどさあ。プライベートじゃ会ってない」

「なにそれ？もう倦怠期かよ」

「いや、ただ直樹が忙しいだけ」

付き合っつて最初こそはいつも一緒にいたけれど、だんだん時間が経つにつれ

お互い自分の時間が多くなっていた。

一年以上も経つと、そんなもんだな。そんなことを思っていた。

「ふん。あんなに劇的に付き合ったくせにな」

そう言っつて健吾はなにかを頭に浮かべて笑った。

劇的かあ・・・

遠距離恋愛をしていた彼がいたのに、直樹の出現ですっかり気持ち直樹に傾き、そのまま直樹にいつってしまったのは自分だった。

今でも当時の彼氏には申し訳ないことをしたと思っつている。

直樹の存在があつたからこそ、結婚まで考えてくれた彼を捨てた形になつてしまつた・・・はず。

けれど、やはり距離の壁に寂しさや不安があつたのも実際問題本当の所。たぶん・・・

「仕方無いじゃない・・・あの時あつちに行ってたら今ごろ仕事大変だったんじゃない？健吾一人じゃ」

「まあ・・・それはそうかもなあ」

「もつと感謝してもらわないとな。お昼オゴリね！お寿司にしよ
うか？」

「高いっつーの。ソバだな」

「うわ！やすうく　だから出世できないんだよ。部下を大事にしな
いから」

「うるせえな。俺はこれからの男なんだって。わかってねえな」

仕事もそれなりに上手くいき、ちよつと忙しすぎるが素敵な彼氏も
いた。
そんな毎日にそれなりに満足していた。

彼氏の直樹のことは入社以来、5年間も憧れていた存在だった。

たまたまタイミングが悪く、当時の彼氏を悲しませることになっ
たが、
時間が経てばいつも側に憧れていた人がいてくれることが嬉しかっ
た。

友達に紹介する時も自慢の彼氏で、
少し歳は離れていたが、かなり若く見えるその外見にみんな実際の
歳を聞くと驚いた。

みんなが驚いて「いいな」と言ってくれる時、いつも心の中では（いいでしょ？）と思って嬉しくなっていた。

元々直樹は仕事中心の生活だった。

暇な時があれば一緒にいてくれるが、仕事が詰まってくると徹夜のように会社にいる人だし。

そんな仕事一筋な直樹に入社当時、素敵な人だと憧れていたのに、付き合いとなると、仕事より一緒にいてほしいという気持ちに変わっていった。

もともと付き合い前からだって直樹はそんな人だった。

そこがく仕事に責任感があり大人の男で格好いい>とっていたはずなのに、あまりに仕事ばかりな直樹に

最近ではちよつとだけ不満に思っていた。

けど・・・文句を言えないのが世間で言う「惚れた弱み」な訳で。

夕方になり会社に戻り、出張先での仕事の整理をしていた。

健吾も結構な仕事人間だったが、やはり直樹よりはプライベートを大事にする人だった。

「さてと・・・そろそろ帰るかな。もう8時じゃん。まゆはもう終わるか？」

「うん。あたしもそろそろ終わる。暑かったから早くお風呂入りたい」

「だなぁ・・・ ベッタベタだよ。まいったな」
そう言いながら帰り支度をした。

ふとちよつと離れた直樹のデスクを見ると書類の山に埋もれた頭が見えた。

(今日も遅いのかなぁ・・・)

会社のほとんどの人があたしと直樹のことを知っていた。けど、お互い会社ではあまり仕事以外の会話はしなかった。

「公私混同してると思われると仕事しづらいと思うんだ」

直樹そうが言うから、直樹から話かけられる以外は、あたしからは仕事以外のことでは話しかけにはいかなかった。担当が違うこともあり、そうなれば会社で直樹と話すことはほとんど無かった。

ちよつと寂しい気持ちのまま、健吾と会社を出た。

自分の家に戻り、直樹にメールを送った。

<まだ終わらない？明日休みだから今日はうちに来ない？>

ちよつと時間があき、15分後に返信がきた。

<まだかかるかな？。たぶん明日も仕事になりそうなんだ。ごめん
な>

その返信を見て（やっぱりなあ・・・）そう思いながら携帯を置いた。

そんなことは付き合う前からわかっていたのに、あまり一緒にいてくれない直樹のことが寂しくなった。

仕事に波があり、集中して忙しい時もあれば時間に余裕のある時もある。

メーカーによつての締日に左右されながらの仕事だから、仕方が無いといえば仕方ない。

（それでも・・・最初の頃は無理してでも側にいてくれたのになあ・・・）

慣れと欲を感じた。

それでも我慢をしているのは直樹のことが好きだったから・・・

付き合っただばかりの頃は、側にいることが緊張した。

5年も憧れていた直樹の側にいられることに毎日がワクワクした。そのワクワクが少しずつ消えかかっている。

自分の側から離れてしまふんじゃないかという恐怖感に、

結局あたしは何も文句が言えなかった。

翌日。一人の土曜日が過ぎようとしていた。

メールや電話をしようと思ったが、邪魔をしてはいけないと思い、なんとなく家にいた。

直樹の家の鍵は貰っていたが、疲れていて迷惑なんじゃないかと思うと

その鍵を使うことができなかった。

きつと直樹から

「今日はうちで待ってて」と言ってくれるのを待っていたんだと思う。

もつと最初の頃は付き合ってた嬉しさで

「今日は家で待ってます！」と言って彼よりもちょっと下手かもしれない

料理を作って家で待っていたこともあった。

けど時間が経つにつれ、なんだか自分だけが空回りしているような気が

してきて、いつも顔色を伺うようになっていた。

思い過ぎかもしれないけれど、自分から何も言わない直樹に何を考えているのか不安になった。

(あたしと仕事・・・どっちが大事なのかなあ・・・)

そんなことを思いながら黙ってソファーに座っていた。

そんなこと・・・昔の彼氏のカオルに言われたな・・・

今になってきつと同じくらいカオルも寂しかったんだと思った。

あの頃のあたしは、仕事が異動になり早く仕事を覚え

なんとかみんなに追いつこうという気持ちで焦っていた。

そんなことを当時のカオルにわかってと言っても無理なことで、

仕事を辞めて自分の元に来てと言う彼にちゃんとした

自分の思いを伝えることができなかった。

今でもそのことは少し後悔してた・・・

けど、もう会うことが無い人だし、

(あれが若気の至りってやつなんだあゝ) そんな風に懐かしんだ。

ここのところ忙しくて

まともな料理を作っていなかったし、たまにはなにか作ろうかと、
閉店ギリギリのスーパーの中に入った。

カートを押しながら品定めをしていると後ろから、無駄に大きい声
が聞こえてきた。

「あ……土曜の夜に寂しい女発見！」

その言葉に振り向くと健吾がいた。

「自分だって！なにしてんのよ。家から遠いじゃない？こい」

「実家の帰り。今日はうちのお袋の運転手だったんだ」

「そうなんだあゝ。で、お弁当でも買おうとしてたの？」

「そんなとこ。俺が作るわけ無いだろ？コンビニも飽きたしな」

「じゃ、うち来る？一緒に食べようか」

「えゝいきなり向田さん来て誤解されないかあ？俺、嫌だぞ、修羅
場とか」

「ばっかじゃないの。直樹だって健吾のことなんか、なんとも思っ
てないよ」

「知ってるけどさ……」なんとも「って言い方酷くねえ？」

文句を言いながら後ろを着いてきた。

「一応、直樹にメールしておくよ。もしかすると来れるかもしれないし」

「ああ。そうだな。誤解されたら困るしな」

「だからそれは無いつて！管理人のオジさんのほうがまだ誤解されるよ」

「ちょ……お前人をなんだと思ってんだよ。ちきしょう……」

お互いワーワーと悪口を言い合いながら家に着き、直樹にメールをした。

<スーパーで健吾に会ったの。独り者に食事をご馳走することになったので、終わったら直樹も来ない？待ってるね>

「よし。たぶん今日は休日出勤だから、早く終わると思うから
きつと後から直樹来るね」
そう言っつて健吾に笑いかけた。

「向田さんも仕事人間だよなあ…… なにも休みまで仕事しなくてもな」

「昔からじゃない。そんなとこに憧れてたのもあるんだもん」

メールを送ったことで、久しぶりに直樹に会えると思うと、ちよつと嬉しくなっていた。

一人でいるから来て！と言うよりも健吾もいるからと言えば、きつと気を使つて直樹は来てくれると思つた。

「俺、今になつて向田さんが結婚できない訳がわかつた気がする・・・」

そう言いながらTVを見て言つた。

「え？なにが？」

「あの人さ、ルックスはいいと思うよ。優しいし、話も上手いしさ。けど、仕事になると周りが見えないんだよ。だから女に

逃げられるんじゃないか？最初はそんなのどーでもいいじゃん。

だけどさ、長く付き合つとやっぱり側にいてくれる人がいいもんじゃね？」

あの調子ですーと来てるんだも、そりゃ結婚できねーよ。38にもなるな」

痛い所を突かれた気がした・・・

「なんだかんだ言つても、まゆもそんな気がしてんじゃねーの？最初はお互い新鮮で、仕事より相手のこと考えるけどさ」

「でも・・・あたし達、付き合つ前だつてそうだったもん。健吾だつて知ってるじゃない」

「いや、知ってるけどさ。俺からしたら暇な時にだけお前に会つとか

そんな風に見えるってこと。あんまり大事にしてないなってさ」

「そう見えてたんだ……」

最近どうよ？とか言ってたくせにシツカリと見ていたんだ……
なにも気にしていないフリをして、料理を始めたが、
本当は（ウツ……）と胸が痛くなった。

「なあ〜？」

能天気な声で煙草を吸いながら健吾が言った。

「ん？」まだ軽く動揺しながら健吾のほうを向くと、

「返信こないな……」と言ってまた前を向いた。

傷口に塩を塗られた気分になった……

料理ができて直樹からメールの返信は来なかった。

気にしていないフリをしていながらも、テーブルの上にはしっかりと
携帯が置いてあった。

「あ〜。久しぶりに手料理って食べた。まあまあだな。

ちよつとは料理上手くなったんじゃない？俺と付き合ってる頃よ
り」

「そんなに昔、酷かった？美味しいって言ってたじゃない！」

「マズいなんて言えないだろ？一生懸命作ってるの見て〜」

「マズいまでいかないでしょう！まあ、確かに美味しいとも

言えなかったかもしれないけどさ……」

それほど得意じゃないことは自分でも分かっていたけど、面と向って言われると、ついムキになった。

「嘘だつて。たまには美味しいのもあつたつて！」

全面的にと言わないところが憎らしかった。

けど、なんとなく落ち込んでいるあたしを元気づけようとする健吾の優しさなんだと本当は知っていた。

「俺の時もこんな感じだったんだな。そう思うと反省するよ」

健吾との別れは、入社して健吾も仕事が少し慣れてきて

毎日、忙しかった……

休日もほとんど出勤し、二人の時間が減っていた。

何度か電話をしたが、忙しそうな健吾を少しずつ遠く感じ、自分からの連絡を途絶えた。

昔から仕事のセンスがある健吾は、上司に見込まれ付き合ってから2年目の春に道外に転勤になった。それで本当に終わったと思った……

その2年後に今の本社に戻り、こうして一緒に仕事をしている。

けど、もう健吾への恋愛感情は無く、

お互い仕事の良きパートナーとして、最高だと思っていた。

「もう忘れちゃったよ。でも、たぶん……こんな感じでフェイドアウトしたんだと

思うな。連絡もくれなかったしね」

そう言っで横目で睨んだ顔をした。

「そう思うと俺も向田さんのこと言えないな」

「本当だね。」「お前だけには言われたくない!」「っって言っと思っよ?」

そう言っで二人で笑った。

「けど、そうやっで失敗しながら良い相手探すもんだしな。

俺もあの頃には、そんなにまゆの存在は大きくなかったけど、別れて人の物になっで初めて気がついたこともあつたしな」

「っか、本人前にして「存在が小さい」とか言っか?普通・・・最低っ よかつたっ健吾と別れて」

「俺はカオルとまゆは絶対上手いくと思っでたんだよな」

でも大穴のダークホースに取られちゃったけどな。

あいつも馬鹿だよ。本当に・・・」

久しぶりに「カオル」という名を聞いたような気がした。

ちよっど夕方にカオルのことを考えていたが、人からその名前を言われると

懐かしさが現実になつた。

「カオルとまだ連絡とってるの?」

「ああ。今となつてはあのチャット部屋は無くなつたけど、

カオルとは電話とかしてるぞ。会社でもメッセで仕事中心か

ちよこちよこ話してるしな」

「そんなことして遊んでるの？あんだ達！真面目に仕事してると思ったら」

「いや、仕事のこと聞いたりとか。あいつPC関係じゃん。だからたまに聞くことあったりな」

「そっか。元気なんだね。よかった」

目の前にある健吾のPCの中にいつもカオルがいたとは知らなかった。けど、チャット部屋が無くなっていたことにも驚いた。

「そっか・・・もうみんなチャットとかしてないんだあ・・・
なんだか寂しいね。みんな元気かな？」

「まあ・・・原因は男と女がくっ付きすぎたんだろな。
カオルとお前が別れたことで、みんな驚いてたけど、
それからしばらくして、ラビとヒデも別れちゃったし、
ミライだっけ？それとハヤだかつてのも別れてさ、
それで人がめつきり減ってな。新しい人も何人かいたけど、
最初からやってる奴等にはなんだか、つまらなかつたみたいだな」

「そっかあ・・・あの頃は楽しかったなあ
仕事も暇だったしね。毎日定時だったし彼氏もいなかったし。
毎日やってたもんな」

「何事も最初は楽しいんだよ。深追いすると飽きるもんだしな。
今じゃカオルとヤスクらいかな。俺が連絡とってるのは」

ヤス…… その名前を聞いて可笑しくて吹きだした。
チャットを始めたのもヤスが作った部屋にたまたま入ったことから
だった。

そこにいろんな人がいて、友達になり、カオルにも会えた。

ヤスの女癖の悪さにカオルと気まずくなる事件もあった。

でも、どんな時でも女遊びを中心とした生活をしているヤスを
憎めない所があった。そんなキャラの人だったから。

「来週さ、ヤスコつち来るぞ？まゆも会うか」

「まだあの仕事続けてるんだ？頑張るねえ……」

「来週なら少し早く帰れるんじゃないか？ヤスなら会ってもいいだ
ろ？」

「一緒に行かないか」

「うーん……でも、一応直樹に聞いてからにする。
心配かけるの嫌だから」

その言葉を聞いて、真面目な顔をして健吾が言った。

「お前はいつも相手のことを気にしすぎるんだよ。直樹！直樹！って
お前が思ってる以上のことしてくれてるか？

なにが「遠距離は壊れやすい」とか言っちゃってさ、今だって
遠距離みたいなこと平然としてるじゃん。自分だって……」

「別に健吾が怒ることないじゃん……」

「いや、俺は未だにあの時、向田さんさえ現われなければ

お前とカオルはうまくいってると思ってるんだって。けど、お前が憧れてたって聞いて、一旦は納得したけどよお・・・それがこれだぞ？納得いかね。絶対！」

「だからお前が言うなと！同じことしたくせに」

そう言っただけで健吾を見て笑った。

健吾も笑ってはいたが、そんなことを考えていたと知ってちょっと驚いた。

「なんだかさ、俺にとってお前は妹みたいなもんなんだよ。悪いところあったらガンガン気にしないで言ってくれし、仕事だってサポート以上のことしてくれてる。

もう一度、今度こそ幸せにしてやりたいって思ったけど、俺じゃないなと思ったしさ。もうそんな関係じゃないって・・・さすがに真面目に笑わないでお前なこと抱け無いしな」

「まだ抱くとか言ってるの？なんか気持ちわる」

「気持ち悪いとか言うなよ！人が良いこと言ってるのに！」

二人で声を出して大笑いをした。

けれど、そんな笑いの裏であたしは直樹からのメールの返事を待っていた。

健吾が帰った後、黙って携帯の<AM0:05>の表示を見ながらため息をついた。

(まだ仕事なのかなあ・・・)

気になるのなら電話をすればいいのに・・・
そんな遠慮が二人の仲を遠ざけているとは思っても、
行動にうつせない自分がいた・・・

久しぶりのヤス

一週間後。

「今日早く終わるだろ？ヤスと飯食いにいこうぜ。」

お前運転な。俺飲むから帰り送ってくれよ」

もう話が決まっていたかのように、健吾が言った。

「でも・・・まだ直樹、、じゃない向田さんに言っていないから・・・」

「ダメなんて言う訳ないだろ？じゃ、聞いてこいよ、あそこにいるだろ」

健吾の視線の先に、書類に書き込みをしている直樹の姿があった。周りに人がいないのを確かめて側に行った。

「あの・・・向田課長、ちょっといいですか？」

「ん？ああ。まゆか、どうした？」

呼び捨てにされ、慌てて周りに人がいないか見た。

「誰もいないよ。今日はみんな出張だから。どうした？」

なにかわからない所でもあった？」

レンズだけの眼鏡を外し、目を軽く押さえながら言った。

「大丈夫？なんか疲れてるみたいだけど」

「ん・・・ちょっと量が多くてね。なかなか思った通りには進まないよ・・・」

そんなあたしを見て、健吾は

「なんて？」と聞いた。

「行つておいで」って……「そうしょんぼりした顔をした。

「なんだよ……行くの嫌ならいいよ。OKもらつてその顔って……」

「ううん。行く……暇だから」

「暇だからって！まあ、いいや。俺も帰り困るしな。じゃ、今日は6時で

帰ろうぜ。それまでに仕事終わらせておけよ」

そう言つて自分もデスクに向つた。

なんとなくガツカリした気持ちのまま仕事を始めた。

本当に信用をしてるだけなんだろうか……

もう飽きられてしまったんじゃないかと少し心配になった。

少しだけ重い気持ちのまま時間は過ぎていき、

定時を少し過ぎた頃、健吾が帰り支度を始めていた。

「じゃ、そろそろ行くぞ。用意いいか？」

健吾に言われ、パタパタと書類を閉まっていると、ちょうど後ろを直樹が通つた。

「マツ、まゆのこと頼むな。飲むと寝ちゃうからアルコールは飲ませないでな。」

俺の彼女はレンタル料高いからな。今度オゴつてくれよ」
そう言つて健吾に笑いかけ、どこかに歩いていった。

「は〜ん・・・俺の彼女ねえ・・・都合のいい時しか会わないくせに〜」

そう小声で呟き「行くぞ」と言っただけで歩きだした。

直樹の言葉にちよつと嬉しくなったのに、健吾の言葉にスタート地点より気分が落ち込んだ。

車を運転しながら、

「ねえ・・・あたしって都合のいい女なのかなあ？」と健吾に聞いた。

「いや、その言葉に本当に当てはまるような都合のいい女とは

ちよつと違うけどさあ・・・けどまあ、向田さんにしては都合のいいと

思わないでも無いな」

「そっか・・・」

「まあ・・・なんだ・・・別に他に女がいる訳じゃなし、そうへこむなっつて」

8時過ぎにヤスとの待ち合わせの場所に着き、店に入ると窓際の席にヤスがいた。

2年ぶりに逢ったヤスはさほど変化は無かった。

「よ！久しぶりだな。リオ！」

懐かしいチャットをしていた頃のハンドルネームで呼ばれ恥ずかしくなった。

「リオだったんだよな。ハンドルネーム・・・プツ・・・」
そう言って健吾が隣で笑った。

「いいじゃない。ネットの世界はそんなもんなんだから！」
そう言って席についた。

「で。どうよ。最近はいきなりそんな話題から入る所がやっぱりヤスだと思った。」

「これがヤツてないのよ。彼が仕事忙しくって」
あたしより先に健吾がヤスに言った。

「うるさい！馬鹿じゃないのあんた達！」

メニューを見て話をそらした。

食事をしながら、ヤスと健吾は仕事の話をしていた。
仕事の話なら入れると思い、3人で話を続けた。

「しかしなあ・・・リオがバリバリに仕事するとはな」
ヤスが思っていなかった！という顔をして言った。

「昔から、センスはあると俺は思ってたよ。なんでも最後まで
キツチリやるとこあったしな」

なにげない健吾のフォローは嬉しかった。

「仕事も男も上手くいってたな。よかったな」

「うん。そうだね」

仕事は上手くいってるが、はたして男が上手くいってるのかは

かなり微妙だと思いながらも頷いた。

「この前の葬式でさ、カオルの妹可愛いのかな。でも俺には紹介しないって」

「言いやがってよ。あの野郎！まったく友達甲斐の無いやつだよ」
健吾に不満そうに言うヤスの言葉に顔をあげた。

「葬式って？なんでカオルの妹に逢ったの？」

「カオルの母さんの葬式だよ。まあ・・・リオには言わないだろうな。元カノに言っても仕方無いだろ？」

「いつ？最近？」

「もう一ヶ月くらい前かな？俺、焼香とかわからなくてさ」

まだヤスはペラペラとしゃべっていたが、頭の中には怖いカオルのお母さんの顔が浮んだ。

「一度しか逢ったことは無かったが、仕事が異動になったばかりのあたしに」

「そんな仕事ばかりしてるのは困るから辞めてカオルの側に来なさい！」

「将来結婚したら同居なんだから」と怒った顔が浮んだ。

「いまだ同居なんて・・・そんな理由でもカオルとの別れが早まったのは事実だった。」

「あの・・・カオル大丈夫だった？」
ヤスの話を止め、言った。

「ああ。まあ、自分の親だからな、そりゃ落ち込むけど、俺達の歳じゃ

そろそろそんなのがあってもおかしくは無いだろ？病弱だったって言ってたしな。癌だったさ」

「そうなんだ・・・」

もう関係無いとは思ってもなんとなく悲しい気持ちにはなった。やっぱり人が死ぬということは嫌なものだ・・・

「会ったことあるんだっけ？」健吾がそんなあたしを見て言った。

「あ・・・一度だけね。ほんの少しだけど・・・」

「親にも紹介したのに、別れたんだもんな」

あれは驚いたよな。あんなに「体の相性がいい！」ってお互い言ってたのにな。いろいろ教えてもらったし「そう言うてヤスが笑った。」

「そんなに？よかったんだ・・・」健吾が笑ってこっちを見た。

「あたしは言っていない！お互いとか言わないでよ！」

カオルと今でも連絡を取っていると言うことを思い出し健吾の顔を見た。

「健吾、知ってたの？カオルのお母さんが亡くなったこと？」

「ああ・・・でも、まゆに言うことじゃないだろ？いまさら不思議な顔をしながら言った。

確かにそうだけど・・・

目の前で健吾とヤスはワイワイと話をしていたが、あたしの頭の中には
カオルのお母さんのことでいっぱいだった。

「……なんだよな？」

なにか聞かれたと感じ、「え？」と健吾を見た。

「なに？ポ―として。向田さんが歳より若く見えてカッコイイって話」

「ああ……うん。そう……」そう言っただけだった。

「あいかかわらずシレッと惚気るな」ヤスがニヤニヤして笑った。

「でも、俺は認めない」また健吾がこの前の話しを蒸し返しムツとした顔をしていた。

「もう……その話はいいじゃない。あたし直樹のこと大好きよ？」

「ふ〜ん。そんなに年上ならさぞ素敵なテクニクもあるんだろなあ……」

ヤスの顔が一段とニヤニヤとし、健吾までその顔は伝染した。

「ああ……そういうことか！だからお前、向田さんの言いなりなんだ？」

呆れた顔をして二人を見て、話を無視した。

「ねえ。ヤスはもうみんなと連絡してないの？チャットしてた時の」

「俺？してねーなあ〜 カオルと健吾くらいか？カオルはヒデとも連絡とってるみたいだけどな」

「そつか・・・今度ラビに電話してみようかな？全然連絡してないしな」

「そうだな。今度東京に行った時でも会ってみたら？」そう健吾に言われ

「うん。そうしてみる」と答えた。

ちょうど話が切れた所に携帯にメールが入った。

それを見て、健吾が

「男と会ってるって思うと、連絡してくるんだな。そんなに心配ならもっと普段から大事にすりゃいいのに」と見てもいないのに直樹のメールだと決め付けた。

メールを開くと祐子さんだった。

祐子さんはカオルの上司で付き合っていた頃に2、3度会ったことがあり、

なんとなく気が合うなと思った。

竹を割ったような性格と言うのがピッタリの人で、

カオルと別れてから、東京に出張で行くことがあり、

そこで偶然再会し、それからカオルには内緒で今でも連絡をとっていた。

<今度東京にいつ来る？ちょっと話があるんだけど時間あるかな？>

「直樹じゃないよ。友達からだった。ねえ？今度の東京行きっていつだっけ？」

まだスケジュール貰ってないけど。ちょっと会いたい人いるんだ、

日にちわかるかな？」

「そうだなあ・・・一ヶ月以内にはあると思うぞ？まだハッキリしてないけど。」

「て、誰？男？」

「うん。女」

「可愛い？」すぐさまヤスが聞いた。

「うん。綺麗だよ？40過ぎだけど」

「おっと、それは無理！」と速攻断った。

「ごめん。ちよつと電話してみるね」そう言って返信を打たずに電話をかけた。

「もしもし？まゆです。今いいですか？」

「あ。ごめんね」ちよつと、まゆちゃんの仕事のことでも聞きたくてさー」

「祐子さんがあたしの仕事を？」

「うん。雑貨とかのことです。まゆちゃんの専門でしょ？」

「ああ・・・まあ。そうですね」

「いろいろメーカーとか知ってるよね？」

「ええ・・・それが仕事ですから」

「ちよつと助けて欲しいの。今度来た時ゆつくり話すわ！」

「はい。じゃあ・・・一ヶ月以内には行くけど間に合います？」

「うん。わかったー。じゃあ決まったら教えて。電話ありがとねー」

相変わらず忙しそう感じて電話は切れた。

なんだろう？祐子さんがなにか雑貨が欲しいのかとその時は思った。

「仕事の話？」健吾が不思議そうに言った。

「うーん？なんだろう？まあ・・・いいや。次の時ちよつと逢って聞いてくる」

ヤスと健吾はかなりの飲みっぷりで騒いでいた。

結構な時間になり、ヤスもホテルに戻っていき、私は酔っ払いを助手席に乗せ、

元来た道を走った。健吾はお酒好きなくせに弱く、いつも泥酔だった。

「あゝ なんだかムカつく」ブツブツと健吾が文句言いながら隣で騒いでいたが、酔ってる人になにを言っても無駄なので

「はいはい」と軽くかわしそのまま走った。

健吾の家に着き、ヨロヨロしている健吾をベットに放り投げ、布団をかけて家に戻ってきた。

自分の家の電気はやはり消えていた。

ちよつとだけ直樹が家に来てくれていたらいいなと思ったのに、それは期待はずれだったようだ。

電気をつけ家に入り、

（倦怠期かあゝ）と思いながらシャワーに入った。

彼氏がいるだけいいのかな・・・そんなことを思いながら髪を乾かした。

時計を見ると12時だった。

ふと思ひ出し、ラビの電話番号を押した。

「もしもし?」

「どちらさまですか・・・」かなり怪しんだ声が聞こえた。ラビと最後に電話をしてから、もう1年半くらいは裕に経っていた。携帯を新しくしてから始めてだったので、こんな遅くに知らない番号からの

電話に出てくれただけありがたかった。

「あの、まゆだけど・・・ラビ?」

「ええー!まゆうー!どうしたの?携帯変えちゃってー」

「私何回も電話したんだよーでも誰も番号知らなくてー」

「ごめんごめん。いろいろあつてさ。ほら、カオルと別れた時に携帯変えちゃったの。ごめんね。連絡しなくてー」

「うんうん。いいよー やっと連絡とれたしー」

そんなに感激してくれて嬉しかった。

それからお互いの近況や、カオルとの別れ、直樹のこと、ヒデとの話、

延々と3時間ほどしゃべっていた。

途中でバッテリーが切れそうになり、二人で慌てて充電のコードを繋いだ。

「そつかあ・・・やっぱり向田さんに行っちゃったかー。でも幸せなんでしょ?今は」

素直にそう答えることができなかった。

そして今の状態ちよつとだけ伝えた。

「でも、一緒の会社だしさ。顔が見れる訳なんだからさ。あまり贅沢言わないの！」そう言ってラビは笑った。

「でね。次の出張の時にラビに会いたくなって思ってた電話したの」

「うん！いいよ！じゃあうちに泊まりにおいでよ！

私もサクラとはもう連絡とってないんだけど・・・連絡したほうがいい？」

「ううん。いいよ。元々サクラは普通の彼氏いたんだし、今となっては連絡もらっても迷惑かもしれないし」

「普通の彼氏って・・・」そう言ってラビが笑った。

お互いネットで知り合った彼氏のことを笑いながら、「でも人に言う時困ったよね」と言った。

ラビに新しい携帯のメールアドレスを教え、出張が決まったら電話すると

伝え電話を切った。

久しぶりにいろいろ話せて、満足した。

次の出張は忙しいな！仕事以外のことが！
そう思いながらベットに入った。

ヘッドハンティング？

9月の前半に珍しく長めの5日間東京に出張があった。

そしてこちらも珍しく・・・出発前日、直樹はうちに泊まっていた。この一ヶ月で二人で過ごした日は、ほんのわずかで、縮めても合計3〜4日にしかなかった。

「それじゃ・・・行ってくるね」

そう言っただけで起きたばかりで新聞を見ている直樹に声をかけた。

「うん。気をつけて行っておいで」

いつものクールな言い方で、ニコリと笑った。

「もっと寂しいとか言ってくれないの？」

「ん？寂しいよ」そう言っただけで頭を撫でた。

「そうかなあ・・・そんな風には見えないなあ・・・」

「じゃあどうすればいいの？」

「うーん・・・」どうって言われてもなあ・・・

「昨日、久しぶりに頑張ったんだけどなあ〜満足しなかった？」

「そっちの話じゃない！」

「ほら。マツが待ってるよ。じゃーね」そう言って玄関まで見送り額にキスをして送り出してくれた。

迎えに来てくれた健吾の車に乗り、空港に向った。

「向田さん泊まりに来てたんだ？」

「うん。昨日はちょっと早く終わったみたい」

「昨日、日曜だぞ？いつ休んでるんだよ・・・あの人」

「年中無休なんじゃない？」そう言っつて、さっきの（どうすれば？）を
を
考えていた。

「昨日ヤツた？」ニヤけて聞く健吾に、

「うるさいバカ！」と言っつて缶コーヒーを飲んだ。

羽田に到着すると、ムツとした湿気を感じた。

「まだ暑いなあ・・・こっちは」そう言っつて健吾が渋い顔をした。

「今日何時に終わる？あたし友達に会いたいんだけど」

「あー。たぶんそんなに遅くないぞ？ラビ？」

「うん。今日は違う人。初日のほうが早く終わると思って」

「そっか、ラビに会う時、俺も行っつていい？」

「うん。いいよ」

「俺は明日、カオルに会うんだ。ここしばらく会っつてなかったし」

「そっか・・・」

その日の仕事を5時で終わらせ、祐子さんに電話をした。

「あ。まゆちゃん？待っつてたのよー！じゃあ何時がいい？」

「あー。もう終わりましたよ。あたしは」

「あら。じゃあどうしようかな。会社に来てほしいけど、
矢吹君に会わないとも言えないしな」

「じゃあ、いつものレストランに行ってます」
「そうね。6時過ぎには行くわ」

少し時間を潰し、いつも祐子さんと食事をするレストランに行った。そのレストランは祐子さんの会社のすぐ近くだった。

あまり遠くだと祐子さんに悪いし、自分もさほど東京に詳しくないので、

そこにした。

レストランに入り、アイス珈琲を頼み、たまたま祐子さんの会社の入り口を見ていた。

いつも座るその窓際の席は会社の入り口がちょうど良く見えた。

（あ・・・あの人結構、カッコイイな。あたしの超タイプ）

そんな感じで外を見ていた。

その人は私の座っている窓際の席に続く道を真っ直ぐに歩いてきた。

（ん。やっぱりこの人なかなかイケて・・・うわ！カオルだ！）

そう思った瞬間テーブルの下に隠れた。

我ながら怪しい行動だとは思ったが、そんなこと考える前に体が動いていた。

ウェイター達が変な人を見る目でこっちを見ていたが、そんなことお構いなし！

こちらら非常事態なんだから！

通りすぎたのを確認して、何事も無かった顔をして座りなおした。
過ぎ去った後姿を見て、

（ちよっとだけ変わったな・・・）そう思いながら、久しぶりの元

彼を見ていた。

30分ほどしてから、祐子さんが来た。

「ごめん！ごめん！待った？」

「あー。30分くらいです。それよりさっきこの前をカオルが通りました！」

「そりゃ通るでしょうね？だって駐車場あっちだもん」

「ビックリしたー」

「あっちも会ったら同じこと言っわよ」

席に着き、取り合えず一服・・・といった感じで祐子さんはバックから煙草を

取り出し火をつけた。

「で。この前の話なんですか？」

「ああ！そうそう！あのね、まゆちゃんてさー 仕事好き？」

「好きって？なんでまた？」

「いやね、望月と会社立ち上げるの。あたし達」

「わー。すごーい！かっこい〜。で、なんの仕事？」

「今の仕事がITじゃない？で、今って通信販売の仕事って結構いいよね。」

私も前々からいいなって思ってたの」

「あゝ いま結構すごいですよね。あたしもよく買いますよ」

「でしょ？でね、いろいろ調べて他とは違う商品にしたいのよ。」

安けりゃいいってもんじゃなくて、もっとこう専門的な品質の良
い物を

扱いたい。雑貨だけじゃないんだけどね」

「はあ・・・なるほど・・・」

「でも、ネット業界には顔がきいても、いざとなると入れてくれる問屋に知り合いがない訳よ・・・ちよっとしか知らないし」

「まあ・・・普通は店から買うのは普通の買い方ですからね」

「バイヤーみたいなことしたことないからさー」

で、ずくとまゆちゃんの仕事の態度とか見てて、真面目でいいと思ってたの！

仕事好きだし、キッチリやるし、責任感あるし！可愛いし〜スタイルもいいし〜優しいし〜」

「祐子さん・・・」

「なにになに？」

「早く本題言ってくださいよ。気持ち悪い・・・」

祐子さんが褒めちぎる時は決まって、なにかある時だ。

望月さんがまた結婚！結婚！とうるさいから、なんとかしてくれとか、

自分の仕事の接待に一緒に連れていかれたこともあった。

「だからー！私達の会社に来てほしいの！ダメ？」そう言って小首をかしげて可愛らしく言った。可愛くなかったけど・・・

「えええー！ダメ？とか可愛いフリして言ってるけど、

それって大丈夫なんですかあ〜？いざこっちに来て速攻倒産とかになったら、あたしどうすればいいんですか？」

「それは大丈夫よ！もし倒産になったらまゆちゃんの仕事は私が責任もって見つけるわ！」

「いやいや、だって東京でしょ？そんな〜」

「やっぱりダメ？もう絶対まゆちゃんて決めてたの！」

ほら、信用ある人じゃないとダメじゃない？こーゆー小規模の会社って。

でね、望月も今、いい人ヘッドハンティングしてるんだけど難航しててね。私は絶対まゆちゃんだと決めてるのよ！」

「ちよつと待つてくださいよお〜 あたしそんな大きなことデキないですよ。」

バイヤーって言ってもそんなにたいしたことしてないし・・・それに、彼氏だってOKしませんよ。遠距離反対派だもん」

「それは私が説得するわ！軌道に乗ったら、まゆちゃんは戻ってネットで仕事すればいいし」

「それってどれくらい期間ですか？軌道に乗るって・・・」

「それは〜 え〜と・・・売れたらよ！」

「超アバウトじゃないですか！！ダメですよ。ダメ！」

「お願い！考えるだけ考えてみて！まだ望月には私が説得する相手がまゆちゃんだとは言っていないから、もし断ってもそれほど問題無いから。ね？」

「いやあ・・・無理だと思いますよ・・・ あたし今の仕事辞める気は

まったく無いし・・・それに東京って!」

「いやね。それは確かに覚悟がいると思うのよ?

でも大きい会社にはできない、小規模ならでは心のこもった
素敵な会社にしたいのよ。私は40歳過ぎて

こんな冒険するんだから、まゆちゃんなんかまだ何回だって
やり直し効くじゃない!私の夢に力貸して!」

夢に力貸してと言われても・・・

(確かに祐子さんには力になってあげたいけど、ちょっと、無理か
もお〜)

けど、祐子さんの熱弁は止まることを知らず、その日は延々と何時
間も説得された。

まるでねずみ講か宗教の誘いのように。

「いやでもね・・・祐子さん。会社を経営するなんてそんなに簡
単じゃないですよ?

それも二人でつて・・・失敗したらどうするんですか?」

それは本心だった。

望月さんだつてもう40歳を過ぎている。祐子さんだつて・・・

仮にあたしが力を貸したとしても、成功するとは限らない。

むしろ失敗すると思っていたほうがいいかもしれない。

世間はそんなに甘く無いと思った。

「でも、これが成功したら今度こそ結婚しようと思つた・・・」

真に迫る言い方をした。

「今の会社で長いこと管理職をしていたけれど、だんだんと二人とも組織に流されているって感じていたの。言われたことだけを毎日こなすだけの仕事なんか、もうウンザリなのよ・・・
いい事をしようとしても、上の指示で潰されたり。」

部下が自由にできるような環境にしたいのに、できない歯がゆさとか。

やろうと決めた時に動かないと、5年しても10年しても無理なのよ。

「今しないと5年後に「あの時していればもう5年経ってるのに」

10年後に「あの時していればもう10年経ってるのに」

そう思うの嫌なのよ・・・ 今やらないともう出来ないのよ・・・

「・

「少しだけ言ってることに納得した。」

「今やらないといけない事をモジモジしていると、

後から後悔するということは身に染みてわかっていた。」

「祐子さんの目が滲んでいた。きつと本気なんだとそれを見て感じた。確かにいい案かもしれないけれど、その手伝いにあたしを選ぶのはあまり適切じゃないとも思った。どう考えてもあたしの責任が大きく流れができて、肝心なのは商品だと思った。」

「でも・・・あたしじゃ、力不足だと思いますよ？」

「私こう見えても、面接とかで間違った人選したことないのよ。」

「それだけは自信あるの。私を信じて！」

「だって一緒に仕事したこと無いじゃないですか・・・」

「そんなに言い切っていいんですか？あたしのこと過信してますよ。」

「大丈夫！望月だって違うバイヤーを探してるの。
だからその人とお互いに助け合えばもっと良い仕事できるわ！
彼も人選にはかなりの信頼があるの」

あたしは本当に流されやすいと思った。

こんな時、ハッキリと断れない……

直樹が最初に彼氏がいるのを知って誘ってきた時も、

今となつてはまんまと直樹の戦略にハマられたところがあった。

押されると弱いのである……

「あの、ちょっと考えさせてください。かなりの距離の移動もあるし、

いきなり仕事辞めることもできないし……

それに、彼氏のこともあるから。彼、絶対遠距離は嫌いなんです。

昔、それで彼女と別れたことあるから……」

「うん……それはまゆちゃんの決めることだもんね……」

そう言つて祐子さんはちょっと落ち込んだ顔をした。

でも、直樹と別れることは考えていなかった。きっとこの話は最終的に断ることになるだろう。

だからできるだけ期待させない言い方をしたつもりだった。

「彼氏は元気？」

いきなり話題を変えて祐子さんが聞いた。

なんとなく強がって、話題を変えたように感じた。

「あ……まあ。元気です」

その顔を見て、なんだか可哀相な気分になった。
これほど仕事の面で全面的に信用してくれるのに、力になれないのが
申し訳なくなつた。

「結婚するの？」

「いえ、そんな話は全然無いです」

「でも、もう結構歳でしょ？彼」

「そんな言い方しないでくださいよ」

本当のことを言われて痛かつた。

「そうなんだ。実はもう考えてるかもね。でも男は女と違って

歳とつても子供は産ませることができるもんね。まゆちゃんさえ
若ければ」

「彼が60歳ならあたし48歳です。もうダメじゃないですか・・・」

「あら？私あと数年でその歳よ？もうダメってこと？」

「あ。いや、、、大丈夫です。全然大丈夫です！」
そう言つて二人で笑つた。

「じゃ、そろそろ帰ろうか。ごめんね。こんなに遅くなつちゃつて。

明日大丈夫？」

「はい。問題無いです」

「じゃあ・・・あの、彼氏に聞いてみて？もしまゆちゃんさえ良
ければ

私、一度彼に話してもいいから。

私の一生がかかってるんだから死ぬ気でお願いするから」

「あ……わかりました。一応聞いてみます……」

「ダメよ！一応じゃ！お願い！」

眼力が違った。さすが部長にまでなる人だとちよつと感じるくらの勢いがあった。

珍しく一滴も飲まない祐子さんを初めて見た。

やっぱり仕事の話じゃ真剣なんだな……

次の日、そんな話を健吾にする訳にもいかず、一日が過ぎた。ちよつとだけ健吾になら言ってもいいかな？と思っただが、健吾よりも直樹に先と言っべきだと思ひ黙った。

その日、健吾はカオルに会うと言って出かけていった。

また健吾は余計なことを言わなきゃいいな……

そんなことをちよつとだけ思った。

今の直樹との状態を間違つてもカオルには知られなくなかった。

あんなに最後、大泣きして別れたくせに、

今、仕事ばかりの直樹に一人で寂しくしてると思われるのが嫌だった。

嘘でも「すつげえ幸せそうだよ」と伝えてほしい……

けど、健吾は直樹のことをあまり良く思っていないと知ってしまった今、

そんなことは頼めなかった。

けど……たまに会う直樹はよくよく考えれば、冷たい訳でも

倦怠期みたいでも無かった。

最初の頃と変わらず優しく接してくれる。
ただ忙しいだけなのに、そんなに不満を言っ
てごめんねと
毎回会う度に思っていたのは本当だった。

あ！わかった！

(どうすればいい?)と言っていた回答がそんな時、頭に浮んだ。

<もつと本音を言っ
て欲しい>

疲れているくせに「疲れた」と自分からは絶対言わない。

せめてあたしの前では力を抜いて欲しかった……
帰ったらそう伝えよう。

そうすれば、もつといろいろ助けてあげることができると思った。
そんなことを思いながら、その日は眠った。

4日目の夕方。

「あたしはラビの家に泊まるけど、健吾どうする?」

「俺も泊まる?3Pとか」

「お前来るな!」

「俺は帰るつてば。本当はカオルも来たかったような顔してたなあ」

「そうなんだ……でもなあ、もうちょっと時間欲しいかな」

「いや、でもカオルも忙しいつてさ」

「そっか。そのうち会えたらいいな」

そう言っ
てこの前見かけたことは言わなかった。

「そうだな。カオルも会いたくなって言ってたぞ」

そう聞いてちよつとドキツとした。

でも流されやすいあたしの性格じゃ会わないほうがいいと思った。きつとカオルを見たら、またいろいろ考えてしまいそうだから。

「そうなんだ。そのうちね」

そう曖昧な言い方をして、二人でラビの家に行った。

久しぶりに会ったラビはちよつとだけふっくらとしていた。

今は彼氏がないから募集中と言って笑った。

「健吾いいんじゃない？」

「えー。だってまゆと付き合ってたもん」

訳の分からない答えだけけど・・・きつと健吾はラビのタイプじゃないんだろっなあ。

ラビはガツチリした人が好きだから。

その日、結構遅くまで健吾も楽しく飲んでいた。

11時過ぎに健吾が帰り、ラビと久しぶりにゆっくりと話をした。

「ヒデとも最初こそ上手くいったんだけどね。でも、やっぱり性格とか合わなかったんだよね」

「そっか。仕方無いよね。そればかりは直せないもん」

ちよつと寂しそうな顔をしたラビにそれくらいしか言つ言葉が無かった。

少しだけ直樹があたしに素直に甘えてくれないのは

自分の性格に問題があるのかな？と考えた。

次の日、帰る支度もあるので早々にラビの家を出る準備をしていた。

「そういえば、私この前カオルを見かけたんだー」

「へえ・・・そうなんだ？」

「うん。女の子と歩いてた」

一瞬だけ胸が痛くなった。

いまさら、なんだよという感じだったが、聞かなければよかったと思っただ。

きつとカオルならすぐに彼女はできると思ったけれど、それを知る知らないは別だった。

頭の中にはいつまでも、自分のことを好きでいてくれた時のカオルだけを考えていたかった。

「そ、そうなんだ。彼女できたんだね。よかったね」

「そうだねー ちよつと派手めだったけど、まあお似合いだったよ」

「ふん・・・」

内心動揺していた。

「カオルもまゆも好きな人できてよかったね」

「うん。そうだね、じゃ、また東京に来る時連絡するね。じゃーね」

そして言って逃げるようにホテルに戻った。

できるものなら耳を塞いで「わー！！」と叫びラビの声を聞こえなくしたかった。

かなり危ない人に思われそうだけど・・・

一旦、聞いてしまった記憶はなかなか消せず、帰りの飛行機の中でも延々と頭の中で回っていた。

昨日の寝不足があつたので会社には寄らずに

真っ直ぐ健吾に送ってもらい家に帰った。

テーブルの上に直樹の書いた手紙があり、それに目を落とした。

「おかえり。疲れたと思うので、今日はゆっくり休んでください。

日曜は休みます。明日の夜、うちで待っていてください。 - 直樹
」

その手紙を読み、気持ちが少し落ち着いていた。

「ただいま」と直樹にメールを送った・・・

正論

土曜の夜、直樹の家で帰りを待ちながら、

朝からどんな料理が喜んでくれるか本を見て考えていた。

あたしなんか頑張ったところで、直樹が作る料理には敵わないけれど。

「一人が長いとなんでもできるようになってね」

そう言っていた直樹が作る料理はお金が取れるくらいだといつも感心した。

忙しい中、時間を作ってくれ、たまに料理をしてくれるどこまでも理想な人。

あまりに完璧で、幻滅することが無いように思えた。

どこかしら人間臭い所があってもいいのにと感じるくらい。

「直樹ってロボットみたいだね」

そんなことを言うあたしに、

「まゆは発想が面白いよね。でも俺、ロボットになりたいな。

そうしたら24時間寝ないでも動けるし。

12時間仕事しても12時間まゆといれるのにな」

その言葉を聞いて、

(それでも12時間は仕事に行っちゃうんだなあ・・・)

なんとなく仕事という見えない物体にヤキモチをやいた。

「せめて仕事は8時間であたしが16時間だな！」

「それじゃ今の仕事の時間と変わらないよ。意味ないでしょ？」

「あたしといるのが意味無いんだ・・・」
「いや？そんなことないけどさ」

その後の言葉を期待したのに、それ以上はなににも言わなかった。でも実際の毎日は仕事が12時間でロボットになった時の予定通りだった。

いや、きつと毎日15時間は仕事にとられてる。
だからといって残りの9時間はあたしと一緒にと言うと違う。

ロボット説自体に意味が無かった。

そんなことを思い出しながらボケーと家で待っていた。

休日出勤だというのに、直樹が家に戻ってきたのは夜の11時過ぎだった。

「遅いなあ・・・」そう言って玄関で出迎えた。

「ごめんね。これでも途中でやめてきたんだよ？まゆが待ってると思ってる」

「そんなに忙しいの直樹だけだよ？もつとパートナーに仕事を分担したらいいじゃない。健吾なんか7割振ってくるよ？」

「そりゃ俺の彼女は優秀なもの」
そう言ってギュッと抱きしめ頭にキスをして部屋の中に入っていた。

いつも話をはぐらかすんだから・・・
そう思いながら部屋の中に着いていった。

「あ。ご飯作ってくれたんだ。ありがとね」

そう言いながら冷蔵庫からビールを出して飲んだ。

(ウマツ!) そう言いながらテーブルにつき、ご飯を食べていた。

「東京どうだった? なにかいい物あった?」

口を動かしてニコニコしながら聞いてきた。

「うん。まあまあかな。そう言えばさ、東京でバイヤーの知り合
いっている?」

直樹が「こいつはデキる!」と思うバイヤーがいるならば、
その人を祐子さんに紹介できると思った。

「東京かあ・・・いないな」アツサリと言い切った。

「えっ・・・いないの?」

「だって俺達自体がバイヤーでしょ? 知ってるのはメーカーだもん」

そう言われればそうだと思った。

自分ももう2年近くになるが、他のバイヤーに会うのはメーカーの
会社に行った時くらいだった。

チラッと見るだけで、話をする訳じゃないので知り合いにはならな
い。

「友達に会ったんでしょ? 泊まるって言ってなかった」

「うん。久しぶりに会ったよ。面白かった」

「そっか。よかったね」

それからラビの話を教えてあげた。

「うんうん」とニコニコ聞いてくれる直樹に、いろいろ報告をした。

食事が終わり、一緒に片付けをしようとする直樹に

「いいからお風呂入っていいよ」と言うと

「いいよ。手伝うから。たまにしか一緒にいけない償いで」と笑った。

結局直樹は隣に立ち洗い物を手伝ってくれた。

「直樹ってさ…… もっとわがまま言ってもいいのに」

「十分わがまましてるじゃない。いつも側にいてあげられないし」

それは本人は自覚しているんだな……

「もっとあたしに何かして！とか無いの？」

「なにかって？」

「うーん…… あたしに不満があるならそれとか」

「別に無いけど？」

「なにかあるでしょ？一つくらいは」

「無いなあ…… まゆはあるの？俺に」

「んー…… もっと仕事しないでほしい」

そう言うと声を出して笑った。

「一緒にいられないから？」まだクスクスと笑いながら言った。

「うん…… 全然いないもん。最初の頃なんかいつも週末遊びに行っただのに」

「最近じゃ休日まで仕事するし」

「寂しかったんだ？」

「うん……」

(そうか！そうか！)と頭を撫で笑っていた。

「じゃあ出来るだけ今度からは週末は休めるようにするから。日曜くらいはなんとかするよ。ならいい？」

「うん……」

(内心、週休二日の意味無いじゃん！)と思いながらもそれでも毎週休みをとってくれると言う心遣いは嬉しかった。

「じゃ、風呂入ってくるね」そう言って直樹は浴室に歩いていった。

どうしてあの人は人に甘えることをしないんだろう……甘えられない雰囲気があたしにあるんだろうか……そう思いながら、そのままキッチンに立っていた。

そしてなんとなく祐子さんの話ができなかった。

止めてくれればいいけれど……

「行っておいで」と言われそんな気持ちもあった。

あたしがすることをなんでもあの人は許してくれる。

あの勢いの祐子さんなら、もしも「彼がダメと言いました」と嘘をつき

断ってもここにやってきて直樹を説得しそんな気がした。

また何事も決めきれない自分がいた……

その日、ベットの中で言ったほうがいいのか、言わないほうがいいのか

そんなことを考えながら直樹に抱かれていた。

「まゆ・・・なにか考え事してるでしょ？」
そう言われて「ううん」と言った。

「なんか集中してないな」と思ってさ。疲れてる？」
「そんなことないよ？」そう言っつて優しく髪を触った。
「直樹も疲れてるんじゃない？今日は寝ようか」

「ん？俺はどつちでもいいよ。まゆがそうしたいならそうするよ
そう言っつて腕枕をした。

「そんな所を言っつてるのに・・・」
「え？どんなとこ」

「全部あたしを中心で考えるとこ。もっと自分がしたいなら
したいっつて言っつてくれたらいいのに・・・」

「まゆこそ、俺中心で考えてるじゃない。俺が疲れてるでしょ？とか
無理してるでしょ？とか、いつも言っつたろ」

「それは・・・そうだけど・・・」

「じゃあもつと自分中心になりなよ。自分がどうしたいとか
どうして欲しいとか言っつていいよ」

「うん・・・」

そう言われて、なんだかよく分からなくなった。

「だからまゆは「流されやすい」っつて言っつたんだよ。

もっと自分の意見を言ったほうがいい。さっきのほうがいいと思うよ。仕事しないでって。言わないと伝わらないよ。何事も・・・」

「でも、あまりうるさく言うと嫌でしょ？」

「でもまゆはうるさいと相手を感じるまでは言わないよ。

その前に相手のこと考えてセーブするところあるから・・・」

「相変わらずなんでも分るんだね・・・あたしのは」

「まーね」

直樹はきつとあたしのことを一番理解している。

理解している上で甘えてくれないことが寂しかった・・・

「じゃ、そんなに俺のわがママを聞きたいなら、そうしようかな
たまには」そう言ってキスをした。

「じゃあねえ・・・いままで一番上手だった人の名前教えて」

「それわがママじゃないよ・・・」

「いや、一度聞いてみたいなってさ」

「それはただのオヤジって言うの」

「うわ・・・一番気にしてることを・・・」

そんな冗談を言い合いながら、その日はいつまでも話をしていて。そんなことが新鮮だった。抱かれてしまえば、お互い疲れて眠ってしまう。

それよりもこうして話をしてるほうが楽しかった。

きつとこれから何年も一緒にいたら、そんなことはしなくなる。

でも、結局祐子さんの話はできなかった。
きつと直樹の言うことはわかっている。
「まゆがそうしたいなら、行っておいで」
そう言っただけをあたしを送り出すと……

それから何回かの週末をむかえた。

あの話以来、直樹はできるだけ日曜に休みをとって側にいてくれた。
土曜は休日出勤をしていたが、それでもかなりの進歩だ！
が……ちよつとだけそれによって仕事が遅れるのではと心配にも
なった。

ある日曜日。

「ねえ？あたし少し直樹の仕事手伝おうか？健吾のほつに
負担がかからない程度ならいいよ」

「ええ〜 いいよ。自分のことは自分でやるよ。
まゆだつてかなりの量してるじゃない」

「でも、日曜休んでくれる分、前より遅れるんでしょ？
なら仕事内容はだいたい同じだから手伝えるよ」

「全然担当の商品違うじゃない……
いいよ。そんなに心配してくれなくても、なんとかできるから」

「ほらー なんでもっと甘えてくれないの？
書類作るくらいなら商品の違いなんか関係無いじゃない。
それともあたしじゃ心配？ミスはしないよ」

「ありがとね。でも大丈夫。俺さ、他人に頼むの嫌いなんだ・・・
肝心な所は自分で納得しないと嫌なんだよ・・・所詮信じられる
のは

自分だけじゃない。だからいいよ」そう笑いながら断った。

「それがあたしでも？」

「うーん・・・ でもそんなに気を使ってくれて嬉しいよ」

気遣う言い方をされたが、それは

「所詮まゆには無理だよ」と言われた気がした。

「俺の彼女は優秀だ」と言った言葉は結局は自分には関係のない
所の話だから、なんとなく頑張っているんだろうな・・・程度のこと
だったんだ。

あたしもきつと仕事に置いては<他人>と同じ部類なんだと感じた。
直樹の中にはあたしがどれだけ頑張っても、ただの簡単なサポート
役でしかないんだ。

健吾ならきつとそうじゃない・・・
もっと信用してくれるのに・・・
自分の仕事が認められていないような気分になった。

「直樹は・・・あたしの仕事を同等とは見てくれないんだ？」

「いや、まあ・・・だってさ、結局ミスがあったとしても

責任は上になる訳じゃない。サポートはあくまでサポートだし。

ただでさえ忙しいのに、そんなくだらないミスで時間をとられたくないんだよ」

「だからミスはしないって言ってるじゃない！あたししてないもん・

・

少しでも直樹が楽になるならって思ったのに・・・

もう一人でもバイヤーできるもん！なにも知らないくせに！」

「なにそんなに熱くなってるの？まゆだってこの仕事を定年までする気じゃないだろ？そのうち一緒になったら辞めるだろ。」

俺はそんな訳にはいかないだって」

「腰掛けだって思ってるの？結婚するまでの適当な暇つぶしくらいに！」

「そんな言い方はしないけど、それでいいじゃない。まゆの将来は俺が見ようって思ってるし。適当なところで辞めたらいいじゃない」

「適当って？」

「なにそんなに怒ってるの？」そう言っただけで笑いながら頭を撫でて俺はちゃんと考えてるから。ね？」そう言っただけで抱きしめた。

きつとこれは普通で言えばプロポーズなんだと思った。

けど、いままであんなに頑張ったのに「腰掛け程度」に思っていた直樹に腹がたつた。

確かに直樹の頑張りようとは全然比べ物にならないけど、

自分の中では健吾と同等なくらいの仕事量はこなしてるという自信

はあった。

所詮、女なんか・・・そう言われたような気分になった。抱きしめられてプロポーズのような言葉を言われても、なにも嬉しくはなかった。

悔しくて涙が出そうになった・・・

「まゆ・・・もう寝ようか？」

そう言っつてベットに連れていこうとする直樹の顔を見て言った。

「あたし、東京で仕事してくれないかって頼まれてる・・・迷ってるけど・・・けど、こんなあたしでも力を貸してっつて言っつてくれる人がいるの。」

直樹は認めてくれていないけど、そう言っつてくれる人もいるの！」

それを聞いて直樹は（やれやれ・・・）という顔をして少し笑った。

「だから認めて無いなんて言っつてないよ。それに、東京に行っつてもなににするの？」

その人どんな人？まゆの仕事の何を知ってるの？どこかのメーカーさんかい」

多少の勢いはあったものの・・・祐子さんの話をした。

その間、直樹は顔色を変えること無く黙っつて聞いていた。

驚く訳でもなく淡々と・・・全部話終わっつてからゆっくくりと口を開いた。

「その人は信用できないな。軽く考えすぎてるよ・・・

俺達の仕事はそんなもんじゃない、後ろに大きな会社と言っつものが

あつてこそ、相手のメーカーも腰を低くする。

なんの実績もない新しいちっぽけな会社にどれほど期待できる？
どこも協力なんかしてくれないよ。

それに、今の話じゃ成功するもしないも、すべてまゆの商品選択にかかっていると知らない？失敗すればすべて責任はまゆになる。」

何も言えずに黙っていた・・・

直樹の言うことはいつも正論だから・・・

自分でも選ぶ商品によつて売れる売れないが決まることくらいわかっていた。

ハッキリ祐子さんに断れなかったのは、あたしのことを必要としてくれたことに

嬉しくて酔っていたのかもしいない・・・

「今まゆとマツがやってることは、俺達の中でも一番楽なこととしてるんだよ？」

取引先だつて古くからの信頼を持ってくれる所だけだし。

うちの会社だからこそ、すんなりと商品提供してくれる。

実際まだ二人はメーカーの新規開拓とかできないだろ？まゆには無理だよ。

行かせられないね。そんな傷つくことわかってるのに」

そう言つて煙草に火をつけて黙つてこっちを見た。

「行つておいで」と言われると思つていたのに違う言葉が返つてきた。

ただ、期待していた言葉とは違う「まゆには無理だ」と言われての「行かせられない」の言葉が虚しかった・・・

確かに健吾とあたしの仕事は難航することは無かった。どこに顔を出してもみんな会社の名前だけ言えばニコニコしてくれた。

あたしは自分の力を過信していたんだ・・・
そう嫌というほど思い知った。

「まゆ・・・ もう仕事辞めてここに住まないか？
仕事のことは、あまり考えなくていいよ。」

俺、次の人事で部長に昇格するんだ。今度は家で俺のサポートをしてくれればいい。

これからはまゆの好きなことだけすればいい。ね？」

きつと頷けばあたしの将来は安泰だと思った。

直樹はもつと上にいける人だ・・・

お金の心配もせず、ただ好きなことだけして暮らせる毎日がある。
そう思ったが、素直に頷くことができなかった。

「今度は何が不満ですか？ん？」

「あたし・・・そうなら、ただ黙って遅く帰る直樹を待つだけなのかな・・・」

「そりゃ・・・昇格したらまたちよつと忙しいけど・・・
でもまゆだって嬉しいでしょ？俺が上に行くのは」

「どつちでもいい・・・そんなこと・・・」

本当にどうでもよかった。今より忙しくなればもっと側にいてくれない。

家で待っていて、疲れて帰ってくる直樹は弱音の一つも吐いてくれない。

あたしにはなに一つ甘えてくれない・・・

「うーん・・・ 今日のみゆは機嫌が悪いね。

どっちにしてもそんな馬鹿げた仕事の話はサッサと断るんだよ？

みゆは俺の側にいればいいんだから」

そう言って寝室に行こうとして立ち上がった。

「いくよ。一緒に寝よう」そう言って手を引いた。

無言で立っているのを見て

「仕様が無いなあ・・・ ほらほら！」と背中を押し部屋に入れた。

いつものように腕枕をして頭を撫でながら

「みゆはなにも心配しなくていいから。黙って側にいればいい。

いつも見える範囲にいればいいから」そう言って目を瞑った。

(私が理想としていた結婚ってこんなだったけ・・・)

そんなことを思いながら黙っていた・・・

祐子さんがあんなに涙を溜めて熱弁したことを

<馬鹿げた話>と直樹は言い切った。

本当に馬鹿げた話なんだろうか・・・

成功してる人もいるのに・・・

でもそれはあたしみたいな未熟者じゃ無く、もっと優れた人がきちんと仕事をしているんだ・・・

と自分で小さく見えた。

隣で目を瞑る直樹を

(この人は間違った選択をすることが無いのだろうか・・・)
そう思いながらいつまでも見つめた。

そして・・・もう付き合って2年になろうとしているのに、
その顔を見て「やっぱりかっこいい・・・ちくしょう・・・」と思っ
ていた。

どことなくその視線を感じたのか、パチツと目を開けこっちを見る
直樹と

目が合った。

「なくに？そんな不安そうな顔するなよ。眠れないの？」

「ううん。そんなこと無い・・・おやすみ」そう言っ
て目を閉じた。

しばらく視線を感じたが、これ以上何を言っても言い返せないと
思うとそのまま寝たフリをした。

スルリと腕枕をほどこき、首にかかる髪を除け唇があたるのを感じた。
本当はあまり抱かれたいとは思っていなかったけれど、
断る理由も無いので、そのまま背中に黙って腕をまわした。

「側にいればいい・・・こうしていつも抱いていたいから。」

まゆが泣く所なんか見たくない・・・。「その顔に黙って頷いた。

「あたしも直樹をいつも見ていたい・・・もっと側にいて・・・」

「いつもいるから。だから困らせること言わないで」

普段と変わらない顔で言ったのに、その日の直樹はいつもより

少し荒々しいと感じた。怒っているならもっと怒っているような言

葉を

ちゃんと言って欲しかったのに・

それでもいつもより激しいキスとわざと嫌がるような恥ずかしいことを

する直樹にほんの少しだけ怒っているんだと感じた。

カオルには舌で責められることが口では「いや・・」と言いながらも体は本当はそれを欲していた。

けれど直樹にはどうしても恥ずかしくていつも拒否をし、それにたいていして

直樹は嫌がることを絶対しなかった。けれど、その日は何度嫌だと言っても強引にそうされた。

それでもされれば、やはり指より柔らかい舌の動きに自然と感じ、切なそうな声が部屋に響いていた。

力が一旦抜けた体の上に自分の体を重ね中に入ってきた時に、

耳元で「二人だけのことなんだから、恥ずかしいこと無いんだよ？」と呟いた。

そうは思っているけれど、やっぱりカオルの時のように開放的にはできなかった。

その日、いつもよりも長めのSEXに、ほんの少しの疲れを感じながら眠りについた。

（昨日もしたのに、珍しいな・・・）そう感じながら満足そうな顔で眠る直樹を見つめ目を瞑った。

けれど、夢の後のように頭の中にはさっきの直樹の言葉が

また頭の中にひろがっていった・・・

ネガティブ満載・・・

いつまでも祐子さんに電話をできないでいた。携帯を開いては閉じ・・・また開いては閉じ・・・ため息交じりにポケくと携帯を見つめていた。

直樹はあれ以来、その話を一切しない。

あたしもできなかった。

したところで直樹の口には敵わないし・・・

日帰りの出張で朝から健吾と車で移動をしていた。

「誰に電話するのに、そんなに迷ってんだよ」

「ん？・・・うーん・・・」

「なにになに〜男？」そう言ってニヤニヤとした。

「いいね。健吾は悩みが無くて」

「あるっつーの！俺にどうして彼女ができないのか不思議だよなあ」

（やっぱりいいなあ・・・能天気で・・・）

「ねえ・・・健吾。あたし達の仕事って簡単なポジションなの？」

「え？あゝ まあそうかもな。ほら、俺だってまゆとは半年しか違わない訳じゃない。俺達が一番下っ端と言えば下っ端だからな

あ。

そりゃ〜貴女の大好きな直樹さんとの仕事内容と比べたら幼稚園児と大学生くらいの違いはあるわな〜」

「そっかぁ・・・ あたし全然知らなかった。直樹もほとんど同じこと

してるんだと思った・・・」

「扱う金額が違っつて。俺達精々月に500万くらいの幅しかないのに、

向田さんは何千万て範囲のデカいもの扱ってたぞ？

俺達が失敗しても、さほど怒られないけど、あの人の選んだ物がコケたら大変なことなんだぞ」

「そうなんだ・・・ あたし何も知らないで「休んで！」って言うてた・・・

そんなことなにも教えてくれないから・・・」

「あ、それで最近、向田さん日曜日は休んでるんだ。良いところあるじゃん。

まあ〜俺も12も下の彼女に「休んで〜」って言われたら休むな。下手したら辞めるまであるな。もう朝から晩まで・・・」

隣で下ネタを言う健吾を無視して、自分が直樹にわがままを言っていたと思うと申し訳ない気持ちになった。

背負う大きさが全然違うのに、それを顔に出さないであたしの為に無理をしてきている・・・

その日、会社に戻り仕事をしている直樹の隣にコツソリ近づいた。

「今日、家に行っていていい？遅くなっても文句言わないから・・・」

「ああ。できるだけ早く帰るよ」

ニコツと笑ってくれた顔を見て、小さく頭を下げ、側を離れた。少しだけ目が充血していて疲れた顔をしているように思えた。

自分のデスクに戻り、残った仕事を始めると

その話を後ろを通りかかって聞いた健吾が、

「仲いいじゃん。珍しい」と冷やかしながら声をかけてきた。

「そう？いつもだよ」

「もっと言えばいいんだよ。残業が普通になってんだから、あの人は。」

定時は無理でも、もっと一緒にいれると思うぞ？その気になれば」

「うっん。迷惑にならない程度でいいの」

「本当にお前は都合のいい女だよ・・・」

まあ、少しは合わせてくれてるみたいだからいいけどさ」

健吾のほうを見て少し笑って仕事を続けた。

8時前に健吾と一緒に仕事を終え、直樹よりも先に会社を出た。

駐車場につくまでの間にふと健吾が

「俺もあと何年かしたらあんな風に仕事ばっかになるのかな」と
呟いた。

「根が違つから大丈夫じゃないの？」

「いやだつてさ、40歳くらいだとリストラ対象とかになるじゃん。あんな風に絶対必要な人にならないと残れないのかな」つてさ」

必要な人・・・確かにそうだと思った。

もうすぐ部長になるくらいの人だし、今、直樹が会社を辞めたら大変なんだろうな。

「やつぱ転職するなら早めがいいな。もっとコジンマリとしたやりたい仕事ができる所がいいな」俺は

「えー転職するの？いつ？」

「いや、すぐじゃないけどさ。俺くらいの歳だとやつぱ考えるだろ。ヤスも仕事探してたしさ、カオルだつてそんなこと言ってたし。30過ぎたら歳の響きからして、もう人生半ばすぎつて感じだしな」

「カオルも仕事辞めるの？」

「うん。なんか言つてた。年内か、来年かわからないつて言つてたけどな」

(カオル・・・実家に帰るんだ・・・)

「結婚するのカオル？」

(聞きたいような聞きたくないような・・・)

「いや？そんなことは言っていなかったなあ・・・女いるのかな？」

「ラビが見たって・・・女の子と一緒にの」と

「へー。アイツそんなこと言わないからな。いたんだ？」

まあ、ラビが見たって言うならいるんだろな。

なんかチャラチャラしたアクセサリーとかつけてたし」

「ふーん・・・そうなんだ」

「お前・・・実はまだ好きなの？カオルのこと」

ニヤニヤしながら健吾は人の顔をジロジロ見た。

「そんなんじゃないよ！ただ結婚するなら実家に戻るって言うって
から、

だからそれで転職すんのかなって・・・それだけ！じゃーねバ
イバイ」

そう言って車に乗り直樹の家に向った。

もう別れて2年近くなる・・・そんな話があってもおかしくない時
間が

経っているんだ。

なんとなく素直に「おめでとつ」と祝えない自分が

(器ちいさっ！)と思った。

直樹が帰ってくるまでに簡単にお風呂に入り、ご飯の用意を待っていた。

11時になっても12時になっても直樹は帰らず、そのうちベットで横になっているうちに眠ってしまった。

暗闇の中、かすかに動いたベットに直樹が入ってきたのが分った。

「あ、おかえり・・・今何時？」

「あ。起こしちゃったか。ごめん。今2時半すぎ」

「そんなに無理したら体壊すよ・・・」

「ん・・・大丈夫。ごめんな。早く帰るって言ったのに」

そう言っ隣に横になり大きく伸びをしてあくびをした。

そんな直樹を黙って見ていた。「疲れたよ」とほんの少しの弱音を言ってくれないかと思いつながら・・・

「どうした？目覚めちゃった？」

「直樹疲れてない？」

「いや？大丈夫だよ」

そう言っ体を寄せ、軽く頭にキスをした。

「そうじゃなくて！どうして疲れたって言ってくれないの？疲れてない訳無い

じゃない。「疲れた」とか「もう嫌だな」とかどうして言わな

いの？」

「言ってもなにも変わらないじゃない。これが現実だもの」

「直樹が本音を言ってくれたのって・・・あたしが初めてここに泊まった
った

時くらいだね・・・」

「初めて泊まったときは酔っ払って寝てただけじゃない」

(うつ・・・)

初めてここに泊まった時はまだ直樹の事を懂れていて
手の届かない存在だと思っていた時だった。

二人でいることに浮かれて飲みすぎて、ここに運ばれたんだっけ・・・

けど、あたしが言った「初めて」は、カオルと別れたほうがいいのか
散々悩み抜いて毎日眠れぬ夜を過ごし、そして直樹を選び、この部
屋に来た。

「やっと来てくれたね」そう言った直樹の顔は今でも忘れない・・・
そしてきつと自分を選ぶことは無いと思っていたと、普段のクールな
感じとは違い、本当の気持ちを言ってくれた。

その時、「この人も普通の人だったんだな」と感じたのに・・・

「そうじゃなくて！初めてここで・・・その・・・ちゃんと泊まった時に
少しだけ言ってくれたことしか、あたし記憶にないなって」

「そんなこともあったね。あの日のまゆも可愛いかったよ」
そう言つて腕枕をして、すぐに直樹は眠つた。

なんだかあたしは直樹にとってなにも役にたつていないんだなと思つた。

あたしがいてもいなくても・・・さほど直樹の毎日に変化が無いんじゃないのかな・・・

なんとなく次の日は浮かない顔をしていた。

朝から延々と続くデスクワークに嫌気がさしていたのもあったけど。

「昨日と打つて変わつて暗い顔だな？」

同じく朝からのデスクワークにアクビをしながら健吾が言った。

「ん？別に」そう言いながら、貰いアクビをして言った。

「昨日、いつまでも起きてたんじゃないの」うわ。やらし」

「健吾の顔のほづがいやらしいよ・・・なにもしてません！
直樹帰つてきたの夜中の2時すぎだもん・・・」

「うはー すごいなあ。やっぱりお前より仕事が好きって感じだな」

健吾は軽い冗談で言つたようだが、その言葉に思わず手が止まつた。

そうだなあ・・・
そうかもしれないなあ・・・

「健吾・・・今日さ、夜時間ある？」

「あ？まあ・・・あるかな。なんで？」

「ちよつと相談があるの。いいかな？」

その日の夜、健吾と近くの居酒屋に行った。

「で。なに？相談て？」

「うん・・・あのね・・・」

ちよつと言にくい所もあったが、祐子さんの話をした。
そしてそれに対しての直樹の意見も少しだけ教えた。

「ふ〜ん・・・で。まゆはどうしたいの？」

「迷ってる・・・ 行って助けてあげたい気もするけど、でも役不足とも

思うし、それにきつと行くってことになったら直樹と別れることになるよつな気がするし・・・」

「そうじゃなくて、お前はやりたいのか、やりたく無いのかってこと。

助けるとかじゃなくて、向田さんと別れるじゃなくて、

お前が本当にやりたいのかってこと」

「うん……」

「お前がやりたいなら、本気でやればいいじゃないか。役不足なんてやってみなきゃわかんないだろ？」

それに本当にお前、いまのまま仕事辞めて黙って家にいろって言う向田さんに従うのか？それは大事にするとは違うと思うな」

健吾と直樹の意見は見事に逆だった。きっと健吾はそう言うと思っていた。

でも、経験と実績から物事を言う直樹の意見に対して、勢いで物事を言う健吾の意見を信じていいのか迷った。

「つかさ、それいつまでに返事しなきゃならないの？」

「さあ？それは聞いてない……」

「でも……きっとお前は向田さんに何も言えないんだろうなあ……」

「・」

「やっぱりそう思う？あたしもなんかそんな気がする」

「上手くいってそうで、いってないもんなら、なんか同等じゃないんだよなあ……結婚してもお前寂しいぞ？」

「いや、すぐにはしないけどさ……」

「だってお前も、もう26だろ？なんだかんだで1年くらいすぐじやん？」

女も27・8って言ったら、結構残り物っぽい歳じゃね？」

「わ！ひどー でも、だんだん周りの友達も片付いてるしな」

「結婚だけが幸せじゃないけどな。今はみんな遅くなってきたし、気にすることでも無いけど、これから向田さんと別れて

次って言ったら大変かもな」ラストチャンスだったりして「
そう言っただけでグラグラ笑った。

そっだよなあ・・・きつと東京に行くなんて言ったら直樹と別れることになるし、

あっちに行っただけで勝手に相手がみつかる保障はないし・・・
祐子さんは望月さんいるし・・・

一人で寂しく仕事以外なにをすればいいんだろ・・・

そんな不安もあり、だんだんと祐子さんの話は夢に思えてきた。

後悔するかもしれないけれど、行って失敗したらあたしには
もう何も残らない。

今の仕事も、直樹も、すべて捨てて行く覚悟がどうしてもできなかつた。

家に帰り、決意が鈍る前に祐子さんに電話をした。

「あの、まゆです」

「あ！まゆちゃん！ん！どう？彼氏なんて？」

「あ・・・うん。やっぱりダメって。きつとあたしじゃ無理だつて・・・」

「随分な理由ねえ・・・ やっぱり私、一度彼に会っていい？」

「いや、やめておいた方がいいですよ。淡々と痛いこと言われま
すよ？」

きつと直樹は祐子さんに会えば、いつもの愛想のいい顔をすると思

った。

けど、本題に入れば結構ハッキリとあたしに言ったように

「それは無理です」とか「まゆにはできません」とか言うんだろうな……

「そんなのは覚悟の上よ！」

「いや、でも」

「じゃあ来月にでも行くわね！彼氏に言うておいて！一度話聞いてっつて」

「あ……いや、その」

「まだそんなに急ぐ訳じゃないの。私も会社にもまだ言うてないしね。」

一応、来年の決算までは辞めることできないし。どっちにしろ

「新しい会社はいつくらいって考えてるんですか？」

「望月のほうも引き抜きに難航しててね。だから来年の秋くらい？

そんな感じだからまゆちゃんもゆっくり考えてくれていいわ。

焦るといいこと無いから、私達も慎重に話進めてるから。

でも、スタッフが早めに決まると安心じゃない？だから。ね？」

「あ……いや、そのゆっくりもなにも……」

「日曜は休みよね？じゃあ、日帰りでもいいわ。日にちを

決めたら連絡するわね。今ちよっと忙しいから。じゃーね」

一方的に電話を切られた。

あたしはいつたい本当はどうしたいんだろう……

なぜいつもハッキリと言えないのだろう。

もう誰にも相談できなかった。
自分の気持ちが固まっていないのに、誰かにどんな助言を貰ってもそれを行動にうつせない。

その日、いつまでも考えた。

けど、やっぱり失敗して今の状況がすべて無くなるのが怖かった。
あたしはどこまでも保守的な人間なんだと感じた。

きっと、このまましばらく仕事を続け、数年以内に直樹と結婚をして子供を産んで暮らす・・・
たぶんそんなところだろうと思った。

それを少し不満と思うのはたぶん贅沢なのかもしれない。
きっと直樹はこれから会社で頑張り、どんどん認められ上に行く。
たまの休みには、いつものように優しいのだと思う。

ただ・・・その休みがあればのことだけど・・・

どんどん考えはネガティブになっていった。

子育てとかも全部協力が無いまま、全部あたしなんだろうな。とか、
毎日帰りが遅くて一人ぼっちなんだろうな。とか。

あまりに悪いことばかりを考えてどんどん気持ちが不安になった。

「これ以上考えたら、眠れなくなるから、もう寝ようっと・・・」
そう呟いて布団をかぶった。

ダメなんだって・・・

次の日曜日。意を決して直樹に
祐子さんが会いたいと言っていることを伝えた。

「会ってもいいけど？」

思ったより簡単に返事をした。

もっと淡々と怒ったり、「まだそんな話しているの？」と呆れた顔をされると

思い込んでいたのに、軽い言い方に（アレ？）という感じだった。

「まゆがちゃんと断れないんでしょう？いいよ。俺が断ってあげるから」

「うーん・・・でもね。本当はちょっと考えてるところもあるの。やってみたいかなって。でもやっぱり失敗すれば全部失うの怖い・・・」

今の仕事だつてまた戻ることできないし、直樹だつて待つてはくれないでしょ？

軌道にのつたら戻るって言つても」

「そうだね。もし行くなら俺と別れると思つたほうがいいね」

煙草を吸いニユースを見ながら、

なんの躊躇もしないでバツサリと言い切った。こっちも見ないで・・・

ほんの少しだけ「少しくらいなら待つてもいいよ」と言ってくれるかもと

期待したのに、それは1秒で砕かれた。

「やっぱりそうかぁ・・・ 期間限定でもダメ？」

甘えるように肩に頭をつけて上目遣いで言ってみた。

（頑張れあたし！少しくらいセクシー系で誘ってみればOKかも！）

「ダメ！まゆは流されやすいからね。そこにイイ男なんかいたら、

絶対もう俺の元には戻ってこないよ。自分でわかってるでしょ？

俺と付き合った時のこと」

片目をちよつとあげ、そんな仕草を嬉しそうに笑いながらも、頭をポンと叩き、（ダメだね・・・）と言うような顔をした。

「でも、あれはあの時の彼氏のほうにもいろいろ問題あって・・・

それに直樹だったから、誘われても遊びに行っただよ！」

「そんなのは今となっては関係無いよ。たぶん辛い仕事になるだろ？

そんな時、優しくなんかされたら絶対まゆはそっちに行く」

「そんなのわからないじゃない！てゆうか、そんな人いないかも

しれないじゃない！なんの根拠でそんなこと言うの！」

ふくれた顔で文句を言った。

「まゆはもう・・・この仕事に携わらないほうがいいな。

下手に今でもバイヤーやってるから、自分にも出来そうな気がするんだよ。

辞めてなにか気軽なパートでもしたらいいんじゃない？

別にお金なんか心配ないんだから、好きなことだけしなよ」

「ほらー！またそうやって人の仕事を馬鹿にして！あたしはお金でこの仕事を
やってる訳じゃないもん。そりゃあ・・・直樹の給料とは全然違
うけど・・・」

「だから馬鹿になんかしてないって。マツのそこは成績いいと思っ
よ？」

「だけど、今の仕事はまゆじゃなくてもできるんだよ。
サポートは誰でもできるんだし」

「だって・・・あたし今の仕事好きだもん。まだ辞めたくない！」

「じゃあ、もうそんな自分の力を過信した変な誘いに気持ちを
揺らしちゃダメだよ。気のすむまでやっていいから」

「淡々と「過信するな」とか「まゆじゃなくても出来る仕事だ」とか
ニコヤカに言われて、結構へこんだ。いや、っ、凄く。
やっぱり直樹はあたしの仕事を適当にしか見てくれないし、
いくら頑張っても、そこらのお茶くみ程度にしか考えてくれなかつ
た。」

「今までの頑張りってなんだっただらう・・・」

「あんなに寝ないで残業したり、
終わらない時は会社に泊まったことだってあったのに・・・
誰かに褒めて欲しくてした訳じゃないけれど、自分の中では誰より
も頑張ってる今の
仕事に責任と誇りを持っていたのに。」

「そして喧嘩のようになっても絶対直樹は本気で怒らない。」

それがまた（子供扱いして！）とイラツとくることがあった。
12歳も歳が違えば、あたしとなんか喧嘩するのも馬鹿馬鹿しいの
かなあ・・・

別に喧嘩したい訳じゃないけれど、もつと本音とか内面的なものを
見せてくれてもいいのに・・・ そんな所が好きだったはずなのに、
段々と欲が出て、どんどん自分の思うような人になって欲しくなっ
ていた。

でも、そんな直樹に本気で怒れない自分がいるのも確かだった。
子供すぎて嫌われてしまうんじゃないかと・・・

翌日、ちょっとだけ気が重くなりながらも、
祐子さんに直樹が会ってもいいと電話で伝えた。

祐子さんは「第一関門突破ね！後はまかせて！」と機嫌良く電話を
切ったが、
二人が会うことに気持ちは晴れなかった。

それから3週間後、祐子さんが北海道に来た。

「わざわざこっちに来ると、また帰りが大変だから、空港で
話をすればいいよね。本当は電話でもいいんだけどさ・・・」

直樹はあくまで断ることしか考えていなく、時間の無駄と決め付け
ている様子だった。

到着ロビーで祐子さんを出迎えた。

「今日はお時間を割いていただいて申し訳ありませんでした」

祐子さんは仕事モードな顔で直樹に挨拶をした。

いつもの顔を合わした瞬間にビールを注文する祐子さんとは全然違う顔をしていた。

直樹も笑顔で祐子さんに名刺を渡し挨拶をした。

「こちらこそ！こんな遠くまで来ていただいて申し訳ありません。

いつもまゆがお世話になっています。今日は日帰りですか？」

異常なくらい愛想の良い直樹に、

この前の言葉は嘘なんじゃないかと思うほどの笑顔だった。

(どっちも、、、芝居上手ってことだよなあ。

上になるってそんな所も完璧じゃないとダメなんだなあ・・・)

「はい。一応、空いた時間に次の仕事のこともありまして。

今の仕事のこともあるのですが今日は失礼ですがお話が終わり次第、戻らせてもらいます。

本当ならば、せつかくのお休みを潰していただいたお礼にお食事でもと言いたいのですが、

もうすぐ退社の予定なので引継ぎなどありまして・・・

まったく、いつまで経っても終わりませんね」

(直樹の女版みたい・・・)

「そうですね。部長クラスの退職だといろいろと大変ですね」

「でも、部長だろうが、専務だろうが居なくなれば残った人で結局仕事なんて進むんですよね・・・

「自分が必要だ！」なんて自惚れもいいところですよね。組織ってそんなものですよね。」

笑顔で言ったけれど・・・きっと祐子さんなりの嫌味なんだろうとチヨット感じた。

直樹は一瞬だけ顔をヒクツ・・・とさせ

「そうかもしれないね」と爽やかな顔で笑った。

日帰りで時間が少ないならばと、空港内のレストランに入り話をすることになった。

「で。今回のまゆの話なんですけど・・・」直樹が祐子さんに切り出しました。

「ええ向田さん。えーとですね。私はまゆちゃんの

真面目なところを前から買ってるんです。東京に来てもし生懸命に仕事してるし、辛いのに頑張ってるし」

「ええ・・・」

「バイヤーという職種にあまり詳しくは無いのですが、まゆちゃんの仕事の方針って聞いたことがあります？」

そう言われて直樹がこっちを向き「なに？」と聞いた。

「あの・・・確かには入り値とかも大事だと思うけど、あたしは基本的に」

お客さんが喜んでくれる物を買付けしたいの。
初めて自分が考えて選んだ商品を嬉しそうに買ってきてくれる人を見た時に、そう思ったの・・・儲けも大事だけど、それも大事だと思っの・・・」

直樹に睨まれるような顔をされ、だんだん声が小さくなった・・・

「あの、岸本さん。まゆはまだ全然この仕事に関しては素人みたいなものです。

だからまゆに期待はしないで欲しいんです。

きつと失敗すれば責任はまゆになります。そんなの分ってるのに行かせられると思いますか？」

そう真面目な顔で言った。

「自分の好きな人を信用できないのね・・・

どれほど頑張ってるか見てあげてる？女だからか思ってない？」

だんだん祐子さんの口調がいつもの強い口調になってきた・・・ドキドキして二人の間をキョロキョロしてみていた。

「貴女はこの仕事には素人でしょ？まゆは簡単な手伝いしかしてないんです。

それがバイヤーを一人でやるなんて無理なんです」

「それはこっちが決めるわ。私はまゆちゃんと仕事がしたいの。

十分責任感だつてあるし、一生懸命よ？いつも電話で

仕事のこと相談されたりするし、男に負けなくらいのガッツはあるわ！」

「だから、話だけなんですよね？まゆの仕事見えますか？責任感や一生懸命だけじゃできないんですよ！この仕事はセンスとか、流行とか、金額とか、いろいろあるんですよ」

「向田さんはそれを全部認めてないの？」

「認めてませんね」

売り言葉に買い言葉だとしても・・・ハッキリと直樹の口から「認めてない」と言われて、シユン・・・となった。

「貴方、まゆちゃんのこと本当にちゃんと見てる？好きなならそんな言い方できないわよ」

「そんなこと貴女に言われる筋合いは無いです」

「ただ自分の目の届く範囲に置きたいだけなんじゃない？本当に好きなら彼女の気持ち優先だと思っただけ」

「俺は、失敗して傷つくこいつを見たくないんです。なにも今から辛い思いをしなくても、十分二人は幸せです。それを横から壊そうとしてるのはそちらです」

「確かに東京に呼ぶのは大変なことだとは思ってる。だけど、このまませっかくの芽を潰すこととしていいと思う？もっと大きい仕事させてあげたいと思わないの？さつきから絶対失敗するようなことばかり言うけど・・・」

「思いませんね」

ピリピリした空気の中、二人は静かにだがキツイことを言い合っていた。
隣で話に入れないあたしはただ黙ってジュースのグラスについた水滴をいじっていた。

「じゃあ、違う方向から聞きます」

煙草を力いっぱいねじ消して祐子さんが直樹を見て言った。

「まゆちゃんを遠くに行かせるのが嫌ですか？」

「嫌ですね」

「そう・・・半年でもダメかしら？」

「ダメですね」

「それは待てないってこと？行くなら別れるということ？」

「そうです」

直樹は淡々と短い言葉でしか話をしなかった。

（やっぱりダメなんだな・・・）

「そう・・・わかりました」

「わかってくれましたか？」

少しだけ直樹はいつもの緩やかな表情になった。

「ええ。後はまゆちゃんに決めてもらいます。

それがどんな答えでも私は恨みません。

もしも来てもらって、貴方と別れることになるなら、

それはまゆちゃんが決めることです。もしも半年だけ待ってくれるなら

もつと説得することはできますが、それもダメならなにも言えませんが

そう言っつて祐子さんがこつちを見た。

(えええー！あたしがこの空気の中で決めるの？?)

「まゆちゃん。後は貴女次第でいいわ。

もしも、まゆちゃんがこれから自分の力を試したいならお願いします。

でも、彼とのこれからを思うのなら断っていいわ。

私の態度は今までと一切変えない。それは約束する。

まゆちゃんとは仲良くやっていきたいから。

でも、私は貴女と仕事がしたい。連絡待ってる」

それだけ言っつて目の前の珈琲をグツと飲んだ。

「向田さん。お休みの時にこんな所まで来ていただいて、

大変申し訳ありませんでした。今日はありがとうございました」

そう言っつて祐子さんはレシートを持って会計に行った。

そんな祐子さんを見て直樹は黙っつて軽く会釈をし、フーと大きなため息をついた。

隣でその姿を見て、なんて声をかければいいのかオロオロしていた。

会計を終え、祐子さんはあたしを見て、軽く手を振りレストランを出て行った。

さすがになにか一言言わないといけないと思い、追いかけてよとすると、あたしの手を掴み直樹は「いいから」と言っただけで座らせた。

結局、祐子さんに「さよなら」も言えずに帰ることになった。

帰りの車の中の空気はとても悪かった。

直樹は何も言わずに黙って運転をしていた。

季節は11月になり空気が灰色に見えるほど毎日が曇っていた。

「もうすぐまゆの誕生日だな。27歳か・・・11歳差になるな。俺の誕生日まで。たった2ヶ月しかないけど」
重い空気の中、直樹がポツリと言った。

その顔を見るといつもの笑顔だった。

「うん・・・そうだね。あたしも27歳か。なんか歳感じるな」

「まあ・・・まだ22、3歳って嘘つけそうだね。特にスッピンは」

そんな関係の無い話をしても、心の中は
(どつしどつ・・・)という思いでいっぱいだった。

自分に自信が無い・・・

でも、やってみたい気持ちもある。

でも、失敗が怖い。

直樹が自分の側から永遠にいなくなってしまうのは、やっぱり寂しい気持ちがあった。

あんなに怒ったような顔を見たのは初めてだった。いつものニコニコした感じとはまったく違った。

(少しでもあたしのこと、、必要だっと思ってきていたのかな)

その気持ちに答えるには、このまま黙って直樹の側にいることなんだろうな・・・

それでいいのかもしれない・・・

やはり自分にはまだ無理なのかもしれない。

自らの力だけで立ち向かうにはリスクが大きすぎるのかもしれない。
・
・

「たしか、再来週に東京に出張あったよね？」
そう聞かれて我に返った。

「あ・・・うん。3日間だけね、今回は」

「いつもさっきの人に会ってるの？東京に行ったら」

「うーん・・・祐子さんの時間があればね。あの人って直樹の女版みたいだね、

仕事人間なの、でね・・・」

「もうあの人に会っちゃダメだよ」

「え・・・」

話の途中なのに、いきなりそんなことを言われた。

「どうして？だってさっき、もし断っても問題無いって言ってたじゃない。」

あたし祐子さん好きよ。これでもう会わないなんて嫌だもん。素敵な人だよ。さっきはあんな話だったから、あんな態度だったけど、

いつもはもっと面白くて、優し、、、、」

「いいから！もう会わないって約束な。あの人はまゆには悪影響だよ」

また話を途中で切り直樹はちよつと声を大きくして言った。そのまま、また黙って運転をした。

「どうして……なんで悪影響って決め付けるの？
そりゃ……ちよつと言いはキツイところあるけど……」
言ってるうちに悲しくなってきた。

それ以上なにも言えずに黙ってしまった。
直樹もそれから一言も話をしなかった。
昼すぎに直樹の家に着き、黙って部屋に入った。

ソファーにドサツ！と座り、直樹は煙草に火をつけた。
その隣にポソツ・・と座り黙ってその煙を見ていた。
なんとも言えない空気が二人の間にあった。

「まゆ……俺のこと入社以来憧れてたって言ってたよね。
それは今も変わらない？今でも俺のこと好き？」

「うん？……ん」小さく頷いた。

「じゃあ、答えは決まってるね？俺からあの人に電話するから。まゆはもう連絡とかもしないほうがいい。関わることは無いようにね」

「でも・・・直樹のこと好きなのと祐子さんともう会わないのはまた違う問題でしょ？断るならそれでいいじゃない」

「俺のことが好きならもうあの人に会わないで。わかった？」

それだけ言っただけ直樹は席を立ち、奥の部屋に入っていった。あたしはその場に座ったまま納得のいかない顔をしていた。いままで直樹はあたしがすることを、いつもニコニコとした顔をしてなんでも許してくれた。

今回ほど大きいものではないことばかりだけど・・・
休みの日の計画も、外食の場所を選ぶのも、すべて

「まゆがいいと思った通りでいいよ」と言っていたのに・・・

しばらくして直樹がいつもの仕事の時のようにスーツを着て部屋から出てきた。

「ちょっとだけ会社に行ってくる。今日はすぐ帰るから。
7時までに戻るね」

「明日じゃダメなの？」

「春に人事発表があるんだ。商品課の中のパートナーの入れ替えも考えてるらしいから、その話で部長が出勤してるんだ。」

思ったより早く帰れたから、話は早いほうがいいと思って」

「ん…… わかった。じゃあ……ご飯作って待ってる」

「うん。じゃ、行ってくるから」

そう言っただけにキスをして直樹は出て行った。

残された部屋の中で、どんとカゴの中の鳥の気分になった。
誰かに会いたいけど、それが誰なのかわからなかった。

（パートナーの入れ替えかあ…… 健吾とペア離れるのかなあ
……）

そんなことを考えながら、ソファーに横になって暇な日曜日を過ごした。

独りぼっちの誕生日

東京に出張をする前日。

明日からの出張に備えていろいろと書類の準備をしていた。

「なにげに短期出張って俺、好きなんだ」

目の前の健吾が書類に目をやりながら言った。

「なんで？」

「だって気楽じゃん。お前と二人だし、相手先行って商品見て、定時に終わるんだぞ？長期出張やそこらに日帰りならそんな訳にいかねーじゃん」

「まあ・・・そうだね。その時くらいしかゆっくりTVとか見られないからね。」

連続ドラマもさっぱり見てないよ。話題についていけないな」

「どっちみち俺は見ないけどな・・・ドラマなんか」

「そうだね・・・昔からそうだったよね」

「でさ、明後日の夕方にサッカーの試合行くんだ」

「ええー。いいな」どこで？」

「どこだっけな？カオルがチケットとってきてくれた」

「へえ」あたしも行きたいな」

別にたいした意味も無く言った。

カオルに逢いたいとかでは無く、たまにそんな所に行くのもいいな・

・
・
そう思ってたただけだった。

「聞いてみてやるのか？もう一枚くらいなんとかならないかな？」

「え・・・本当？あゝ・・・でもいいや。やっぱり逢いづらいし・・・」

「

「もういいんじゃない？かれこれ2年くらい経ってないかあ？」

「そうだけど・・・でもやっぱりいいや。健吾楽しんできて」

「ふうん・・・」

いざそんなことを言われるとやっぱり尻込みした。

それに彼女がいると聞かされた今、目の前で彼女の話をするカオルに会うのは嫌だった。

健吾が昼休憩に行き、あたしは書類をコピーしていた。

早めに行く社食はすごい混みようなので、時間をわざとズラしていた。

商品課になってから、昼休みとかにあまりうるさくないので、自然と会社に一日いる出勤の時は、普通の昼休みよりも30分から1時間は遅く取っていた。

コピーを追い、健吾の席の横を通った時、

<ポコン！>という音がパソコンから聞こえた。

ふと足を止め画面を覗いてみるとカオルからのメッセージが出ていた。ちよつと驚きながらキョロキョロを辺りを確認しカオルのメッセージを見た。

<カオル> 「サッカーさ、由美も行きたいって言うんだけどいいかな？」

ちよつと胸が痛くなった。

カオルの彼女の名前なんか知りたくなかったのに……

<カオル> 「あれ？まだ昼休みか？本人もう行く気だからな。

じゃ、明日の夜電話するから」

なんだかその場にいたくなくなり、書類を席に置き社食に行った。ほとんどの人が食事を終え、席は空いていた。

(あゝあ……. なんだか最近ついてないよな) なんだろう……)

直樹は一週間ほど出張に行っていた。

出張に行っている間の夜は暇なのか、毎日電話をくれた。

そのことに対し、嬉しい反面、

「暇な時しかこうして電話とかしてくれないな」という気持ちもあつた。

直樹はあの祐子さんに会った日以来、あの話はしなかった。

あたしもなにも言えずにいた。

一度だけ

「返事の電話するから番号教えて」と言われ、

それを教えてしまうと、祐子さんに二度と会えない気がして

「来年の秋の話だし、まだいいんじゃない？」と軽く断った。

「ま。そうかもね。でも、約束は守るんだよ」とだけ言われた。

たいした食欲も無く、早々に社食を後にし
デスクに戻ると、健吾が

「サッカーのチケットとれるかもってよ？どうする？」
パソコンに向かいながら言われた。

チケットがとれたとしても、カオルはきつと彼女を連れてくる。
名前を知ってしまっただけでも、ちよつと落ち込んでいるのに、
本物を見るなんてできなかつた。

「ううん。やっぱり行かない。あんまり面白くなさそうだし」

「なんだよ。ソレ・・・じゃ、いいや」

そう言いながら健吾はパソコンのキーボードを叩いた。
きつと今の話をカオルにメッセで送っているんだろうと思った。

8時頃になり、仕事を終え帰り支度をした。

「じゃ、明日8時ね。家で待つてるから。お先に」

「なあ？今日向田さんいないんだろ。飯いかない？」

「うん？いてもいなくても・・・別にいつでも行けるよ・・・行く？」

「ん・・・じゃ、行くか」

いざ食事と言われても本当はあまり食欲が無かつた。

適当に居酒屋に入り、隣で健吾はいつもの調子で飲んでいた。帰りの運転手のあたしは、ウーロン茶を飲みながら、なんとなく元気が無かった。

直樹は春の人事発表まで、かなり忙しいようで最近はいつもの残業に輪をかけて毎日かなり遅くまで会社に残っている。

少しだけ教えてくれた人事で、直樹が商品課を統括するようなことを言っていた。それもありイロイロ忙しいのだろう。

日曜には休んでくれてはいたが、それでも祐子さんの件から少しだけ、あたしは直樹に対する気持ちが変わっていた。

それは嫌いとかそんなことでは無いけれど、仕事に没頭する直樹に少し距離を感じていた。

「なんかさ……10年くらい前に戻りたいな」
八方塞の気持ちでなんとなく言葉が口から出た。

「はあ？高校生に戻りたいの？」 呆れた顔をして健吾が言った。

「別に、高校でも中学でも大学でもいい。もつと気楽だった歳に戻りたいな……ってさ。どうして歳を重ねると何事も重く考えることばかりになるんだろうね」

「そりゃ……大人だからじゃない？」 笑いながら言われた。

「大人だもんね……もう……」 目の前のストローをいじりながら言った。

「そついや。あの話どうなった？例の東京の件」

「ん？直樹がダメだつて。もし行くなら別れるつて・・・だからダメになっちゃった・・・」

「ふん・・・」

「それに・・・やっぱり自信無いんだ・・・直樹に言われたの・・・まゆじゃ出来ない」つて。なにも力が無いくせに、そんなことできる訳ないだろつて・・・」

「うわ・・・キツイなあ　あの人らしいけどなあ。

普段は優しそうだけど、仕事じゃキツイなあ・・・」

「でも・・・それが本当のことかなつて。

あたしの仕事は一切認めてないんだつてさ・・・
お金の心配はいらぬから仕事辞めるまで言われちゃった・・・」

そう言つて力無く笑つた。

「なんかさ、お前見てると可哀相になつてくるよ・・・
そりゃ懂れてた人かもしれないけどさ、お前のこと大事にしてるつてどーしても思えないんだよなあ。

カオルと付き合つてた頃のお前と全然違ふなつて・・・
言いたいことも言えないで辛いのか？お前は」

「でも・・・直樹の言うことはいつも正しいから・・・」

「そうかもしれないけど、それにしてもその言い方は酷くね？
じゃあ俺の仕事も認めてねーな・・・あの人は」

「男と女は違うんだってさ。健吾のことはそんな風に思っていないよ。ただのサポートなんか誰でもできるって。そう言われればそうかなって」

思ったんだ。あたしの代わりなんかいくらでもいるからね・・・」

「俺はまゆがパートナーで良かったと思ってるぞ！」

振った仕事はミスしないし、それ以上のことやってくれるし。

メーカーの対応だって、俺じゃなくてまゆに言う人も多いだろ？

それは向田さんが見てないだけじゃないか？」

「あたしこの仕事好きよ・・・でも、これ以上この前の東京の話したら」

絶対この先、今の仕事辞めろって言われる・・・だから、もうしない。辞めたくないもん・・・」

「はあ・・・いくら懂れてたか知らないけど、そこまで自分殺して」

付き合う意味が俺にはわかんねーな。ありえねー」

呆れた顔をして健吾がビールを飲んでいた。

「ありえねー」と言われるほど、あたしは直樹の言いなりなのかな？そんなことを思いながら、モグモグと目の前にある料理を食べた。

「ねえ！もしさ？あのままあたし達付き合ってたなら、今ごろ結婚してたかな？健吾どう思う」

場の雰囲気重くなったので、違う話を振った。

「そうだな。してたかもなあ。別に付き合ってる間は
なにも不満も無ければ、どっちかと言えばイロイロやってもらっ
てたしな」

「そっか。じゃあ今ごろ子供とかいたかもね？」

「子供かあ……。考えたこともなかったな」

「うっそ！あたし絶対結婚するなら健吾だってあの時は
思ってたのに。自分だって「一緒になるうな」って言ったの
に。」

ひどーい！あれって嘘？純粹なあたしを騙してたんだ」

「いや、嘘じゃなかったけどさ。でも、ほらまだ若かったじゃん。

ついそんな甘い言葉も口から出るもんじゃん」

「ふん……。あたし子供の名前だって考えてたのにな」

「なに？どんな名前」

「もういいよ。そんな水子の話なんか……」と泣いたフリをした。

「もしかして……。ハンドルネームに使ってたやつ？なんか前に
カオルに聞いたことあったな？そんな話……。って水子言うな！
人聞き悪い！そんな失敗してないぞ！」

「ん、そう。リオって。漢字で梨緒。いい名前じゃない？」

「松永梨緒ねえ……。まあ。アリだな。でも向田梨緒はなんか
語呂が変じゃね？あ。矢吹梨緒はシックリくるな。な？」

「カオルも言つてたなあ・・・」「ピッタリだね」って。男は俺が決めるって。

あの頃はそれを信じてたんだけどなあ」

そう言つてなんとなく懐かしい気持ちになりボくとカオルと付き合つていた頃のことを考えた。

「カオルに電話してみたらず？」
ポツリと健吾が言った。

「いまさら？もう終わったことじゃない。あつちだつて困るよ。そんなこと」

ケラケラと笑いながら言った。

「待つてたらどうする？」

そんな訳無い・・・健吾だつて昼間のメッセで知ってるのに・・・変な期待するようないやがって・・・

「そんなことして、また最後に直樹選んでしまったら、同じ女に2回も振られるんだよ？カオル可哀相でしょ。ばつかじゃないの健吾」

「まあ・・・そうだよな。お前の考えてること分らないしな」
そう言つて二人で笑つた。

けど、心の中ではやっぱりカオルに彼女がいたことに対して「おめでとー」とは素直に言えなかつた・・・

嫌な女だな・・・あたしって。

東京の出張はやはりスムーズだった。

最近ではスムーズに話が進む度に直樹の

「会社の名前言えば問題無く仕事が進むだろ？」と言った言葉を思い出した。

これは、あたしや健吾の力じゃなく、会社の名前のおかげなんだと思っただ。

初日は相手の営業の人と食事に行き、二日目、健吾はカオルとサッカーに行くと5時半にホテルを出た。

いつもなら祐子さんに電話をして遊びに行く所だが、直樹の言葉に電話をするのを躊躇した・・・

黙ってホテルでTVを見てみると、携帯が鳴った。画面を見ると祐子さんだった。

「もしもし・・・」

「まゆちゃん？今って東京にいるの？」

「あ・・・はい・・・」

「なんで連絡くれないのよう〜！さっき同僚って人が矢吹君迎えに会社に来て、矢吹君に紹介してもらったの。そうしたらまゆちゃんの同僚だって言うからさー」

「ええ・・・でも・・・なんとなく連絡しずらくて・・・」

「どうして？まだ返事してないから？」

「あ……う……ええ……」

「とりあえず、もう少ししたら終わるから、いつものところで待って！」

急いで仕事終わらすから！じゃーね！」

いつもの調子で一方的に電話を切られ、黙って携帯を見ていた。

（まあ……直樹にバレなきゃいいか！）

暇だったのもあったので、急いで支度をしてレストランに向った。

見えない所で、こんな小さな抵抗しかできない自分も情けないけれど、

祐子さんは直樹とこうなる前からの大事な友達だもの！

「ごめん！ごめん！もう～　なかなか終わらなくて～」

「いえ。大丈夫です。どーせ暇だったし」

「暇なら電話くれたらいいじゃない～　もう！水臭い！」

直樹が会っっちゃダメと言ったことを言うべきか悩んだ。

そんな顔を先に察した祐子さんは笑いながらバシツと指を着きつけた。

「はは～ん……彼氏が私と連絡とるなとか言った？」

ズバリ言われて目が大きくなった。

「あ……わかりました？」

「わかるわよ。あの人ならそんなこと言いそうだもん」

「うん……断りの電話も自分がするって……」

「そうねえ……そんな感じだったわね」

そう言っつて祐子さんは少し笑った。

軽く注文をし、ついでに一杯だけ！とビールを頼んだ。

「で。まゆちゃんはどんなの？」

「え？あたしですか？……えーと……」

なにも上手い言い方ができず、ただ困った顔をした。

「私ね。男には女を伸ばす男と、それ以上伸ばさない男がいると思うのね。」

伸ばす男は相手のことを信頼して自由にさせる……

伸ばさない男は相手のことを信頼しているフリをして自分の

言うことだけをきかせる……」

「はあ……」

「彼。向田さんて後者ね」

「うん……」

「優しいこと言っつけど、実は自分に都合のいいこと言わない？」

健吾と同じことを言う祐子さんに、なにも言えずただ愛想笑いをした。

「まあ……私もいろんな人を見てきたから、彼が仕事ができる人かそうじゃないか分かるわ。彼、かなり仕事できるでしょ？」

「ええ・・・春には統括部長らしいです」

「まゆちゃん嬉しい？彼の昇進」

「どっちでもいいです・・・別に・・・」

「あら。どうして？だって自慢の彼氏なんですよ」

「だって・・・今でもほとんど普段は会えないのに、これで部長になったら、

もっと時間無くなるし・・・」

「すれ違ってるんだ？」

「すれ違つどころか、かすつてもいないですよ・・・」

「ふん・・・」

「なんだか最近わからないんです・・・本当に好きなのか・・・優しい時はきつと好きだと思うけど、最近、あの、、、この話以来なんだか鳥かこの鳥みたいな感じがして・・・」

「そうなんだあ・・・男と女は難しいね」

そう言いながらビールをグイッと飲みおかわりを頼んだ。

「まあ・・・ゆつくり考えて。そう急がなくていいから。

年明けに私は会社に言うことにしてるの。望月もね。

あと、望月のほうのヘッドハンティングはなんとかなったわ。少しづつだけど現実に近づいてるから。

でも、彼のことが好きなら無理にとは言わないから。ね？」

「あ・・・望月さんのほうの人って決まっただんですね。」

よかったですねー ちょっと安心しました」

これでもし自分がこれなくても、何とか話は進むんだと思った。少しだけ安心して気が楽になった。

「ん〜・・・私はあんまり安心じゃなけどね〜 あっ・・・まあいいや」

「あたしのほうはあまり期待しないでください。

いつもだけど勇気が無いんです・・・あたし・・・」

「勇気かぁ・・・ でもあっちから出てくるのは勇気いるものね」

「ええ・・・それに、直樹と別れてこっちで一人でつてことに

耐えられるのかな〜とか、もし、その、仕事がダメならあたしには何も残らないとか、そんなこと考えると彼の言うことも

一理あるなって・・・」

「守りに入ったな？」そう言って祐子さんは笑った。

確かにこれは、守りなんだろうなあ・・・

なんだか情けないや・・・

それから2時間ほどそこで飲み、ホテルに戻った。

祐子さんの態度がいつもと変わらなかったことに感謝した。

これからも直樹に内緒にすればいいや・・・
別に浮気する訳じゃないし・・・

ほんの少しだが直樹に反抗してるようで、気分が良かった。

見えない所でということとは、かなり小さいけれど……

北海道に戻り、またいつもの仕事に戻った。

日にちの感覚が無くなるくらいに、毎日が忙しく過ぎていった。

すっかり外は寒く、カレンダーは12月20日になり、自分の誕生日の前日をむかえていた……

ちょうど明日は土曜日だったので、きつとその日くらいは直樹は休んでくれると思った。

わざわざ自分から言い出すのは、なんとなく言いつらかったので黙っていた。

でも、去年もちゃんと覚えていてくれたから、きつと今年もなにかサプライズがあると、密かにワクワクしていた。

デスクで仕事をしていると健吾が

「お前、明日誕生日？」と聞いてきた。

「昔の彼女の誕生日覚えてるなんて凄いじゃん」

「いや、メッセでカオルがそう言うから……」

「ちょっと、健吾は忘れてたの？」

「だって、もう何年前よ？忘れるっーの」

「うつそ〜ん。あたし健吾もカオルもちやんと覚えてるよ？ひどい」

「女はそんなの好きだもんな。よくカオルは憶えてるよな〜」

カオルがあたしの誕生日を覚えていてくれたのは、ちょっと嬉しかった。

一度も一緒にはいられなかったけど・・・

「どこか行くの？誕生日は」

「まだわからない。何も言われてないし・・・」

「また仕事なら考えたほうがいいぞ？」

内心ドキツとしたが、きつとそんな所はマメな人だから大丈夫！

でも・・・人事の件で忙しいのか、ここ2週間くらいの日曜日は直樹は仕事で休めていなかった。

だんだんと「休んで！」と言った時から時間が経ち、効力が薄れたんだと思った。

けど、仕事内容が全然違うと聞いてしまった今、もう一度その言葉を言うことを躊躇した。

その日、仕事を終え自分の家に帰り、きつと連絡をくれると待っていた。

けど・・・何時になってもそんな連絡はこなかった。

別に誕生日と一緒にいられないと死ぬ訳ではないとは思っても、なんとなく寂しかった。

(きつと明日は連絡をくれる・・・)

そう信じて、その日は黙って家にいた。

けど、次の日もその次の日も、直樹からの連絡はこなかった。少しだけ心が乾いた気持ちになった。

けど、それをどう言葉にしているかは、わからなかった。

誕生日ごときで・・・そう思われるんじゃないかと思うと、結局なにもできずに、その歳の誕生日は誰からも

「おめでとう」と言われることは無かった・・・

TVではクリスマスで浮かれている恋人達の画像が流れていた。

彼氏がいるのに、こんなに淋しい誕生日とクリスマスを過ごしたのは人生で初めてかもしれない・・・と虚しい気持ちでいっぱいだった。

日曜日。

夕方になっても連絡は無く、一人が暇だったので、直樹の友達が経営している店に一人で遊びに行った。

その店長は直樹の高校からの友人でタケシさんといった。近づくクリスマスに、店内はクリスマスムードだった。

「あれ！まゆちゃん一人？直樹は」

少し驚いたような顔でタケシさんに言われた。

「仕事だつて、もうあたしより夢中みたい」

苦笑いをしてカウンターの席についた。

「ほんとに仕様が無いな、アイツは・・・こんな若い彼女を

一人にして」

店内は結構混み、タケシさんは忙しそうにホールと厨房の間を走り回っていた。

「繁盛してますね。忙しいみたいでよかったですね？」

「今だけね。イベントが終わればまた暇さ」

そう言って厨房に消えていった。

タケシさんのご自慢のカレーを食べ、1時間ほどで席を立とうとした時、

「もう少ししたら暇になるから、ちょっと待ってて」と言われ、別に用事がある訳じゃないので、そのまま待っていた。

人もまばらになった頃、

「さ。聞いてやるのか！」と言ってタケシさんが隣に座り、「直樹のことで相談あるんでしょ？」と笑顔で言った。

「いえ？別に無いですよ。ただ暇だったし、カレー食べたいなって」

「そう？ならいいけど。直樹が忙しいから一人ぼっちでいるのが嫌でもう別れようと思うの。とか言うのかと思った」

そう言って女っぽい台詞を真似して言った。

「そんなこと思ってないですよ。彼が忙しいのは最初から知ってましたし」

「まゆちゃんは大人だね。俺なら別れるよ。あんな仕事人間なヤツ。あいつが別れる理由はいつもそれだからさ。」

「どこかしら女より仕事なんだろな。だからいつまでも一人なんだよ。」

「まったく不器用だよな。直樹って」

そう言いながら煙草を吸い笑った。

「いつもなんですか？」

「そう。いつも。で……大体別れる前に彼女はみんな俺のところに来るんだ。」

ほら、俺って癒し系でしょ？」

癒し系……確かに太っていてそう言われればそんな感じもした。いつもニコニコしているし、なにより直樹のことをよく知っていた。

「そうですかぁ……あたしも自然と別れたくてここに来たのかな？」

「そうなら大変だけどね。まあ……まゆちゃんは仕事のこと理解してるから」

大丈夫なんじゃない？今度直樹にキツク言っておくよ」

「ええ。そうしてください。キツクね。ガツチリと！」

そう言っただけでタケシさんの店を後にした。

家に帰る道の中、

（いつもなんだ……やっぱり結婚しない原因は……）

そんな事を考えていた。

普通はみんな独りぼっちの生活を察して、直樹と別れるんだなあ……

・
いまのままじゃ、いつまで経っても変わらないんだろうなあ……

直樹にとって結婚よりも大事なものは仕事なんだろうなとシミジミ思った。

やはりあたしは直樹にとって、それほど必要な人間では無いのかな……

・
・
そんなことを感じながら家に向った。

翌日、仕事をしていると健吾が

「誕生日どうだった？」とニヤニヤして聞いてきた。

「別に。普通」そう言って黙って仕事をしていた。

「普通ってなんだよ？」

「ん？なにもないってこと。普通となにも変わらないよ」

「もしかして……向田さん忘れてるの？」

「さあね？知らない。会ってないし」

「うわあ……」

それっきり健吾は、あたしの顔色をうかがい何も話さなかった。

きつと口を開けば、あまり気分の良いことを言う訳が無いと

思ったので、それはそれでよかった。

（このままいけば、クリスマスもあと数日後の正月休みの連休も一人かもな……）

そんなことを考えながら、年末の休みに備えての仕事を片付けた。

何度か社内で直樹とすれ違うことがあったが、

わざと目を合わせないで隣をすれ違った。

どことなく直樹の視線を感じたが、あえて無視をした。

子供じみたことだとはわかっていても、なんとなく許せなかった。

それでも、そんな態度をすれば誕生日を思い出して謝ってきてくれると内心期待をしている自分もいた。

けど、そんな期待とは逆に直樹からの連絡をあたしの携帯は受信すること無く、クリスマスイブを迎えた。

一昨年のクリスマスの日。初めての長期出張で直樹のことを最高潮に意識し、そこからカオルとのバランスが崩れたことをTVのクリスマス番組を

見ながら思った。

誰しも最初は一生懸命に相手の気を惹き、自分も普段以上の頑張りをし、

自分の悪い面を見せずに、（可愛いな）とか（素敵だな）とかそんな部分を見せて相手に好かれようとする。

たぶんあの時の直樹もそうだったんだろう。

ちよと出張で時間があつたし、もうちよと押せば自分に転びそうな子が

いて、、そして転んだのがあたしだったのかなあ……

ミニスカートのサンタルツクの女の子が微笑むのを見てそんなことを思った。

（スカートみじかつ！）

別に誕生日もクリスマスも一人で過ごしても死なない。

浮気されてる訳でも無いし、声を聞きたいなら電話をすれば絶対出てくれる。

けど……「今日クリスマスなの。だから逢いたいな」って言ったならなんて言うんだろう。

なんとなく想像できるし、想像したくない……

「ごめん。また遅くなるんだよなあ・・・家で待ってて」

そう言われて、きつと夜中に帰ってくる・・・

別にクリスマスだって今の直樹には関係無い。クリスマスチャンでも無ければ

プレゼントやケーキを喜ぶ歳でも無い。

そんなことを考えれば別にわざわざ会うことも無いんだな・・・

ボケーとTVを見ていた。きつとこの日本に今、あたしと同じく一人で

クリスマスを過ごしている人なんていっぱいいる。

どこに行けば、そんな人たちと「別にいいよね」と言いあえるんだろう。

ふとTVの横のパソコンが目に入った。

（ここにいるじゃん！）きつとネットの中ならそんな人達はいっぱいいる。

イベントが嫌いな人、一人の人、あたしのように彼氏に相手にされない人、

彼女に相手にされない人、不倫で一人の人だっているかもしれない。

数年ぶりにチャットを試してみようかな・・・そんなことを思った。

電源を立ち上げて消すと言ったくせに消さなかった昔のURLをクリックしてチャットルームにアクセスした。

あの頃のようなワクワク感は無かったけれど、それでも

ミニスカのサンタを見て、CMに入る前のジングルベルを聞くよりはよっぽど良いと思った・・・

知らない所で進む話

久しぶりにアクセスしたチャットルームには見たことが無いほど沢山の部屋が建っていた。

昔ならば入ったことが無くても、見たことがある名前の部屋がいくつもあったのに、この2年弱でそこにあった部屋達は心機一転ほとんど知らない名前の部屋ばかりだった。

ほんの2〜3室は見たことがある部屋もあった。

結束が固い部屋もあるんだなあ・・・けれどそんな部屋に顔を出しても

みんな常連さんばかりできつと話にはついていけずただ黙って「はい」とか「うん」とかそんなことしか出せないのであれば

入らないほうがいいような気がした。

バーを下げながら見たことが無い部屋の名前を読んでいった。

結構な人数がチャットをしているんだと思うと、なんとなく寂しい気持ち

少し減り、（みんなクリスマスでも関係無いよね〜）とそこにいる大勢の人達に心の中で呼びかけて寂しさを紛らわせている自分があった。

中にはカップルでそんなことをしている人もいるのかもしれないけれど・・・

（まずはハンドルネームだよなあ・・・）

自分の昔のHNの（リオ）を使うのはちょっと考えた。

どう見ても女と分かるその名前に（クリスマスに女が一人でチャットか・・・）

きつとそう思う人も多いと思い、男でも使えそうな名前にしようと思っただ。

クダナイ見栄を張る自分もどうなんだろう・・・
実際暇で独りぼっちなのに。

<まゆ>じゃ女だし、、、直樹の<なお>なら男でも女でもイケそうだ！

入って、みんなが女なら女と言おう。男ばかりなら男と言おう。

ここがネットの良い所だ！そう思いながらHNを<Naon>にして
適当に一室入ってみた。

3人の人が話をしていた。簡単に慣れた感じで挨拶をし、
軽く自己紹介をした。もう自分の27歳という歳は結構この世界では
年配だと感じた。

みんなが女の人ばかりで、

「寂しいよね」クリスマスに女ばかりでー」と出しながら、
それなりに会話を楽しんでいた。

聞くとあたし以外のみんなは彼氏がいなく最近ずっとネットばかり
をし、

当然今日もイベントと関係無くチャットをして普通に寝ると言っ

いた。

中には19歳でいまままで彼氏がいたことが無い人までいた。

内心、(そんなに若けりゃどんなことしても男なんてできるのに) そんなことを思ったけれど、自分で「モテない！」と言いきる彼女にそれ以上言うのは喧嘩を売っていると思われるのも嫌なので黙って「そんなことないよ」と無難なことを出していた。

そのうち話はあたしの話になり、どうして彼氏と会わないの?とかどんな人?とか聞かれ、適当に話をするうちにいない人の僻みなのか「今ごろ他の女の人と一緒ならどうする?」とズケズケと書かれ、だんだんと面白く無くなってきた。

そう思われても仕方が無いのかもしれないが、そうじゃないから困ってるんだと……

そのうち面倒になり「あ。じゃあ彼氏が帰ってきたから」といままで言われた分をその言葉ひとつで終わらせ部屋を出た。

やっぱりこんな日は、暇そうな人は僻みっぽいのかな……そんなことを

思いながら他の部屋を探してみた。

新しく作られれば部屋の名前はどんどん上にあがる。古い部屋ほど下にある。一番下まで見たけれど古い所にほとんど人がいなく

新しい所はそれなりに人がいた。

「なんだかどこもたいしたこと無いな」 もう止めようかな……」

そんなことを思いながらも下までチョコチョコとバーを下げながら
なにかインパクトがありそうな部屋の名前を探していた。

けれどそんな部屋なんかどこも無く・・・

「もうやめよつと・・・ほんの少しでも人と話せたからいいや」

久しぶりにメールチェックをして、ダラダラとHPを見たりして時
間を

潰しているともう12時になっていた。

(イヴも終わりか・・・)

結局ケーキもチキンも食べずにその年のクリスマスは終わった。
意地を張らずに連絡をすればいいのに・・・

それでもやっぱり去年も、その前も一緒にくれたのに、
なにも自分のことを考えてくれないと思うと寂しかった。
このまま起きていると、泣きそうになりそうで
無理をして布団の中に入った。

(これから・・・ずっとこうなのかな。あたしにはもうイベントと
か無いのかな)

暗い天井を見ながらポツリとそんなことを考えた。
もう・・・いい加減年だもんな。
卒業しなきゃな・・・そんなこと・・・

翌日、昨日のチャットのこともあり、それほど独りぼっちで過ごした気分でもなかった。実際は思い切り一人だったけれど……

それでもあたしは素直に直樹と目を合わせることはできなくてすれ違う時も下を向いていた。

もっと素直になれば、きっとそれなりな対応としてくれる人だと分っているのに、どうしてもできなかった。

変に意地を張り続けてもなんの意味も無いのに……

その日、それでも家に帰ってから0時までの間、

(まだクリスマス圏内だよね)と2年前に誘ってくれたことを思い出し

デジタルが1分ずつ進むのをぼくと見ていた。

一本自分からメールをすれば、この気持ちはスッキリする方向に向うかも

しれないのに、そうするとなんとなく負けた気がして黙って直樹のほうからの

連絡だけを待ち続けた。結局、その想いは伝わらなかった。

26、27日と朝から直樹は年末の挨拶周りで会社には居なく、

最終日は健吾と二人で外出をして戻った時には

直樹はまた書類の山に埋もれながら、他の人達と打ち合わせをしていた。

話すことも側に行く事もできずに、結局最終日は黙って家に戻った。

休みに入って3日後の31日。

あまりの暇加減に普段なら絶対思わない実家に帰ろうかと考えてい

た。

年末に一人ぼっちなんて、もう何年も無い。
去年は直樹がいて、その前はカオルがいた。
その前は・・・たぶん誰かいたはずだ。

そんな自分が惨めで、帰ろうか、どうしようか考えていた。
きつと31日の大晦日でも直樹は会社にいるのだろう。
なんだかどどん直樹の行動が嫌いになってきた。
夕方、家を出ようとした時、やっと直樹から連絡がきた。

「まゆ?ごめん。今、仕事終わったから今日うちにこれる?」

「・・・・・・・・・・」

「聞ってる?今日さ、これからうちで一緒に年越ししようよ」

「・・・・・・・・・・」

「まゆ、なに、怒ってるの?ごめんって。仕事が忙しくてさ。で
も、も・・・・・・・・」

「もういい!今日は実家に帰るから!」

電話を待っていたくせに・・・
仕事が忙しいって知ってるくせに・・・

でも、やっぱり自分の都合だけであたしに会おうとする直樹に
腹がたつて、直樹が話をしている最中に、怒って電話を切った。

実家に帰る用意をしていたのに、なんだか力が抜けてそのまま黙って家にいた。

(別に家に電話した訳でもないし・・・どっちでもいいや・・・)

そんなことを思いながら黙って部屋にいた。

本当は直樹に会いたいののに、勢いで電話を切ってしまい、どうすることもできずにただ時間が過ぎていた。

きつと黙って家にいたのは、直樹が家にいるかもと様子を見に来てくれないか内心思っていたのかもしれない。

けど、新年が明けてもあたしは一人だった・・・

このままフェイドアウトして、直樹と別れるのかな・・・そんなことが頭の中を過ぎった。

けど、不思議とそのことにたいして、あまり悲しい気持ちにはならなかった。

それならそれでいいかもな・・・

どんどん気持ち冷めていくのが自分でもわかった。

憧れは憧れのままのほうがよかったのかもな・・・

そんな感じで直樹のことを受け止める自分がいた。

ギリギリだった気持ちはどんどん乾き、もう怒りも無くなりつつあった。

年明けの仕事が始まった。

新年の挨拶は商品課が今年の仕事を始める前に済んでいた。通常の人達よりも、商品課は出張や残業が多いのもあり、いつもお正月の休みは多少のズレがあり、普通のみんなどは2日ほど遅く仕事が始まった。

商品課だけの朝礼をすませ席についた。朝礼の間に2回ほど直樹と目が合ったが、悪びれもせずニコツと微笑む直樹が憎らしかった。

いつもなら笑顔で返す所だが、あえて無視して思い切り違うほうを見た。

そんなことをしても、きつと直樹にはなにも打撃が無いとは思っていたが、それでも笑顔にはなれなかった。

ムスツとしたまま席につくと健吾が顔を覗きこんできた。

「朝から機嫌悪いな・・・ 正月休みに喧嘩でもしたのか？」

「してないよ。会ってないもん」

「うつそ・・・連休に一度も？」

「あたし・・・もう別れるかもしれない」

そう一言だけ言って黙々と仕事をした。

「まじ？つーか・・・この連休なにしてたのよ？一人だったの？」

「うるさい。今日は話かけないで」

そう言って黙って仕事をした。

そんな時、後ろから直樹が話しかけてきた。

「まゆ・・・今日さ、昼一緒に食べない？」

そんな二人を見ないふりをしながら書類の影から健吾の目が見えた。ちよつとその仕草が可笑しくて笑いそうになった。

「あたし、昼から打ち合わせで外に出るから」

直樹の顔を見ないで黙ってパソコンを打っていた。

「じゃあ・・・夜は？」

「残業あるからいけない」

「遅くなってもいいからさ・・・」

「疲れるから嫌！」

そう言つて席を離れた。

後ろで健吾が

「向田さん・・・誕生日も無視して連休も一人にしたの？」と、

直樹に言つてるのが聞こえた。

直樹がどんな顔をしてその話を聞いているのかは見えないが、内心（ざまーみる！）と思いつながら、給湯室に行った。

5分ほど時間を潰し、席に戻ると、物凄く嬉しそうな顔をして健吾がニヤニヤしていた。

「人の不幸って面白いよな」

「性格悪いね・・・相変わらず」特に笑いもしないで仕事を続けた。

「少しは懲りたんじゃない？これで」

「知らない・・・」

「今日、家で待ってるってさ。伝えてだって。俺はちゃんと伝えたからな」

まだニヤニヤしながら健吾が言った。

「悪いと思ってるなら自分で来るべきじゃない？あたし行かない」

「まあ・・・そうだけど・・・」

そのまま健吾は話をする事無く、黙っていた。でもニヤニヤと・・・
(絶対行くもんか!) そう思いながら仕事をした。

その日の夕方、出先から戻り書類の整理をしていた。

まだ終わる目途が立たなかったので、給湯室に珈琲を取りに歩いていった。

中には人の気配があり、そのまま入ろうとした時、話し声が聞こえた。

その中に健吾の声もあり、ふと足を止め、その場に立ち止まった。

「4月の人事で向田さん部長だったさ」

声の感じで西田さんだと思いながらその話に耳を傾けた。

「ふん・・・」さほど興味の無い健吾の声が聞こえた。

「でさ、商品課の今のパートナーも入れ替えあるんだってさ」

「まじで？俺、まゆに全部頼みつきりだから別れたらキツイな」
いない所でも、そう言ってくれる健吾の言葉が嬉しかった。

「そうだな。まゆちゃん全部やってくれそうなもの」

「そうそう。文句言っけどやってくれるのよ。楽だぞ？まゆとだと」

「でも、まゆちゃん外れるらしいよ？」

西田さんの言葉にドキツとした。

「なんで？外れるってなんだよ」

「向田さんが統括になるから、自分にはパートナーはいらないってだから今のままじゃ一人余るだろう？だからまゆちゃん外してくれって」

向田さんが上に希望出したらしいよ？」

「なんだよそれ。パートナーいらなくてどーゆーことよ？」

「ほら、去年の夏くらいに向田さんとペアの小山がミスしたじゃん。それ以来、小山に仕事ふらないで全部向田さんがやってたらしくて、

それで今回から一人でやるってさ」

「そんなの自分の都合じゃん。まゆには関係無いことじゃん」

「まあ……きつとまゆちゃんと結婚でも考えてるんじゃないの？向田さんも、そろそろ年貢の納め時って感じだし。」

まゆちゃんならいいんじゃないの？男としては、あの年の差嬉し
いだろうし。

結構二人で話している時、仲いいじゃん。

「直樹」とか「まゆ」とか言っちゃって。向田さん直樹って呼ばれてんだな」

それもあってキツイ商品課から外すってこともあるんじゃないかと……

「ごじゃなくて、たぶん前の商品2課って聞いたな」

「2課?あんな所にまた戻すのかよ!」

「いや、俺が決めたことじゃないし。ただ統括になることと、まゆちゃんを外してくれて頼んだことしか知らないけどさ。2課は噂だよ。もつたいないと思うんだけどな」俺は「

「もつたいないより・・・まゆより仕事が出来ないのいっぱいいるだろ?」

「なんでまゆなんだよ!」

「いや、それは俺に聞かれても・・・向田さんが直々に頼んだつて・・・

「まあ・・・春の話だからさ。今からマツも少しまゆちゃんに押し付けてる

「仕事、自分でやったほうがいいぞ?次に誰にあたるかわかんねーし」

「ちょっと、俺、向田さんに聞いてくるわ。変だろ、その話!」

そう言つて給湯室から勢いよく出てきた健吾とバツタリ会つた。会つたと言つより、話を聞いてビクリして足が動かなかった。

「あ・・・今の話・・・全部聞いちゃつた?」
「あたしがいたことに驚き健吾が言った。」

何も言わずそのまま自分の席に戻ろうと歩いた。

直樹の所に行こうとする健吾の手を掴み、自分の席に座らせた。

「なに?ちょっと聞いてくるだけだつて」

「あたしが聞くからいい・・・」

「ん・・・なら・・・いいけど」

そのまま健吾は黙って席に座りなおし、また仕事を始めた。

なにも手につかなかった。

ただ、勝手にそんなことを決めた直樹に腹が立って仕方無かった。統括になるなら、そんな権限はあるとは思っても、どうして自分なのか腹が立ち黙って唇を噛んだ。そんな様子を黙って目の前で健吾が見ていた。

「健吾・・・」

「うん？やっぱ俺が聞いてこようか？ちゃんとやってやるよ」

「違う・・・もし、この話が本当なら・・・あたし辞める」

「はあ？また黙って従うのかよ・・・ちゃんと向田さんに・・・」

「違う！この会社辞める！東京に行く！」

「えええー！マジかよー！」

あまりの健吾の声の大きさに商品課の全員がこっちを見た。慌てて「なんでもないです」と健吾がみんなに笑った。

「ちょ・・・いいの？マジで！向田さんどうすんのよ？」

「まだ決定なのか、わかんないじゃん」

「だから、それが本当なら。もう直樹の言いなりになんかならない。なんでも自分勝手にあったまきた！ちょっといい男だからっていい気になりやがって！」

「イイ男は関係無いと思うけど……」

「もういい。だんだん嫌いになってきた!」

「ちょよ、声大きいって、とりあえず会社出ようって!」

そう言って自分のカバンを持ち、あたしの手を引いて急いで廊下に出た。

駐車場で健吾の車に乗せられた。

「ちよつと頭冷やせて。まだ決まった訳じゃないだろ?」

「だって!上からの指示ならまだ納得するけど、なんで直樹がそんなことまで決めるの?あたしそんなに仕事できない?そんなに迷惑かけた?変じゃない!」

「いや、、だから、それは俺もそう思ってるってば。

きつとまゆを家に置いておきたいんじゃないの?

ほら、例の件だってバイヤーやってなきゃ、でてこない話だったしさ。それもあるんじゃないの?」

「だって、それは断る気だったもん。「気のすむまでやりなさい」って

自分で言ったのに…… どうして……」

悔しくて目が潤んだ。

「まあ……俺も納得はしないけどよお……」
そう言いながら健吾も困った顔をして黙った。

「とりあえず、あたし今日聞いてくる。それが本当なのか」
そう言っつて健吾の車を出た。

「あんまり興奮して言うなよ？な？後から電話くれよ？」
「うん。わかった・・・」

家に戻り、簡単に支度をして直樹の家に向った。
さすがに腹が立って食事の用意もわざとしなかった。

11時を過ぎた頃に直樹が帰ってきた。
いつもならば玄関に迎えに出るが、とてもそんな気分にはならなかつた。

「まだ怒ってる？」

いつものニコニコした顔をして直樹が部屋に入ってきた。

「これ。遅くなってごめん。忘れていた訳じゃないんだ・・・
その・・・連休もちよつと忙しく・・・」

なにかプレゼントの入った袋を差出しながら言った。

「あたしを外す相談が忙しくて？」

話を途中で切りそう言った。

「え、なんの話？」

「あたしを商品課から外してくれっつて頼んだんでしょ？」
「ずいぶんと話が広まるのが早いね」

「どうして？あたしミスした？気のすむまでやれって言うてくれたじゃない！」

「どうしてなんでも勝手に決めちゃうの！」

「前にも言ったろ？下手にこの仕事に関わるから、

あんな話もくるし、それにもう残業しない部署に移ってゆっくりとしなよ。

ここに引っ越しておいで」

「あたし残業が嫌って言った？この仕事が嫌いって言った？直樹なんにもわかってないじゃない！」

「まだ迷っているから東京の話をキチンと断れなんだよ。

この仕事から離れればそんな気はもう起きないよ。だから外れるのは一番いいんだ。そう思って俺が決めた」

「もう決まったの？それは」

「ああ。そうしてもらった」

直樹は勝手だ・・・

自分の都合だけであたしの行動すら決めてしまう・・・

「もう・・・いいよ・・・」

一緒にもいてもくれない！なんでも一人で決めちゃう！

あたしがどれだけ寂しかったとかわからないでしょ！

自分が会いたい時だけ連絡して！もういい！

直樹とは一緒にいられない！もう・・・別れる！」

「別れてどうするの？東京のあの馬鹿げた話に乗るの？」

そんなの無理に決まってるじゃない。黙ってここにいれば

なんの心配も無いのに、それでもそうするの？」

(なに言ってるの?) と言うような顔をして少し笑いながら言った。

「無理かどうかなんかわからないじゃない！」

馬鹿げてなんかいない！なんでも直樹の言うことが

正しいと思わないで！あたし東京行く！」

「失敗するのが関の山だよ・・・」

俺のこと好きなんでしょ？ならいいじゃない。

俺もまゆのこと大好きだよ。だからいつも家にいてくれたら

もう寂しいことなんか無いだろ。俺は、どんなに遅くなっても

キチンとここに帰ってくる。無駄な努力することないだろ」

「もう直樹の言うことなんか聞きたくない！さよなら！」

引き止める声も聞かずに部屋を飛び出した。

そのまま車の中から祐子さんに電話をした。

きつと今の勢いで言わないともう電話はできない。

「もしもし。祐子さん！」

「あら。まゆちゃん。どうした？また出張決まった？」

「あたし、祐子さんの会社行きます！お願いします」

「え？ど・・・どうしたの、なにかあった？え？」

ちよつと慌てて祐子さんが答えた。

「ダメですか？あたし3月で仕事辞めます！直樹とも別れます！」

「ええー 本当によいの？本当？」

「本当です！」

「そりゃ・・・私はとっても嬉しいけど・・・でも、彼の
「じゃ！そーゆーことで！また連絡します！」

いつもとは反対に一方的にこっちから電話を切った。
悔しくて涙が溢れた。

（馬鹿にして・・・）

涙をグツと拭いて直樹の家の駐車場から出た。
腹が立ちすぎてどこを走ってるのかわからなかった。

ピピピピ・・・

信号が赤の時に携帯が鳴った。
直樹からなら、もう一度文句を言おうと思い画面を見ると健吾だった。

「もしもし・・・あの・・・大丈夫か？まだ話中？」

「今、健吾の家に行く！」

「あ・・・うん。じゃあ、待ってる。あんまり熱くなつて事故る
なよ」

携帯をバックの中に投げ入れ、そのまま健吾の家に向った。
インターホンを押し、健吾が顔を出した。

「どうなった？」心配そうな顔を見て、一気に涙が溢れポロポロと
こぼれた。

「ちよっ！こんなところで泣くなよ！隣の人に誤解されるだろ・・・
もう〜 とりあえず入れよ」

そう言つて慌てて中に入れた。

「やっぱり本当の話だったのか？もう決まりか？」

そう聞かれば聞かれるほど悔しくなり、健吾に抱きついて大泣きした。

「やっぱり・・・本当かあ・・・」

そう言いながら黙つてそのまま背中をポンポンと叩き、泣き止むまで黙つて待つていてくれた。

少し時間をおいてから、目の前にウーロン茶を出して

「まあ・・・ちよつと落ち着けよ」と言い自分もビールを飲んだ。

「落ち着ける訳ない！」そう言つて健吾のビールをとり一気に飲んだ。

「あつ！馬鹿！お前車だろ！なに飲んでるんだよ！」

「もうなんでもいい！もおお〜！ 嫌だ！」

「嫌だ・・・って。俺も酔つ払つて絡まれるの嫌だあ〜」

そう言つて全部ビールを飲み干したあたしを見て情けない顔をして言つた。

「まだ時間あるしさ、向田さんだつてちゃんと話せば分つてくれな
いか？」

「しらない。もう別れるって言ってきた」
「はやっ！まじで？向田さんなんて？」

「知らない。そう言っても「別れて馬鹿げた話に乗るのか？」だつて・・・」

もう知らない。絶対許さない！あんな男！それも笑いながらだよ？
なによ！ちよつと顔がいいからって！」

「いやだから・・・顔は関係ないから・・・」

「だって、一目惚れだったんだもん！」

「知らねーよ！そんなもん！」

呆れた顔をして馬鹿にしたように言った。

勝手に冷蔵庫をあけてビールを数本だし、健吾に一本渡して

「別れた記念に乾杯だ！」と差し出した。

「っーか・・・本気なの？まあ・・・ちよつと今回ののは向田さんが悪いけどよお・・・」

「もういい。あの顔は好きだけど性格は大嫌い！」

「やっぱり顔がいいのは性格が悪いんだ！よくわかった！」

「俺は前からワンマンだつて知ってたけどなあ」
「だからあんまり好きじゃなかったけどさあ・・・」

「健吾だつて別れるって言ってたじゃない。
本当にもういい。絶対別れる！はい！乾杯！」

無理矢理に乾杯をさせ、また一気に半分ほど飲んだ。

「つーか・・・この乾杯の意味がわかんねえ・・・」

そう言いながら健吾も呆れた顔をしてビールを飲んだ。

もつべきモノは元カレ

あれから2週間。

直樹とすれ違っても目も合わせず仕事をした。

何度か声をかけられたが、

「なんですか？課長」と冷たく言うあたしに、

「いや・・・なんでも無い・・・」と言い直樹は自分のデスクに戻った。

それを見た健吾が、

「お前怒らせると怖いな・・・」と呟いた。

自分の中で直樹に対しての恋愛感情はもう消えていた・・・と思う。

日帰りの出張で、健吾と二人車を走らせていた時のこと・・・

「なあ・・・まじで3月いっぱい辞めるの？」

「うん。有給が残ってるから実際は4月まで在籍だと思う。

秋にはあっちの仕事が始まるらしいから、その前に

いろいろ準備があるんだってさ。だから5月にはあっちに行く予定

「お前、カオルの時にその行動力があつたらよかつたな。そっかあ・・・まゆも辞めちゃうのか・・・」

「なに〜 寂しいの？」

「寂しいってどうか・・・俺の仕事増えるな〜ってさ」

そう言っただけで健吾がズルそうに笑った。

「健吾・・・ごめんね。全部押し付けるような感じで辞めることになっただけ。」

もう少し健吾と一緒に働きたかったけど・・・」

「仕方ないさ。組織には太刀打ちできねーもん。」

所詮、そんなもんだろ。俺達なんか」

「ん・・・そうだね。でも、辞めるまではちゃんと頑張るから。迷惑はかけない。あと、いまのうちに協力してくれるメーカーもチェックしてくよ」

「しっかりしてんな。でも、何件かは大丈夫だと思うぞ。」

まゆのこと信賴してるとこ結構あるじゃん。大丈夫だ！」

「うん。ありがと。絶対頑張るから。東京に来たら遊ぼう？」

ちゃんと連絡してね。絶対だよ」

「うん。わかった・・・って、お前あつちに行くならカオルに言わないの？同じ東京なのに」

一瞬ドキッとしながら、健吾の顔を見た。

同じ東京にいても、偶然会うことなんか無いだろうと思った。

祐子さんも望月さんももう今の会社を辞めるし・・・

カオルとはなんの接点も無い。

「言ってもなにも始まらないでしょ？あんな裏切りかたしたのに。」

健吾、カオルに言ってないよね。あたしが直樹と別れたこと」

「あ……うん……まだ言ってない。ハッキリしてないかと思っ
て」

「もうハッキリしてる。けど、カオルには言わないで！」

「なんで？別れたなら言ってもいいじゃん」

「言わないで……花嫁修業で辞めたとか言っておいて」

「なんで嘘つくんだよ。いいじゃん」

「言ったからってなにが変わる？いまさらじゃない……」

もうカオルには新しい彼女がいるのに、いまさらそんなこと聞かさ
れて、

おまけに喧嘩別れで、東京に行ったなんて言われたら、
格好悪くて泣けてくる。

そんな惨めな状態で、カオルに会うことなんかできない……

「ん……わかった。じゃあ、、武者修行に出たって言うておく」

「花嫁だっつーの」

「言ったほうがいいと思うけどな」

また期待をさせるような言い方をして健吾が煙草を吸いながら運転
をした。

そんな健吾の意見を無視して黙って外を見ていた。

（カオルの近くに行くんだなあ……）

直樹と喧嘩別れしてから3週間ほどした週末。
インターホンの音にドアを開けると直樹がいた。

「あ……ちよつといいかな。ちゃんと話しようよ」

「もう話すことなんか、なにも無いけど」

「だからさあ……本当にこれでいいのか？」

「いいよ？もう直樹のことは忘れる」

ドアを閉めようとしたが、グツと止められた。

「ちよつと……一旦部屋で話そうよ。玄関じゃなくて……」

後ろから直樹が部屋に入り、ため息をついて話を始めた。

「俺は別れる気……無いんだけど」

「あたしは別れる気しか無いんだけど」

「ちよつと待つてよ……まゆ……」

「もう直樹の言いなりになんかならない。勝手すぎるよ！
なんでもあたしが言うことを聞くって思ってるでしょ！
絶対自分には逆らわないって思ってる！」

「そんな風には思ってないって。俺はまゆがもつと楽に
俺の所に来やすいようにって、そう思ってああしたんだって」

「だからそれが勝手だつて言うの！あたしそんなこと望んだ？
一度だつていままで直樹に反抗した？
いつも直樹のいうこときいたじゃない。なのに……」

「でも、この仕事辞めないといつまでも、あの話で迷うだろ？ お前には無理だつて。本当にそう思うから言ってるんだぞ。お前の為に言ってるのに、なんでわかってくれないんだよ」

「どうして？なんで言い切るの？」

「そう・・・思うから・・・ 誰が見ても分るだろ？」

真面目な顔の下はきつと、あたしのことをバカにしているんだ。所詮あたしじゃって思ってるんだ。

悔しくて、、悔しくて、、知らないうちに手に力が入っていた。

「直樹の思うことが全部正しいの？絶対正しいって言える？」

あたしあのまま直樹を待つだけの生活だつて嫌！

仕事ばかりして、あたしのこと放つとく直樹も嫌！

ぜんぜん正しくないことだつていっぱいあるの！

これじゃ遠距離より最悪。側にいるのに全然嬉しくない！」

目に涙を溜めて言うあたしを見て、申し訳ない顔をした。

「本当に俺と別れて後悔しない？」

「しないわよ！」

そう言つて滲んだ涙がこぼれないうちに手で拭いた。

「わかった・・・ そこまで言うなら・・・ そうするよ。

いままで一人にしてごめんな・・・」

そう言つて直樹は部屋を出て行つた。
本当に悔しかった。絶対見返してやる！
それしか頭の中には浮ばなかった。

あんなに憧れて大好きだったのに、別れたことより
最後の最後まで「無理！」と言われたことが悔しくて
仕方無かつた。

直樹から貰つた物、一緒に撮つた写真、お揃いのカップ、
すべてゴミ袋に投げ入れて一つにまとめた。

ちよつと高価な物に躊躇はあつたが、悔しさが勝ち全部を捨てた。

ゴミ袋の中でひっくり返っているモノ達を見下ろし、
不思議と胸がスーとした。

(別れる時はこうじゃなくちゃ！)

相手のことを嫌いになつて別れるのが一番だ。

いつもまでも相手のことをウジウジ考えながら別れるのは
カオルの時だけでもう沢山だ・・・

スッキリした気分で購入物に出かけた。

少しずつ引越しの準備をしようとガムテープや紐を買いに
近くのホームセンターに行った。

「あ。怒らせると怖い人だ・・・」
振り返るとまた健吾に会つた。

「絶対あたしのことつけてるでしょ？」そう言つて笑いながら

健吾と並んで歩いた。

「なに買いにきたの？・・・ってもう引越しの準備？
まだ辞表も出してないのに」
カゴの中身を見てそう言った。

「ん。さつき直樹と完全に別れたから、ついでに部屋を片付けて
使わない物から先に準備しておこうと思って」

「完全に、向田さんに会ったの？」

「うん。さつきうちに来た。で、完全に別れた」

「うわぁ・・・ 本当に別れたんだぁ・・・」

「当たり前じゃない。言ったでしょ？絶対許さないって」

「お前と別れる時、モメないでよかったよ・・・本当に・・・」

「そう？」

ニツコリと笑ってそのままカートを押して歩いた。

「じゃあ、今日は俺がオゴるわ。独りもの同士、気楽だしな」

「ん。そうだね。もう誰にも気兼ねないからね。じゃ、行こう」

「ああ。少しなら引越し準備手伝うよ」

そう言っただけ健吾はカートを押して先に歩いた。

部屋に戻り、健吾は玄関にある直樹からの贈り物が入ったゴミ袋を
見て

「あゝぁ・・・」と言いながら部屋にあがった。

「あれ・・・結構高い物とかあるんじゃない？」

もつたいない顔をして聞いてきた。

「うーん・・・あるだろね。」

直樹つてブランド物とかのアクセサリーとか結構くれたから」

「それ捨てちゃうの？もつたいたくない？それくらい持つてても問題無いじゃん・・・」

「ダメ！別れた男の物なんか持つてても仕方ないでしょ？」

気持ちが落ち込んだ時にそれ見て後悔したくないから。

欲しかったら持つていつていいよ。彼女ができたらあげたら？」

少しだけ考えてジッと袋を遠目に見ていた。

「いや・・・やっぱやめとく・・・怨念とかついてそうだから」

二人で押入れの物を出し、要らない物を捨てながら荷造りをした。

「これ、なに入ってるの？」

後ろで健吾がゴソゴソと箱を開けながら聞いた。

「ん？」

振り返ると、その中にはカオルから貰った物や、写真が入っていた。

お互いなんとも言えない間があき黙っていた。

「これは・・・別れた男の物では・・・ないでしょうか・・・」

笑いを堪えながら健吾が言った。

「それは・・・捨てるの忘れたの！」そう言って箱を閉めた。

「ふうん・・・そうなんだ？じゃあ俺が捨ててきてやるよ
そう言いながら箱を持ち上げ、また中を見た。

「そ、っ、そうだね」

(シマツタ・・・)という顔をしながら後ろを向いた。

「ふうん・・・カオルちょっと変わったな。老けたのかな？
髪型か？いや・・・あいつ整形したのか？」

「老けたんじゃないの？もうあれから2年経ってるし」
「そっか・・・そうだよな。2年だもんな」

「うん。カオルも健吾も、もう来年には30でしょ？
三十路だね・・・」

「やばいよなあ・・・30だって。涙がこぼれちゃいそう・・・」
「早く相手見つけないと、直樹みたいに周りに言われるよ？」
「だよなあ・・・でも男は30からだろ？」

「まあね。まだまだイケるでしょ。健吾ももつと残業しないで
出会いを探したら？」

「お前だっけどうすんだよ。もう27だろ？ギリギリだな。
いや、っ、もう終わってるな・・・」

「あたしはこれからさ！つて・・・どうしよう・・・
あつち行つても誰もいなかったら・・・キツイな」

ちよつとだけ不安になった。

このままあつちで仕事人間になつて誰からも相手にされない歳になるんじゃないだろうか・・・

「んゝ まあ・・・そればかりはわかんねーな。

仕事もそこそこに誰か見つけないとな

体で釣れるのもギリギリだぞ」

笑いながらこつちを見た顔が憎らしかった。

男はいいよなあ・・・

幾つになつても若い女と結婚できて。

逆つてあんまり無いからなあゝ。

「ま。これは大事にとつておけよ。捨てられないんだろ？」

カオルとの想い出の品が入ったダンボールにガムテープを貼り積み上げた。

「ん・・・なんとなくな。あたし、カオルのことは大好きだったから」

「向田さんだつて大好きだったろ？」

「そうだけど・・・別れ方がね。あたしが先走らなきゃきつと、

最後にカオルがホテルに来た時、また元に戻ったかもしれない・・・

「

それを言うならカオルの子供より最低な嘘だな・・・」

カオルとの別れを決めた時、カオルはあたしに東京に来て欲しいばかりに「来ないと会社の子に誘われてるから遊ぶ」と子供じみた嘘を言った。

まだ迷っていたあたしには、その嘘を見破ることができず、それなら別れたほうがカオルの為だと勝手に決め、その話を聞いた夜中、カオルの家から黙って帰ってきた・・・

お互い不安定だった時なので、頭が回らなかった。一緒にいてあげられないのならば、いつそその方がカオルが寂しい思いをしなくていいのではと思い、その嘘が引き金になった。

結局、直樹と付き合った後に、それが嘘だと判明したが、もう手遅れだった・・・

「あの時は遠距離ってことが大きかったから・・・カオルの嘘も今となっては笑い話だよな」
弱く笑い箱を見つめた。

「アイツからその話聞いて、やっとあの朝の謎が解けたよ。そりゃお前も怒って帰ってくるわな。ま・・・アイツが迂闊だったって

ことだよな」

「うっん。あたしが悪いんだって。ちゃんと言いたいこと言わないから。

だからカオルにも辛い思いさせちゃったしね。今でも悪いことしたな・・・って思ってる」

「意地張らないで連絡すれば？本当はまだ好きなんだろ」

「意地じゃないよ。カオルの為だし、自分の為だから・・・」

「もしも、カオルに会いまた好きだと思っってしまったら、きつと彼女と別れてほしいと願ってしまう。」

「そんな勝手なことできない・・・」

「せつかく今は幸せかもしれないカオルに波風立てることをしてはいけない・・・」

「けど・・・結局は自分の気持ちの弱さなんだよね・・・」

「直樹がダメだからカオルに・・・なんて都合が良いにもホドがある。それも、、あんな終わり方したくせに。」

「だから・・・健吾も絶対言わないで。ね？」

「そう言っただけでまた引越し準備をした。」

「頑固だよなあ・・・」呆れた顔をして呟いた。

「部屋がスッキリしてから、二人で外に夕飯を食べに行った。」

「なんとなく気分は軽かった。」

「こんな時、一緒にいてくれる健吾に心から感謝をした。」

「持つべきものは昔の彼氏だ・・・」

「そう思いながらサツパリとした気持ちで食事をした。」

「ありがとね。健吾」本当に感謝の意味を込めて言った。

「なに？気持ち悪い・・・」人の顔を見て疑った顔をしながら

ちよつと笑つてそう言った。

「ううん。こんな日に一緒にいてくれて」

「本当に間が悪いよな。俺って。なんか感謝のしるしでも貰わないとな」

「本当だね。じゃ今夜うちに泊まる？」

「は？な、なに言ってるの、お前、」

驚いた顔をして目が泳いでいた。

「ん？こんなにお世話になったから、一晩くらいいいかな？ってさ」

「ええー。お前なに言ってるんだよ。馬鹿じゃねえの・・・」

「まじで？、、どっしようかな・・・そりゃもう向田さんもいな
いし」

「嘘だから」

「え？・・・し、知ってたよ・・・嘘だろ？うん。知ってた」

慌ててビールを飲みながらそう言った。

「ふん・・・」

そんな健吾を横目で見ながら笑った。

やっぱりこんな日に健吾がいてくれて心底良かったと感じた。

最後のキス

2月に入りまだ表面上、人事の話は発表されていないにしろ、商品課の中で、次の人事であたしが外れることはほとんどの人が一度は耳にしているようだった。

だからといって特に誰に何を言われる訳では無かったが、どことなく居づらい感じはあった。

社内ではあたしと直樹が結婚をするといった話まで流れていた。

(普通はそう思うのかなあ・・・直樹が直々に頼んだって聞いて・・・)

そんな噂を社食に行った時に、他の部署の女の子達が話していたのを偶然耳にした。

「いいよね〜吉本さん。聞いた？向田さんの話！玉の輿だよ〜部長夫人じゃん」

「本当だよ〜。向田さんあの歳でも結構イケてるもんね〜」

「吉本さんもラッキーだね。イイ男見つけて、次はそのイイ男のおかげで

楽な部署に移してもらって、イイ男の帰りを待つんでしょ？」

「いいな〜 私もそんな人いないかな〜 その為にここに入ったのに〜」

そんなことを言っている彼女達の隣を通ると、

「あ。やばっ！本人だ」と急に黙り軽く会釈をされた。

(もう全部聞いたっつーの・・・)と思いながらもニコやかに笑顔で彼女達に挨拶をして少し離れた席に座った。

(いまさら別れたなんて言ったら・・・みんなビツクリするんだろなあ・・・)

彼女達は声を小さくしているつもりだろうけれど、またヒソヒソと噂話をする声が嫌でも耳に入ってきた。

(やっぱりさつき健吾と来ればよかった・・・)なんだか陰口を言われている気分が背中が痛かった。

下を向いてモソモソと食べているといきなり目の前に人の気配を感じた。

「辞表は、いつだすの？」

そう言って目の前の席に直樹が座った。

あの日以来、まともに話をしたことが無かったので驚いた。それに、一緒に社食で座ったことも無かった。

「ちょ・・・まずいでしょ・・・みんな見てるよ？」

確かにさっきの女の子達がまたこっちを見てヒソヒソと話をしていました。

「いいんじゃない？もう別れたんだし。これからは上司と部下だろ？」

別に一緒に食事しても問題無いじゃない」

そう言って普通の顔をして目の前で食べ始めた。

「ま・・・まあ・・・そうだけど・・・」

そう言いながらなんとも言えない気持ちで食事の続きをした。まだ少し今回のことで恨んではいたが、もう辞めると決めた今、直樹の顔を見てもそれほど腹はたたなかつた。

「今日さ。終わるの遅い？」

そう聞かれて顔をあげた。

「え？なんで」

「いや、暇になつてさ」

「いまさら暇でも直樹には関係無いでしょ」

素っ気無い言い方をして箸を動かしてはいたが、いままでそんな態度をしたことが

無いあたしは、少しだけ直樹の表情にドキドキしていた。

子供が親に初めての反抗期・・・って感じで。

「上司が部下に仕事の相談とかしちゃダメなの？」

「逆でしょ普通は。それに、直樹があたしに仕事の相談なんかする訳無いじゃない」

「今日さ・・・なんの日か覚えてる？」

目を合わせず黙々とご飯を食べながら直樹が言った。

「今日？・・・2月3日・・・あ・・・」

今日は直樹の誕生日だった。

それに2年前、二人が初めて一緒に夜を過ごした日。

「タケシの店に行こうと思うんだ。一緒にどうかなって・・・」

「自分の誕生日には独りでいたくないんだ？」

「あたしなんか、、誰にもおめでとうって言うってもらえなかったのに！」

「そうだよな・・・自分の都合もいとこだな。ただ、最後に一緒に食事しようかなって。ズーとまゆのこと独りにしたし」

内心、自分の時だけ誰かに祝ってもらおうという直樹が腹ただしかった。

けど・・・そんなことを言う直樹がほんの少しだけ寂しそうに見える、このまま断るときっと自分が一人の誕生日を迎えた虚しい時間を直樹も味わうのかと

思うと、可哀想になった。

「ん・・・いいよ。あんな喧嘩別れのままじゃ、後々嫌な思い出しか残らないし。仕方無いから付き合ってあげる。

これが最後のわがままだと思って」

そう言っつて直樹を見てちよつと笑った。

「ありがとね。じゃ、今日8時に迎えに行くよ。家で待ってて・・・」

「うん。わかった」

そう言っつて先に席を立った。

最後までいいかい・・・

あの目で見られたら、やっぱりなあ・・・

惚れた弱みだよな、まったく。

その日の夜、8時に直樹が家に迎えに来た。

部屋の雰囲気を見て、自分との思い出の物がなにも無いことに気がついたようだった。

それでも何も言わず、黙ってソファに座っていた。

用意を済ませ、

「じゃ、行こうか」そう言って二人で部屋を出ようとした。

黙って部屋を見ながら、

「もう・・・ここに俺が来ることは無いんだな・・・」

そう呟いて先にドアを出て行った。

その言葉に何も答えず、後ろをついていった。

「直樹・・・飲むんでしょ？車・・・どうするの」

「いや、今日は飲まないよ。最後までシラフで話したいし。」

送ってもらうと、なんとなく寂しいから。送るほうがいいよ・・・」

「うん・・・」

そう言って直樹の車に乗った。

自分の体に一番合った角度でシートは止まったままだった。

「やっぱりそのネックレス、まゆに似合うな。俺センスいいな」

直樹から貰ったものはすべて一つにまとめたが、

燃えるゴミ、燃えないゴミの分別をしていなかったの、いつまでも出窓の脇に置いてあった。

その中から、一番最初に直樹から貰ったネックレスを

あたしは一番気にいっていた。

(最後までいつけようかな・・・)

そう思って袋の中から出し、今日つけていた。

「うん。これが一番好きだった。シンプルだけど可愛いから」

「ん・・・そうだね」

そう言っただけで直樹はいつものニコやかな顔で運転をした。

その横顔を見ながら、

(この顔が・・・もう少しブサイクだったら、あんなに悩まずに
もっと早く別れたんだろうか・・・)

そう思いながら見ていることをバレない角度から直樹の顔を見ていた。

悔しいけど、、、やっぱりこの顔に本気で「大嫌い！」と言えるほど鬼にはなれない。

店に着き、中に入るとその日はそれほど混んではいなかった。

「お！誕生日の度に顔出すな。久しぶりだな」

直樹にタケシさんが言い二人で笑っていた。

タケシさんがいつも立っている場所に一番近いカウンターの席に二人で座った。

今日はもう向き合っただけで座らないほうが自然だと感じた。

「お前、まゆちゃんをクリスマスに独りにしたろ？」

可哀相に。ね、まゆちゃん」

タケシさんがそう言いながら人の顔を見て

(ガツンと言っただけでやるから!) みたいな顔をした。

「え？まゆ来たの。ここに」

「うん・・・誰かさんが遊んでくれないから、暇でここに来たの
そう言いながらタケシさんを見て笑った。

「そつだぞ？お前そんなことばっかりしてると、フラれるぞ。

いいのか？10歳以上も下の子がいなくなるんだぞ〜」

大げさな顔をしてタケシさんが直樹に言った。

「もうフラれたよ・・・」

「え？・・・だって今一緒にいるじゃない・・・え？」

「今日は俺の誕生日だからって気を使って一緒にいてくれるんだ。

今日が最後のデートって訳」

気まずそうな顔をしてタケシさんが二人を見た。

さすがにあたしも最初からそんなことを言われて、
なんて言っつていいのかわからなかった。

「ま。最後のデートにタケシの店っていう、このセンスの無さが

フラれる原因かもな〜 サッサと飯持ってこいよ。腹減ってるの
に。なあ？」

こつちを見て同意を求めるように笑った。

「あ・・・うん・・・」ただ頷くことしかできずにへらへらと笑った。

「じゃ、、、じゃあ、、、なんか適当に作るわ」

そう言っつてタケシさんが厨房に消えていった。

そんなタケシさんを笑いながら見て、直樹は煙草を吸った。

「今日でまた12歳差になったね。39歳かぁ……
来年は40だよ？うわぁ……やばっ！」
からかうように笑い直樹の顔を見た。

「2年前の今日か……まゆが家に来てくれたの……」
「あ……うん。そうだね。早いね、2年って」
「そうだな。あんまり楽しいことしてやれなかったな」
ちよつと寂しそうな顔をして直樹が言った。

「ううん……最初から知ってたのに、それに対して文句言ってた
あたしもね……あまりいい思い出残してあげれなかったし」

「いや？そんなこと無いよ。俺は十分楽しかったよ。
特にベットのの中ではね」ニッコリと笑いこつちを見た。

「やっぱオヤジだ……すぐ下ネタに走る……」
「言うなよ。歳は！これでも気にしてるんだから」
お互い笑いながら前を向きチラチラ見ているタケシさんを見た。

「俺な。この前、ここ2年のまゆの導入書見たんだ」
導入書とは、いままでバイヤーが交渉しながら、自分の
センスで買い付けした物を写真つきでファイルしている物だった。

「2年分も？直樹……結構暇なんだねえ……」
「ん。すごい量だった。けど、まゆが頑張ったのが
これなんだなぁ……てさ。俺、まゆの仕事ちゃんと見てなかった
なって」

思ったよ。良い物買い付けしてる。センスいいと思った」

その言葉にちょっと驚いて黙っていた。

あんなにあたしの仕事を否定していたのに……

「で、販売の比率出してみただ。そしたら俺、負けてやんの」
そう言つてクスクス笑つた。

意味がよく分からず、不思議な顔をしていた。

「あのさ……その比率つてなに？」

「ああ……売り場の面積とか、商品の個数とか、在庫の数とかね。
統計してどれだけ売れてるのかなつてさ」

やっぱりあまりよく分からなかった……

あたしはいつも「売れ残つてない？」と心配して各店舗の担当に
電話をして「今回は売れた！」とか「ちょっといまいち」とか
そんな生の声でした確認をしていなかった。

商品が店に並ぶ頃には、もうその3ヶ月先の仕事をしていたので、
そこまであまり頭が回っていなかった。

「あたし……直接電話して売れ具合を聞くくらいしか……
してないから統計とか言われても……ちょっと……」
たぶん物凄く恥ずかしいことを言つてるとは思ったけれど
正直に直樹にそう言つた。

「ん。誰もが先のことはかり忙しくて、そんなことすらしてないん
だ。」

各店舗に電話するだけまゆは偉いよ。

それに、そうして店舗の間と距離を縮める努力をしてるから店の人もまゆの商品に愛着を持つてくれる。

それもあって、まゆの選んだ商品の売れ具合はうちの課でほとんど上位になってた。初めて知ったよ……」

自分の選んだ品がそこそこ売れているのは知っていた。

けど、それも直樹は上で自分はもっと下なんだろうな……それくらいしか思っていなかった。

「俺も意地になってたんだ。いつもイライラしてた。

やつても終わらない、サポートに頼めばミスをする。

けど、やらないと終わらない。そんな毎日の中で、いきなり

あんな話が出てきた。まゆはどんなことがあっても俺の側にいるって変な自信あったんだ。いつも俺のこと一番に考えてくれてたし。

そんな風に俺に憧れ持つてくれるのに、弱音なんて吐けないだろ？

幻滅されるの怖いしさ……」

「幻滅なんかする訳ないのに……馬鹿だね、直樹って……」

「何年も憧れてたなんて言われて、そんな醜態見せられるかよ」

「でも。最後に仕事のこと少しでも認めてくれて、

すっごく励みになる。統括部長に言われると自信が湧くよ」

「ん……俺には及ばないけど、そこそこできると思うぞ。

頑張れな。なにか困ったことあったら連絡すれよ。

これでも部長なんだから。下っ端よりは頼りになるだろ」

「偉つそうに・・・ 年功序列で部長なんじゃないの」
「だから歳は言つなよ。実はすごく気にしてるんだから・・・」

直樹に認めてもらえたのは自分にとって最高の褒め言葉だと思った。
どっちにしろ、あたし達は別れただろう・・・

あたしの器の小ささじゃ、残業続きの直樹を支えることは
到底できなかつたと思う。憧れだけじゃなにもできない。

そして、直樹もあたしの側にいるよりも、仕事に気持ちが行って
いるのわかつた。

そんな笑顔の二人を見ながらタケシさんが料理を運んできた。

「なんかさあ・・・さっきから見てるけど、別れた風には見えない
だけだ」

「ん？いや、もう完全に別れたよ。俺、捨てられたの。
おっさんだから」そう言つて直樹が笑つた。

「まあなあ・・・おっさんだもんな。お前、髪とか染めてんだろ。
格好つけちゃつてよ。なんだよその茶色の髪は。日本人なら黒髪
だろ？黒髪！」

そのタケシさんの言葉に二人で笑つた。

なんだか大きな壁が崩れたような気がした。

やはり、直樹は今でもあたしの憧れの人であることは変わりが無か
つた。

けれど、憧れる気持ちと恋人の気持ちは別になった。

「やっぱり直樹は大人だつたね。その大人の雰囲気はコロッと
騙されちゃつたな」

「どこから見ても大人だろ。けど、まゆだつて最初に飲みに行った時、

「ずっと憧れてた」とか「30歳過ぎて素敵になった」とかそんなことばかりガンガン言っつて、あれで気にならない訳ないだろ。

（この子、俺のこと誘つてるんだろうか・・・）ってずっと内心ドキドキしたよ。

まあ・・・同じ会社の子に悪さするのは危険だから、あの日はなにもしなかつたけど」

「そう？あたしは正直に言っただけなんだけどなあ・・・
だつて入社式の時に、初めて見て一目惚れだつたんだもん」

「そうなんだ？それは光栄ですね。ありがと」

「いーえ。どういたしまして。あたしも十分楽しんだから」

「じゃあ、今なら教えてくれる？」

「なにが？」

「一番いままでで、上手だつた人の名前」

「うーん・・・それ言つと直樹傷つくよ？」

「うわ・・・その時点で俺じゃないって言つてるようなもんだな。
じゃあ聞かないわ。やめとく・・・」

「でも、キスは一番かな。きっとこれからも直樹以上はでてこないかも？」

たぶん、付き合う前にあのキスが無かつたら、それほど気持ちが悪くことなかつたかな」

「じゃあ、今後俺はキスだけで生きていくわ・・・」
苦笑いをしながら野菜スティックをポリポリ食べた。

(なにになに?)とタケシさんが話しに入ってきたが、

「教えない」と言っただけで直樹が笑った。

最後のデートは自分にとっても、直樹にとっても、
とても気持ちのいいデートだった。

明日も仕事ということ、その日は0時には店を出ることにした。
タケシさんはちょっと寂しそうな顔をして

「まゆちゃん・・・また来てくれることあるかな?」と聞いた。

「はい。次は新しい彼氏連れてきますね。たまにしか帰って
こないと思うけど、その時は絶対来ます。」

もしかしたら子供も一緒かもよ?」そう言っただけで軽く抱きついた。

「うん。俺、いままで直樹が連れてきた子の中で、
まゆちゃんが一番、馴染めたよ・・・」そう言っただけで背中を叩いた。

「じゃ、また来ますから、そんな顔しないでくださいよ」

「な? いいもんだろ。12歳も下の子の抱き心地」
直樹がタケシさんに言っていた。

「うん。今日は手洗わないわ」と二人で笑っていた。

「それじゃ、また。」と馳走さまでした」と挨拶して店を出た。

「タケシさん良い人だね・・・」

「そうじゃなきゃ、かれこれ20年も付き合っていないよ」

「そうだね・・・」

「ま・・・しばらくは、タケシの店で時間潰すさ。馬鹿な話でもして」

直樹の車に乗り、あたしの家に向った。

もう体に馴染んだ角度のこの椅子に座ることも無い・・・

そう思っレバーを上げ普通の角度に戻した。

次に座る人がすんなり自分の角度にできるよう・・・

家の前につき、

「それじゃ、また明日、会社で」

「ああ。今日はありがとね」

「うん。プレゼント買う暇なかったけど、誕生日おめでと」

「ん。こっちもいままでありがと」

お互い笑顔で顔を見つめた。

その顔を見て、やっぱり素敵だなんて思った。こんなに素敵だと思
う人と

別れてまで行くのだから、絶対成功しなきゃと、また強く思った。

「直樹、一度だけキスしてくれる？」

ニッコリと微笑み、静かに髪を触りゆっくりと唇を重ねた。

軽いキスのつもりで言ったのに、いつものように舌を入れてくる

直樹のキスをそのまま受け止めた。

いつまでも終わらないキスに少しだけ体が熱くなった。

「んっ、、、直、樹、、、もう、、、いい」

自分から唇を離し体を後ろに引いた。

けれど、直樹は回していた腕に力を入れ引いた分以上の感覚を自分に近づけ

また唇が重なった。

「んっんっ、、、やっ、、、もう、、、いいってば、、、」

腕の中から逃げようとしたが、直樹の力は全然弱まらなかった。

やっと唇が開放されたが、そのまま直樹の胸にグツと顔をつけるように抱きしめられ、

突然の展開に心の中で（え？え？）と動揺していた。

「まゆ、、、俺がもし「待っててもいいよ」って言ったらどうする？」

「えっ……」

「そしたらこの別れ話は無かったことになる？」

瞬間的に……自分の心の中の汚い所が見え隠れした。

失敗しても直樹がいてくれる。

自分の力が及ばなくても、あたしにはまだ逃げ道がある。

気がすむまで自分の力を試して、それがダメだったとしても……

ここに戻ってくれば直樹がいてくれる。

「待てないって言ったじゃない……」

「あの時はそう言えば、まゆは側にいるって思ってたけど、もう今はあの時と違うだろ」

「そうだけど、でも、そんなこと言われたら、」

「もう俺のこと嫌いになった？」

そんなことじゃない。

あたしが今、一瞬でも迷ったのは自分の将来が不安だったからだ。

直樹を心から愛しているとか、離れても好きとか、そんな純粋な気持ちじゃない。

ただ自分の為だけだ・・・

「嫌いな訳無いよ。今も昔も直樹は憧れの人には変わりないもの、でも、」

「じゃあ、待ってるよ・・・。まゆのこと」

「違うの！今の気持ちのまま直樹の言葉に甘えると、あたしきつとすぐに嫌なことから

逃げ出しちゃう。仕事で躓いたり、思うようにいかなかったり、

そんなことあったら

すぐに直樹の所に帰りたかって思っちゃう。だから、待ってるなんて言わないで」

「そう思ったら俺の所に戻っておいで」

優しい笑顔と暖かい手に気持ちが大きく揺れていた。

「直樹・・・。ありがとう。でも、あたしやっぱりダメだよ。直樹のことは今も素敵な人だと思ってる。2年も一緒にいてガツカリしたことなんか一度も無いし、いつ目が合ってもドキドキした。

でも、今になって分かったの・・・あたし一度も心から直樹の彼女だって胸を張って思ったこと無いって。いつも嫌われないようにし

よう・・・とか、邪魔にならないようにしようとか、そんなことばかり考えていたの。それって、、なんか違うんじゃないかと思うんだ」

「うん。気がついてた・・・」

ポツと軽く頭に手を乗せ、笑っている声が聞こえた。

「えっ、、そうなの？」

「うん。まゆはいつも遠慮していたからね。その証拠に俺達って喧嘩したこと無いだろ？」

「う、、うん」

「俺はそれが寂しかったかな。本音を言ってくれていないなって。だから、今回のことでまゆが本気で泣きながら文句を言ってくれたのは、実は嬉しかったりもしたかな。やっとそんな姿を見せてくれたなってさ」

いや、、今回泣きながら文句を言ったのは、そんなことじゃないんだけどなあ・・・
複雑な顔をしたままジッと考えていた。

「俺も、初めてムキになっちゃったかな。まゆの前では格好いい大人の男でいようと思ったんだけどな。

あの祐子さんだっけ？あの人、俺苦手」

直樹の言葉について「プツ、、」と笑ってしまった。

直樹が「苦手」とか言うのを初めて聞いたような気がする。そして、本当はあたしが遠慮していると気がついていたことも。

「まゆ、、、まだあっちに行くまで時間あるだろ？俺達のこともう一度考えてみないか」

「いや、、、でも」

「俺にわがまま言えって言ったのまゆだろ。なら遠慮無く言わせてもらっよ。」

俺は別れるのやっぱり反対」

「反対〜って。さっきまで普通に「別れたんだ〜」ってタケシさんに言ってたじゃない！」

「タケシに抱きつく姿見て、「俺のまゆに触るな」ってムカツときた・・・」

アイツわざと腰の辺り触ってたし！だからやっぱり嫌なんだもん」

「嫌なんだもんで・・・」

「俺は遠距離でも我慢するって折れてんだよ？ならまゆも「分かった」って折れてもいいんじゃない？」

「ちよつと、、、考えさせて。じゃ、、、今日はご馳走さま！」

直樹の押しに圧倒されて、このままじゃ首を縦に振らないと話が終われないような気がして、

早々に車を降り、直樹が帰るのを見送った。

直樹は結局、あたしのことを理解しているから、押せばなんとかなる事くらい分かっている。

少し腑に落ちない顔をしていたが、

（早く！早く！）と車が動くよう手でバタバタする姿を見て、

（はいはい・・・）という顔をして車をユックリ動かした。

それでもジツ・・・と見る視線に耐え切れず、そのまま車が走り去る前に

あたしは慌ててアパートの階段を駆け上がっていった。

直樹の逆襲

翌日、会社で顔を合わせた直樹はいつものようにクールな感じで軽く微笑み

「おはよ」と隣をすり抜けていった。

その後姿を見ながら、昨日の言葉の返事を考えていた。

（「待つててもいいよ」「って言ったらどうする）

難しい顔をして書類に目を落としていたが、全然書類の文字なんか理解していなく、

どう返事をするのが一番ベストなんだろうと、そればかりが頭の中にあっただ。

「眉間にシワ寄ってるぞ」

「え？」

「明日の休み、また引越しの手伝いしてやろうか。昼飯つきで」

メーカーに商談に行く途中の車の中、またあたしは難しい顔をしていたらしく

隣で健吾が指摘してきた。

「あ、、、うん。そうだね。頼もつかない。。」

「なんだか今日は随分ボクとしていいるな。夜更かしてもしたのか？」

「えっ、、、いや、、、そんなこと無いけど」

「まあな。男もいない今、夜遅くまで起きてる意味もねーか」
「うっ、うん」

健吾ならこの話をどう思うのかな。

でも、あまり直樹のことを良く思っていないから、きっと反対するかもしれないけど。

「そっいや。昨日、向田さんと一緒だったんだって？」

「えっ！ど、どうして知ってたんの？」

「朝、誰かと向田さんが話してた。昨日、誕生日だったから彼女にお祝いしてもらったってニコニコしてたよ。どーりで昨日俺より早く帰った訳だ……」

「ちょっと……ご飯行っただけだよ」

「別にいいけどよ。っーかお前また良いように利用されてんの？」

「利用なんかされてないよ！」

「だってあんだだけ怒ってたくせに誕生日に仲良くお食事ってか？」

「違っつてば！ちょっと、話をしただけだってば！」

「ふん……。復縁話い？」

っ！！！

「いや、、、それは、、、」

「凶星だろ」

少しバカにしたような顔でチラッとこっちを見て、また前を向いた。

「あのさ、直樹が遠距離でもいいって・・・」

「へえ。で？」

「で？」って・・・」

「俺はこの機会に別れたほうがいいと思うな。どーせ今だけだろ、あの人がそう言うの。」

きつとお前があつちに行っても、理由つけてすぐ戻されるぞ」

「やっぱり、そうかな」

「だろうな。お前まだ分からねーの？あんだけ独りにされてたくせに」

「うん・・・」

健吾はやっぱり反対なんだろうな。自分も昔そうだったくせに、スツカリ棚にあげているみたいだけれど。

「人はそう簡単には変わらないぞ」

「うん・・・」

昼休みの少し前に会社に戻り、書類の整理をしていると隣にスツ・と立つ

人影を感じ顔をあげた。

「まゆ、昼飯行こう」

直樹がニコニコしてお昼を誘ってくるなんて・・・
ちよつとビツクリした顔をして、直樹を見ていた。

あたしの周囲の人達もそんな直樹をチラツと見て、視線を外していたが

明らかにあたしと直樹を視界に入れているのが分かった。

目の前の健吾すら、ちょっと驚いた顔をしてこつちを見ていた。

「あ、、、その、、、まだ書類の整理終わってないの。もうちょっとかかるから、、、」

お先にどうぞ・・・」

「どこ？見せてみなよ」

空いた隣の席の椅子を引つ張り、あたしのデスクと一緒に書類を見出し

そんな行動がもつと驚いた。

いままで一度だってそんなことしたこと無いのに。

「これはOK。こつちは、、、もう一度価格の訂正だな。あと、、、これは後から電話して

納期を確認してからな。って、、、これくらいか？じゃ、行くところか」

「あ、、、うん」

あたしはやれば軽く30分はかかってしまうような確認業務をチラッと見ただけで手際よく終わらせてしまう直樹に正直驚いた。

(やっぱり、、、凄いななあ・・・)

仕事が終わってしまった今・・・もう断ることもできず二人で食堂に行く他なかった。

後ろに刺さるくらいみんなの視線を感じながら・・・

食堂に入っていくと、噂好きな女子社員は二人を見てすぐにコソコ

ソと口元を隠しチラチラ見ながら嬉しそうに話をしていた。

「直樹・・・どうしたの？」

「なにが？」

「こんなこと、一度もしたこと無いじゃない」

「改心したの。もうまゆに寂しい思いさせないよ。できる範囲で頑張るからさ」

小さくウインクをしてニッコリを微笑んだ。

ちょうどそのウインクを見られ、後ろの女子社員が小さく「キヤー！」と言っていた。

「おっ！随分と仲がいいな」

二人の席に部長が通りかかり、普通の顔をして空いている席に座った。

(わっ！部長とご飯とか、超緊張するんだけどー)

直樹は普通に「いつも仲はいいですよ」と否定することなく微笑んだ。

しばらく部長と直樹は仕事の話をしながら食事をしていたが、あたしは目の前の二人に

どんな顔をしているのか分からず、黙々と食事だけに集中していた。まるで腹ペコの高校生並みに・・・

「確か君達結構、付き合っただけ長いんじゃないのか？」

「もう2年くらいですかね」

「そうなのか。じゃあそろそろだな」

部長の口角が上がるのを見て、あたしも一応は話を合わせたように

笑った。

「その時、仲人は部長にっと思ってますけど、いいですか？」

直樹の言葉に目が大きくなった。

「ああ、喜んで。そうか！向田君も落ち着くか！楽しみだな」

(直樹・・・何言ってくれちゃってんの!!)

ジロツと睨んだけれど、直樹は涼しい顔をして部長と会話をしているだけで、あたしの視線なんかまったく気にする素振りも無かった。

「じゃ、お邪魔して悪かったな。吉本君の白無垢姿、楽しみにしてるよ」

「いえいえ、」

「ぜひ楽しみにしてください。きっと似合いますから」

笑顔で見送る直樹にテーブルの下で思い切り足を踏みつけた。

「いてっ！まゆ、俺の足踏んでるよ」

「わざとよ！何言ってるの！」

「なにが？」

「どうして結婚なんて話になってるのよ。それもすぐみたいな言い方して！」

「社交辞令じゃない。そんなに怒らなくても」

「どんな社交辞令よ！あんなこと言ったら期待するじゃない」

「別に現実になれば問題無いだろ。何を怒ってるんだよ」

(もう・・・) また眉間にシワを寄せてアイスコーヒーを飲んでいると、直樹がクスクスと笑っているのが目に入った。

「笑い事じゃないよ。もう・・・どうするのよ」

「最近、素のまゆが見れて嬉しいよ。な、俺達これからも上手くやっつけていけると思わない?」

昼休みを終えてデスクに戻ると、なんとなく健吾は不機嫌な顔をしていた。

ポコン!とパソコンの中から音が聞こえ、見てみると目の前の健吾からメッセージが届いた。

Ken go<また上手い具合に流されてんな>

チラッと目の前を見ると大袈裟に掌を上へ上げ(やれやれ・・・)というアメリカ的な仕草をした。

May u<その仕草、古臭い・・・>

Ken go<そうやってお前はいつの間にか向田夫人になっていくんだな。バーカ>

May u<バカってなによ!>

Ken go<バカにバカって言って何が悪いんだよ。少しは自分で物事考えろ>

Mayu<仕方無いじゃない！社内でききなりあんなことされたら、無視できる訳無いじゃない！>

お互い眉間にシワが入ったままで、凄い勢いでキーボードを叩いていた。

Ken go<はいはい。結局、お前の「別れる」は口だけだな。もう別れる気もねーのにくっだらねー相談してくるなよな。時間の無駄だから。バーカ>

「ちょっとお！いい加減バカバカ言うの止めてよ！あつたまくる！」

カツとなりメツセを打つよりも先に口が動いてしまい、目の前の健吾に食ってかかった。

「俺は間違ったこと言ってないけどお〜」

その語尾を伸ばした言い方に更にカチン！ときた。

「なによ！偉そうに。自分だって同じことしたくせに！」

「けど俺の時は電話も出なかっただろ！」

「それとこれとは全然違うもん！」

「何が違うんだよ！」

デスクを挟みお互いならみ合いながら文句を言い合っていると、横から直樹が入ってきた。

「おい……。全部丸聞こえだけど……」
「えっ、、、あ、、、ごめんなさい」

周囲の人が全員こつちを見て、啞然とした顔をしていた。

「マツ。何か問題あった？」

微笑みながら健吾に話かける直樹を見ていたが、健吾はあからさまにムスツとした顔をして直樹を睨んでいた。

「向田さん、、、チヨットいいですか」

「ああ。どうした？」

「ちよつと、あつちで」

人のいない場所を指差し、移動しようとする健吾にまた文句を言った。

「ちよつと！文句があるならあたしに言えばいいじゃない！」

「お前じゃ話になんねーよ。バカだから」

「こんのお！ちよつと待ちなさいよ」

健吾の側に行こうとするあたしを直樹は半笑いで（まあまあ……）とヤンワリと止め、

「俺が聞いてくるから。仕事してな」と健吾とフロアの外に出て行った。

一気にみんなの視線を改めて感じ、急に恥ずかしくなり黙って席に

ついた。
けれど、怒りがおさまらない。

パソコンに残ったさっきのメッセの残骸が更にイラツときたが、すぐにそのウィンドウを消していつもの仕事に戻った。

30分ほどして戻ってきた健吾の姿を見て、さっきのイラツ・・・がまた復活してきた。

後ろを通り過ぎた直樹は目が合うとニコツと笑い、自分の席に戻っていった。

「ちよつと・・・何話したの」

「別に」

「教えなさいよ。あたしのことでしょ」

「大事な直樹さんに聞けばあゝ」

(コイツ・・・本当にムカつく・・・)

「おい。打ち合わせ行くぞ」

澄ました顔をして外出用のボードに予定時間を書き込む健吾の後ろを着いていったが、

背中を見てムカムカしていた。

車で移動中も、お互い口もきかずに無言でいたが、しばらくするとポツリと健吾が話をしだした。

「お前さ」

「なによー!」

「きつと、このままいけば東京行き無くなるぞ」

「どうしてよ。直樹は行ってもいいって言ってるんだし、あたしもそのつもりなもの」

「お前は甘いよな。本当に甘い。相手は向田さんだぞ」

「どういう意味よ」

「あの人、お前を行かせる気ねーぞ」

「なによ、、それ」

「あの言い方は無いな。このままお前が別れるの止めたら、またアレコレ上手いこと言って、

お前をこっちに残すつもりだな。そんな感じしたな・・・俺は」

二人でどんな話をしたのだろう。悔しいけど、ここは健吾に聞くべきなんだろうなあ・・・

「何を話したの？」

「うーん・・・。向田さんから聞けよ。そのほうがお前にはいいと思うから」

「教えてくれたっていいじゃない。そこまで言って言わないの感じ悪いよ」

「でも、本人から聞いたほうがいいな。俺が間に入ると言った、言わないって話になるし。」

それに自分で決める。自分で納得して決めたほうがいい。後々後悔しないように。

さっき相談するなって言ったけど、本気の相談なら乗るから。口だけならするな」

健吾の言い方に、きつとこれ以上食い下がっても口を割ることは無

いと感じた。
昔からそんな所がある人だから。

人の噂話はしない人だったし、自分が思ったことは絶対の人だし。

「分かった。じゃあ直樹に聞く」

「ん。そうすね。でも、、、」

「ん？」

「俺はお前がいつも笑っていられるようになって欲しい。無理して我慢する姿は

見たくないから。歯向かえないオーラがあるのは認めるけど、お前はお前らしくしている」

「うん・・・」

健吾の言い方に、きつとさっきの二人の話はあまり良い話では無かったのだろうと感じた。

その夜。あたしは直樹の家で帰りを待つことにした。

大人の別れ方

0時を過ぎた頃、疲れた顔をして直樹が家に戻ってきた。いつものように夜食を用意し、スーツの上着を受け取りながら、昼間の健吾の話をどう切り出そうかとチャンスを狙っていた。

「やっぱり家にまゆが居てくれると嬉しいよ。明かりのある部屋に帰るのがいいな」

冷蔵庫からビールを取り出し、一口飲みながらテーブルにつき夜食を食べ

「美味い！」とニッコリ微笑んでいた。

「あ、、、うん。あのさ、、、直樹、、、今日の、、、」

「いつもこうして、まゆのいる家に帰ってきたいな」

あたしの言葉を被せて直樹が話しをした。

まるで、健吾の話をしないように邪魔をしているように。

「あ、、、うん」

「まゆ。引越してこないか。そうしてくれたら、俺、今よりは残業減らすよ。一緒にいる時間、

できるだけ増やすように頑張るから」

「いや、、、その前にあたしまだ返事してないし」

「なんの返事？」

「えー！直樹と別れるかどうかって・・・話」

「ああ。あれね。もういいじゃない」

「なにがいいの？」

「きつと俺達、前より上手くやっていけるよ。俺もまゆを一人にしないように気をつけるし。」

それに、まゆさえ良ければ商品課に残れるように上ともう一度話してもいいよ」

「ちよ、そんなことじゃなくて。商品課がどーのじゃなくて。あたし5月には東京に

行くよ？だつて祐子さんと約束したもの」

あたしの言葉はまるで聞かなかったように直樹は箸を動かしながらパクパクと夜食を口に運び、視線はその先にあるＴＶに向いていた。

「今日、、、健吾と何を話したの？」

「ん？まあ、、、たいした話じゃないよ」

「教えてくれないの？」

「聞いても面白く無いこと」

いつものあたしなら、きつとここで「分かった・・・」と直樹に気を使って黙る所だけれど、

さすがに今日はそんなこと言ってられない。

「面白くなくても教えて欲しい。健吾に聞いても教えてくれないんだもの。直樹から聞けって。」

だからあたし今日ここで待ってたの」

「マツから「まゆと別れてやって欲しい」って言われた。でも俺は断った。ただそれだけ」

それだけ言って直樹は二本目のビールの缶を開け、グツ……と一口飲んだ。

「直樹さ、あたしが東京行くのやっぱり反対なんだね。商品課の話まで出すなんて」

「そりゃね。まゆには側にいて欲しいもの。もしも仕事が今のままで、こっちにいるって

言うなら、掛け合うことだって可能だよ。まゆ次第でどうでもなるよ」

「もう決まったって言ったじゃない……」

「だから掛け合うよ。なんとかかなると思うし」

この前はもう決まったと言っていたのに。掛け合うなんて言ってくれなかったのに……

「でも、いまさら祐子さんに断るの悪いから、仕事は今のままでいいよ。」

上に掛け合ってくれなくていいから

「別にまだあっちの仕事が始まった訳じゃないだろ。取り合えず、今のまゆのポジションは

確保しておいて問題無いんじゃない？明日にでも部長に言っておくよ。」

後さ、引越し来週くらいにどう？来週なら俺も時間あるし」

「だから、、、いってば。それに今、引越しても二度手間だもの……」

「大丈夫だよ。俺、来週は連休取るよ。それまでに、、、」
「直樹……」

あたしの話なんか聞く気が無い直樹の話を割り込んで止めた。

「やっぱり、、、あたし、、、このままじゃまた流されちゃう。直樹、全部自分の

都合ばかりじゃない……」

「俺の何が不満？」

「何って……」

「一緒にいなかった事？それならこれから気をつけるって言うてるだろ。仕事のことだって

まゆが今の所にいたいなら、そうしてあげるよ。わざわざ遠くに行くこと無いんじゃない？」

「結局、、、全部反対なんだね……」

「反対っていうか、、、そのほうがまゆの為だよ。俺はまゆが一番良い状態にいられるように

したいんだ。ここに住めばずっと一緒にいられる。できるだけ早く帰るように頑張るし、

仕事だって好きなだけしていいよ。一番良いことだろ？」

「直樹は、、、結局自分のことしか考えていないんだよ。あたしのことなんか考えてない。

自分から離れるのが面白くないんでしょ。言うこと聞かないのが

嫌なんですよ」

「まゆが思うほど世間は優しく無いよ。ここにいれば俺が守ってあげるよ」

「やっぱり、、、あたし無理みたい。直樹が思うような生活できない」

ため息をつき、あたしの顔を見て困った子だ・・・という顔をした。

「まゆ。俺の側にいな。きっとあっちに行けば後悔する時が必ずある。」

辛い思いすること無いよ。離れたら、本当に俺達終わりになるかもしれないよ?」

(自分で決める!)

健吾の言葉が頭に浮かんだ。

「うん。分かってる。それでも行きたいの。直樹がいなくなっても

行く」

しばらく黙って顔を見た後に、直樹はフウ・・・とため息を吐き、隣に来てキュツ・・・と軽く抱きしめた。

「もう・・・こうしてもドキドキしない？」

直樹の胸に顔をつけたまま、その言葉を聞いていた。そして、、言われたようにドキドキしない自分を感じた。

いつの間に、こんな気持ちになってしまったんだろう。

いまひとつキチンと断れないのはきつと自分の自信の無さで、直樹と一緒にいたいと

いう気持ちはとっくの昔に消えていたのかも・・・

「ごめんなさい。もう、、前みたいに、、」

クイ・・・と顔を上に向け、少し強引に唇が重なった。

けれど、やっぱり前のように胸が締め付けられるような、あのドキドキ感は消えていた。

ただ無言で受けるキスがこんなに寂しいモノだったなんて・・・

ユツクリと唇が離れ、覗き込む直樹の顔が淋しそうだった。

「もっと早くに、、まゆの気持ちに気がつくべきだったな・・・俺」

無表情で直樹を見つめたまま少しだけ体を離し小さく（ううん・・・）と首を振った。

「でも、あっちに行つてどうしても辛くなつたら、その時は俺の所に帰ってきてもいいから。」

きつと辛いと感じることもあるだろうし、嫌になる時もあるはずだから。

そんな時、いつまでも無理しないで戻っておいで」

「ううん……。もう嫌なことから簡単に逃げない。あたし、いつもそうだったから。」

どんなに辛くても頑張ってみる。力が足りないのは分かっているけど、

それでも頑張ってみる」

「ん……。やれるだけやってみたらいいよ。そこそこ出来るだろうから」

フッフ……。と笑い、ポンと頭に手をやりクシャと撫でた。

あたしは、この優しい手にいつも甘えていた。何度もこの手に助けられてきた。

「直樹、、、ありがとう」

「本当は行かせたくないけれど、まゆの気持ちが変わらないみたいだし、

仕方無いな。まあ……。マツの話聞いたらもつと行かせたく無くなつたけど」

「健吾がなんて？」

「ん？いや、、何も無い所から1から始めるのって大変だなと思
ってぞ。」

きつと、、まゆは戻ってこないだろうけど」

(・・・?)

「俺があつちに出張の時は、できるだけ顔を見せること。後、こっ
ちに戻ってきたら

キチンと連絡をしてくること。それが守れるなら、別れてあげる」

「それって・・・ちよつと変じゃない？」

「どうして？」

「普通、、別れたら会わないでしょ・・・」

「だって嫌いになって別れる訳じゃないもの。それに限りなく低い
可能性だとしても、

まゆが戻ってくるかもしれないしれないだろ？」

それまで悪い虫がつかないようにチェックしないと」

「なにそれ・・・」

心配してくれているんだなと感じた。

たぶん直樹くらいのベテランからすれば、今のあたしができる仕事
の結果なんか

大体予想はつくのだろう。

相手の意見を見無視してまで別れると言う女に、ここまで優しくでき

る直樹が

やっぱり同年代とは違う大人の男だなと思った。

普通ならば怒って「勝手にすればいい」と最悪な終わり方になるのに。

「あつちに行っても俺のこと散々引きずってね」

笑顔で言う直樹に思わず笑ってしまった。

「もう・・・なにそれ」

「前の彼氏くらい引きずって寂しい顔してね。あの顔、結構きついから」

「え？」

「まゆ、最初の頃、ずっとそんな顔してたろ。あの顔見る度に俺は間違ったことを

したのかわかって思ってた。遠くにいる恋人の存在なんか否定していたけど、

案外離れていても、気持ちって変わらないのかわかって思うことあったよ」

あたし、、そんな顔していたんだ。

いつまでも心のどこかに消えないカオルの存在を直樹は気がついていた。

「俺からのプレゼントは簡単にゴミ袋に入っちゃうけど、彼の物は大事にしているみたいだし」

「えーっ！なんで知ってるの！！」

「ダンボールに「絶対開けるな！」なんて書いてあったら、気にな

るでしょ。

ちよつと、、、ショックだったな。写真のまゆ、、最高に良い顔してたし」

「直樹……ごめんね。でも、直樹がいてくれて、本当にあたし、助かったの。」

それは嘘じゃない」

「ん……。分かってるよ。」

きつと、、まゆが俺の所に戻ってくることがあったら、その時は今と違ってもっと

上手くやっていけるって思ってる。だから、微かな望みで待ってるよ。」

「いや、、それは、、、」

「やっぱり俺が一番だって感じたら、その時は戻っておいで。」

逃げるとか恥ずかしいとかそんなこと考えないで、俺の側にいたいと思ったのなら

それが本物だと思うから。

でも、俺だってまゆだけに執着しないぞ？チャンスは逃さないからね。」

だから、あまり重く考えるな。俺だってモテるんだから」

「ありがとう……」

「こんな良い男、振ってまで行くんだから頑張ってこい！」

自分で「良い男」という所が直樹らしいけれど……

それでも「頑張ってこい！」という言葉に元気がでた。

自分の家に戻り放りっぱなしのダンボール達を整理し始めた。
どこかにまだ直樹と元に戻ったら・・・そんなことを考えて本気で
準備をしていない
所があつたけれど、もう迷いは無い。

強がって少しだけ困らせてやる・・・とかそんな気持ちが確かにあ
つた。

あんなにアツサリとさよならも言わないで、サクサクと話が進んだ
ことにも
どこかに納得いかない気持ちがあつた。

けれど、最後に見せてくれた直樹の「別れない」という態度が本当
は嬉しかった。

これで何も問題が無く、話し合うことも無いまま東京に行けば、
きっとあたしは直樹との2年間を後悔したかもしれない。

何かある度に直樹のせいにして、責任を押し付けたかもしれない。

でも、もうそんな気持ちは消えた。

応援してくれた直樹に感謝の気持ちでいっぱいだった。

「やっぱり、、、直樹を好きになってよかったな」

貰った物達は、姉にあげることにした。

二人で一番最初に撮ったプリクラをこっそりと手帳に貼り微笑んだ。

・あまり良い思い出を残してあげられなかったかもしれないけれど・

ブリクラの中の二人の写真は、緊張してガチガチの引きつり笑顔のあたしと、

あたしが大好きだった笑顔をした直樹がピースをしていた。

偶然と後悔

3月になり、健吾と二人で東京に出張に来た。きっとこれが最後の東京出張になるだろう。

この後のスケジュールには近場の出張しかなかったので、泊まりでの出張もこれが最後だった。

2月の終わりに辞表を出し、部長にアレコレと直樹との今後を聞かれたが、曖昧な言い方をした。

いきなり別れたと言えはなんとなく直樹の立場上、みんなの目があると思った。

それでも、あの別れからお互いすれ違う時も笑顔で前と変わらない態度に変わっていた。

「結局、向田さんは快く送り出してくれたのか？」

「うん！ちゃんと笑顔で別れた。」

直樹、あたしの仕事少しは認めてくれたの！センスいいって。きっとそこそこ頑張れるだろうってさ」

「そっか。そこそこって言い方が向田さんらしいけどな」

笑いながらそう言って、私が嬉しそうな顔で言うのを見ていた。

「今回で健吾との泊まりの出張も最後だね。なんか寂しいね」

「そうだな」 これから誰と来るんだろな」 向田さんなら嫌だな」

「なんで？直樹は今度から独りなんだから直樹じゃないでしょう？」

「あ。そつか・・・ 次も全部書類関係やってくれる人がいいな」

「そう簡単にはいかないよ。今が楽をしすぎなんだって」

そう言いながらバツクでお尻を叩いた。

その日、健吾はカオルに会うと言って少し早めにホテルを出た。

あたしも祐子さんに会う為にいつものレストランに歩いていった。

レストランの近くまで行くと、どこことなく見覚えのある人が

こっちに向って歩いてきた。

コンタクトを入れていなかったので、ハッキリ見えなく

なんとなくその人の顔を見ていたがボヤけていた。

近くに来た時、その人が止まりこっちを見ていた。

（誰だろ・・・まだ見えないや・・・でもこっち見てるからメーカーさんかな？）

一応挨拶するフリしなきゃ・・・）

そう思い、軽く会釈をして近くまで歩いた。

すぐ目の前のその人の顔を見て、初めてそれがカオルだと分った。

「あ・・・あの・・・久しぶり・・・ えつと、健吾と一緒に？」

久しぶりにカオルの声を聞いた・・・

かなりあつちも焦っているのか、噛むにいいだけ噛んでいた。

あたしはと言うと驚きで頭が真っ白になり体が固まっていた。

「あ……いや……一緒じゃないの。先にホテルでたよ？
まだ会ってないの？」

「あ……うん。会社まで来るって言ったんだけど……
玄関にもロビーにもいなくて、それでホテルに行こうかかって」

「そ、そうなんだ……あの、元気そうだね。カオル」
「うん。まあ……元気かな。で、こんなとこでなにしてるの？」

やっとお互い少しだけ落ち着いてきたのが普通に会話ができるようになった。

内心全然落ち着いてなんかいないけど。

「あ、いや、懐かしいなって。で、散歩……うん。そう！
「懐かしむほどこの辺に馴染みあったっけ？」

「あ、そのお……、そうでもないかな？……は……は……
「なんか怪しいなあ。まゆ嘘つくといつもそんな感じだよな」

くまゆ>そう、呼び捨てにされドキッとした。
そして、久しぶりに見たカオルはどことなく大人っぽくなっていた。

「そう？そんなことないよ……あ、健吾に電話した？どこかで
女の子でも見てるんじゃない？デレ〜として」

「そうなのかなあ……なにやってんだろうなあアイツ」
困った顔をして携帯を出し、健吾に電話をかけた。

「もしもし？俺。どこに隠れてんだよ？ああ・・・うん・・・
そうなんだ？うん。じゃあ、会社の前のレストランにいるよ。
おお！早くすれよ！じゃーな、あ、今、まゆに会った。
目の前にいる。うん・・・そうだな。じゃあお前が来るまで
付き合ってもらおうわ。OK〜 じゃ〜な〜」

たぶん話の流れからして・・・あたしはこれからカオルとレストランに
入り、健吾が来るまで一緒にいる・・・らしい。

携帯をポケットにしまい、

「なんかさ、人身事故見ちゃったってさ。で、今、警察に事情を
説明するから、ちよっと待っててだって。本当に間が悪いよなあ
」

「健吾の得意技だからね。間が悪いの・・・」

「でさ、すぐそのレストランあるじゃない。ほら、一回行った。
あそこで待ってるって言ったから、まゆ暇なんだろ？
散歩するくらいだし。健吾来るまで付き合っつてよ。いい？」

「あ・・・うん。いいよ・・・」

ヤバイ・・・祐子さんが来ちゃう・・・
今日だけは大遅刻をしてくれたら嬉しいな・・・祐子さん・・・

そう思いながら一緒にレストランに入った。

テーブルに向い合うくらいの距離ならば、ハッキリとカオルの顔が
見えた。

懐かしい気持ちでいっぱいになった。

「会社辞めるんだって？」そう言いながら煙草を出した。

「あ……うん。今月いっぱいだね」

「結婚するの？」

「ん？ううん……そうじゃないけど」

いまさらもう別れているのに結婚もないよな～と思ったが、健吾がカオルに内緒にしてくれていると感じた。

「じゃあなんで辞めるの？あんなに仕事好きだったのに」

「あ～その、、えーとお。花嫁修業とかしてみようかな～って」

「そうなんだ？俺も辞めるんだ。今月で」

その言葉の続きは絶対聞きたくなかった。

もし「結婚するんだ」とか言われたらきつとあたしは、祝福する顔はできない。

「そうなんだ。みんないろいろ大変だね～。あつ！こっち暖かいね」

まったく訳の分らないことを言いながら、話をそらした。

「まあ……こっちはもう春だしね……そりゃ北海道に比べたら暖かいだらな」

そう言っつて煙草に火をつけた。

なにか話すとさっきの話の続きをされると思い、慌てて

「一本ちようだい。煙草」と言っつて箱に手をかけた。

「まゆ……煙草吸ったっけ？」

「あ．．うん．．たまに。あの頃はやめてたけど．．」
「ふ〜ん．．俺に気使って？」

そう言いながらライターの火をこっちにむけた。

なんとなくつけてもらうのは抵抗があり、ライターを受け取った。

「ん？そうかな。カオルが嫌がるかなと思って、」

そう言っただけで火をつけた。あの別れた日以来吸っていなかったのだから喉が痛くなり、突然むせた。

「ねえ．．．なんか俺に隠してない？慌てるように見えるんだけど」

「いや！そんなことない！」

煙が目には染みて痛くて仕方無く一度吸っただけで、もみ消した。

「ふ〜ん．．まあいいけど。で、彼氏は元気？」

「えっ！！どうだろ．．あ、いや。元気だよ。うん」

「そっかー。もう2年だもんな。そりゃ花嫁修業もするわな」

そう言っただけと同じ優しい顔をして笑った。

その顔を見て、やっぱり胸が痛くなった。

あれほど好きだった人が目の前にいることに涙が出そうになった。

きつと会うとこんな気持ちになりそうで、今まで避けていたのに．．

けど、もう自分のせいで別れてしまったのに、いまさらだ。

「カオルは？彼女いるんでしょ？」

カオルの口から聞けば自分の中で諦められると思った。

「俺？あゝ・・・うん。まあね」素っ気無く答えた。

(あゝ・・・やっぱりなあ・・・)

「どんな子？可愛い？歳は？」

もうヤケになつて質問をした。

「いいじゃん。俺の話は」そう言つてそれ以上の話はしなかった。

なんとなく場の雰囲気が悪くなった。

勝手に他の男の所にいった無責任な女にそれ以上言いたくないんだと思ひ、話を切り替えた。

「ヒデ元気？この前ヤスに会つたの。で、まだカオルと連絡とつてるって。」

あたし、この前ラビに会つたよ。元気だった」

「ヒデも元気だよ。最近は会つてないけどな。」

ラビは元気だった？もう結婚とかしてたの？」

「ううん。ラビも募集中だったさ」

そう言つて場が和んだことに安心した。

「くもゝつてラビと誰のこと？」

(なにそれ？)という顔をしてカオルが聞いた。

つい口から自然と自分のことも言つてしまった。

油断していると危ない・・・

「あ・・・いや、ラビくは>って。は！ラビが！」
「ふん。まゆ変わらないな。いつも慌てて」
慌てるあたしの顔を見てカオルは声を出して笑っていた。

(あ・・・カオルの笑顔、昔と全然変わってないや)

「そういやさ。うちにまだあるよ。まゆが置いていった服とか小物とか、なんかいろいろと・・・」

「そんなの捨てればいいのに。今の彼女がいい顔しないよ」

そう言ううちよつと曇った顔をして「そうだな・・・」と言った。その顔を見て、慌てて、

「でも、あたしもカオルの物、全部あるよ？」

指輪も写真も服も、あと、えーと、花も」

言っつてよかったのかわからないが、つい言っつてしまった。

「そっか。俺もなんか捨てきれなくてさ・・・」

そう言いながらネクタイを緩めた。

その緩めた先に昔、カオルにプレゼントしたチョーカーが見えた。

「カオル・・・その首のって・・・」

慌ててシャツのボタンをして、

「いや、これ好きになって。だから、今でもしてるんだ」と隠した。

「そっか・・・そんなに気に入ってくれて、プレゼントした甲斐があつたよ。似合ってるもん」

また会話が止まりさつきと同じくらい気まずい空気が流れた。そこに能天気健吾が入ってきた。

(グツジョブ！健吾！) そう思い健吾を見た。

どこことなくカオルも安心した顔をした。

「いやあ〜 まいった！どっかのアホガキがよそ見しながら
自転車乗っててよ、で、止まったタクシーの上にボーンて」

健吾がワーワーと説明するのを二人で笑いながら聞いていた。

「じゃ、そろそろ行くか。まゆも行かないか？飲みに行くけど」

「行くこう？まゆ」カオルにもそう言われたが、祐子さんが来ると思
い、

「ううん。いい。あたしも帰るから」と言った。

「そっか・・・」健吾がそう言い、ちょっとだけ(いいのか?)と
言うような顔をした。

「だよな。元彼に挟まれて飲みに行くなんて彼氏が心配するな」
そうカオルが言い笑顔で、

「じゃ、今日は時間つぶしに付き合ってくれてサンキュー」と手を
振った。

なにか健吾が言いそうだと思ったが、なにも言わずに二人は出て行
った。

(また最後に「またね」とは言ってくれなかったな・・・)
そんな虫のいいことを考えながら、二人の後姿を見ていた。

やっぱりカオルの顔を見ると、後悔ばかりが体の中から溢れた。

けど、散々直樹と一緒にいたくせに、いまさらそんな都合のいい事は言えない・・・

ハッキリとカオルの口から「彼女がいる」と言われた今、

もう昔の気持ちをきちんと精算しなきゃ・・・そう思いながらもただ黙って、カオルが座っていた席を見つめていた。

そして、今日カオルに出会ってしまったことを後悔した。

「ごめん！やつと終わった」 たまには違うところで食事するう？」

そんな空気を見事に碎き、祐子さんが走ってきた。

それも、レストランの人に聞こえる声で「違うところ行く？」と言う祐子さんの言葉に慌てながら

「いいです！いいです！ここでいいです！」と座らせた。

祐子さんに勢いで電話してから初めて会った。

だから、いままでのことをゆっくり話すのは今日は初めてだった。

「で。もう本当に彼とはダメになったの？」

「はい・・・でも、喧嘩してじゃなくて、きちんと笑顔で別れました」

「そっか・・・やっぱり私のこの仕事のことか原因？それが一番大きくて？それなら・・・ちょっと心が痛むわぁ・・・」

「いいえ、違います。まあ・・・引き金はこれかもしれないけど、でも、それで彼はあたしの仕事を認めてくれたところもあつたし。これが無かつたら、きつと一生あたしは仕事の出来ない女と思われて 彼の元で不満な人生だったから。だから、これでよかつたんです。あたしもやってみたいし」

素直に笑顔で言えた。本当にそう思っていた。そんなあたしを見て、祐子さんは安心したような顔をした。

「そう。じゃあ遠慮無くお願いするわ。ついでに彼氏も探してあげる！」

「そうねえ・・・でもなかなか向田さんみたいな人はいないかも？」

「当たり前ですよ。あんなに格好イイ人なんかそうそういないですよ？」

伊達に何年も憧れてたんじゃないですもん。

でも、やっぱり憧れは憧れのままのほうがいいですね。

よくわかりました」

そう言つて二人で笑つた。

「で。まゆちゃん、住む所とかどうしよう？希望とかある？」

「あ。仕事場の近くで・・・って、思つてます。車は持つてこないから」

「そうね。こっちは駐車場とかも高いし、そんなに高給には最初からできないしね。じゃ、事務所が決まったら、そこの近くで探しておくわ。それでいい？」

「はい。高給取りになつたら凄い所に引越しますから」

そう言って祐子さんにプレッシャーをかけ笑った。

「実際、仕事が始まるのっていつですか？」

「そうねえ・・・もう会社には言っているの。望月は来月の10日で辞めるし、私も4月末だしね。だからやっぱりみんな揃うのは5月かな？私達はGWもなしで用意してるから。まゆちゃんはどうする？」

「あの・・・ちよつと関係無い話ですが・・・カオルも辞めるんですよね」

「えっ・・・なんで知ってるの？それ」
なぜが慌てて祐子さんが聞いた。

「あ。いや、さっき偶然会っちゃったんです。で、さっきまでそこに・・・」
そういつて祐子さんが座ってる席を指差した。

「そう・・・まあ、そうね。矢吹君は今月いっぱいね。それもあつて職場はバタバタしてるの。一気に私と二人でしょ？望月は部署が違うけど古株が3人だからねえ」

「そうですか・・・まあ、いいんですけどね。その話は」

自分で振っておきながら勝手に話を締めた。

祐子さんからカオルの結婚話とかされたらやっぱりへこむ。

「で……カオルには直樹と別れたこと言わないでくださいね。
まあ……あたしと会ってることも内緒だから、そんな話には
ならないと思いますけど、……一応……」

「え？だってさつき会ったんでしょ？ならもういいじゃない。
教えたって」

「いやいや。祐子さんと会うとは言ってないし。

それに、やっぱり格好悪いし、カオルはあたしが仕事辞めることは
健吾、……そのあたしのパートナーから聞いているけど、
それは花嫁修業だと思ってるので。カオルも彼女いるみたいだし、
あまりあたしの話は耳に入れたくないんです」

ちよつと格好悪かったけど、正直に祐子さんに言った。

「矢吹君に彼女？いたの？へえ……明日聞いてみようと。ふ
ふふ」

「あたしから聞いたって言わないでくださいよ！

それと……あたしにその聞いた話は言わないでください。

聞きたくないから……」

「ふくん……」そう言いながらニヤニヤして祐子さんはこつち
を見ながら

「わかった……じゃあ、まゆちゃんは5月の始めに来てね。
部屋は私が勝手に決めていい？しばらくは会社で家賃だから」

え……それはとてもラッキーだけど……
大丈夫なんだろうか……祐子さん……

「あの、いいんですか？そんな家賃とかまで」

「いいわよ。これでも部長よ？そのくらいの貯金はあるわよ！

でも、倍にして返してね。頑張ろうね！私達！」

そう言っつて人の珈琲のカップに自分のビールがあて乾杯をした。

その日の夜。ホテルでTVを見ていた。

祐子さんはまた仕事に戻り、あたしは真っ直ぐ帰ってきた。

11時を過ぎた頃、ドアがノックされた。

「はい。どちら様」たぶん健吾だと思いながらドアを開けた。

「ちよつといいか？」そう言っつて少し赤い顔をして健吾が部屋に入ってきた。

以前、酔っ払った健吾に出張の際、抱きつかれたことがあり、

「今日は抱きつかないですよ？」と睨みながら笑った。

「今日は大丈夫だ。それほど飲んでないっつて」と言いながらベットに大の字で横になった。

「で？なに？珍しいね。こんなに早くホテルに戻るなんて」

いつも、カオルと二人で飲みに行っつても、何時に帰っつてきてるかは知らないが、翌日の酒臭さでなんとなく深酒だとは思っつていた。

「なんで今日一緒に行かなかつた？」

大の字になりながら聞いてきた。

「だって・・・約束あったし。それに・・・なんだか行くのもね」

「もういいんじゃない？二人で先に会ったんだし」

「いや、もう会ったから尚更わざわざ行かなくてもいいじゃない」

冷蔵庫からミネラルウォーターをコップに注ぎ、健吾の顔にくっつけた。

「こつちに来て、誰か相談できるヤツとかいないんだろ？」

なら、カオルにその役してもらえばいいだが」

「だーかーらー。もうカオルに会うことは無いってば。

今日はたまたまだったけど・・・」

「あゝ・・・なんかお前等本当にムカつくな。俺もう寝るわ」

一方的に話をし、健吾は部屋を出ていった。

（だから健吾の深酒は嫌なんだよなゝ）

そう思いながら、ドアの鍵を閉めた。

せつかく夕方のことを少し忘れかけていたのに・・・

（やっぱり会わないほうがよかったな・・・）

そう思いながら、黙って窓からあまり綺麗じゃない夜景を見た。

気持ちを新たに

無事に仕事も最終日に向えた。

先週末にみんなが送別会をしてくれた時、直樹と結婚すると信じている人達には曖昧に答えその場を切り抜けた。

それは一度、直樹とエレベーターの中で2人の時の事。

「みんなに言ってから辞めたほうがいいかな？」

「いや？そのうちわかるでしょ・・・俺が独身貫けば。

それにもう会社の子に手をだすこと無いから、

知れても知れなくてもどーでもいいさ」

なんとなく「言わないで・・・」というような感じに聞いてとれた。

居なくなる自分はいいけれど、残された直樹がみんなに陰口を言われるのは目に見えていたので口を閉ざし、

結局最終日まで別れた事は健吾以外は誰も知らずに会社を去ることにした。

その日はさすがに残業も無く、ほぼ定時にみんなの席に挨拶に回った。

最後に直樹の席に行き、

「じゃ。行くね。いままでありがとう。元気でね」と

みんなに聞こえないように小声で言った。

「ん。それじゃね。後、この前のことは守るんだよ。俺があっちに
行く時は

連絡するから。ちゃんと元気な姿見せるんだよ」

そう言っただけで記念にと自分のいつも使っている万年筆をくれた。

「ありがと。これ呪いはかかってない？仕事病にならないかなあ」

「たぶんね？じゃ、頑張れよ。あんまり泣かないでね」

そう言っただけで頭をポンツと叩き、またデスクに体をむけた。

(最後までクールだなあ・・・)

自分の席の物を入れたダンボールを持ち、まだ仕事をしている健吾に、

「じゃ。行くね。今の家に来月いっぱいいるから。」

「どーせ週末は暇なんですよ？遊びにきていいよ」と最後に声をかけた。

「ああ。じゃあ今週行くよ！」

健吾の目の前の書類はまた山のようになり、アセアセと久しぶりの書き込みに忙しそうにしていた。

7年間も勤めた会社を辞めるのはやっぱり寂しかった。

けど、もうここまできたら寂しがっている暇は無いと思い、気持ちを新たにしたら。

家に着き、大きなため息をついた。

本当は不安な気持ちだった。

なんだかここ数ヶ月の変化を思い出しながら怒涛の日々だったと改めて感じた。

まだ一ヶ月ある。そう思うと何からしようか考えた。
とりあえず・・・実家に報告だなあ・・・

こんなに話をどんどん決め、会社まで辞めてしまったのに、
東京に行くことをまだ親には言っていないかった。

独り暮らしをすることさえ、大騒ぎだった父と母をなんとか説得
する言い訳を考えた。

次の日、電話をしてから家に行った。

父は仕事で夕方じゃないと帰ってこないというので、
母とぼんやりと一日を過ごした。

ふと母が・・・

「あら？そういえばアンタ仕事は？あっちこっち行って忙しいんで
しょ？」

あゝ 今日出張で戻ってきたのね」

「あゝ・・・うん。それがね・・・」

先に味方を作ろうと母に東京に行くことを打ち明けた。

2年前の秋に、カオルがうちの親に「付き合ってます」と挨拶に来
てくれた。

それ以来、特にカオルとは別れた・・・とは言っていないので、
母はてっきりカオルの所に行くとは勘違いをしていた。

「もう貴女も結婚してもおかしく無い歳だしね。きつとお父さんも
なにも言わないわよ。で、式とかどうするの」

物凄い痛い勘違いに内心焦った。

このままそんな話で進めてしまおうか・・・
で、あっち行ってから別れたことにしようかな・・・
そんな嘘を考えたが、きつとそうなれば挨拶にこないカオルのことで
バれてしまう。仕方ないので正直に母に言った。

「ごめん。言っただけで・・・カオルとはもうとっくに別
れたの。」

で、あっちの知り合いの会社に呼ばれて行くの。
5月になったら行くことと思うんだ・・・」

そう聞いてきつと怒られると思い、覚悟して黙って下をむいていた

「ええ」 矢吹さんと別れたの「がっかり」

お母さん、あの結構好きだったのに「あんな息子が
できるって内心喜んでたのになあ」

母とあたしのタイプは必ずと言っていいほど一致した。
だからあたしのタイプなカオルのことを一度来た時に
ものすごく気に入っていたようだった。

「食いつくところが違うでしょ！あたしの仕事のこと
で突っ込んでよ！」

「まあ・・・ちゃんとした会社ならいいんじゃない？」

「あんたももう歳だしね。親があーだこーだ言うこと無いでしょ」

そうアッサリと言いつつ切った。

「あら・・・もつとうるさいと思ったのに、ちよつと拍子抜け。」

夕方、父が帰り、ご飯を食べながらその話をした。

「勝手に仕事辞めたりして、もっと早く親に言うべきだ!」と怒られた。
母とはまったく違う反応にただひたすら平謝りをしてなんとか許しを貰った。

(こんな説教なんか直樹の説教に比べたらなんでもないな・・・)

食器を洗うのを手伝いに台所に行き、母に小声で謝った。

「なんだかお父さんを怒らせちゃったね。帰ってから気まずいでしょ?」

「ごめんね・・・」

「あんなの嘘よ?だって前の仕事だって知り合いやイトコ達に

「まゆは全国を飛び回って仕事してるんだ。すごいよな」

ってみんなに自慢してたのよ。きつとスカウトされて行ったなんてこれからまたみんなに自慢するわ。大丈夫よ」

「うん。じゃあお父さんがガツカリしないように頑張ってくるから。

でも、ダメだったらここに帰ってきていい?

マンションも今月で出るんだ・・・行くところ無いの・・・」

ほんの少しの逃げ場があったほうが気持ちも楽だと思いきつと「いいわよ」と言うて決め付けそう言った。

「なに言ってるのよ。ダメよ」アツサリ言われた。

「うっそ!じゃああたしどうすればいいの!」

「そんなの自分でなんとかしなさい？あっちで結婚相手見つけて連れて帰ってくるのねえ」そんな歳の子いまさら家になんか置けないわ。精々頑張つて。仕事も結婚相手も！」

そう言つてアッサリとした顔をして笑つた。

まあ・・・そうだよなあ」

帰る時に、玄関で母と話をしていると、後ろから父がポテポテと歩いてきて、

「ちゃんと頑張るんだぞ。途中で投げ出してくるなよ」と一言いい、また部屋に戻つていった。

「ほら。嬉しいのよ。期待にこたえなさいね」そう言つて母は手を振つた。

家に戻り、

「これで本当にもう後戻りできないな・・・」と思つた。

まあ・・・失敗したら見合いでもするか！

そうポジティブに考えた。なんとかなるだろう。

ここまでみんなに強気で言つてしまつた今、失敗することは考えないでおこう。

もし、どうしてもダメで倒産してしまつたらそれでもなんとかなる。もしかしたら・・・一緒に働くバイヤーの人がかつこいいかもしれない！

できれば女じゃありませんように・・・

それからの一ヶ月はとっても長かった。

いつも毎日遅くまで仕事ばかりだったのに、いきなりなにもするところが

無くなり、ただぼくとしていた。

あのまま1ヶ月遅く退職してもよかったが、商品課にいられないならきつとつまらなかつたし……

週末に遊びにきた健吾に会社のことを聞くたびに
仕事がしたくて仕方無かった。

直樹は統括部長になり、前より一層厳しくなったと言っていた。
ほとんど笑うことが無く、いつもピリピリしていると。

健吾も少しだけ新しいパートナーに慣れてはきたが、
やっぱりあたしと一緒にの時に楽をしすぎて今となっては
毎日遅くまで残業で「まじで嫌になる」と愚痴っていた。

けれど、そんな話を聞いても、あたしは羨ましかった。
もう体をもてあまし、祐子さんに電話をした。

「もしもし祐子さん。事務所つてもう決まりましたよね？」

「うん。まゆちゃんの家も決めたわよ」

「本当ですか！じゃあ、あたし……早目に行ってもいいですか！」

「そう言うと思ったわ。暇なんでしょ」

「はい。もう……何もすること無いんです」

「男がいないと寂しい女になっちゃったわね・・・」
そう言つてケラケラ笑つた。

結局、10日ほど早く、東京に行くことが決まつた。
引越し準備をしたり、実家に連絡したりとそれからは忙しく毎日が過ぎた。

出発の前日、健吾に電話をし

「明日行くから。あつちに出張あつたら電話して」と伝えた。

「おう。たぶん来月あるから。2〜3日前に電話するわ」

「うん。じゃ、元気でね」

「おう。気をつけてな」

電話を切り、ガランとした部屋の中を見ながらこの部屋であつたことをいろいろと思い出した。

少しだけ寂しいと感じたが、でも期待のほうが大きかった。
もう布団しか無い部屋で、寝転びながらゴロゴロしていた。

ふと携帯をとり、最後に直樹に電話をしてみた。

「もしもし。まだ仕事？」

「ん。そうだよ。俺の彼女は仕事だもん」

久しぶりに聞いた声はちよつと疲れ気味な声だった。

「あのね。明日発つから。それだけ教えておこうと思つて」

「そつか。元気でね。仕事、詰まつたら相談に乗るから。」

あんまり無理しないで頑張れよ」

「うん。ありがとね。直樹もたまには早く帰りなよ？」

もう歳なんだから無理すると体壊すからね！」

「歳は余計……いつも心配してもらってありがとうござい
ます」

そう言っただけで笑っていた。

「あんまりピリピリしないでね。笑ってるほうがイケてるよ？じゃ、
元気でね」

「うん。電話ありがとな。頑張れよ」

「わかった。それじゃね。元気で……」

電話を切り、そのまま布団の中に入った。

いままでであったことを思い出しながら、
目を瞑るとカオルの顔が浮んだ……

(いまごろ彼女と一緒にのかな……)

天井を見上げながら、そんなことを考えた。

あのまま付き合っていたら、今でも仲良くやっていたのかな……
そんないまさらなことまで……

「さっ！明日は早いからもう寝ようっ！」
無理矢理に布団をかぶった。

翌日、朝一番で引越しの人が荷物を取りにきた。

慌しく午前中が過ぎ、空港までの道のりを移動しながら

新たな旅立ちに期待をしつつ、住み慣れた北海道から脱出した。

荷物は2日後と言われたので、その間は祐子さんの家に泊めてもらうことにした。

いつもは隣に健吾がいるのに、なんとなく一人の飛行機が久しぶりで緊張した。

向こうに着き、言われたとおりの移動手段で事務所に向った。

その日はもう前の仕事を午前中しか出勤していないと言う

祐子さんが近くのバス停まで迎えに来てくれることになっている。

「来たわね！もう帰れないわよ」

笑顔で出迎えてくれた祐子さんにいままですっと一人での移動の緊張がやっと解け安堵感が広がった。

「はい。よろしくお願ひします」そう言ってニッコリと笑った。

荷物をひとつ持ってきて、そのまま二人で事務所まで歩いた。

「そつえば、もう一人のバイヤーの人ってもう来てるんですか」

「あ・・・うん。でね・・・そのことなんだけどお」

ちよつと困った顔をして言葉を考えながら話を続けた。

「それがねえ・・・バイヤーじゃないのよ・・・実は・・・」

「えええー！なんですかそれ！バイヤーじゃないって、

それじゃなんなんですか？その人は」

「うん。ほら、ホームページとかの管理のほうでネットに詳しい人も必要だったの。とりあえず望月がそつちを優先したの・・・」

これからバイヤーの人もちゃんと入れるから！

ね！だから最初はまゆちゃんに・・・その・・・お願いしようかなって。

大丈夫よ！いままでやってるんだもん！一人でも！」

（うわぁ・・・なんだか自信が一気に消えてきた・・・）

もしも自分が役不足でも、もう一人のフォローがあると内心そんなことを思っていたのに・・・

「その人どんな人ですか？なんかパソコンヲタクとかじゃないですよねぇ？」

あたし苦手ですよ、ヲタクっぽい人って・・・

あゝあ・・・格好イイ人と一緒かと期待したのになあゝ」

少しの望みをかけて聞いてみた。

「うゝん。でもまゆちゃんは好きな顔よ。スッキリした顔が好きでしょ？私はあまり好きじゃないけど」

どことなくニヤニヤしながら祐子さんが言った。

「スッキリした顔嫌いって言っても、直樹のこと格好イイって言ってたじゃないですか？直樹もスッキリしてましたよ」

「いやゝ彼はスッキリした以上になんとなく色気あったしなゝそれとはちよつと違うのよゝなんだろ？歳下だからかなあ」

「んゝじゃあ健吾とか？ほら、あたしと一緒に働いていた。後、カオルとか？そんな感じの顔なら嫌いじゃないかなゝ」

そう言いながら笑い祐子さんを見た。

少しひきつった笑いをしながら、「じゃ、大丈夫ね」と言いスタスタと歩いていった。

バス停から10分ほどの所にその事務所はあった。

見た目は結構綺麗な感じのそのビルは他に数件の会社が入っていた。下には車庫があり、そこを指差して

「ここは在庫を置くのに、借りたの。頼むわね！」
そう言っつてビルの中に入っつていった。

4階のワンフロアーが祐子さんの会社だった。

エレベーターに乗り、

「今日はもう仕事始めてるんですか？みなさん」
そう聞いてみた。

「うん。もう少しずつ始まつてるわ。でも肝心の商品が無いからいろいろ止まつてるけどね。いつから入荷とかできるかしら」

「あゝ・・・じゃあ今日から早速メーカーに連絡します。

向こうでもうOKしてくれた所もあるので、FAXで

写真送ってもらいます。祐子さんも一応見て検討してください」

「そうね。そうしましょ。私もあと数日で朝からこつちに来れるし。望月ともう一人の人はもうこつちで仕事してるから」

そんなことを話ながらエレベーターを下り、これからお世話になる事務所のドアを開けた。

中には望月さんがいた。物凄く久しぶりだった。

「あ。お久しぶりです。これからよろしくお願いします」
笑顔で挨拶をした。

が……望月さんの顔が驚いて止まっていた。

「あの……なにか？」そう聞くと、望月さんは慌てて祐子さんの腕を

掴み、廊下に走っていった。

(なんだよ……人が挨拶してるのに感じ悪いんだから……)

事務所の中をグルリと見渡した。

今日からここで頑張らないと！そう思い少し広いその事務所の中を歩いて見て回った。

奥の観葉植物の向こうに人の気配があり、

(あ！さっき言ってた人だな？これが出会いの第一歩かも！)

そう思い、なにやらゴソゴソしているその人の後ろ姿に向って挨拶をした。

「あのぉ……今日から一緒にお仕事させてもらおう者ですが……」

そう言うと、その人は

「あ。すみません。今、行きます。ちょっと配線が……」
そう言って立ち上がった。

お互い顔を見合わせて、驚きで言葉が出なかった。

その人はカオルだった・・・

気まずい初入社

お互いなにも言えずに黙っていた……
かなりの間があき、先にカオルが口を開いた。

「あの……なにしてんの？ここで」

「カオルこそ……なにしてんの？」

「いや、俺は、ここに転職したの……」

「あたしも、、ここに……転職したの……」

なにが起こっているのか訳がわからず、ただ黙ってカオルの顔を見ていた。

カオルも驚いた顔をして見ていた。

「だって、花嫁修業って……」

「それは……そのお、、、、」

瞬間的に健吾の顔が浮んだ。

アイツ知ってたな！！そう思いバツクの中の携帯を探した。

それを見て、カオルも慌てて首から提げた携帯を持ち、なにやら番号を探していた。

「ちょ……健吾にかけるとしたらあたしがする！」

「いや！俺がするからいい！」

二人で携帯を持ち健吾の番号を探した。

タッチの差でカオルに先を越され、健吾と電話が繋がった。

「おい！お前ふざけんなよ！なに黙ってたんだよ！知ってたのかよ！」

健吾に電話が繋がり、

隣でワーワーと言うカオルの携帯を奪い電話に出た。

首からかかったストラップの紐を引っ張りすぎて、

「痛いって！ちょっ・もつとゆるめて！まゆちよつと！」と

カオルが騒いでいたが、そんなのは無視した。

「健吾全部知ってたの！！なんで教えてくれないの！」

「え？面白いかな〜って。あはは」悪戯が成功したような声で嬉しそうに笑った。

「面白いてっ・っ・ちょっとソレどうなの！」

「だってお前がカオルに言うなって言っただぞ？俺、言ってないもん」

ケロリとした声でそう言った。

またカオルに電話を奪われ、

「お前なあ〜　なんで隠してたんだよ！」そう健吾に文句を言った。

慌ててカオルと逆側のほうに耳をつけ健吾の返答を聞いた。

「だつて〜　カオル余計なことまゆに言うなって言っただろ？」

だからこれは余計なことかな〜　って思ってた。ひひひ」

明らかに嬉しそうな声が少し曇って聞こえた。

「だから！その、確かに余計なこと言うなって言っただけ、お前・・・これは・・・余計どころか肝心なことだろあ？」
へナへナとした声でカオルが言った。

「だつて〜 まゆにもカオルに余計なこと言うなって言われたんだもん。」

アイツ怒ると怖いから、怯えてそれを守ったの！
じゃ、俺いまから外出だからさ。また電話するわ。
似た者同士頑張れよ！じゃ〜〜ねえ〜〜ん」

そう言つて電話は切れた。

お互い一つの携帯に耳をつけたままの形で止まっていた。
携帯越しにカオルの体温が伝わり、その格好が
あまりにピッタリとくっ付いていたことに、慌てて離れた。

パクツ・・・音をさせ携帯を閉じ、カオルは黙って前を向いていた。
微妙な空気が流れたまま、お互いにも言わずに
その場に並んで立っていた。

なにを言えばいいのか動揺したままイロイロと考えた。
けど、あまりに予想外のこと頭の中は真っ白だった。

「東京・・・」

「え・・・」

「東京に住むの？」

「あ……うん」

「仕事なら来られるんだな」

そう言っただけでカオルはなににも言わずに歩いていった。

一気に昔のことが頭に甦った。

昔、カオルが自分の元に来てくれと言われた時、

確かに今の仕事を始めたばかりで辞めたくなかった。

けれど、問題はそれ以外にも山のようにあり、もしもこっちに来てしばらくカオルと一緒に二人だけで住むとしても、

じきに結婚となればカオルの実家に移りちよつと怖いお母さんと

同居しなければならなかった、まだ付き合っただけで1年も経っていないのに、

そんなことを言われ、どうしていいのか分らず結局は

カオルじゃなく、もっと身近な直樹を選んでしまった。

カオルのことは大好きだったけれど、不安が大きくて

結局直樹に逃げた……

確かに直樹のことも好きだったので、そう自分で選択したのだが、一度だつてカオルのことを嫌いと感じたことはなかった。

ただ、カオルの実家に行くことを「嫌だ!」と言いきることができなかったのは、そんなわがママを言うのが嫌われると感じたし、そこまでジツクリと結婚を考えたことは無かった。

普通でいえば、もうとっくにしているもおかしくない歳なのに、楽しいことばかり優先して、生々しい現実には背を向けた。

それがカオルとの破局の一番の原因だとわかっていた。

そのままの場所にどうすることもできずに立ったままで
そんな昔のことを考えた。

さっきの態度からしても、カオルは怒っている・・・

(まいったなあ・・・もう)

そう思いながら、とりあえずデスクがある方へ歩いていった。

デスクが2つ向き合う形で並べてあり、その横に並んで2つ
少し大きめのデスクがあった。

これはどう見ても、あたしとカオルは向き合った形だと思った。

一つのデスクにカオルが不機嫌そうな顔をして座っていた。
その正面のまだなにも置いていないデスクの近くにいき、
気まずそうな顔をしてイスに座った。

視線がカオルとちょうど真正面だった。

チラッとこっちを見て、また黙って目の前のノートパソコンに目を
うつした。

(確かに・・・パソコン関係の会社にいたから得意分野だよなあ・・・)

そう思いながら、自分のバックからアドレス帳を出し、
どこのメーカーから電話しようか考えた。

例えカオルがいたとしても、逃げて帰ることはできない。
もうここしか自分の場所は無いのだから。

「あの……なにか書くものあるかな？」

ニツコリと笑いかけたが、カオルは自分の目の前にあったメモ帳をポンツとあたしの机に投げた。

「あ、ありがと……」

物凄いやりずらいんですけど……

そんな時、ドアから祐子さんと望月さんが入ってきた。祐子さんの顔を見て慌てて立ち上がった。

と、同時にカオルも望月さんの顔を見て立ち上がった。

望月さんが慌てて、

「俺は知らなかったんだって！本当に！無実だって」と手を前にアワアワ振っていた。

望月さんから祐子さんに視線をうつしカオルが

「ちよつと、部長。これどーゆーことですか？ちゃんと説明してもらえませんか？なんでここにまゆが……あ……吉本さんがいるんですか」

<まゆ>から<吉本さん>に言い換えたカオルが本気で怒っているんだと感じた。

(えー) あたしもいまさら矢吹さんとか言つの？言いづらーい(

「うーん。そうねえ……」
あまり顔色を変えないで祐子さんが話しました。

「私は矢吹君の仕事ぶりも良いって思ってた。最初望月から矢吹君を引き抜きたいって言われて、本当に来てくれるならこれほど嬉しいことは無いと思ったわ。

それに、まゆちゃんね。昔から絶対仕事面では良いって思ってたの。

この仕事に決めた時に、一番にまゆちゃんの顔が浮んだ。

大変だったんだから、わざわざ北海道まで行ってまゆちゃんのを。

彼氏説得して……」

そこまで言った祐子さんが

（「説得して、別れてまで来てくれたのよ」「）と言っんじゃないかと慌てて話を途中で切り

「あの、いいんです。あたしは問題無いです！」
そう大きな声で言った。

そんなあたしをカオルは黙って見て、

「まあ……俺も問題無いです。もう昔のことだから」
そう言っつて自分の席に座った。

頭の中でカオルが言った（昔のことだから）そればかりが延々と回った。

「そう？ならいいわね。ちょっと二人が揃うまでドキドキしたんだけど、

まあ……これから頑張りますよ？弱小会社なんだから

みんな仲良くしましょうね」

そう言つて祐子さんは自分のデスクに座り涼しい顔で仕事を始めた。あたしも黙つて立っているのも変だと思い、またイスに座つた。

カオルが打つキーボードの音が部屋に響いている。

すぐ顔をあげればカオルがいる・・・その現実に本当はかなり動揺をしているのに、なんてことない顔をしてメモ用紙にメーカーの電話番号を書き写した。

(後から祐子さんには山のように聞いてやる！・・・くっそ！)

「あの、祐子さん・・・あ・・・なんて呼べばいいですか？ やっぱり社長？ですかね・・・」そう祐子さんに言った。

「社長？なんかインチキ臭いわね。私が言われると。でもまあ・・・基本的にはそんなんだけど、どうしようかなあ〜けど、仕事の時はキツチリしたほうがいいわね。誰か社外の人がいる時はそうして。普段はいいわ。なんだか背中が痒くなるから」そう言つてクスクス笑つた。

「望月さんは？」

カオルが望月さんのほうを見て言った。

「俺？俺はあ・・・いまのままで。社外の人がいる時でも

「うちの望月が〜」でいいよ。実際のところも祐子が全部やるし」

「わかりました。じゃあ・・・部長のこと俺、祐子さんて呼ぶんですか？

それはちよつと・・・なんだかなあ〜」

そう言って苦笑いをしていた。

「しばらくは部長でいいわよ。もうそれが名前みたいなものでしょう？」

そう言って祐子さんも笑いながらカオルを見た。

「じゃあ・・・まゆちゃんのこととは？」望月さんがこっちを見て言った。

「俺は吉本さんで」そう言ってカオルはまた黙ってパソコンを見ていた。

そんな微妙な空気を望月さんも祐子さんも感じ、

「ま。みんなまだ好きなように呼びましょう！」そう言って話を締めた。

(すっごくイヤりずらい!!)

そう心の中で叫びながら

電話をとり、感觸のよかったメーカーに電話をしようとした。

「あ・・・あの、社名は？こっちから名乗る時なんて言えば？」
受話器をもう一度下ろして祐子さんを見た。

「あ。これまゆちゃんの名刺ね」そう言って1ケース渡された。

「なんとなく今っぱい会社って感じの名前ですね」

社名を確認してから、また受話器を持った。

「あの・・金額の枠や主体の商品とか・・
全然聞いてませんでした・・ まずそこから教えてください」
そう言つてまた受話器を下ろした。
実際かなり動揺していて、なにからすればいいか慌てていた。

「まゆちゃ〜ん・・ いくら目の前にタイプな男がいたとしても、
そんなに慌てないでくれない？」

（悪意は無いだろうけれど、今はそれを言うタイミングでは決して
無いですよ祐子さん）

「じゃ、とりあえずみんなでミーティングしましょうか！」
祐子さんが手をパンツと叩き、みんなに言った。

言われた言葉があまりにも、今の状況に不適切で倒れそうになつた。
なにも聞こえなかったような顔をして言われたまま
テーブルのほうにみんなが集まつた。

「と・・ まあ。こんな所ね。私も少しだけ買い付けについて勉強

してみたの。まあ・・・やっぱりセンスが最大の問題だけど、金銭面での管理は私のほうが少しは上だから、しばらくは私がまゆちゃんの仕事付き合うから。

で、矢吹君と打ち合わせしながら写真とかその辺決めましょ？」

軽く2〜3時間かかった最初のミーティングで、大体扱いたい商品を卸してくれるメーカーの検討はついた。

自分の専用のパソコンをオンにし、各会社に挨拶と簡単な「こちらの会社に移りました」とメールを送った。ほとんどの所は仲良しのメーカーさんで、会社を通してというよりも、個人的に仲が良い所に最初はアクセスした。

ふと時計を見ると、もう9時を過ぎていた。けど、みんな黙々と仕事をしていて、一体いつになったら手が止まるんだろう・・・と内心想っていた。

「じゃ、今日はこれくらいにしましようか？」
それから1時間を過ぎた頃に、祐子さんが言い、やっとみんなの手が止まった。

みんなで一緒に事務所を出て、
「今日はやつと全員が集まったから一緒に食事しましょうよ〜！」
と言う祐子さんの案に従うしかなかった・・・

本当は今にも祐子さんを引っ張っていき、いろいろ聞きたいことも山ほどあったが、すっかり望月さんも祐子さんの案に同意し、カオルも何も言わない状態で、一人だけそんな行動ができず、ただ黙ってついていった。

「じゃ、近場にいい所見つけたの！」という祐子さんは
どっどん前を歩いていき、その隣を望月さんが歩いていて、
その少し後ろにカオルがいて、あたしは一番後ろを
なんとも言えない気分です歩いていました。

(ああ・・・これからどうなるんだろう・・・)

仕事をしている時は少しだけ気まずいことを忘れていたが、
こう思いつきりプライベートになると、結構キツかった。

トボトボと下を見ながら歩いてついていった・・・

いきなりなにかにぶつかり、慌てて前を見ると、
カオルが立ち止まっていた。

「健吾にも聞きたいことがあるけど、まゆにも聞きたいこと
山ほどあるから・・・」
そう言っただけを見ていた。

(うわぁ〜目が怒ってる・・・どうしよう・・・)

直樹のことを言う心配して連絡してくるかも・・・
なんて甘っちょろいもんじゃなく、これから毎日顔を合わせるのに
絶対別れたなんか言えない。

頭の中でどう言えばそのことがバレないか一生懸命に考えた。

隣に並んで歩きながら、カオルが口を開いた。

「この話ってさ。この前会った時にはもう決まっていたの？」

「あゝ、うん。1月頃に・・・」

「だから辞めたんだ」

「うん……」

しばらく黙ったまま歩いた。

けど、それほど怒らなくていいのに……

もうあの頃と今とじゃいろいろ状況が変わってるのになぁ……

「でさ。彼氏は？」

（うわっ！きたー！）

「あ……うん。ちゃんと理解してくれてる。あっちも仕事忙しいから」

口からでまかせを言った。もしこれで、カオルに彼女がないのならば、

もうここまで毎日会うことになった今、言ってもよかったが、いまさらそんなことは言えない……

「ふ〜ん……さすが大人の男だね。俺なら絶対ダメって言うな。

まゆって遠距離好きなんじゃないの？自分から来るなんて」

そう言っつて、少し先に早足で歩いていった。

店につき祐子さんと望月さんは明るく食事をしていた。

それとは打って変わってあたしとカオルは目を合わせること無く、違うほうを見ながらポソポソと口を動かした。

そんな乗り切れていない二人を見て、少しアルコールが入った

祐子さんは

「ちょっと」 そんなに暗い顔しないでよ？
ビックリさせて悪かったと思ってるからさー」と軽快に言っていた。

(ビックリだけじゃ済まないよ・・・)
そう思いながら一応愛想笑いをした。

1時間ほどで店を出て、祐子さんの家に向った。

店の前で望月さんとカオルと別れ祐子さんと歩き出した。

その瞬間に、後ろの方でカオルが望月さんにワイワイ文句を言っているのが聞こえた。

タクシーで家に着き祐子さんに

「祐子さん・・・知ってたんですよね？カオルがいること。ちょっとそれは無いんじゃないですか」と少し怒って言った。

「仕事とプライベートは別よ？私は力になる人しか呼ばないもの。まゆちゃんも矢吹君も十分デキる人達だもの。」

まあ・・・最初はちょっと矢吹君のこと考えて賛成はしなかったけど、

まゆちゃん別れたしね。一度は決めたいんだけど、やっぱり矢吹君も

不安なのか、いろいろもめたんだけど二人がかりでグイグイ押し込んだの。

彼も押しには弱いよね」まゆちゃんと似てるとこあって「

全然悪いと思ってる素振りは無かった・・・
でも、いまさら嫌だと言っても仕方無いし、それ以上言うのを諦めた。

「じゃあ帰る？」と言われても、もう帰る所が無い。ならば・・・カオルが今後、目の前で彼女の話をしても「うんうん」と笑顔で聞いて流していればいいか・・・あっちも直樹と付き合ってると思ってるし・・・

「祐子さん。一つだけ約束してください」

「なに？給料アップはまだ、できないわよ？」

「いや、そうじゃなくて！カオルには絶対、直樹と別れたことは言わないって約束してください。もし望月さんも知ってるならそこも口止めしてください。お願いします」

「なぜ？もういいじゃない。別れたんだし」

赤い顔をして、ダブルベットにもう一つ枕を置きながら振り返った。

「いえ。さつきカオルにも聞かれて、ただ仕事で来ただけで、まだ付き合ってるって言いました。だから・・・言わないでください」

焦りながら真剣な顔でそう言った。絶対カオルには知られては困る。惨めすぎて、そんなのがバレたらもう仕事していて目が合っても仕事が手につかない！
絶対嫌だった。そしてもしも優しくなんかされたら、期待をしてしまっ・・・

「まあ、そこまで言うならわかったわ。黙ってる。これでいい？」

「はい。ありがとうございます」ホツとしてやっと笑顔がでた。

「頑固なんだか、意地っ張りなんだか……」

そう言いながら「もう寝るわよ」と言い、先にベットに入った。

バタバタと荷物を整理して、シャワーを借りてからベットに入った。

もう祐子さんは大きなイビキをかいて眠っていた。

隣に入り、眠ろうとしたがあまりのイビキの大きさに
なかなか眠れなかった。

（どこに行っても問題はあるもんだなあ……）

そう思いながら目を瞑った……

健吾の出張

5月に入り、祐子さんが朝から出勤をするようになり安心した。

4月の末に来てから、毎日午前中は気まずく、望月さんもかなり二人の間を気づかいこっちが申し訳なくなるほどだったので、祐子さんがいるといないのでは、場の雰囲気違った。

まだカオルとはほとんどまともに話をしていなく、お互い朝、出勤しても軽く目だけで挨拶をする程度だった。それでも仕事にはあまり支障が無く、やりずらい所はあったが、それもこれも自分のせいだと思い、あまり気にしていないフリをして仕事を進めた。

何件かのメーカーは最初から、好感触で商品を入れてもらうことになり
気持ち良く話は進んだ。

けれど、何件かは

「新しい会社だと・・・ちょっとね・・・もうちょっと実績があると
うちも問題無くだせるんだけど」ごめんね。吉本さんは
信用してるんだけど、上がOKださないんだ・・・」

そう言われて断られることも多かった。

「あ。いえ、気にしないでください。けど、そこそこ信用がついた

その時はよろしく願います」

内心（買ってやるって言うてんのに！）とムカつきながらも笑顔で電話を切った。

小さくため息をつき、今になって直樹が言った言葉が正しかったと暗い気持ちになった。

GWなのに、みんな黙って仕事をしているのを見て、

「祐子さん？せっかく連休なのにどこも行かないんですか？」と、デスクでご飯を食べながら聞いた。

「だってどこも混んでいるでしょ？たいした行きたい所も無いし。

それより仕事してるほうが気楽なのよ。

まゆちゃんどこか行きたいの？なら休んでいいわよ」

「あ・・・いえ。あたしも人混み嫌いだから。

それに、まだサンプルとかチェックしてないし、メーカーが休みでも

やらなきゃならないことは山ほどあるから・・・」

「そう？休みたい時言っつてね。まだ本格的に開始じゃないし、

そのうち開始したら、ちゃんと休みは日曜って決めるから。

7月までは自己申告ね。ね？矢吹君もそれをお願いね」

そう言っついでにカオルのほうも見た。

「あ・・・はい。俺もいいですよ。別にたいした用事無いし。

サツカーも辞めちゃったし。まあ、もう年齢的に無理だけど」
そう言っつて祐子さんに笑った。

内心、（彼女に会わないのかなあ・・・）そんなことを少し思ったけど、今の雰囲気は気軽に休みたいと言える感じではない空気が会社の中に漂っていた。

少しだけ入荷した商品をチェックしに下の倉庫に行った。少し値は張るが、そこそこ満足できる品を買いつけてきて（ん）なかなかいいじゃん）と思いながら見ていた。

後ろからガサガサと音がして、カオルがいるのがわかった。

けど、なんとなく話かける雰囲気ではなかったので、黙ってそのままサンプルチェックなどをしていた。

「あのさ・・・」

急に話し掛けられ、商品を見ながら

「なーに？」と聞いた。

「連休なのに帰らないの？いいのかよ彼氏」

カオルも商品をデジカメに撮影しながら聞いてきた。

（いいも・・・悪いも・・・無いんだよなあ）
と思いつつも、「うん。いいの」と答えた。

「もしかして上手く行ってないとか？」

「ん？別に」そっちは？いいの連休なのに彼女放つといて」

「え？ああ・・・まあな」相変わらず素っ気無い言い方をした。

「上手くいつてないの？」ちょっと期待をして言った。

「ん？別に」

それきりお互いにも話さず、黙々と仕事をした。

(別に……ってなんだろう？もう別れるんだろか？それとも……
仕事に理解のある彼女なんだろうか……)
そんなことを考えながら黙っていた。

そんな気まずい雰囲気も5月末には少しづつ解消された。
仕事もそれなりに問題はあったが、なんとか進み毎日が忙しく過ぎた。

そんな中、健吾の出張の日がきた。

アイツ……会ったらガツチリ文句を言ってやる！
そう思っていたが、今回は会える日が一日しか無く、
きっとカオルと会うと思い、次の回に溜めておこうと思った。

その連絡の電話の時も、健吾は結構忙しくただ日程だけを
言って電話が切れたので、文句のひとつも言えなかった。

その日の夕方。

「あのさ、健吾に会うんだけど行かない？一緒に」
と、カオルが話し掛けてきた。

「あ……でも。二人で話があるでしょ？いいよ。行ってきて」

「いや、健吾にも連れてきてって言われたし……
その、彼氏が怒らないならどうかなって……」

「あ……うん。じゃあ行く」

そんな会話を祐子さんと望月さんが耳を大きくして聞いていた。
なにげに視線を感じ、二人でそつちを見ると慌てて仕事をしている
フリをした。

（けど、今日健吾に会ってもカオルの目の前じゃあまり本腰入れて
怒れないな……）

そう思ったが、久しぶりに健吾の顔も見たいと思い、
その日の夕方は祐子さん達より早めにカオルと二人で
健吾との待ち合わせ場所に向った。

隣で歩くカオルを見ながら、
（こうして二人でゆっくり街を歩くのも久しぶりだなあ……）
そう思いながら、昔なら手を繋いでいたのに、今は離れている
お互いの手の距離をなんとなく見ていた。

人で賑わう街中を歩いていると、路上でアクセサリーを売っている
露天が目についた。
そこに、今カオルがつけているのと同じようなデザインのチョーカー
があった。
カオルにあげたのは赤だったが、それはターコイズの石がついた青
だった。

ふと立ち止まりソレを手にとり見た。
そんなあたしを隣でカオルは黙ってみていた。

「それ可愛いでしょ？インド製でね・・・」

店の人が簡単に説明をはじめた。

（あ・・・やっぱり同じような物なんだなあ・・・）

そう思いながら、その話を聞き笑顔で「そうですか」と返した。

カオルにあげた物は、自分でもとても気に入る昔から

大事にしていた物でいままで付き合った人達にも

「それくない？」と言われては、絶対「いや！」と断り続けた。

健吾になんか即答で断ったくらいだった。

けど、カオルにだけは「よかったら貰ってくれる？」と自分から首にかけた・・・

それをカオルはとても喜んでくれた・・・元々男性用だったこともあり、

それはカオルのほうが似合うと思った・・・

「じゃあ特別安くしてあげるよ！」

その声で我に帰り、「あ・・・いいです。ちょっと見ただけだから」
そう言つて頭を下げてその場を離れた。

お互い話をすることも無く、黙って歩いていると、

「色違いだったね・・・」隣で前を見ながらカオルがポツリと言つた。

「うん。ほとんど同じだったね。色以外は」

「欲しかったんじゃないの？気に入ってたじゃん。これ・・・」
そう言つて自分の首にしたチョーカーをシャツの中から軽く触つた。

「ううん。ただ見ただけ。似てるな〜つてさ」

「買ってやるうか？」

そう言つたカオルの顔は昔と同じ優しい顔だった。

その顔を見て、昔のあたしなら「うん！」と笑顔で返しただろう。
けど、今はそんなことしてもらつう立場じゃない・・・

「いいよー。そんなお揃いみたいな物してたら、彼女に悪いし。

あ！なんなら彼女に買ってあげたら？さっきのもすごく
可愛いかったじゃない。いいんじゃない？ペアなんて」

自分で言っていて、それが本心じゃないことはわかつていた。

本当はあのチョーカーを今でもしてくれていることが嬉しいのに、
それをペアでつけられることなんか、嫌だった・・・

「それもそうだな・・・じゃ、ちょっと待つてて、買ってくるわ」

そう言つてカオルは今来た道を引き返していった。

その後ろ姿を見て、自分が馬鹿すぎて嫌になつた。

つい勢いで言つてしまったとしても、あれほど自分が大事に
していた物なのに・・・値段こそ、そう高価では無かったが、

デザインや雰囲気はいままで買ったアクセサリーの中で
一番お気に入りだったのに・・・

（カオルもカオルだよ。あんなにあたしが気に入ってるの
知つてたのに・・・ 言つたのは自分だけだ）

そのままビルの壁に寄りかかりカオルが戻ってくるのを
惨めな気持ちで待っていた……

「ごめん。ごめん。タッチの差で売れたってさ。

俺も健吾の間の悪いのが移ったかなあ？じゃ、行こうか」
そう言っただけで歩き出した。

「残念だったね……」思ってもいない言葉が口から出た。

（先に買ってくれた人……ありがとう！）

そう先に買ってくれた知らない人に感謝しながら、
カオルの後ろを歩いた。

そんな風に思うなんて自分はなんて性格が悪いんだろう……
自分が先に裏切ったくせに、今になってカオルに彼女が出来たことに
内心、つまらないと思っている……

（こんな器の小さい所がなにをやってもダメなんだろうなあ……）

ブツブツとそんなことを口にしながら歩いた。

「お前……ちょっと変な人に見えるぞ……」

「え？あ、いや、、、なんでもない」

慌てて横に並び、なにも無かった顔をして歩いた。

それでも、彼女になにかプレゼントをしようとしたカオルが、

（結構上手くいってるんだな……）

そう思いながら、今度は口に出さずに黙って歩いた。

店に着くと健吾がニヤニヤしながら手を振っていた。

「よ！似た者同士が来たな。元気だったか？」
相変わらず憎らしい顔をして笑っていた。

「お前なあ……俺が転職のこと言った時点で知ってたんだろ？」
そう言つてカオルが健吾に少し怒った顔をして言った。

「本当だよ！あたしなんか去年から言つてたのに！」
同じく怒つて言った。

そんな二人の顔を見ながら、
「そう怒るなつて」 だつて会いたかつたんだろ？二人して
ビールを飲みニヤニヤしながら言った。

その言葉に動揺しながら
「なに言つてんのよ。いまさら会つてもなににも変わらないでしょ？」
そう言つて慌てているのを隠した。

「そつだよ。もう昔のことじゃん。それに、あつちではまゆの彼
氏が
待つてんだし。」
そうカオルも健吾に向かって言った。

（うわあ……またく昔のことゝだつて……何度も言つなよへい
むじゃん）

内心グサツときながらも普通の顔をした。
そんな二人を見ながら「ふ〜ん」と言い、また健吾はビールを飲んだ。

「ま・・・いいか。じゃ、俺もビール」そう言ってカオルは注文をした。

あたしは隣でまだグサツときた衝撃が強く動揺しながら黙っていた。

「あと、ウーロン茶とね」

それがいつものことのようにカオルがあたしの分を注文をした。

もう昔のことと言い切るならば、あたしがいつまでも

カオルのことをウジウジと思っているのは、これからの仕事に

支障が出るな・・・そんなことを思いながら、なんとか普通の顔をした。

久しぶりに会った健吾はぶつぶつと会社の愚痴を言っていた。

少し懐かしい気持ちで昔の会社のことを聞いていた。

「でさ。部長がさ、あ、向田さんな。前にも増してキツイんだよ。

統括になると嫌だねえ〜 人の仕事にも口出すしさ。

あの人どっかネジが外れてるな。疲れ知らずってくらい

毎日残業してるしさ。俺にはついていけねーよ」

直樹の悪口を言いながらブーブー文句を言っていた。

「俺、ちょっと煙草買ってくるわ」そう言ってカオルが席を立ち、

「おう。じゃあ俺のも頼むわ」そう言って健吾がカオルを見送った。

「直樹、頑張ってるんだね。相変わらず遅いんだ」
なんとなく頭の中に難しい顔をした直樹の顔が浮んだ。

「でさ。まだ言ってないの？部長と別れたって」
いきなり話を変え健吾が聞いてきた。

「え？うん。だって別にわざわざ言うことでも無いでしょ」
「ふん……」

「だって……ほら。カオルだって彼女いるみたいだし……
いまさら言ってもね」

「ふん……」

「なによ？その「ふん」て馬鹿にした言い方！

どーせまた「こいつ馬鹿だよな」とか思ってるんでしょ！

まあ、いいけどさ。どーせ馬鹿だし……」

「カオル、彼女のことそんなにお前に言うの？」

「え？うん……聞けばそんな話はちよつとするけど、詳しくは
言わないかなあ……でも聞きたくないから、あんまりあたしも
その話しないけど……あたし器小さいから嫌な顔すると思うし」

「ふん……」またニヤニヤとした顔をして

「好きなんだねえ〜ん」と馬鹿にした言い方をした。

「うるさいなあ〜 違うわよ！だから健吾も言わないですよ！
祐子さんにも口止めたんだから！わかった？」

「はいはい。わかりました〜」

なんとなく信用が無い言い方に
何度も念を押している所にカオルが戻ってきた。

それから最近のこっちの仕事の状況の話になり、
健吾は「なんかいいな」と羨ましそうな顔をして言った。
いつそ健吾もこっちに来ればいいのに・・・そんなことを少し思
った。

「あ！そう言えばさつき由美ちゃんに会ったぞ」
いきなり思い出したかのように健吾がカオルに言った。

一瞬、胃がギュツとなった。そんな話にいきなりなるとは思って
いなかったので驚いた。
その問いに答えるカオルを見たくなくて、
「ちよつと、化粧直してくる！」と慌てて席を立った。

「別に直しても、たいした変わらんぞ？」と笑いながら健吾が
言っていたが、その声を無視して席を立った。

慌ててトイレに駆け込み、

(あの馬鹿・・・わざわざ目の前で言わなくてもいいのに！)

やっぱり自分の器の小さいことが身に染みた。

笑顔で「どんな子？」と余裕で聞けるほど、デキた人間では無かつ
た・・・

それから5分ほどその場で時間を潰し席に戻ると、
もう話はいつものサッカーの話になっていて安心して座った。

さっきの健吾の言葉をなんとなく思い出しながら、
いまいち入れない二人の会話を聞いていた。

「俺もこつち来ようかな」
「なにかの話のキツカケで健吾が言った。」

「あ・・・でも祐子さんバイヤーもう一人探すって言ってたよ？
どう？うちの会社。健吾なら問題無いよね」
「そうカオルに言った。」

「あ・・・うん。いいんじゃない？でも今より給料安いぞ。
まあ、俺としては遊ぶ相手が出来ていいけどさ」

「うん。あたしも健吾なら仕事しやすいし！来ちゃえば？」
それが現実になれば、今よりも仕事が進みメーカーの幅も
広がると思いきう薦めた。

「そうだな」
「本気で考えようかな」。じゃあ社長に聞いてみて？」
「え、まじで？」
「驚いてカオルが言った。」

「うん。だって今の所はギスギスしてるしさ、同じような仕事する
ならお前等と一緒にするのも悪くないかなって。
無職でこつち来るのはマズいけど、仕事で・・・って言うなら
そんなに問題無いかなってさ」

「なんだか知り合いの寄せ集めになってきたなあ・・・
そんなことを思いながら、それが現実になればちよつと楽しいかな
と思った。」

「うん・・・じゃあ近いうちにでも社長に会うか？」

まあ、どつちにしろすぐには来れないだろ？辞めるのにもすぐって訳にいかないし。こつちに来るにしても家とか決めたり引越しかないとかあるし。まずは話聞いてからにしたら？」
ちよつと健吾の勢いに不安そうな顔をしてカオルが言った。

「まあな。でも転職したいって思ってたし、東京もいいかなってさ。すぐには来れないけど、家はこつち来てから決めるよ。」
それまでカオルの家に世話になればいいし」

そう言つてカオルに「な」と言った。

「なんで俺の家なんだよ。嫌だつて。男二人で暮らすなんて〜」
気持ち悪〜つと言う顔をしてカオルが健吾に苦笑いをした。

「ほう・・・俺の頼みをきけないと？ふ〜ん・・・」
そう。ならいいや。あのな、まゆ。俺まゆに教えてあげたいことがあつ・・・」

「わかった！わかったから。いい！来い！けど、決まったらだろ？
まだわかんねーじゃん。断られるかもしれないし」

慌ててそう言つたカオルを見て、

（カオルもなにか弱みを握られてるんだなあ・・・）と思つた。

「断られるかなあ？じゃあ、それはまゆが社長に売り込んで。
自分より俺のほうが優秀だつてさ。俺がいないと仕事できない〜
とか言つてくれよ？な？」

「なに言つてんのぉ？なにがあたしより仕事が出来るって？
まあ・・・確かに仕事面では真面目だとは思うけど、

そこまで持ち上げては言えないなあ〜
あたしよりちょっと落ちるって言うならいいけど〜」

「ほう……お前も俺に逆らう訳だ？いいんだ？へ〜

あのな、カオル、実はまゆな……こっちに来るにあたって……

」

「わ！わかった！言う！言うから！あたしより出来るって言う！」

あの顔は直樹のことを言おうとしている顔だと咄嗟に思った。
ちきしょう……コイツに弱みを握られているのは問題だな……
そんな慌てるあたしを見て、カオルが不審そうな顔をした。

「そっか。悪いなあ〜俺はいい友達を持ったなあ〜。本当に！

これで家も仕事も問題無いな？

じゃあ次の出張の時にでも時間作るよ。明日はちょっと遅いから。
たしか〜 2週間後にもう一回あるんだ。その時よろしくな。

そっちの会社ちよつと見てみようかな？いろいろ話も聞いてみた
いし」

「わかった……腑に落ちない顔をしてカオルが言い、

「うん……」と同じような顔をしてあたしも言った。

その日は平日ということもあり、先に帰ろうとして席を立つと二人
も一緒に店を出た。

「じゃ、あたし帰るね。この後二人で飲むんでしょ？じゃ、また明

日ね」

健吾とカオルにそう言っただけ帰ろうとした。

「あ。俺も帰るから。この辺物騒だし、途中まで一緒に帰るよ」「
そう言っただけ健吾に「じゃ、またな」と言っただけカオルは歩き出した。

「いいの？どこか行くんじゃないの？」
そう健吾に聞いたが、

「ま、2週間後も会うしな。とりあえず送ってもらえ。じゃーな」
そう言っただけ手を振っただけホテルのほうに歩き出した。

「そうなんだ・・・じゃ、また今度ね」

小走りにカオルの隣に行き、

「よかったの？もしなんなら・・・あたしタクシーで帰ろうか？そんなことしなくても

きつと大丈夫だと思うけど」「なんとなく自分のせいかと思い、顔を覗き込んで聞いてみた。

「いや、最近毎日遅いし。眠いになってさ。

ま、襲われはしないだろう。どーせ襲うならもっと若い子にするだろう？

誰かさんも、もう歳だし」「そう言っただけニヤニヤと笑った。

「ちょっとお・・・自分だっただけ来年は三十路でしょ！そんなこと言えるの？」

「俺も30かぁ・・・もっと昔は30歳ってすごくオヤジと思っただけ
ぶ」

いざそうなると思うと実感沸かないな」

煙草を吸いながら少し笑ってカオルが言った。

「そうだね・・・あ！そういえばさ、なにか健吾に弱みでも握られてるの？さっきあんなに慌てて」「ふと思いついた。

「えっ・・・いや。そんなたいしたことじゃないけど。

あの、えーと・・・そっちだって弱みあるんじゃないの？さっき慌ててたじゃん」

(そう来るか・・・)

「え？いや、あたしはその、あたしもたいしたことじゃないよ？別に・・・うん。ぜんぜん」そう言って笑って誤魔化した。

「でもほら、もし健吾が住むことになったら、彼女が家に来れないじゃない？いいの」

(いくら誤魔化すにしろ・・・もつと他になにかあるだろ！)自分でそんな聞きたく無い話を振ってしまい、自分の言葉に動揺した。

「あゝ・・・それはそうだけど・・・でもほら。困った時はお互い様だし。

社長なんて言うと思う？いいって言うかな」

「どうかなあ？でも健吾は仕事に対しては真面目だよ？

普段はあんな感じだけどね。まあ・・・売り込んであげるさ！」

そう言って笑うと「そうだな」と言ってカオルも笑っていた。

内心・・・

(このまま健吾がずっとカオルの家に住み着いて彼女が来れなくなればいいや・・・) そんなことを考えた。

そのうちもつと自分が意地悪になるんじゃないかと思った・・・

止められない

カオルの態度も普通になり、少しずつ仕事も順調に進んだ。

普通と言っても「おはよう」と交わす挨拶と「お疲れ様」以外は、仕事のことだけで、世間話も無難なことだけだった。

それでも始めの頃のように、睨まれることは無くなった。

ちやくちやくと商品が入荷してきたが、新しいメーカーなどは

電話だけでは話が進まない所も出てきて、

慣れないながらも、なんとか商談に出かける日々が続いた。

「なんだか、こつちって電車がいっぱいあって意味わかんない・・・

」

朝からメーカーの住所とにらめっこをしながら、ブツブツと文句を言っていた。

「どこ行きたいの？」

カオルに住所を渡すと、

ペラペラと「ここで乗り換えて、この駅で地下鉄で」と説明してくれたが

全然意味が分からず「紙に書いて！」と子供の使いのようになっていた。

「おい・・・大丈夫なのか？それで・・・」冷めた目で見られながらも、

「大丈夫だよ。なんとか着いてなんとか帰ってきてるから。

その気になれば人に聞けばいいんだし、なんとかなるよ」

呑気なことを言いながら外出した。
かなり苦戦をしたが、それでも人見知りをする性格でもないので
分からなくなれば田舎モノのように、気軽に道を尋ねながら
あちこちのメーカーに挨拶回りをした。

なんとかその日の予定を無事にこなしへ口へ口になりながら戻ると、
裕子さんに、「明日もあるんでしょ？さっき矢吹君に頼んだから明
日は

二人で行きなさいね」と言われた。

「え？カオルと行くんですか」驚いて聞き返すと、
「あら。ご不満？」と聞き返された。

「いや、不満で言うか、、何をしに？」
「なについて仕事に」お互い変な顔つきで話をしていた。

それを見てカオルが横から「俺は話の内容が分からないから、運転
手」
と口を挟み、「仕事いいの？」と聞くと「社長命令だから」と笑っ
た。

話を詳しく聞くと、HPのほうはほとんど出来あがりなのに、肝心の
あたしの商品が入らないので仕事がストップしていると言われた。
・
・
「あゝ すいません。もつとマキ入れてしまーす・・・」と謝り
翌日から数日間はカオルの車でメーカーに顔を出すことになった。

久しぶりに乗るカオルの車は、昔と何も変わっていなかった。

「何も、、変わっていないんだね？」と車内をジロジロと見ると、
「そうか？まあ、、あんまり休みも外出するほうじゃ無いしなあ」
さほど感心無く答え、メーカーまで車を走らせた。

こうして仕事だとしてもカオルと二人で、またこの車に乗れることが嬉しかった。

隣で澄ました顔をしながらも、前と同じように普通に

「ジューズ開けてよ」とか「CD入れ替えて」と変わらない空間に昔を感じた。

相手先に着き、「じゃあ、カオルも一緒にいこ」と誘った。

「えっ・・・ だって俺、意味分からないし。ただヘラヘラするだけでもいいの？」

「うん。何も話しないで名刺交換だけしてくれたらいいよ」
二人で会社の中に入り商談をした。

隣で緊張しているカオルを見ながら、きつと昔は自分も健吾に着いて初めて仕事をした時はこうだったんだなと思った。

話に入りたいけれど、下手なことを言ってしまうそうで、ただ愛想笑いを

してその場をやり過ごしたことを思い出していた。

以前に前の会社で何度か商談をした所だったので、問題も無く話はスムーズに流れ、トントンと決まって行った。

相手先の担当の人も前と同じ人だったので、緊張することは無かった。

その人は何も話さず愛想笑いをするカオルを見て、

「吉本さん。なんだか松永さんと来てるみたいですね」とカオルが健吾に似ていると笑っていた。

商談を終え、外に出るとカオルはドツと疲れた顔をした。

「うわぁ・・・ 緊張するなぁ？なんだこれ。なんでこんな仕事が好きなのよ？」

「そう？面白いじゃない。自分で好きな商品選べるんだよ。で、売れたら

それがまた嬉しいのよ」カオルもバイヤーになっちゃう？」

「なんだか仕事の時は雰囲気違うんだな」真面目なんだな」

「なにそれ。ちゃんと真面目だよ。じゃ、次も今の調子でよろしくね」

「うん・・・ 次から健吾のふりするわ」

「健吾のフリねえ、、、ならお茶くれたお姉さんにも名刺渡さないとね」

「アイツ、、、そんな感じなんだ？」

「うん。動物的に名刺配ってた」

「それは、、、真似できない・・・」呆れた顔をしながら次の場所に向かった。

やはり車の移動だと、それほど時間のロスが無く順調に仕事が終わり、

定時少し前には会社に戻れた。

翌日の商談のスケジュールを組みながら、あれこれと残りの仕事をしている、裕子さんが声をかけてきた。

「どう？バイヤー矢吹は使い物になりそう？」

「どうかな？人見知りか激しいですかねえ・・・」

「そこがネックよね・・・」と二人でカオルを見て笑っていた。

「俺なりにとても好感度が上がる笑顔で接してきましたよ？」
澄ました顔をしてパソコンに向かっていた。

それから数日はあたしの運転手としてカオルは活躍してくれた。

それでも数日着いて回ったくらいでは、仕事の話には入っていけずに本人が言う好感度の上がる笑顔で隣でニコニコしていた。

別に本気でカオルのことをバイヤーにしようという訳では無くあくまで商品が入るまでの繋ぎなので、仕事を教えることは無かったが、

「まゆと仕事するっていうのは・・・絶対馴染めない」と毎日言っていた。

それはこつちも同じ意見だった。人見知りの激しいカオルには無理だと思っただし、足元を見られるような値段交渉をされる時、自分の力の無さをカオルに見られるのはやっぱり嫌だった。

その日は、昼前に数件のメーカーを周り終え、

「今のうちに昼食っちゃおうぜ」と言われ、

大きな噴水のある公園の駐車場に車を停め外に出た。

天気がとても良く、6月と言えどもあたしには十分暑いと感じた。

「たしかあつちにオープンカフェとかあったかな？そこのほうがいか」

「ん？どこでもいいよ・・・ あ！あれ食べたい！」
移動販売車のホットドックを指差し、「あれ！あれにしよ！」と強引に引つ張っていった。

「ええ・・・ こんなんでいいの？」

「うん。だってあたしの街にこんなの無いもん！これがいい！」

「田舎モンって感じだな〜まゆ」

少し呆れた顔をしながらも、笑いながら二つ買い噴水の脇に座りながら
軽めの昼食を取った。

「そういやさ。こんな風にするのって初めてだよな」

「そうだねえ・・・ あまりこっちに来てものんびりと外歩くとか
少なかったしね」

「もつといろいろ行きたい所、後からいっぱい思い出したんだよな
」

「あたしもそう思ったなあ〜 連れて行ってあげたい所沢山あった
んだ」

「お互い、あんまり外出なかったもんな」

「本当だね。引き籠もりだったからね。あたし達」

「桜・・・」そう呟き、大きく噴出す噴水の水を見ながらカオルが、
「花見行けなかったな。見せてやりたい場所あったんだけどさ。」

結局、桜が咲く時期に付き合って、次の花が咲く前に終わっちゃ
ったもんな〜」

と言った顔を横で黙って見ていた。

「来年、きつと裕子さんのことだから会社で花見行こう！って言出すよ。」

「一緒に行けるじゃない」とちよつと寂しい気持ちを隠してそう言った。

「来年かあ・・・もうまゆは結婚準備して辞めちゃうかもなあ・・・」

そう言ったカオルに普通な感じで、

「それは無いだろな」と言った。

「へ？いつまで引つ張るの。お前・・・」

慌てて我に返った。

「そんなことまだ分からないって話。まだ会社スタートもしてないし、

軌道に乗らなきゃ辞めるに辞めれないじゃない！」

「そつか。まあ、さっきの仕事ぶりじゃ仕事好きって感じだしな。

そのうち彼氏に捨てられちゃうかもな」

「カオルだつて・・・そのうち結婚して実家に帰るかもしれないじゃない」

「俺？うーん・・・どうかな。今のところ無いなあ」

「え？そうなの？」今の彼女と結婚を考えていると思っていたのに、ちよつと驚いて聞き返した。

「えっ？ああ・・・まあ、全然無いつて訳じゃないか。」

けどほら、それこそ軌道に乗るまで責任あるしな。そう、それ」

「だよね〜」と二人とも変な空気のまま話をしていた。

噴水に足を入れはしゃいでいる子供を見ながら、カオルがポツリと「まゆつてさ。今の彼氏の他に結婚とか考えた人っている？」と聞かれた。

「結婚かぁ・・・ なんだか昔は憧れていたと思うんだよね。結婚ってことに。

けど、現実味が増してきたら、勇気が無くなってきちゃって、、ね。

失敗はしたくないと思うと、人一倍慎重になりすぎちゃって・・・ そうなるといつもギリギリで「これで決めていいのかな？」って思っちゃっう」

ギリギリで結局逃げてばかりだなぁ・・・自分の言った言葉にそう思った。

若い頃ならそんな言葉が嬉しくて喜ぶだけで、それほど現実を感じなかったが、

カオルの時と直樹の時は嬉しいというよりも「うわー！」という感じだった。

（そのうち・・・婚期逃してしまうな・・・）と思いながらボ〜としていた。

「普通、女って「結婚して」って言われたら喜んでOKすんじゃないの？

俺さ、ずっとそう思っていたから、まゆに断られた時ショックだったな〜

初めて「一緒に住もう」って言ったのに。「あれ？」って思ったよ

苦笑いに近い顔をして、そう言うカオルが可笑しくて笑った。

「あれは断ったんじゃないよ。嬉しかったもん。けど、あの時は勇気が無くてね。」

いろいろ心配だったから、ほら、家、、、あ。そうだ。お母さんのこと聞いた。

ヤスから。大変だったね・・・」

「あ？ん、まあね。なんだか今思うと、悪い息子だったなつたわ。」

言うことは聞かぬし、家も勝手に出るし、しまいには、、

「まゆと別れたの母さんのせいだ」って正月に帰った時、酔った勢いで

言っちゃつてさ。きつと内心そう思っていたんだな・・・俺。

最後の最後に「ごめんね」って言われてさ・・・」

ほんの少しカオルが泣いてしまっただけじゃないかと思った・・・

確かに少しはそれが原因でもあったけれど、死ぬ寸前までお母さんにそう思わせたことに胸が痛んだ。

「ごめんね・・・」

きつと言葉で謝るくらいじゃ足りないんだろうと思った。

将来のことを真面目に考えて家に連れて行ってくれたカオルに、

（お母さん怖いから来なきゃよかった・・・）と本気で思った自分が申し訳無かった。

「もういいつてば。じゃああの時、少しは俺と結婚すること考えてはいてくれたんだ？もうちょっと家のこと隠しておけばよかったな」と顔を普通に戻して笑っていた。

「あ、でももう一人考えた人いたなあ・・・」

「そうなんだ？」

「うん。健吾」

「ええー！健吾お？お前、それは危険だろ。アイツは勢いで生きてる男だろ。」

俺が女なら遠慮する・・・」

「うん。思いとどまって良かったと思ってる」そう言って二人でクスクスと笑った。

それでも心の中では（でもカオルのことは本気で考えたんだよ）と思っていた。

結局、逃げてしまったけれど、そこまで本気で考えてくれていたことに

やっぱり嬉しかった。あんなに気軽に何度も「一緒に住もう」と言っていたから

てつきり付き合う子みんなに言っているのかもと当時は思ったけれど、

そうじゃなかったんだ・・・と今になって思った。

「きつとき、まゆってガツついて無いから、いいなって思ったんだと思うな」

「なにが？」

「昔さ、ちょっとだけ、んゝ半年くらいかな？付き合った子には、逢う度に結婚式がゝとか 新婚旅行はゝとか言われてさ、友達にも「付き合ってるの」とか「結婚するかも」とか言われて、

て、
どんどん追い詰められた気がしたんだよな。

なんだか気軽に考えていたのに、周りから固められるっていうか、俺の意思とは別に他で話が決まってきたさ……
だんだん怖くなってきて、俺、逃げたんだよな。自分のこともちゃんとしていないのに、人の面倒なんか見るの怖くてさ」

「へえ……でも若い時ってさ、結婚に憧れるからね」

「で、その子と付き合ってる時に現実逃避でチャット始めたの」

「あたしも、ちょうどその当時の彼氏と別れて暇で始めたの」

「そう思えばタイミング良かったな。それに遠くの子なら、

そこまで真剣になること無いって思ってたんだ。たまにしか逢わないだろうし、

逃げるのも簡単になってさ」

「うわ……最低〜超危ない人だったんだ……」

「いや、もしもってことでさ。また熱い子なら逃げるの可能かなって。

けど、始めからチャットしてる時だって、まゆは良い子だって思ってたよ。

みんなに気使っていたしな。そんなに熱そうないメージ無かったしさ」

「ふ〜ん。あたしさ、写真見るまでカオルに全然関心無かった。

今思い出しても、オフ会前のカオルの印象が全然無いもの」

「お前ねえ……それ本人前にして失礼だと思わないのかよ」

「だって本当のことだもの。あたしには遠距離は無理だと思って思ったし、

きつと逢うこと無い人だと思っていたから」

「そう思うとき、すげえ確率だよな。あんなにネットしてる人の中でお互いがいいなって思えて、付き合えて、しまいに今は同じ会社だぞ?」

「そうだね。凄いことだよねえ・・・ 奇跡的だね」

そんな話をして笑っていた。やっぱり別れてないと言えないこともあるんだと

シミジミ思った。昔、付き合っている時は昔の彼氏の話や彼女の話など

聞くとやきもちに繋がって、遠慮して話したことが無かった分、今日の話がとても新鮮だった。

「そろそろ次行こうか」そう言われ「うん」と立ちあがり車に戻った。

車の中ではまださっきの話を続きをされていて、

延々と昔の彼女のホラーに近い、結婚追い詰め作戦の話をするカオルに

笑いながら車を走らせた。

「だからさ、メールもこなきや電話も来ないまゆが新鮮だったんだなあ・・・」

俺のほうが遊ばれてるんじゃないかと思ったよ」

「そう?だってカオル電話もメールも苦手って言ってたじゃない。

苦手なら仕方無いかなくてさ」

「普通は大体2ヶ月くらいで文句言われて逃避が始まるのが俺なんだけだね」

「苦手なのにたまにくれる電話が嬉しかったけどね」

「俺、かなり頑張ったものー俺が毎朝と毎晩メールだぞ？
前の彼女が知ったら、殺されるな、、、俺」

「けど、それも半年くらいじゃなかった？」

「半年かぁ・・・でもその頃、まゆの仕事忙しかったしな。俺も忙しかったし」

「あのまま付き合っていたらよかったな・・・あたし馬鹿だったなぁ・・・」

つい窓の外を見て、話の流れに沿ってそんなことを言ってしまった。急に車内が静まり（あれ？）と思ってカオルを見ると、黙ってこっちを見ていた。

「え？どうしたの？」

「あ、いや、、、あのままって、、、」

「あ、その。違っつてば。それならそれでも、良かったかもなくて。」

カオルのこと嫌いって思ったこと無かったしき、自分には勿体無
いって

そう思っていたから。あゝ えーと」

お互い「あー」とか「いやいや」とか繋がらない会話にジューズを
飲んだりして、

誤魔化しながら外を見ていた。

「あ、あの看板そうだよな？」ちょうど話が続かなくなった所で、
上手い具合に次の会社に着き、お互いちよつと安心した。

「じゃあ、、、話の続きは終わってからで・・・」

「もう話は終わったよ。じゃ、行こうか！」

エレベーターの中で、さっきの自分の言動を思い返して冷や汗が出ている。
そして、その言葉に対して戸惑ったカオルにやっぱり、もう終わったことなんだと思いきらされたような気がした。

(いつまでも想っていちゃダメなんだ……)

隣で「あ、ボタン間違った！」と一人で騒ぐカオルを見ながらそう思った。

やっぱりもう時間は取り戻せないんだなって痛いほど感じた。

やっとすべての商談を終え、会社まで車を走らせていた。

どことなくさっきの会話以前は、せつかく普通な感じで話をしていたのに、
すっかり雰囲気を変えてしまったように感じた。

「もし健吾来たら、仕事楽になりそう？」

「うん。そうだねえ……あれでもあたしの上司だったから」

「今度は下だからいじめられるな」

「ねえー もうわざと意地悪してやる」

仕事の話ならば、気まずくなることも無く普通な感じで会話が出来た。

もう余計なことと言わないでおう……気まずくなるだけだと思った。

「さっきの話さ・・・その、今でもって・・・」

「あ、いいの。その話は昔話に花が咲いたって感じのこと。」

「気にしないで。さーて、戻ったらどこのメーカーに連絡しようかなあ」

そう話を切り、それ以上の話をしなかった。

（こんなことを「後悔先に立たず」って言うんだなあ・・・）

そんなことを思いながら窓の外を黙って見ていた。

会社に着き、書類や荷物を降ろし、

カオルはサンプルが入った大きなダンボールをトランクから降ろしていた。

「なにか持っついていこうか？」

「あ、じゃあこれ・・・ちよつと後ろ向いて」

言われたように後ろを向くと首にスツとなにかをかけられた。

「え、なにこれ？」とクツと引っ張りそのモノを見ると、ターコイズの石が見えた。

サツサとダンボールを持って会社に入るカオルの後姿を見ながら首にかかった物を外して見ると、この前買えなかったと言ったチヨーカーだった。

（本当は買えたんだ・・・）

どんな気持ちでこれにくれたのか聞きたかったけれど、

「だってそれ欲しかったんだろ？そんだけ」そう言いそうなカオルに期待をしてはいけないと思い、そのまま黙って事務所に戻った。

「あのお、、、コレさなんだけど」
首にかけてチョーカーを軽く押さえカオルの顔を見た。

「ん。そっちのほうが似合うな。俺はいつも見えないからお揃いだ
って

「バレないよ。欲しかったんだろ、やるよ」

笑う顔にやっぱり昔に戻りたくて、黙って見ていたら絶対に泣きそ
うで、
慌ててトイレに行った。

止められそうに無い自分の気持ちと、動けない持ち前の行動力の無
さが
重なり、動揺しながら鏡に映るターコイズの石を見ていた。

(どろじよう……)

優しくされた分だけ、心臓がキリキリと痛み目が赤くなっていった。

そしてお礼を言うのを忘れていた……

直樹の弱音

すっかり健吾が出張に来ることなど忘れていたが、
どうやら予定通りに東京に来ていたらしく
最終日に自分の都合で仕事を無理やり終わらせ
昼過ぎに連絡があり会社に来ることになった。

相変わらず健吾は勢いで生きていると思っただけ……

朝、祐子さんにその話をすると、

「そうねえ……まゆちゃんの前上司でしょ？まあ仕事はできそう
ねえ。」

でも、あつちの会社の都合もあるだろうし……
その辺は希望聞いてあげないと。とりあえず話を聞いてからね」

カオルとチラツと目が合い、好感触な祐子さんの言葉に
二人でニコツと笑った。

「アイツ凄いな〜！さすが勢いの男だな。俺なら怖くて北海道にな
んか就職できねーよ……」

「ちよつと……よくそれで人に「こつちに来い」とか言ったよね
？しんじらんない」

「いや、それは男と女は違っただろお……」

「違わないよ！自分だって逆なら尻込みするでしょ？」

延々と昔のことを小声で言い合っていた。

健吾が来て応接フロアのほうで話をしている声が聞こえた。それなりに健吾は口がうまい。祐子さんの声も優しい感じに聞こえてきたので、大丈夫だと確信した。

コソコソとカオルと

「健吾決まりそうだね」と言っていた。

ちよつと弱みを握られているのは良くないが、仕事の面では大歓迎だった。

「じゃ、一応話は聞けたし社長もその気があるなら採用してもいいつてさ。

そうだな〜 8月くらいなら来れるかな？ まあ、また連絡するよ」

そう言つて元気に帰つていった。

「なんだか賑やかそうな人ね。けど、なかなかシツカリしてそうだしこれでスタッフの心配は無くなったわね。

まあ〜まだ2〜3カ月後だし、それまではまゆちゃんが頑張つてね。

彼が来るまでうちの会社潰しちゃダメよ？」

そう言つて祐子さんも安心したようにニコニコしていた。

そんな祐子さんを見て、カオルと二人で

「よかったね」と小さい声で言い笑った。

少しずつカオルも前と同じに接してくれることにも安心した。

これで健吾も来てくれる・・・

最初の不安が消えていった。

まだ全部とは言えないけれど、カオルも思っていた以上にあたしに

自分の彼女の話はしなかった。しなかった・・・というよりも一切>しなかった。

聞いてみたいような、でも聞くとショックを受けそうな、どちらにしろ

自分からその話を気軽に振れることは性格上できなかった。

その夜、みんなに珈琲を入れようと奥の給湯室でお湯を沸かしていると、

デスクに置いた自分の携帯が鳴りだした。

ちようどお湯を使っていたので、

「後からかけ直せばいいか・・・ どーせお母さんかも？」
そんなことを思いながら無視をしていた。

その音が少しずつ大きくなったことに後ろを振り向くと、カオルが携帯を持ってきてくれた。

「これ。鳴ってる・・・」

「あ。ありがと。わざわざごめんね」

そう言って受け取ると画面には<向田 直樹>の文字があった。

咄嗟にカオルの顔を見た・・・

「彼氏から。早くでたら」そう言ってそのまま席に戻っていった。

別れたことを隠しているくせに、カオルに直樹の電話を見られたことが

内心（しまった！）と思っていた。

「あ。もしもし・・・」

「まだ仕事？今、大丈夫かな」

「うん。いいよ。直樹も仕事なんじゃないの」

「あ・うん。あのさ、マツからさっき話聞いて」

健吾はやっ！もう直樹に言ったんだ・・・
ちよつと怒られるかと思ひ慌てた。

「あ、、、ごめん。その、、転職したいって言ってたから・・・
その、、どうかって、、、、」

「いや。それはいいんだけどさ。マツがやりたいなら構わないよ？
マツからまゆのこと聞いてちよつと電話してみようかと思ってさ」

「あ・・・そうなの？怒って電話してきたんじゃないの？
この忙しいのに勝手にうちの人材を引き抜きして！って」

怒っていなかったことにホツとした。

統括ならそんな所も直樹の管轄内かと思ひ、てつきり文句の電話か
と思つていた。

「俺もマツが側にいれば、まゆも頼れるんじゃないかと思うし。

それはマツが決めることだから問題無いよ。うちは人数いるしね。
で、どう？サツパリ俺に助けを求めてこないけど順調？」

どことなく話が筒抜けな気がして、ソロ／＼と事務所を移動した。

カオルが「彼氏から」と言ったのを祐子さんが聞き、こつちをチラ
チラ見ていた。

「あ、、ちよつと待ってね」直樹にそう言つて、

事務所の外に行き、エレベーターの前の小さなイスに座り話を続け

た。

「うん。まあまあかな。でも、やっぱり直樹の言ってることは正しいこともあったかなって。結構断られちゃった。やっぱりバツクに有名な社名があると違うね・・・」

そんな弱音は今の所、直樹にしか言えなかった。

祐子さんに「この会社が小さいから」なんて言えない。健吾に言っても「だよな」程度だと思った。

「どのメーカー？」

「え、どうして？」

「いや。もしそんなに大きな金額と数量じゃ無いなら俺から言っただけだろうか？」

「え・・・そんなことできるの？」

「いや、俺が金出す訳じゃないけど。ちょっとでも助言すれば少し違っかなってさ。もしまゆさえ嫌じゃないなら、来週、そっちに出張あるから一度話聞こうか？」

社長に金額の枠と支払方法を聞いてきて。あとは・・・

直樹はいろいろと仕事に関してアドバイスをしてくれた。

詳しいことは祐子さんにFAXするから見てもらいなさいと言い、なにやら書類を送ってくれることになった。

（やっぱり違うよなあ・・・あたしと次元が・・・）

「じゃ、来週の金曜の夜ならいいかな？」

まゆの会社の住所わからないから、後からメールして。
で、適当に待ち合わせよう？俺も愚痴聞いてもらうよ。もう安心
して」

事務所に戻り、席に着くと祐子さんがこっちを見て

「向田さん？」と聞いた。

「あ・・・はい。あの仕事のこと・・・」
そう言い、さっきの話を言った。

カオルも聞いていると思い、
「あくまで仕事の話でした」という感じで話をしたが、
あまり意味が無いよな・・・そんなことを思いながら祐子さんに説明
した。

「やっぱりこの道が長いと言うこと違うわねえ」。顔は良いは仕事
は出来るは・・・

彼ってさ、完璧って感じよねえ」

「あ、そ、そうですね」

「うん。凄いなあ」

祐子さんが褒めれば褒めるほど、なんだか居心地が悪くて
どんな顔をして答えていいのか分からなかった。

チラッとカオルの顔を見たが、こっちを見ないで黙々と
パソコンを打っていた。

(せっかく最近はなんだかニコニコしていたのになあ……)

これでいいはずなのに、なんだか気持ちが落ち込んだ……その翌日からまたカオルはあまり口を聞いてくれなくなった。

なにか仕事のことで話をする以外は目も合わせずただ黙々と仕事をした。

そんな気まずい空気で毎日が過ぎていった……

金曜日。直樹からのFAXの質問通りに祐子さんが回答をし、それをプリントアウトした紙を渡してきた。

「じゃ、今日向田さんに会うんでしょ？これお願いね」

そして小さい声で

「これで復活したりして？」とクスクス笑った。

「いや。もうそれは無いです……」

会社を出る時もカオルは顔色ひとつ変えることなく

「お疲れさま」とだけ言い、黙ってパソコンに向っていた。

夕方6時頃、みんなよりかなり早めに会社を出た。

外に出て「はあ……疲れた」とため息と一緒に言葉が漏れた。

きっと今日会うことで、もっと付き合っていることを深く確信するんだろつと

思うと、それで良いと思っている反面、内心複雑だった。

前もって連絡をもらった待ち合わせ場所に行くと、もう直樹がいた。

「お久しぶり」そう言ってテーブルに着くと、
「ん。元気そうだね」といつもの笑顔の直樹だった。

そして祐子さんから渡された書類を見せた。

しばらく難しそうな顔をして見た後、

「うん。じゃ、戻ったら連絡してみるよ。たぶん大丈夫だと思っからさ。でも、頼むぞ〜 もし支払いとかしなかったら俺の信用に関わるからな。まゆだから信用するんだぞ？」とニツコリ笑って言った。

「うん。大丈夫。直樹の顔を潰すことは絶対しないから！」
調子の良い顔でニヤニヤとお願いとすると、その顔を見てまた笑っていた。

軽くそこで食事をすることにし、お互いの近況などを話していた。久しぶりに会ったけれど、まだ辞めてから3ヶ月しか経っていないので
それほど直樹に見た目の変化は無かった。

「で、直樹の愚痴は？聞いてあげるよ」

「ん？そうだなあ・・・思ったより統括が大変かな。

これなら前のほうが楽だったし、なんだか毎日疲れるよ・・・」
そう言っって苦笑いをした。

「ふ〜ん・・・あたし直樹が「疲れた」って言うのはじめて聞いたかも」

「だってもう格好つけても、仕方ないだろ？」

俺捨てられちゃったし。こんなイイ男を捨てるやつのが見たいね。俺なら絶対捨てないな」

オーバーに言いながらこつちを見て笑った。

「本当だね？顔が見てみたいね」

なんだかそんな直樹の顔を見て安心した。

それから直樹は上司の不満などを笑いを交ぜて言い、二人で大笑いをしていた。

「もつと格好つけなきゃ、こつちやっていつも笑えたのにな」

「でも別れてなきゃ言えないこともあったし。たぶん直樹とはどつちにしても別れたと思うから・・・

あたし器小さいからさ。ちよつとのことへこむしね」

「そうだな。俺も別れてなきゃ、きつと不満とか愚痴は言ってるいな。幻滅されると思うと言えないからさ」

あんなに完璧だと思っていた人も案外脆い部分もあると改めて感じた。

何処と無く（もつたいない）という気持ちもあったが、直樹にはもつと大人で素敵な人が似合うんだろなと感じた。

「仕事でピリピリしてるんだって？健吾が怖いって言ってたよ」「ん？まーね。でもそうしないとき。仕事だから」

直樹も辛いポジションだな・・・と感じた。
上にいけば行くほど弱音を吐けないんだなあ。

目の前の直樹が急に可哀想になり、一人で暗いあの部屋に
毎日疲れた顔で帰る直樹が頭に浮かんだ。

「これからは愚痴聞いてあげるから、あんまりピリピリしないほうがいいよ？」

もうあたしに遠慮しないで言えるでしょ。そんな人が一人はいた
ほうがいいよ！

直樹、格好つける人だからストレス溜まって体壊しちゃうよ」

一瞬だけジツ・・・と見て何か言いたそうな顔をした直樹に
「ん？」と言うと、またいつもの顔に戻し笑った。

「そうだな。これからも愚痴が溜まったら聞いてもらうよ。
心の広い昔の彼女で俺は幸せだな」と目の前のグラスを全部空け
た。

フツ・・・とたまに見せる疲れた表情が少しに気になりながらしばらくして店を出た。

「じゃ、仕事のことと先方に連絡ついたらまた電話するから」
「うん。じゃあ、あたしもまた何かあつたら連絡するね。
今日はありがとう。お世話になります」そう頭を下げた。

「今日はしなくていい？最高なキスは」
隣に立ち、軽く肩に手を置きながら聞いた。

「ん・・・たぶんするとそれ以上して欲しくなるからいいよ」

そんな気は無いくせに悪戯っぽい顔をしてそう言った。

「いいよ俺は。まだ早いし、なんなら朝まで付き合おうよ？」

俺のこと一番って言わせたいしさ」少し嫌味を込めながら、ニッコリと笑った。

「だからキスくはゝ一番て言ったじゃない？じゃ、連絡待ってる」
そう言っって肩の手を軽く抓った。

直樹はいつもの笑顔で軽く手を振り歩いていった。

(大丈夫なのかなあ・・・)

初めて聞いた直樹の弱音に胸が痛くなった。

いつも強そうに見えた直樹だったのに、本当は言えないことが沢山あったんだ

と思うと、消えていく後姿がいつもよりも小さく見えた。

(でも、もう別れたんだもの。だから愚痴だつて教えてくれたんだし！)

クルリと背を向け、直樹と逆の方向に足を向けた。

時計を見ると9時少し前だった。

もし直樹が上手く話しをつけてくれたなら、諦めた希望の品が入る。他に妥協した商品をもう一度チェックしておかないと！

明日でもよかったが、家から数分の会社だし・・・
家に帰ってもすることが無いし・・・そう思い、真っ直ぐ会社に戻った。

くすることが無い」と感じる自分が我ながら寒いなと思ったが、今の気持ちじゃきつと納得のいく恋愛なんか出来ないだろうと思っ

た。
焦ると良いこと無いしね・・・自分で自分を慰めながら会社に戻った。

外から事務所の窓を見ると電気がついていていた。

（ほくら。どーせ裕子さんはいると思っただろ）

ちよつと気分が軽くなりさっきの話を報告しようと思ひ急いで事務所に戻った。

事務所のドアを開けると、そこにはカオルがいた。

「あれ、祐子さん帰ったの？」

「あゝえーと、望月さんとなんだか仕事の話で誰かに会って」

ちよつと驚いた顔をしてカオルがそう言った。

「そうなんだあ、」

ちよつとガツカリしながら自分のデスクに座り、書類をだしチェックを始めた。

（せつかく喜ばせてあげようと思ったのになあ）

「あの、もう帰ってきたの？」

「え、そうだけど？どうして」

「いや・・・彼氏と会ってたんだろ？」

「あゝまあ・・・でもほら、仕事のことであつたから。今日はそれだけだつたの！うん。あたしも忙しいし」

慌てて言うあたしを見て、少し怪しんだ顔をしながら「そうなんだ？」と言い、またパソコンに向つた。

それから1時間ほど、お互いにも言わずに仕事をした。

「まゆさ・・・」

いきなりシーンとしていた所に急に呼ばれてビックリして顔をあげた。

「そんなことばかりしていると、彼氏、嫌気さすんじゃない？」

もっと会えた時くらい、その、一緒にいたら？」

「あ・・・うん・・・」

「本当は上手く行つてないんだろ？そうじゃなきゃお前付き合つてる時そんなことしないだろ」

確かに付き合つていたら、こんな所には戻つてこない。きつと今ごろ直樹とまだ一緒にいる。

でもいまさら、そんなことを言われてなにも答えられなかった。

「そんなこと言うなら・・・カオルだつてじゃない。カオルだつて上手く行つてたらこんなに仕事ばかりで放つておくことしないじゃ

ない・・・」

その言葉にカオルも黙っていた。
お互いシーンとしながら、また黙って仕事を進めた。

しばらくして静かな部屋に「キュ〜」とカオルのお腹の音が聞こえ、
思わず「プツ・・・」と吹き出した。

時計はもう11時をまわっていた。

「なにか食べて帰ろうか？」そう言ってカオルを見た。

「んじゃ、もう今日は帰ろうか？」

大きく伸びをしてカオルも帰り支度をした。
外に出て近くのラーメン屋さんに入り、食事を終え家に向かって歩いた。

「で。どうなの？本当のことは」

二回も夕食をとり、苦しくてお腹が痛くなりそうな
あたしに向ってカオルが聞いてきた。

「へ、なにが？」

「彼氏のこと・・・ さっき途中で話すり替えただろ？」

「あ・・・でもカオルだってちゃんと答えてないでしょ？」

「だから俺のことはいいんだってば。まゆのこと聞いているんだって」

「ちよつと〜普通、人に物を聞くときはまずは自分からでしょ？」

「なにへ理屈言ってるんだよ」

別にいまさら直樹に会ったとしても帰る以外なにも無い。
うまく説明ができない上に、嘘ついてるんだから言える訳が無い。

「てゆうかさ。それ言うてどうにかなるの？」

自分だって彼女いるんでしょ？そんなこと聞いてどうするの？」

「だからさ、、、もし、、その、、」

困った顔をしながらポツポツと言葉を考えながら言う
カオルの顔を見ながら、変に期待している自分がいた。

（わ！もし上手くいって無いなら俺も彼女と別れて・・・とか言う？
言うっちゃう？）

次の言葉次第では、もうバラしてしまってもいいや！
そんなことを内思いながら、次の言葉を待った。

ピピピピピ・・・ピピピピ・・・

カオルの首にかけたストラップの先の携帯が光った。
暗闇でその光った文字が<由美>と浮んでいた。

その文字を見て、なにくわぬ顔でカオルは電話にでた。

「もしもし。どした？・・・ああ・・・うん。まだ仕事だから。

いや、今週も仕事休めないから付き合えない。ああ・・・じゃーな

携帯をとじ、

「あ・・・ごめん。で・・・さっきの続きは～え」と

今、目の前でのやりとりを聞く限りでは、カオルも上手くいっているとは思えなかった。

それに、、こんな寒いカオルを見たことは無かった。

いつも一緒にいた時は文句は言っても、最後はあたしのわがままを絶対聞いてくれたのに・・・
長く付き合っているとカオルもこうなってしまうのかなあ・・・
そんなことを考えながら黙っていた。

「本当はもう別れそうなのか？」

内心（本当はもう別れているんですよ！参りましたね。この空気）と

思いながら黙っていた。

それよりも彼女からの電話の後に、こつこつ話をするカオルが内心「どうよ？」と思っていた。

「どこか飲みに行かない？立って話すのもなんだし」
なにも言わないあたしにカオルはそつそつ顔を覗き込んだ。

「でも、カオルの家ってここから遠いでしょ？」

それに、車だつて会社に置いたままだし・・・」

「あれ・・・知らないの？俺、引越したんだよ。前の家って会社契約だから出されたし。今、歩いて出勤してるし・・・」

車も会社に置きっぱなしだけど・・・まさか気がついてなかったの」

「え・・・だつて、朝あたしより早いし、帰りだつて遅いから全然知らなかった・・・」

聞くとあたしの家とそう遠くない所に引っ越したと言っていた。

「でもこの辺ってあんまり飲みに行く所も無いか・・・
じゃ、俺の家に来る？ここからなら俺の家のほうが近いし」

一瞬、もし家に行つて彼女の写真とかあつたりしたら、
立ち直れない・・・そう思っていた。
それに家にいる時に彼女が来たりしたら・・・

「あの、でも、、彼女が来るかもしれないでしょ？なら、、うちのほうが」

(うわ！彼女持ちなのに家につて言っちゃった・・・)

「あゝ・・・いや、、それは無いけど・・・
それならまゆの家だつて彼氏が来るかもしれないじゃん。
今、東京にいるんだし・・・いきなり来るかも・・・」

(ない！ない！)と思つたが、どう説明していいか分からなかった。

「いや、やっぱり俺の家で。いこー！」

そう言つてカオルは急いで歩いていった。
内心動揺しながらも、それ以上にも言えずに着いていった。

カオルの家はあたしの家とは逆側の会社から数分の場所にあつた。

そこは前の部屋とそう雰囲気が変わらないくらいスッキリとした部屋だつた。

(なんだか女の気配がしない部屋だなあ・・・)

そう思いながらキョロキョロと部屋を見た。

どこにも彼女の空気を感知することはないその部屋に不思議な感覚すらあった。

「あんまりジロジロ見るなよ・・・別に前とそう変わらないだろ？」
そう言っつてビールをテーブルに置いた。

「あ・・・あたしビールはいいや。飲めないから」

そう言っつと、お茶のペットボトルを目の前に置き、

「じゃ、これね」と言い、ソファアの隣に座った。

隣で普通の顔をしてビールを飲むカオルに、

「あの・・・なんだかこの部屋つて女の匂いが無いね。引っ越してから彼女来てないとか？」

部屋をキョロキョロ見ながら聞いた。

「えっ・・・そう？そんな感じする？どこが」

「うーん。だつて前なら一緒の写真とか飾つてたじゃない？」

あと、、、、ほら、歯ブラシとか無いし、タオルとかも。あとは」

「俺のことはいいんだけどさ。そっちは？本当のところはどうなってるの？」

今日だつてあんなに早く帰ってくるし・・・こつち来てから始めてじゃないの？」

その、、会つたのつて」

「えっ・・・そう？だつて仕事あつたし、あつちも朝早いし、それに、あたしも早いし、その・・・」

本当に自分が日本人なんだろうか？というような話し方だった。なんだかもう嘘をつくことに少し疲れを感じた・・・
けど、いまさら言つてもなあ・・・ 格好悪いよなあ・・・

そう思うとやはり本当のことは言えずにへらへらと愛想笑いをする他無かった。

「もしかして・・・もう別れてるとか？」

ズバリ言われて、かなり慌てた。

目が少し泳いじゃってるし！

「そ、そんな訳無いじゃない！今日会ってるんだよ？
別れてたら会う訳無いじゃない。なに言ってるの」

「だよなあ・・・そんな訳無いか・・・」
そう言つてビールを全部飲み、カンツ！と音をさせテーブルに置いた。

ふと見たパソコンが昔と変わっていた。

「あれ？パソコン変えたんだ。あたしもこれ欲しいなつて思つてたんだよね」

「マックつて意味わかんねーぞ。まあ、俺も形で買ったんだけど」「ふーん。あたしも買おうかなあ・・・」

そのうちお互い話を忘れて、パソコンの話になっていた。

「買ったなら接続してやるよ。どーせわかんねーだろ」

「うーん。そうだなあ・・・けど今ってもうあまりしないしなあ」

「夜とかなにしてんの?」

「別に?何ってこと無いかな・・・ダラ〜としてる」

「彼氏は電話とかしてこないの?メッセとかでもいいじゃん。スカイプとか」

「しないよ・・・いまさら」

「いまさらって?」

「おう・・・なんでもない。そんな暇無い人だから・・・い、忙しいし」

もうこれ以上突っ込まれたら絶対バレてしまう!

「あっ!もう帰る!お邪魔しました!」

カオルの顔も見ないで急いで玄関に行った。

「え・・・まだ全然話聞いてないけど。まあ、もう遅いから仕方無いか。じゃ、送るよ」

そう言っで一緒に玄関まで来た。

「いいよ!大丈夫だから。走って帰るから!それにもう歳だから痴漢にも会わないし。大丈夫!」慌てて玄関を飛び出した。

そのまま家まで早足で何事もなく帰った。

家につき玄関に入り

「ヤバかったあ・・・おまけに「歳だから大丈夫!」って、自分で言っくなよ、、あたし。本当はまだイケるって思ってるのに」

息を少しあげながら独り言を言った。

そして、チラリと見たカオルの家の食器棚にあたしのカップがまだあったことを

少しだけ嬉しく思う反面、複雑な気持ちになった……

嫌なバッティング

直樹のおかげで一番取引したかった大手のメーカーとの契約が実現した。

そのこのメーカーは今でも直樹の担当で、商品の幅が広く2〜3度あたしも買いつけをしたことがある所だった。

「いくら相手が直樹でもよくOKしてくれたね？なんて言ったの」
契約が正式に決まった日の夜、お礼を兼ねて電話をして聞いた。

「ん？そんなにたいしたこと言っていないよ」

「そうなんだあ・・・あたしなんか速攻断られたのに・・・」
ブツブツと文句を言いながら、あの嫌な担当の顔を思い浮かべた。

「ただ「俺の彼女だから信用あるし。ダメですか？」って言っただけ。

だからあつちにはそんなフリするんだよ」

「それマズいでしょ！嘘ついたの？うわあ・・・」

「1年もすれば、すっかりと信用がつくよ。もつと良い売上さえ残せば、他のメーカーからも頭を下げてお願いしてくるし。

まあ・・・これは内緒な。頼むぞ」

「うん。ありがと。ごめんね、無理なこと頼んで」

ちよつと申し訳無くなった。

直樹に反抗してこうなったのに、迷惑をかけている自分が世間知らずで甘かったと感じた。

「そんなに気にしないでいいよ。昔の罪滅ぼしだから。

もつと上手に俺を利用しなつて。馬鹿正直はこの仕事にはむかないよ。」

「さすが憧れの人だけあるね。あたし見る目あるう〜」

「まったく調子いいな。で、もう7月になるけど、どう？ だいたい商品は揃つた」

「うん！ このメーカーから入荷すれば一応は完成かな。

あとは、もう冬商品に切り替えないとね」

この仕事は先へ先へと行かないと遅れてしまう。

これから暑くなるのに商品はもう秋、冬のことを頭に入れなければならなかった。

「そつか。後、マツのことだけどき。9月くらいになる予定なんだ。

次の人の引継ぎもあるし。問題無い？」

「うん。大丈夫。そつちは健吾抜けても大丈夫？」

「ああ。マツも今がチャンスって言うし、止めることはできないじゃない。

こつちはなんとかなるよ。精々マツに仕事押し付けて、今度は彼

氏でも探しなよ」
終始ニコヤカに直樹の電話を切った。

）もつと上手に利用すれか・・・そんな器用な性格ならなあ・・・

もうほとんどHPも完成し、祐子さんと望月さんは毎日、
宣伝を兼ねて営業に回っていた。
毎日事務所の中はあたしとカオルだけという状態が続いた。

あの夜に慌てた帰ったけれど、特にカオルはそのことに関しては
あまり気にしていなかった。
お互いあの日以来、カオルの彼女のことと直樹のことと話にはあが
らなかった。

けれど、由美という人は実在した。
健吾も知っているというその人の存在を電話とはいえ目の前で
見てしまい、もうこれ以上カオルに関わるときとその人とカオル
の仲を
壊してやりたくなくなると思った・・・

）どーせ上手くいつてないなら・・・

そんなことを考えることもあった。
けど、逆に打ち解けているからこそ、少しくらい冷たい言い方でも
二人は繋がっているのかもな・・・そんなことも考えた。
結局はなににもできないまま日々が流れていった・・・

7月に入り、本格的に仕事がスタートした。営業の甲斐があり、検索サイトにも名前は上のほうに載り、アクセス数も順調だった。

最初から好感触な状態に安心した。

大きな注文こそ無いが、そこそこの商品の流れ具合に嬉しくなった。

商品の流れによって在庫の確認、新しく入荷させる品、

オープンすればしたで、またやらなければならぬ仕事は山のように増えた。

オープン前よりも残業の時間が長くなり、毎日一番最後まで残って仕事をして、終わりは見えなかった。

「そんなに無理しなくていいわよ？」そんなあたしを見て

祐子さんも心配そうに何度か言ってくれたが、

「健吾が来たら楽させてもらいますから。大丈夫です」と言い、本当は無理をしながら毎日を過ごした。

仕事が忙しいのもあったが、家に帰っても

(今ごろカオルは彼女と一緒にかな・・・)

そんなことを考えるくらいなら、こうして仕事に没頭しているほうが気分的に楽だった。

「じゃあ、今週から日曜は休みにしましょう。当初の約束だからね。

みなさんお疲れさまでした。休日はゆっくりしてね」

そう言った祐子さんの言葉も、

これで毎週休日があることで、カオルが彼女と会いやすくなって

しまったことに内心重い気分になった。

(あゝ・・・本当に性格が悪い・・・)

自分でそんなことを一番に考えてしまう所が嫌だった。
毎週土曜日がくる度、気分は落ち込んだ。

何度と無く「じゃあ・・・お先に」と帰るカオルを見送り、暗い気持ちになった。

「まゆちゃんまだ帰らないの？」と裕子さんに聞かれても、「うん。残すと気持ち悪いから」と笑って一番最後まで残り、ふとした時に、きつと彼女といるであろうカオルを思い、
(どうしよう・・・)とウツスラと目が曇ったりもした。

どうもこうも無いのに、ただ勝手にそう思いこみ悲しい気持ちになった。

それもこれも自分の昔の軽はずみな行動が元かと思うと、戻れるものなら

あの時に戻り、ちゃんと気持ちを伝えてカオルと一緒にいたかった。

きつと昔、別れた時カオルは今と同じ状態だったんだな・・・
まだ好きでいてくれたのに、私は離れた場所で直樹といた。

連絡を待っていたカオルはきつと今と似たような気持ちで毎日を過ごして

いたのかと思うと、今の苦しい気持ちは当然の罰だと思った。

会社の鍵を各自持っていることで、何度か日曜も

一人で出勤をしたりもした。

こうしてどんどん寂しい女になっていくんだ・・・

そう思えば思うほど、どうにもできない自分が小さく見えた。

目の前にいるのにカオルが遠い。

毎日が不安だった。

目の前にカオルがいても、もうカオルの側には違う人がいる・・・

その現実が辛くて辛くてどうしようも無かった。

みんなが帰り、一人で黙々と仕事をする事で辛い気持ちを隠している自分が惨めだと感じていたが、今のあたしにはそれしか逃げ場が無かった。

暗い給湯室でコーヒーを入れながらため息をついた。

「なにやってんだろ、、あたし」

デスクに置いたあった携帯が鳴りフツ・・・と我に返った。

着信の名前は久しぶりに見た「向田直樹」の文字が浮かんでいた。

(直樹だ・・・)

直樹の笑顔が頭に浮かび急いで電話に出た。

「もしもし」

「あ・・・寝てた？」

「ううん。仕事してた」

「おっ！俺の万年筆の効果がもう出た？」

あれ持つと仕事しないとられない気持ちになるんだよね」

直樹の冗談に救われた気持ちになった。

「直樹は？まだ仕事なの」

「俺もそろそろ帰ろうかな〜って思ってたんだけど、ちょっとまゆのこと思い出してね。隣に彼氏でもいたらすぐに切ろうと思っただけ……大丈夫そうだね」

「おかげさまで。一人で残業してるくらいなもの、ぜんぜん心配してくれなくて大丈夫」

誰かが自分の存在を想ってくれたことが嬉しかった。そこまで心が乾いていたなんて……

「彼氏できた？」

「ううん。毎日仕事ばかりでそんな暇ないもん」

「そうなんだ〜。俺も全然だよ。まあ、会社と家の往復だけで出会いも無いけどな。おまけに会社の中ではまゆと付き合っていると思われているんだから、そんな話も出てこないだろうし……」

「じゃあもう「別れた」って公表したら？狙っている人はいると思うけど」

「別にいいよ。今はまだそんな気分じゃないからね。相変わらず忙しいし」

「そっか……」

ちょっとだけ間が空き、お互いクスクスと笑った。

「まゆ。来週、そっちに出張あるんだけど会えないかな？」

「えっ、、そうなんだ。うん、大丈夫」

「じゃあ、、仕事が終わるそうなの時間ハッキリしたらメール入れる。いつも何時くらいに終わる？」

「一応定時は6時だけど、、」

「分かった。それに合わせるよ」

「うん・・・」

電話を切り、直樹の声に気持ちが悪くなった。

独りぼっちだったさっきの気分から少しは浮上できていたけれど、また誰もいない事務所が広く感じた。

相変わらず毎日、毎日、あたしは仕事ばかりの時間を過ごした。

他のことを考えると弱い人間になってしまいそうで、どこか壊れたかのように頭の隅にはいつも仕事のことを置いていた。

直樹と会う約束をした日。

いつもは誰よりも遅い退勤なのに、その日は定時に帰り支度をするあたしを見て、

祐子さんや望月さん、、カオルまでもが黙ってこっちを見た。

「あ、、まゆちゃん、、今日は早いね？」

「ええ。今日はちょっと用事があるので・・・。って、、何か急ぎの仕事ありますか？」

「えっ！ううん！そうじゃないの。珍しいな」と思って

「あ、ええ。たまには、、ちよっと人に会うんで

「へえ。だれだれ？男？やるう」

祐子さんの言葉にカオルが顔をあげ黙ってこつちを見ていたが、スツと立ち上がり

「じゃ、俺も今日は帰ります」と上着を着た。

(彼女と約束なのかな・・・)

胸がチクツ・・・と痛んだ。

カオルの方を見ないように「じゃ、お先に失礼します」と先に事務所
のドアを出たが、

エレベーターで追いつかれ一緒になってしまった。

お互い無言で上がってくるエレベーターを待ちながら一つずつ点く
ボタンを見つめていた。

「彼氏に会うの？」

「え？」

「今日はいつもよりお洒落しているなって思ってたから」

「そうかな・・・。別に気にしてなかったけど」

なんとなく、、、直樹と会うことをカオルに知れるのが嫌で、返事
をしないで曖昧に服装のことだけで誤魔化した。

「カオルは、、デート？」

「うん」

お腹がグツ・・・と重くなったような気がしたけれど、無理に笑顔
を作り

「そうなんだ。楽しんできてね」と頑張って笑った。

「どこで待ち合わせ？」

「えっ、どうして？」

「送ってやるよ。どーせ車出すから」

「い、いいよ！電車で行くから」

「プリンスホテルだろ」

「えっ……？」

直樹の宿泊先を知っていたカオルに驚いて俯いていたのにカオルの顔を見た。

「健吾と一緒に出張らしいな。健吾「怖いなあ……」って文句言ってた。

俺、今日アイツと飯食いに行くんだ」

「あ……そうなんだ」

カオルが彼女との約束じゃないことに一瞬ホツ……とした。が……すでに隠しても直樹に会うことはバレていた。

「まだ終わらないみたいだな。ロビーで待っていてくれてって言われたんだ」

「うん……。そうみたいだね」

「玄関で待ってて。車回すから」

カオルはそれだけ言って先に駐車場に向かって歩いていった。

（あたしが……直樹に会つと分かっているても顔色ひとつ変えない
つてことが、

もう答えだよね）

分かっていたけれど、そんな現実が悲しかった。

ホテルまでの道のりが長く感じ、お互いこれと言って会話をすることも無かった。

スピーカーから聞こえる歌だけが耳に流れていた。

ロビーに着き、ちょっと離れた席で待とうと歩き出すと後ろをカオルが着いてきた。

「どうしたの？」

「え、別に離れて座ることも無いだろ」

「ま、まあ、、、、そうだけど」

「それにまゆの彼氏も見たいし」

あたしはカオルの彼女なんか見たくない。てゆうか、見るのは絶対嫌だ。

けど、カオルは平気なんだな・・・

そうだよね・・・

自分はなんて小さいんだろうと、改めて感じた。

目の前で煙草を吸いながら外を見ているカオルをチラチラと見ながら、

なんだか落ち着かない気持ちで直樹が来るのを待っていた。

「あ。来た！」

カオルの声に顔をあげると、直樹の後ろに少しだけ驚いた顔をした健吾が見えた。

(うん・・・驚くよね。あたしがここにいる時点で・・・)

健吾は軽くカオルに手を上げた後、あたしの方を見て

「よっ!」と笑い、チラツと直樹を見た。

「ごめんな。遅くなって」

直樹の言葉に「ううん」と少しだけ笑い、その場から立ち上がった。

「初めまして。まゆと同じ会社の矢吹と申します」

突然、席を立ち直樹に挨拶するカオルを緊張した顔をして見ていた。

弱い心

「初めまして向田です。いつもまゆがお世話になってるみたいで」
ニッコリと微笑みカオルの顔を見た後に、あたしの頭をポンと触った。

「コイツ迷惑かけてませんか？」

「いえ、別に」

保護者のようなことを言う直樹の手を避けることができないまま黙っていた。

笑顔でカオルに名刺を渡す直樹をドキドキして見ていた。

直樹とは逆に笑いもしないで名刺を受け取り、自分の名刺を差し出すカオルに

なんとも言えない変な空気が流れていた。

「どーも。松永健吾です」

いきなりあたしに名刺を差し出す健吾に、そのギャグを拾いきれず真顔になった。

「ここ笑うところ！」

「全然笑えない！」

健吾とコソコソ小さい声で話をしていたが、目の前の二人は話をする訳でも無く、

お互い視線を合わせて黙っていた。

「じゃ、、、じゃあ！あたし達はこれで！」

その空気に耐え切れず、直樹の腕を引っ張り一足先にホテルを出ようとしたけれど、

直樹の口から思いもしない一言が飛び出した。

「せつかくだから、みんなで食事でもします？」

（えええええー！）

驚いて直樹の顔を見ると、ニッコリと笑っていた。

「だってまゆの会社の人なんだろう？もうすぐマツもお世話になるし。元上司としては

それくらいしてもいいかなって」

「あ、、、いや、、、でも、、、ほら！直樹が入ると健吾も緊張するしさ！ねー？」

健吾に助けを求めるように顔を見たが、目の前で「緊張する」なんて直樹に言える訳も無く・・・

曖昧に笑って健吾は「いやあ」と誤魔化した。

「いいえ。今日は遠慮しておきます。せつかく誘っていただいたのに申し訳ありません」

カオルの言葉にホツ・・・としたと同時に、もうこれで直樹と付き合っているままだと

思われることに少しだけ胸が痛んだ。

「そうですか。じゃあ、またの機会に。行こうか！まゆ」
「あ、うん」

カオルの視線を感じながら直樹とその場を離れた。
後ろにいるカオルがまだ見ているのか、、そうじゃないのかわからなかった。

直樹とホテルを出て、近くのレストランに入った。

メニューを見ていても、さっきのカオルの顔が浮かび、胸の中がモヤモヤしていた。

「彼、なかなかだね」
「えっ・・・？」

直樹の声に顔をあげると、微笑みながらメニューを見ていた。

「矢吹さんって、、あの遠距離の彼でしょ？」
「どうして分かったの？あたし名前なんか言ったこと無かったと思うけど」

「昔、部屋に写真あったじゃない。マツに似てるって思ってたし」
「あ、そっか。あの、偶然同じ会社だったの。祐子さんの繋がりで・・・」

あたしも全然知らなくて、こっち来てビックリしちゃった」
「そうなんだ。まあ、彼女の仕事の流れなら、そんなこともあるかもね」

ある訳無いんだよ・・・
もう・・・

自分に言い聞かせながら虚しい気持ちになった。
どこかであたしは期待をしていた。

今回、偶然にもカオルに会ってしまったことで、また、、元に戻れるんじゃないかと
思う自分が確かにいた。

「もう少し話できる？」

「え、、うん。大丈夫だよ」

「じゃあ、、俺の部屋行こうか。歩き疲れちゃったし」

「あ、、うん」

直樹の部屋に行き、ソファで膝を抱えながら座っていると
ポンスと頭に手をやり、髪をグシャグシャにされた。

「もう！何すんの！髪がグシャグシャになっちゃうでしょ！」

隣に座る直樹に文句を言うと、少しだけ心配そうな顔をしたままこ
つちを見ていた。

「まゆ・・・。疲れた顔してるな。それに少し痩せたんじゃないか
？」

「あ、、うん。ちょっと最近、忙しかったから・・・」

「本当は辛いんだろ。彼と一緒に働くことが」

「そんなこと、、無い、、よ」

不覚にも、直樹の言葉に知らないうちに目に涙が溜まっていた。

少しだけジワツ・・・とした涙をそこで我慢しようとしたのに・・・

「なんて顔してんだよ・・・まったく」

直樹が優しく微笑みながら、昔のように頭を撫でるから・・・
そんなこと言うから・・・
もう止めることができなかった。

ポロポロと落ちる涙を見られたくなくて、

「あれ？、、なんだろ。なんだか疲れて、、変な時に涙が、、」
全然言い訳にならない言葉を言いながら、慌てて涙を拭こうとした。

「こんなまゆを見たく無かったから、行かせたくなかったんだ」

フワツ・・・と軽く抱き寄せ直樹のシャツに涙が染み込んでいった。
久しぶりに直樹の香りが体全体を包んでいた。そして、その温かさに最近の凍りついていた気持ちが一気に溶けていった。

「マツが来たら、、もう帰ろう？」

一瞬だけ・・・直樹の言葉に頷きそうになった。

もう、、カオルを見ていることが辛い。誰かを好きでいるカオルが目の前に
いることが辛くて逃げ出したくなった。

「そんなに頑張らなくていいよ。まゆは十分頑張ったよ。HP見た
よく一人で頑張ったね。俺でもあんなに出来るかどうかってくらい
だ」

優しい言葉に涙だけじゃなく、小さく声が漏れるほど泣き出した。

ずっと独りぼっちだったような毎日の中で、直樹の言葉が凄く嬉しくて、、、

何に対してこんなに涙がでるのが自分でも分からなかった。

「会いたかったよ・・・」

直樹の言葉に顔をあげた。

「もう格好つけないことにした。会いたかった。やっぱり行かせなければよかった。」

まゆがいなくて淋しいよ」

「えっ・・・」

「一緒にいて欲しい」

今、、、直樹に戻るのには逃げるってことなのかな。

カオルがダメだったから、、、だから直樹と一緒にいようと思ったのかな。

一瞬、頭の中でいろんな事を考えた。

けれど、、、この数ヶ月の独りぼっちだった毎日と、誰も自分を必要としてくれて

いないと思ひ込んでいた寂しさが直樹の言葉に負けてしまった。

「直樹い、、、」

子供のように顔をクシャクシャにして泣き出すあたしを見て

「よく頑張った！よしよし」と大きな手で頭を撫でた。

結局あたしは弱いんだ。

直樹の言葉に簡単に転んでしまう。

でも、自分を必要としてくれる人がいることに、なんだか心が温かくなった。

久しぶりの直樹の香りに包まれながら、いままで我慢していた涙がどんと零れていった。

「これでもう彼のこと忘れられる?」

直樹の言葉に頷こうとしたけれど、まだ頭の中に浮かぶカオルの顔がハッキリしすぎて一瞬、体が止まった。

「バカ正直だな。相変わらず」

返事をしないあたしに直樹は笑いながらポンポンと頭を軽く叩いた。

「いいよ。それだけ好きだったってことだもんな。時間が経てば自然と消える。」

俺は我慢強い大人の男だから、全然悔しく無いよ」

そう言っただけ思い切りあたしの髪をさつきよりグシャグシャにして笑った。

「言ってることと・・・やってること全然違う・・・」

乱れた髪を撫でつけながら直樹を見ると、サラッと前髪を上げ額に軽くキスをした。

「本当は無理にでも連れて帰りたいけれど、それじゃきつとまゆがスツキリしない。」

俺の気持ちは言ったよね?後はまゆの気持ち次第だよ」

複雑な顔をしたまま直樹を見つめた。

「怒らないの？」

「なにが？」

きつと直樹は私が今もカオルのことを好きなのを分かっている。それを知った上で、こんな優しいことを言ってくれる。

もう・・・疲れた・・・

「あたし、、また嫌なことから逃げちゃうのかな
また目からポロツ・・・と涙が落ちた。

自分が情けない。

全然あたしは進歩していない。

「俺は今も昔も逃げの道具に使われたなんて思わないよ。どうしようって

迷う時点でまだ俺に気持ちがあるって思ってる」

あたしは・・・直樹のことが好きだから一緒にいようと思っているのかな？

逃げたくてそう思いたいと自分に言い聞かせているのかな？

「今、何考えてる？」

直樹の言葉に上手く伝えることができなかった。

「じゃあ待ってあげる代わりに一つだけお願い聞いてくれる？」
「お願い？」

「最近さ、ずっと眠れないんだ。今日だけ一緒にいてくれるかな」
「眠れないって、、どうしたの？」

「疲れすぎなのかな。けどまゆが隣にいてくれたら違つかもってさ」

（それって・・・マズい展開にならないかな）

ジツ・・・と見る視線を察知したのか直樹はニヤツと笑い、

「大丈夫！疲れてそんな気無いから」先にあたしの頭の中の疑問を解決した。

ベットに横になりフワリと抱き寄せる暖かさに気持ちが安心した。

（嫌いなら、、きつとこんな気持ちにはならないな・・・）

直樹に包まれながら、さっきの話をボンヤリと考えていた。

ふと、気がつくとき持ち良さそうな寝息が聞こえ静かに直樹の顔を見るとき

安心したような顔をして、もう眠っていた。

（あたしが側にいたら、、少しでも安心して眠れるのかな）

こうしているだけで、、この人の為になれるのかな)

今の気持ち genuinely 愛情なのか、そうじゃないのかは分からなかったけれど、

直樹の側にいてもいいかな・・・って素直に思えた。

翌日の朝。

目を覚ますと隣で直樹はまだグツスリと眠っていた。

部屋のテーブルにメモを残して起こさないように部屋を抜け出した。

<着替えがあるので先に行きます。昨日は少しでもユックリ眠れたなら良かったです。

また連絡します。まゆ>

家に戻り着替えをして、いつもと変わらない時間に会社に出社した。目の前のカオルは昨日のことには何も触れず、いつものように仕事を進めていた。

きつとこれが答えだ。

今は新しい彼女がカオルの隣にいる。あたしの隣には・・・

直樹のことは逃げるとか、辛いとか、、そんな気持ちが消えてからキチンと答えよう。

もっと強くなろう。

お昼を過ぎた頃、携帯に直樹から連絡が入った。

「まゆ？起こしてくれたらよかったのに」

「ううん・・・」

気持ちを切り替えると決めたくせに、直樹の電話を目の前のカオルに聞かれるかもという複雑な気持ちで会話が簡単な返事だけになっていた。

コッソリとデスクを離れ、事務所の外に出て会話を続けた。

「俺、来週もこっちに出張だから連絡する」

「うん・・・」

「その時はちゃんと着替え持っておいで。その分、ゆっくり眠れるでしょ」

「あ・・・。うん、、あの、健吾って、、側にいるの？」

「マツ？ああ。わかる？」

「ううん！いいの！別に用事無いし！」

「そっか。じゃあ、、また連絡する。あんまり無理するなよ。じゃ」

側にいる健吾は今の会話をどう思ったのだろうか。

また「バーカ」とか言われるんだろうなあ・・・

そのまま携帯を閉じ事務所に戻ろうとした時、また携帯が鳴り出した。

恐る恐る画面を見ると・・・

問題の健吾からの着信だった。

(うわぁ・・・。出たくない)

ちよつと間を空けてからボタンを押した。

「もし、、、もし」

「おい、、、、お前今日何時に終わる?」

「えっ?どうして、、、、だって今日帰るんでしょ」

「それは部長だけ。俺は明後日までこつち。で、、、何時」

「あ、、、、えーと、、、、」

「何時!!!」

「ろっ、、6時っ!」

「分かった。その時間にお前の会社行くから。逃げんなよ!」

ブチッ!と音がしそうなくらい突然電話を切られ画面を見ながら無言になった。

「ですよねえ」

一人でそう呟き事務所に戻った。

事務所に戻ると、カオルと目が合い少し気まずくて軽く目を逸らし自分のデスクに着いた。

(あゝあ。もう、、、、何もかも嫌になってきた・・・)

ガツクリとうな垂れながら仕事にかかり、

時間が6時に近づく度に胃が痛くなってきた。
そして、健吾に会って何て言おう。
そればかりが頭の中に浮かんでいた。

そして時間は6時になろうとした頃、勢い良く会社のドアが開き健吾が現れた。

「あら。松永君。どうしたの？」

祐子さんの陽気な声に健吾はニコニコと挨拶をしていた。

「ども。こっちに出張だったんで、ちょっと顔出してみました。

もうすぐお世話になるしお土産なんか持ってきたりして」

「あら。ありがとう」

楽しそうな雰囲気になっただけホッ．．．として「お疲れ様」と健吾に声をかけたが、こっちを見た瞬間、斬られてしまっくらい鋭い目つきに笑顔が真顔に変わった。

「おい．．．。話あつから」

「はい．．．。」

カオルがそんな二人を不思議そうな顔をして見ていた。

酔った時の本音

「じゃ。ちょっとこのバカ借りまゝす」

ニコヤカに祐子さんと望月さんに挨拶をして健吾が事務所のドアを閉めた。

こつちを見た瞬間、さっきの怖い顔でグイッ・・・と顔を近づけてきた。

「お前。今日あの電話、、、なんなんだよ」

「あ、、、いや、、、その。え？？なんのことお？」

「ふざけんなよ！てゆうか、なんで昨日部長と一緒にいるんだよ！」
「あ、、、それは、、、その。直樹が出張だから会わないかって言うから」

「それは良いとして。どうして「今度は着替えを持ってこい」って話になるんだ？」

「ーことは、、、お前もしかして昨日泊まったのか？」

「あ、、、いや、、、それは。だからー！健吾が想像しているようなこととは無いってば！」

「はあああああ？そんな子供でも分かるような嘘ついて俺が信じると思うかあ？」

「嘘じゃないってば！本当に何も無いんだから！」

「お前はバカの上に尻まで軽いのかよ！」

「なにそれ！言い過ぎじゃないの！何もしてないっいたらしてないの

「！」

お互い睨み合いながらエレベーターの前でもめていた。

「あのお……。どうしたの？お前等」

声に振り返るとカオルが二人を見て不思議そうな顔をしていた。

「カオルも帰るのか？」

「うん。今日はもう何も無いし」

「そうか。じゃあ、飯でもいく？」

（えっ！じゃあ……。あたし開放？）

健吾の視線がカオルに行っているのを確認し、ソロソとその場を離れようとしたが

ガシツと襟首を捕まれそのままエレベーターに乗せられた。

「健吾とまゆつて……。飼い主とペットみたいだな」

二人の動きを笑うカオルに健吾は「こんなバカペットいらねーよ」と文句を言っていた。

三人で近くの居酒屋に入り、健吾は普通にカオルと話しをしていた。またあたしの分からない話を笑いながらする二人を見てみると、なんだか昔のような気がして、居心地が悪いはずなのに懐かしかった。

しばらく時間が経ち、目の前のカオルの飲むペースがいつもよりも遅いことに気がつき、ジヨッキを見ていた。

「カオル、、、今日は飲まないね？」

あたしの言葉に健吾がニヤツと笑いながらカオルを見ていた。

「こいつ昨日、飲みすぎてゲロゲロだったから。今日はセーブしてんだよな？」

「そんなことねーよ。ただ、ちょっと体調が悪かったから」

「ふ〜ん。そうなんだあ〜」

健吾のニヤニヤした顔を見て、カオルは急にピッチをあげて飲みだし、止める健吾の言葉を無視しておかわりを注文していた。

「本当にお前等・・・バカだよな」

「お前等ってなんだよ！」

「お前等ってなによ！」

お互い声がかぶり目を合わせて違う方を見た。

しばらくしてカオルが席を立った時、健吾が呆れた顔をしながら昨日ことを蒸し返した。

「お前よお。まだ部長のこと好きな訳？」

「そつ、、、それは、、、」

それは・・・

自分でも良く分からない。でも、直樹はまだあたしのことを必要としてくれている。

昨日、あんな風に弱い直樹を見たのは初めてだったし、淋しかったあたしを受け入れてくれた。

「流されんなよ・・・バーカ」

「健吾は、、分らないんだよ！」

「はあ？何を」

「何って、、その、、。直樹だつて大変なんだよ。みんなの前で弱音なんか言えないし、統括なんだもん！それに、、健吾には冷たいかもしれないけど、、優しいとこイツパイあるんだよ・・・あれでも」

「俺が言ってるのはそんなことじゃねーよ」

「じゃあ何よ・・・」

「お前が部長のことを好きなら俺は何も言わない。けど、もう終わったことだと分かっているのに、同情とか寂しいからとか、そんな理由でまたくつつくな。それだけ言いたかったんだ」

結局、、何も言い返せなかった。

昨日直樹と一緒にいたのは、、愛情では無かったのかもしれない。必要としてくれたことに嬉しくなった。淋しいと気がついてくれたことにも嬉しかった。

カオルを見ていると辛くて、苦しくて、そんな気持ちに気がついてくれた。

結局あっちにいる時だつて、直樹はあたしにいつも優しくしてくれた。

仕事の時は、、多少、、放っておかれたけど。いや、、多少じゃないけど。

でも、一番あたしを理解してくれているのは直樹じゃないんだ
ろうかと
昨日改めて思った。辛い気持ちも淋しい気持ちも直樹なら分かって
くれる。

「お前さ。カオルのこと好きなんだろ？」

「そんなこと無いもん。もう終わったことだし！なんでそんなこと
言うの！」

「何年一緒にいると思ってんだよ。見てたら分かるよ。んなもん・
」

健吾の顔が少しだけ心配そうな顔をしていた。
いまさら心配されても、どうにもならないけど。

「すげえトイレ混んでんの。誰か吐いたのかな」

カオルが（やれやれ・・・）という顔をして席につき、二人の会話が
止まってしまった。

「昨日の誰かさんみたいにヤケ酒飲んだ奴いるんじゃないの？」

「誰がヤケ酒なんだよ。昨日は寝不足で体調が悪かったんだよ！」

「はいはい。そうですね」

健吾の言葉にカオルがまたムキになってジョッキを空けていた。
カオルを見る健吾の目が馬鹿にした顔をしていた。

「じゃ。後はまゆ頼むな」

「ちょ！無理だよ！こんなになってるのにー」

あのままカオルは馬鹿みたいに飲み続け、半分意識が無い状態になるほどベロベロに酔い、吐きまではしないが足がヨロヨロになるほどに酔っ払っていた。

「だって俺、明日早いんだもん。家も近いんだろ？じゃーな」

健吾は軽快な足取りで先にタクシーに乗り込み、あたしは近くのゴミ箱にやっと座っていられるような状態のカオルと二人取り残されてしまった。

「カオル・・・大丈夫？」

「・・・ウイ、、、」

「、、、な訳・・・無いね」

（どうしよう・・・。担ぐっていつても、、、無理だし。酔いが覚めるまで、

ここに座っていたほうがいいかなあ〜）

横目でカオルを見ていたが、突然フラフラと立ち上がり側にあった壁や看板にぶつかりながら歩き出した。

「ちょ、、、大丈夫？」

「う、、、ん、、、」

急いでタクシーを止めカオルの家まで向かい、なんとか部屋の前まで肩を貸してたどり着いた。

「カオル鍵ある？」

「ポ、、、ケツト、、、」

カオルの上着のポケットから鍵を取り出し、ドアを開け中に入ろうとした時。

突然、手でドアをバンツ！と閉められた。

「ちよつ！何するのよ」

「ごめん、、、部屋、、、入らない、、、で」

「ええ？」

「彼氏がいるのにノコノコ男の部屋になんか入るなよ……」

その言葉はシヨックだった……

あたしはそのまま、その場から動けずドアを背にしているカオルを黙って見ていることしかできなかった。

「分かった、、、じゃあ、、、あたし帰るね」

「俺と、、、したかった？」

「えっ？」

急にグツと腕を捕まれ、ドアに体を強く叩きつけられた。

「痛っ、、、」

「したかったから、、、俺の家まで着いてきたんだろ？」

「アンタねえー！」

顔を近づけてくるカオルを押しつけようとしたけれど、腕を捕まわれないで動けなかった。

首筋にカオルの唇が軽く触れ、

「じゃあ外で、、、する？」と小さく囁かれた。

「何言ってるのよ！離しなさいよ！」

グツと力を入れ、少しだけ死角になっている非常階段の所に引っ張られた。

「やだバカ！離してよ！ちょっとカオル！」

目を半分閉じているような顔でジツ・・・と人の顔を見た後にポツリと呟いた。

「どつちがいいか比べてみたらいいじゃん」

「はああ？」

グツ・・・と体を抱き寄せたカオルにやっと自由になつた右手が思い切り吹っ飛んでいった。

バツチーン！！

体をねじるほど力を入れ思い切り顔を叩き、カオルを突き飛ばしてその場から逃げた。

後ろの方から凄い音が聞こえていたが、あまりに腹が立ちすぎてそのまま振り返りもしないでカオルのアパートを飛び出した。

その日。家に帰ってもムカムカしすぎて、眠ることができなかったけど、やっぱりカオルの言葉がいつまでも頭に残った。

翌日、会社に出社するとカオルの目の上と口の横に格好悪いくらい大きな絆創膏が張り付いていた。

「あ。おはよ」

カオルの言葉を見無視して、自分のデスクに座り仕事を始めた。無視をしたことにカオルは（アレ？）というような顔をしていたが、こっちは昨日のカオルのしたことに、たった一日でニコニコできるほどできた人間じゃない。むしろ・・・今日、顔を見たらまたムカついた。

目の前のデスクで普通の顔をして仕事をするカオルが視界に入る度に、胃がムカムカしていたが、なんとか顔に出さないように午前中の仕事が終わった。昼休みになり、思い切りカオルに背を向けて食事していると、カオルの携帯が鳴っていた。

「おう。健吾！」

電話の相手は健吾なんだ・・・あんなことを言われたのに、それでもまだカオルのことが気になる自分が

本当に馬鹿らしかった。

「えっ！いや、俺、自分で帰ったんだと思ってた。いつも、知らないうちに家で寝てるし……。てゆうかさ、俺、昨日飲んでる時、怪我したかな？」

自分の顔の傷を触りながら、何かを思い出そうとしているような顔をした。

「うん……。分かった。じゃ、」

電話を切ってから、こっちをチラッと見て話しかけようか、どうしようか困っている顔をしているのが分かったけれど、思い切り無視した。

近くの席の祐子さんや望月さんに聞こえないように、カオルは椅子をコロコロと転がし、あたしの側に来て小さい声で話しかけてきた。

「あのさ……。もしかして、昨日俺のこと送ってくれた？」
「……………」

「もしかして、朝から無視してるってことは、俺何か怒らせた？」

「……………」

「なあ……。俺、全然覚えてないんだよ」

キツ！とカオルを睨みつけ、事務所の外に引っ張って行った。

ドアを閉め、声が聞こえないか確認した後に目の前でオドオドするカオルに

昨日からのモヤモヤを全部ぶちまけた。

「アンタねえ……。昨日あたしに何言っただか覚えてないの？」

「うん。てゆうか、まゆに送ってもらったことも、覚えてない」

少し複雑だった。いや、かなり……

「家までノコノコ着いてきて俺としたかったのかって」

「ええー！」

「家には入れたく無いから外でいいかって」

「えええー！」

「彼氏と比べてみたらいいだろうって」

「うええええー！」

「アンタ、、、最低!!！」

「ごめん、、、全然覚えてなくて。で……外でしたの？」

「するか！バカ！」

「あ、、、。それで、、、この傷」

「そこまでは知らない。ただ思い切り引っ叩いた後に突き飛ばした。凄い音してたけどそのまま帰った。そんだけ。じゃーね」

「まゆ！ごめんて！俺、そんなこと言っただなんて思ってなくて。」

いや、それ以前に
全然覚えてなくて」

慌てて後ろを着いてきたカオルにクルツと振り返って真面目な顔で
言った。

「もうカオルの家にはいかないから安心して。あたし部屋に入る資
格無いから。」

その日から、あたしはカオルの視線を避けた。

まったく口をきかなくなった二人を見て、祐子さんも望月さんも
困った顔をしながら毎日が過ぎていった。

忘れられない

口をきかないまま一週間が過ぎた。

たまにカオルがこっちを見ているのを感じたけれど、わざと視線を合わせずに

仕事を進めた。

ここ最近、祐子さんと望月さんは営業の為に二人で外回りをするところが

多く、こんなタイミングなのにカオルと二人きりという時間が多くなり

シーンとした社内は針のムシロ・・・という言葉がピッタリな感じだった。

シーンとした事務所のドアが突然開き、ビックリして二人で顔をあげると

ニヤツと笑った健吾がそこに立っていた。

「あ・・・出張？」

「おう。明後日帰るけどな」

キョロキョロと事務所の中を見て、祐子さん達の姿が無いことを確認すると

健吾はカオルのデスクに腰掛けて大笑いをしてからかっていた。

「お前やっぱバカだよな〜」

「うるさいな・・・」

「聞いたぞ。まゆ！アノ後、随分と面白い展開になったんだってな？」

「全然面白くないけどね」

「だってよお〜。笑っちゃうよな〜」

「だから、、、それは！酔って覚えてないんだってば！」

健吾の大笑いにカオルが顔を真っ赤にして怒っていた。

散々健吾にバカにされ、定時を過ぎた頃に無理やりカオルとあたしは健吾に居酒屋に連れて行かれた。

「そろそろ許してやれよ。まゆ」

「別に許すも許さないも無いけど。ただ仕事以外で話をするのも無いから

しないだけだもの」

「……………」

無言であたしの顔を見るカオルの顔が少し淋しそうに見える、ちょっとだけ

可哀想に思えた。

「仕方ねーじゃん。お前も悪いんだぞ？」

「あたしがどうして悪いのよ」

「だってよお〜」

「あー！いいんだってば！俺が全部悪いんだって。その、、酔っていたとしても

怒らせるようなこと言ったのは俺なんだし、怒って当然だし！まゆは悪くない！

階段から突き落とされても当然だし！外でしようとするなんて俺、

最低だし！」

突然力オルが焦ったように健吾の言葉を止め必死になっている姿を見て、

思わず健吾と二人で笑ってしまった。

「まあ、、確かに最低だわな。外って……。お前はイロイロ経
験豊富だなあ」

「外なんかねーよ！つーか覚えて無いって言ってるだろ！」

「もういいよ。酔って覚えてないなら仕方無いし。あたしも無視してごめんね。」

お互い仕事に支障があるから、、もう無視しないで許してあげる」

「マジで！」

「うん。でも……。これからあたしがいる席では飲みすぎないって約束してくれたらね」

「する。分かった！」

二人で笑う顔を見て健吾が「バカのダブルは疲れるな」とニヤニヤしていた。

RRRRRR.....

バックの中の携帯が鳴り出し、手に取ると直樹からだった。

「もしもし」

「あ。まゆ？連絡遅くなってごめん。今日、こっちに来たんだ。今日は出られないよな」

「あ、、、うん。今、健吾といるの」
「そうなんだ？じゃあ俺もそこ行くよ」

電話の感じに健吾もカオルも相手が直樹だと感じたようだった。でも、この場に直樹が来るのは、、、ちよっと、、、マズいような。

「あ、、、うん。今日はいいよ」

「行っちゃダメ？」

「いや、、、そうじゃなくて。その、、、」

「じゃあ、後からまゆの家に行ってもいいかな」

(うちですか！)

「えーと、、、いや。なら、、、あたしが行く。話もあるから」

「じゃ、後からね」

電話を切り、小さくため息が漏れた。

この前のカオルの言葉に、もうカオルのことは諦めようと自分に何度も言い聞かせた。

そして健吾の言葉に少しだけ冷静になれた自分もいた。

カオルがダメだから直樹に逃げるという選択はやはり間違っている。だからこそ、キチンと直樹に自分の想いを伝えようと思っていた。

(やっぱり戻れない)

自分を必要としてくれる直樹に対して嬉しい気持ちは確かにあるけれど、

でも、きっと今のままならあたしは前と何も変わらない。

また流されてばかりの自分を変えるキツカケは今しか無いように思えた。

携帯をしまい前を向くと二人がこっちを黙ってみている。

「え？どうしたの」

「いや、、、部長に、、、会ったの？」

「うん。ちよつと話もあるからね。もうちよつとしたら行くね」

「そっか。分かった」

しばらく二人はまた訳の分からない話をしていたが、

「俺達、ちよつと煙草買ってくるわ」と健吾がカオルを立たせた。

「え？俺、煙草あるけど」

「じゃあお手繋いで一緒に付き合っつてカオルちゃん」

「お前何言っつてんだよ。一人で行ってこいよ」

「いいから！ほらほら！」

カオルを無理に外に連れて行く健吾に声をかけた。

「あ、、、じゃあ、、、あたしもう行く。あまり遅くなるのも困るし」

「まゆはもうちよつと待ってな。俺が戻るまで待て！」

人を犬のように「待て」の仕草をして止め、健吾がカオルを外に引っ張っていった。

5分ほどして戻ってきたのはカオルだけだった。

「あれ？健吾は」

「急用ができたって・・・」

「えー！なにそれ」

「分からないけど、、いきなり帰った」

「もう・・・。なんだよお」

ブツブツ言いながら座っていたが、時計を見るともう9時になるうとしていた。

「じゃ、、あたし達も出ようか？」

「えっ、、もう？」

「もう、、って。あたし、、これからちょっと行く所あるし」

「あ、、そうだよな。うん、、」

店の外に出て、カオルに「じゃ、明日ね」と笑顔で手を振った。

カオルは複雑な顔をしたまま黙って何も言わずにこっちを見ていた。

「どうしたの？」

「いや、、その。あっ！会社！」

「会社？」

「俺、忘れ物しちゃった」

「そう。じゃ、あたしはここで・・・」

カオルに背を向け歩き出そうとした時、突然手を捕まれカオルはどんどんと

歩き出していった。

「えっ！ちよつと、、、なに？え？」

「一緒に来て」

「どうしてー」

「いいから！」

あまりに早足で追いつくのが精一杯な状態に声もかけられず、カオルの背中を見ながら会社の前に着いた。

「ちよつと！どうしたの？」

「えーと、、、一緒に探してくんない？」

「なにを？」

「あ、、、鍵！そう！俺、鍵失くしちゃったみたいで」

「鍵い？」

ハアハア・・・と息を荒くして言うカオルに仕方なく、もう一度会社に戻り中に入った。

もう祐子さんも望月さんも帰ってシーンとした会社の電気を点けカオルのデスクの下や給湯室を探して回った。

振り返るとカオルは自分のデスクの前でただ立っただけの姿が見えた。

「あつたの？」

「いや、、、」

「もう・・・どこに置いたとか覚えてないのお？スペアキーとかは？」

「うん、、、」

「「いや」とか「うん」とかじゃなくてー！もつと真剣に探しなさいよ！」

付き合ってるんだから」

「まゆ、、、これから彼氏に会うの？」

「えっ、、、あ、、、うん。ちょっと話もあるから」

「なんの話？」

「それは、、、カオルには、、、関係無いじゃない」

自分のデスクの下を見ようと椅子を引いて覗き込んでみると、後ろからカオルが抱きついてきた。

「ちよつと、、、また酔ってるの！」

「酔ってない……」

「じゃあ何！」

「行くのやめない？」

「は？」

「今日は、、、彼氏に会うの止めない？」

「何言ってるの？」

振り返ろうとすると、グツと力を入れられ動くことができなかった。

「顔、、、見ないで」

「えっ？」

「俺、、、真っ赤だから」

「もう……何言つてのかわかんない」

呆れた顔をして前を見たままため息をついた。

でも、久しぶりのカオルの温かさに心臓はドキドキしていた。

「やっぱり、見なきゃ良かった。まゆの彼氏なんか・・・」

俺より10歳も上だって聞いて、どーせオッサンが来るんだと思ってたのに、

アレ反則だよ・・・」

（そりゃ、、、そうだけど・・・）

「けど、、、お似合いだったな・・・」

胸が痛かった。

何も言えずに背中にカオルの体温を感じたままその場に立ち尽くすことしかできなかった。

背中にソツとカオルの頭が当たるのを感じた。

この人は他に好きな人がいるのに・・・

それなのに・・・

こうして抱きしめられていることが嬉しいと感じてしまう自分はバカだ。

「まゆ、、、行くなよ、、、」

カオルの言葉に泣きそうになる。

今にも振り返って抱きついてしまいそうになる。

「いかなければ、側にいさせてくれるの?」と聞いてしまいそうになる。

「なんで、、、そんなこと言うのよ・・・」

泣かないように頑張って声を振り絞ったのにカオルは何も答えなかった。

「もう、、、行くから離して」

「行くなら離さない。ここで離したら、、、」

「いいから離してよ！もうこんなの止めてよ！終わったことなのに！」

カオルの力がフツと弱まり、回していた腕が外れた。

外して欲しくなくせに、、、それでも強く抱きしめて欲しかったのに、

強がった言葉を聞いて外れてしまった腕に後悔していた。

カオルの腕から飛び出し、階段を駆け下りて外に出た。

やっぱり、、、カオルが忘れられない。

「行くな」と言われた言葉が嬉しいのに、強がって終わったことなんて

言ってしまった自分の言葉に後悔していた。

家に着き、放心状態のままソファーに座っていると直樹から電話がきた。

その瞬間まで直樹のことをすっかり忘れていた。

「まゆ、まだ遅くなりそう?」

「直樹、、、ごめん。やっぱり会えない」

「そう。じゃあ、明日のほうがいいね。今日は突然だったし」
「そうじゃないの。あたし、、、やっぱり直樹に戻れない。だからもう会えない」

電話の向こうの直樹の表情が読めないけれど、しばらく沈黙の後
「どうしてそう思ったの？」
と言う優しい口調にまたグツ・・と涙が溢れた。

「だって、、、辛いから直樹に逃げるみたいじゃない、、、」
「本当にそれだけ？」

本当はそれだけじゃない。
カオルが好きだから・・・
さっきの言葉が嬉しかったから。だから、直樹に会うなというカオルの言葉に見えていなくても従ってしまう。

「それだけ、だよ」
「まゆ・・・。俺に気を使わないで正直に思ったこと言ってみな。そうじゃないと、

俺もスッキリしないし、まゆもスッキリしないよ」
隠そうとしていた気持ちを当てられたような気がした。
きつと・・・直樹は気づいている。

「あたし、、、」
言葉が詰まる。

直樹に悪いというよりも、自分を嫌なヤツだと思われたく無いから
言えないの
かもしれない。

「言って・・・」

誰にも嫌われないようにしようなんて、、あたしって最悪だ。そんな奴、、この人に想ってもらえる資格なんか無い。

「あたし、、」

また直樹は眠れない日が続くのかな。

あたしがカオルのこと好きだって言ったら、、悲しい顔するのかな。

「じゅめ、、ん、、なぞい」

涙声なあたしの言葉を聞いて直樹はしばらく黙っていた。

「まゆ。俺のこと心配してくれてるの？」

直樹の優しい口調にどうしてもカオルのことを言えない。言つと、、傷つけてしまいそうで言葉にできない。

「心配してくれるのは嬉しい。けど、嘘をつかれるのはもっと辛いんだ。」

本当はどうしてなのか理由があるんだろ」

あたしは知らないうちに直樹をもっと傷つけていた。言わないと、もっと傷つけてしまうんだ。

「カオルが、、忘れられないの・・・」

「やっと素直に認めたね」

「バカだって分かっているの。もう、、遅いって分かっている。直樹を選ばない自分は本当にどうしようも無いバカだって思っている。」

けど、、あたし今、直樹に戻ったら、、また昔と同じ顔して直樹を悲しませる。

それに、、」

少しだけ電話の向こうからクスツ・・と笑う声が聞こえた。

「もういいよ。ありがとう」

「え、、、、」

「この前みたいに弱い俺を見せたら、まゆはきっともう一度考えられるだろうって

分かっていたんだ。伊達に2年も一緒にいた訳じゃないからね」

「あ・・・・・うん」

「まゆの悪い所は素直じゃない所だよ？後、押しに弱い所。まあ・・それが分かっているから俺も押しただけだよ」

直樹が電話の向こうで少しだけ笑っていた。

「自分でそう思うなら、頑張りな。もう誰に押されても簡単に転んじゃダメだよ。」

もう俺は助けてあげないよ」

「う、ん、グスツ、分かった、」
「あゝ。もうちょっとだったのにな。80%こっちに傾いてたのに」

なんとなく、直樹はこんなことを言うのを分かっていたような雰囲気だった。

「直樹、」
「ん？」

「ありがとう」
「お礼を言われるのはちょっと複雑かなあ。まゆが彼のこと忘れられないの

ずっと分かってたからね。本当は会わせたくなかったんだけど、仕方無いね。

まゆ・・・素直になるんだよ。じゃ、」

切れた電話を耳に当てたまま、一人で声を出して大泣きをした。

カオルが「行かないで」と言ってくれたこと。

素直にその言葉を受け入れずに飛び出してしまったこと。

「もう終わったこと」なんて言ってしまったこと。

そして、直樹がもう助けてくれることは無いこと。

どれに対してか分からないけれど、

子供のように声を出していつまでも泣いていた。

押し込めた気持ち

翌日。カオルと顔を合わせるのが気まづかったけれど、自分から「おはよう！」と声をかけた。

ちょっと驚いた顔をしながらカオルがこっちを見ていた。

「あ、うん。おはよう、、、。って、、、まゆ、、、凄い顔してるけど」

「え？」

「目、、、開いてるの？それ」

「開いてるわよ！失礼な」

散々泣きはらした結果、、、二重が消えてしまっくらい人相の悪い顔になっていた。

カオルの視線を感じながら、黙々と仕事を始めたけれどやっぱり視界に何度も顔をあげるカオルが見えた。

「じゃ、後よろしくね。ちょっと出てくるから」

祐子さん達が事務所を出た瞬間、カオルが席を立ち隣に歩いてきた。

「な、、、なに？」

顔を覗き込まれ、慌てて下を向いた。

突然両手で顔を挟み、グツと上を向けられカオルと視線が合った。

「泣いたの？」

「ちがう、、泣いてなんか無いもん！」

「向田さんに泣かされたの？」

「そうじゃないよ。なんでも無いから。すぐ戻るってば」

カオルの手を離そうと手を上に重ね退けようとした。

昔も、、こうして、、ふざけたことがあった・・・

「変な顔〜」って笑っていたのに、、

急に涙がこみ上げ、また目が真っ赤になっていた。

「ごめん、、痛かった？」

慌てて手を外すカオルに首を振りながら下を向いた。

「昨日は、、ごめんな。変なことと言って。俺、、やっぱりちょっと酔ってたのかも。」

彼氏に会うの意地悪して悪かった」

「うっん・・・」

(変なことなんかじゃないのに・・・嬉しかったのに)

ダメでもいいから、、好きになっってくれなくてもいいから。

自分の気持ちを言うなら、早いほうがいい。

「あの、、カオル、、」

「俺さ、、ちょっと彼女と喧嘩しちゃってさ。それで、、彼氏に会うの嬉しそうに

してるまゆを見たら、ちょっと意地悪したくなってさ」

ズキンツ・・・

「そ、そうなんだ。大丈夫、、。全然問題無かったから！」

慌ててカオルを見ながら微笑んだ。

笑いでもしないと、、やってらんない。

「そっか・・・。なら安心した」

「彼女とは、仲直りできたの？」

「うん！大丈夫だった。今度の休み、デイズニerlandに連れて行くって約束させられちゃったけどな。まあ、、それくらい仕方ねーよな」

「うん。そうだね」

笑顔のカオルを見て、どうすることもできなかった。

今にも泣きそうだったけれど・・・

心臓が飛び出しそうだったけれど・・・

それでも必死に我慢して書類にペンを走らせた。字が、、小さく震えていた。

その話を聞いてから、あたしは自分の気持ちをまた押し込めてしまった。

直樹の言葉に少しだけ出た勇氣は、スツカリと影を潜め無心で仕事のことだけを考えてた。

今の自分の逃げ場はそれしか無かったから・・・

バカにみたいに毎日、毎日仕事ばかりをしていたけれど、

その甲斐もあり、頑張りとは例して仕事は順調だった。

少しでもカオルのことを考えると、また弱くなってしまいそうで、毎日残業をし、家に帰ると倒れるように眠った。

休日も、一人でボンヤリする時間を無くすように出勤をして頑張った。

今となつては直樹の仕事病に文句を言えないくらい、あたしも立派な仕事中毒になつていた。

祐子さんは少し心配をしていたけれど、波に乗れそうな会社のことを思うと、

「いつもごめんね……。この借りは絶対返すからね」と申し訳無さそうな顔で

あたしの仕事ぶりを喜んでくれていた。

でも……。月曜日の朝は大嫌いだった。

仕事が始まるからとかじゃなく、、カオルがきつと彼女と過ごした翌日だから。

眠そうな顔を見れば（昨日、、彼女と遅かったのかな）と考え、元気な顔を見れば（彼女と上手くいつてるのかな）と考えた。

もう……。どうすることもできなかった。

相変わらず、裕子さんと望月さんの外出が続いていたある日。視線を感じて前を向くとカオルが黙って見ていた。

「どうしたの？」

「いや……。顔色悪いなって。白いつていうより青白いぞ？」

「雪国の人だから抜けるような白なの」

そう言っつてそのまま書類に目を戻した。
目の前で小さく（アホか・・・）と呟くカオルに少しだけ笑いかけた。

「なあ・・・彼氏来てないの？」

「来てないよー」（知らないけど）

「そっか。今度の日曜って暇？」

その言葉に驚いて顔をあげた。

「なんで？」

「いや、ちよつとな」

ここで「うん」と言えば、カオルが彼女に会うことを阻止できる・・・

そんな意地悪なことを考えた。

けれど、そんなことはしちやいけないんだろうな・・・
何も言わずに黙って仕事を続けていた。

「彼氏怒るかな・・・」

（どうしよう・・・どうしよう・・・）

「彼女怒るんじゃない？」

「ん？・・・大丈夫だよ」

「直樹が来てないから一人で可哀想とか思ったの？」

別にいいよ。同情されるの嫌だから気を使ってくれなくていいよ」

本当に素直じゃないよな・・・

自分の言葉が嫌になった。それでもシツカリと自分の首にはあのチヨーカーを

毎日大事につけているのに、馬鹿も良いところだと感じた。

「別に、気なんか使ってないよ。買い物あるんだ。で、付き合ってくれないかなって」

「なに買うの？」

「いろいろ・・・」

「彼女へのプレゼントなら自分で選べば？」

「んなもん、お前に頼むかよ。じゃ、日曜な」

勝手にそう決めて話が終わった。

けれど、その日家に帰ってから少し笑顔で洋服を選んでいる自分が能天気だよな・・・と感じた。

約束の日曜。

時間通りにカオルが家に迎えに来た。

車に乗りデパートや雑貨屋、どこことなくだが昔二人で行ったことがあるような店などを見て回った。

けれどカオルは何かを買う訳では無く、普通な顔で

「これ可愛いな」などと気軽にウィンドウショッピングをしていた。

「ねえ。何買う予定だったの？」

「ん？なんか・・・」

「なんかってなに？」

「それを見に来たの。なんか欲しいな」って

曖昧な返事をするカオルにきつと買い物なんか無かったのだからと
感じた。

きつと毎週休まないで仕事をしているあたしの息抜きの為にこうして
街に連れ出してくれたんだらうな。

この人はそんな所があるもんな……

これで直樹のことを言えば、きつともつと心配をするのだと思った。

「お前一人で大丈夫なのか？なにか心配なこと無いか？」
そんな慌てた顔をするカオルが目に見えかんだ。

(やっぱり言えないよなあ……)

もしそれで優しくされてしまえば、きつと甘えてしまっただろう……
アレコレと理由をつけてカオルの時間を独り占めしたくなる。

その日、なんてこと無い買い物をして昔行った海にカオルは車を走
らせた。

人で賑わう海水浴場を車の中から見ながらジュースを飲んでいた。

「まゆ、去年とか海行った？」

「うん。あたし日焼けすると真っ赤になるし……」

「そうだったな。じゃあ去年はなにしてたの？」

そう言われて去年のことを考えていた。

せいぜい直樹と、買い物くらいかもしれない。

それも商品の下見をかねて街をうろついたくらい・

「別にどこって無いかな。仕事してたー」

「彼氏とどこも行かなかったの？」

「うん。もつどこか行って喜ぶ歳じゃないしねえ・・・あの人」

確かにそうだった。相変わらず笑顔ではいるが、

何かを見て大騒ぎをする人でもないし、

(ふくん・・・)といった顔をする程度だったので、何処に行っても大喜びをする

直樹を見たことは無かった。

それに、毎日残業続きだとやはり気を使ってしまい、

日曜はできるだけ、ゆっくり寝かせてあげようと「どこに行きたい！」と言っことを

だんだん言わなくなっていた時期でもあった。

「大人だもんな。そんなもんなんだ」

「あたし引き籠もりとばかり縁があるみたいだね」
そう言っ二人で笑っていた。

「今年は彼女を海に連れてきたりしてないの？」

「ん？しないねえ」

「どうして？」

「休みは寝てたいもの。俺いつも日曜は起きたら夕方近いからなあ・・・」

(彼女も一緒に?) そう頭の中で思うだけで、辛くなっていた。
変な想像をしまいそうで、無理にクーラーをあげた。

「少し日曜休めよ。体壊すぞ」
「うん……」

(そんな優しいこと言わないでよ……)

黙って聞いていたカーステレオから、カオルが好きだった歌が流れていた。

昔、全然知らなかったスピッツをカオルと付き合ったきっかけで聞くようになり

いつもカオルに会えない時は聞くようになり、自然と歌を覚えていた。

海にぴったりなその曲を聞きながら、水着姿の人達を見ていた。

その歌に合わせて口ずさむカオルの音程が少しズレているのが可笑しくて、泣きそうな気持ちが少しだけ平常に戻った。

「カオルってさ、音痴だよね……」

「今は腹から出してないだけ。本気になればスピッツのボーカルになれるぞ」

「あつそ…… もう行こう。家に着くまでに暗くなっちゃうよ」

そのまま話を無視して進めると、意地になって歌っていた。

どんだん音程が外れていてわざとじゃないかと思うほどだった。

「もうそこまで音痴だと悪意があるよね」

小さく舌打ちをしながら笑うカオルの横顔を見ながら、今この瞬間がずっと続けばいいと思った。

やっぱり隣で微笑む顔を永遠に見ていたかった。

車を降りる時。

「今日さ、買い物なんか無かったんでしょ？嘘が下手だよね」
「たまにはいいじゃん。なんなら来週もいいぞ」と言う顔に思わず
約束を
してしまいそうだった。

「いいってば！お互い相手が心配するよ。じゃ、また明日ね」

そう言つて手を振りカオルの車を見送つた。

部屋に戻り、なんとも言えない気分になった。

誰かにこの気持ちを伝えたかったが、誰にも言えることじゃなかつた。

カオルの優しさが、もっと辛くなつていった……

8月に入り、暑さが本格的になつてきた。

いままでこんなに暑い所を体験したことが無いのもあり、
なんとなく体調が悪いと感じていた。

けれど、休む訳にはいかない！そんな最後の意地で
みんなには気づかれぬように仕事をした。

北海道の夏はいくら暑いと言つても30 を越える日は
数えるほどしか無く、そんな所に慣れている体は、
このジメジメした湿気の多い、東京の夏には馴染めなかった。

連日の猛暑に食欲も無く、おまけにそれを無視しての
連日の残業。そしてまた考えすぎの不眠。

たとえ東京に長く住んでいる人でも、多少の体調の悪さを
訴えそうな毎日だった。

その日の朝・・・

起きた時に軽い目眩がした。

(夏風邪かなあ・・・) そう思いながらもさほど気にせず出勤をした。

祐子さんと望月さんは、また営業の為に外回りをし、カオルと二人でエアコンが効いた部屋の中で仕事をしていた。快適なはずなのに、どんどん体調は悪化し、座っていることにも辛くなり書類の文字もボヤけて見えた。

「昨日、何時に帰った？」パソコンにむかひながらカオルに聞かれた。

「ん？そんなに遅くないよ」

本当は1時過ぎまでいたのに嘘をついた。

笑顔でそう言ったが、もう自分の言葉すら虚ろな感じだった。

「お盆は休みみたいだから帰るんだろ？」

「ん？わかんない」書類を見ながら曖昧な返事をした。

本当は帰ることは考えていなかった。

別に毎年あつちに居ても実家になんか顔を出さないし、

移動で疲れるくらいなら、お正月にでも帰ればいいや・・・

そのくらいにしか考えていなかった。

「わかんないってこと無いだろ？待ってんだろ、ほら・・・」

(あ・・・直樹のことか・・・)

そんなことを思っていたが、やはり朝からの微熱に頭がボ〜と
していた。体がどんどん重くなり頭をあげていることすらキツイ・
こうして座っているだけなのに体がどんどん痺れるように冷たく
なっていた。

「あの、エアコン切らない？なんだか寒くない」
話しを全然無視してそう言った。

「は？切ったら死ぬぞ？今日何度あると思ってるんだよ。」

35 だぞって・・・設定温度高いからこれでも暑いのに・・・」

(なに言ってるの?)という顔をして言われた。

「あ・・・そうなんだ・・・」

もう体感温度がわからなかった。

風邪薬でも飲めば、なんとかおさまるかと思えば薬を飲もうと立ち上がると
目の前が一瞬、真っ白になりそのまま、またイスに座った。

(アレ・・・?)

体が痺れたような感じになり、そのままデスクにくったりと
突っ伏してしまったようだった。

「ちよ、まゆ！大丈夫かよ！」

慌てて言うカオルの声を

ボヤ〜とした意識の中で聞いたような気がした。

ふわっ・・・と体が浮くような感じがしたが、もうそれがなんなのかわからなかった。

(あゝ・・・こんなことくらいで貧血かぁ・・・歳だなぁ・・・)
そんなことを考えながら、薄い意識の中思っていた。

いつも血圧が低いので、

こんな風に貧血になることはたまにあった。

それが風邪と重なって、ここまで具合が悪くなったんだなぁ・・・

まるで他人事のように頭の中で考えていた。

そのまま意識が無くなっていった・・・

昔のよじに

頭を撫でられる感覚に薄れていた意識が少し戻った。
目を瞑ったままだったが、もうさつきほどは体調も悪く無く
頭に感じる手の動きが気持ち良かった。

(誰だろう・・・)

そう思ったが、まだ少し体が重く
目を明けるほどまではいかなかった。

(あれ？デスクにいたのに。なんだか横になってないか？
どこに寝てるんだろ)

だんだんと意識がハッキリしてきて
目を明けようとした時、その頭を撫でている人の声が聞こえた。

「なんでこんなに無理するんだか・・・毎日、毎日、夜中まで」
カオルの声がした。

(ああ・・・この撫で方はカオルだったんだ・・・)

そう思うと、急にもう少しだけこのままカオルの手の感触を
味わっていたくなった・・・
こんな時じゃないとそんなことも、もう無いだろうしそうしてくれ
たのが嬉しかった。

「こんな時になにもできない彼氏なんか別れたらいいのに・・・
俺じゃなんにもできないじゃん・・・」

盗み聞きをしているような自分が（いいのか？）と思いながらも、
そのカオルの独り言をそのまま寝たフリをして聞いていた。

「こつちまで来たら別れたって期待するだろーが。変な期待させる
くらいなら、目の前に現われるなよなあ。いい加減忘れようっ
て思ったのに」

その言葉を聞いてドキツとした・・・

（まだ・・・好きでいてくれる？）そんなことを考えながら
必死で寝たフリを続けた。

手の動きが止まり、スツと立ちあがったような動きが聞えた。
でもいつ目を明けていいのか、タイミングがわからずただジツとそ
のまま動かずに
目を開けたいのに我慢していた。

（きつと目がピクピクしてるかも・・・）

そう感じながらも必死で、できるだけ自然な寝たふりをしていた。

ギシツ・・・という椅子の音と少しだけ揺れる感触に

（わ！開けなくてよかった・・・まだ近くにいたんだ！）と驚き
ながらも黙っていた。

唇に懐かしい温もりを感じた。

その感触にカオルのキスだとすぐにわかった・・・
ほんの一瞬のことだったのに、ものすごく長い時間に感じて・・・

あまりの驚きに目を開け黙ってカオルの目を見ると
一瞬カオルは驚いて「わっ！」と言ったが、

「あの、ほら、熱、そう！熱どれくらいかな？って・・・
で、その体温計無いから額くつつけようとして。
で、えーと、ごめん。ちょっと、間違っ、て、」

お互い気まずい感じで離れた。

彼女に後ろめたい気持ちになりながらも、さっきの言葉と
今のキスに内心喜んでる自分がいた。

でも、上手くそれをカオルにどう表現していいのかわからずに、

「あ・・・うん。いいの。もう大丈夫。ごめん」
と言い、慌てて二人でデスクに戻った。

まだ唇にはカオルの感触が残っていた。

なにがくごめん、でなにがく間違っ、て、なのか会話が成立していな
かったが、

お互い慌てて、なにも突っ込まずオドオドしていた。

「あの、まゆ、今日もう帰ったら？後から部長にそう伝えておく
し。」

まだ顔色悪いからさ。あ、俺、終わってから家になにか
差し入れするから。それまで寝てな。毎日遅いんだろ？」

「あ・・・うん。そうだね！今日もう急ぎの仕事は無いし。」

そ、そうさせてもらおうかな？祐子さんにそう伝えて」

このまま二人でいることが耐えられなくなり、
それだけ言って事務所のドアを飛び出した。

家に戻り……

（あれは……なんなんだろう……）
痛い頭をさらに酷使して考えた。

体中が汗でベタベタしていたのに気がつき、部屋のエアコンを入れ
そのままシャワーを浴びた。

さっきの貧血のような感覚はもう無かった。

シャワーを出るとヒンヤリとした空気に少し体が楽になった。

そのままベットに入り時計を見るとまだ5時前だった……

（後から来るって言ったけど……きつと来ないな。

あんなに気まずい空気の中、飛び出してきちゃったし……）

そんなことを考えながら目を閉じた。

さっきのことでいつもベットに入ってから悶々と考える

カオルと彼女のこともスツカリ頭から消えていた。

ただ頭の中には

（まだ好きでいてくれるなら……それが本当なら……）

まだ間に合うのかな？直樹と別れたって言えば、……どうにかな
るのかな？）

そればかりが頭の中に何度も浮んだ。

けど、そんなことをいままさら言う勇氣が自分にあるのかと言えばきつと無いと思った。流されやすいくせに、自分ではなにも行動できないことは知っていた。

しばらくして頭がボンヤリしながら眠りに落ちた・・・

部屋が真つ暗で、何時なのか分からなかった。ただ、インターホンの音で目が覚めたような気がして、枕もとのスタンドを点し、携帯を見ると10時を過ぎていた。

ピンポーン・・・

(あ・・・やっぱり鳴ったんだ・・・)

そう思い、受話器をとるとカメラにカオルが写った。

「あ・・・今、終わったの？」

「うん、うん。あの、軽く食べられる物買ってきたんだ。

どづつ？少しは良くなった」

「うん。今、ロック開けるね」

受話器を置き、カオルが部屋に来るまでの間、
少しでもドキドキする気持ちを落ち着けようとした。

(落ち着け・・・落ち着け・・・)

ドアを開けると、目を合わせずに壁のほうを見ながら、
カオルがサツ・・・と袋を目の前に出した。

「あ。これ・・・ サツパリした物にしたから。

夏バテもあるのかなって。あっちより暑いだろ？

じゃ、俺行くわ。明日も具合悪いなら休めよ」

そう言っつてコンビニの袋を手渡し玄関を出ようとした。

「あ！あの、ちょっとあがつていかない？

せっかくだから・・・ あ、もし嫌じゃなかったらだけど・・・

「

咄嗟に帰ろうとするカオルを引き止めた。

そんなことを言ったことに内心ビツクリしながらも、カオルの顔を
黙ってみていた。

「えっ！でも、具合悪いだろ？」

予想していなかったのか、少し戸惑ったようにカオルが答え、
オドオドしていた。

「ううん。少し寝たらもう大丈夫になったし。

あ、でも、、彼女とか来るよね。ごめん。いいの・・・」

(うわぁ・・・どうして嫌味っぽく言ってしまうんだろう・・・)

「いや、じゃ、ちょっとだけ」

そう言っただけでカオルはドアを閉めの中に入った。

自分から「どぞ」と言ったのに、部屋にカオルをあげたことに動揺して

慌ててドアを開けずに後ろのカオルのほうを見ながらリビングに入ろうとして閉まったドアに頭を打った。

「うわぁ！いったぁ〜」

頭を押さえて、あまりの動揺っぷりに自分で恥ずかしくなった。

「お前・・・熱あるんだろ？てゆうか、目見えてる？」

呆れた顔をして言うカオルに「大丈夫！大丈夫！」と言いながら中に入った。

「適当に座って。いまなにか出すから・・・あ、ありがとね」

コンビニの袋を軽く上げお礼を言った。

「おう。コンビニじゃなくてもっと違う物って思ったんだけど、店無くてさ」

「うん。いいの！いいの！どーせ何も食べないで寝よつって思ってたからー」

キッチンに歩きながらカオルに話かけた方がいいが、

咄嗟に昼間のことを思い出し、これからどんな会話をすればいいのか頭がこんがらがっていた。

冷蔵庫から冷たいお茶を出してカオルの目の前に差し出した。

「あ……ごめん。ビールのほうがよかったでしょ？」

でも、あたし飲まないから……買ってこようか？」

「いや、いいよ。これで！」

一気にお茶を飲んだカオルが

「彼氏って酒飲まないの？こつち来てから一回も部屋に

来てないとか？まゆの部屋だって男の匂い感じないな」

そう言つて黙つて部屋を見渡した。

(ヤバイ……)

そう思ったが、「そ、そうかな？」と変にへらへらと笑つた。

「いやあ……会社出たらやっぱり暑いな。俺、デブかよつて

くらい汗だらけ……」そう言つてシャツを引つ張り笑つた。

「あ……シャワー入る？」

「えっ……」

(シマッター！いくらなんでも、そりゃ無いだろ！)

「あ……いや、汗かいて気持ち悪いかなつて。あたしも帰つてす
ぐに

入ったから。だから、ちょっと言つてみただけ。うん」

そんなあたしを見て、引きつった顔で笑っていた。

「なんでそんなに慌ててるの？いや、入りたい気持ちは山々だけど、またこの汗だけの服は着れないから遠慮しとくよ」

「着替え・・・あるけど？前にカオルが置いていった服・・・」

自分で自分の首を締めすぎな発言をするこの口をどうにかしたかった。

慌てると、余計なことをどンドン言ってしまう・・・

(ん〜)と少し考えながらも、カオルは黙って浴室を見ていた。

「マジで？本当に入っていいなら入るぞ俺。

もうさっきから気持ち悪くて死にそうだから」

「あ・・・うん。いいよ。全然！」

そう言ってベットの脇に置いてあったダンボールから着替えを出した。

クリーニングの袋に入ったままのTシャツなどを持ってカオルに渡した。

(あたし何してるんだろう・・・)

「あ、じゃあ、そうする。サンキュ〜」

シャワーの音が聞こえてくると、妙に冷静になる自分がいた。

(あたしどうする気でそんなこと言ったんだろ……)

これじゃまるで誘ってるみたいだ！

けど、いまさら浴室のドアを開けて「やっぱり出て！」とは言えない……

オロオロしながらカオルが持ってきた袋の中を見た。

簡単なお惣菜やお茶、果物やビールが入っていた。

どれも二人分で、玄関で帰ろうとしていたくせに本当は一緒に食べようとしていたんだと思った。

ビールを冷蔵庫に入れ、惣菜を器に盛り

他になにか作ろうとキッチンに立ち簡単な料理を作っていた。

「いいの？寝てなくて」

タオルをかぶり髪を拭きながら後ろからカオルが覗いていた。

「あ……うん。もう大丈夫。少し寝たし。寝不足だったんだと

思うんだ……最近遅かったから」

そう言いながら、そのまま料理を続けた。

「なんか懐かしいな。まゆがそんなことしてる姿って」

横で笑っているカオルの視線を感じた。

「俺さ、何度やっても目玉焼きが綺麗にできないんだよなあ……

それ見る度に「まゆって上手だったんだな」って思ってたよ」

目玉焼きくらいで褒めてくれるカオルがちょっと可笑しかった。

直樹だったら、あたしよりも料理が上手だから

いつも以上に気を使って作っていたのをなんとなく思い出した。

「目玉焼きなんて簡単だよ……それにあたし料理はいまいちだし。」

カオルくらいしか褒めてくれないよ。健吾だって馬鹿にしてたし、笑いながらレタスを千切っていた。

「あんまり家庭的な女と付き合ったことないからかな？」

千切ったレタスを横からとり、なにもつけないまま口に入れてシャクシャクと音をたてて食べた。

「彼女は作ってくれないの？あたしなんでも喜んで食べてくれるからカオルに作るの大好きだったよ。味覚音痴だから一番楽だった」

「味覚音痴まで言うのかよ……」

昔のような冗談を普通に言いながら笑っていた。

でも、やっぱり彼女のことを聞いてもカオルははっきりとは答えなかった。

聞きたくないけど、つい口から出てしまう。

「けどさ……ほんの少ししかあのキッチン使ってるまゆなんか見たこと無いのに、」

あそこ見るといつも思い出してたなあ……」

テーブルに寄りかかりながら、タオルを肩にかけ笑いながら言うカオルに

「そうだね……ほんの少しだったもんね」と笑いかけた。

「料理以外もあつたけどね……あのキッチンの思い出は？」

ニヤニヤと上を見て何かを頭の中で想像している顔をした。

「相変わらずエロオヤジだよ、今なに考えてるか分かった。」

「え？俺からエロ取ったら何も残らないもの。」

「まったくだよ。歳いってどんどんパワーアップしてんじゃないの。」

そんなくだらない昔話にも思わず笑みが零れていた。

ちょうどそこに携帯が鳴り、電話に出ると祐子さんだった。

「もしもし。まゆちゃん？大丈夫！矢吹君から聞いたんだけど。」

「あ、すいません。もう大丈夫です。勝手に帰って申し訳ありません。」

「ううん。いーの！いーの！何か買っていこうか？」

そう言われて一瞬カオルの顔を見た。

（え？）というようなカオルの顔を見て、祐子さんにここに来ると言っていないかった。

んだなと思い、ただニコツとしてまた電話に意識を向けた。

「いーえ。大丈夫です。もう食べたから。明日はちゃんと出勤しますから。」

「そう？もし朝起きて無理だと思ったら電話ちょうだいね。」

「はい。分かりました。」

少し慌てながら電話を切り、カオルの方を見た。

「祐子さんが何か買っていこうかってさ。」

「わっ！部長くんの？俺、この格好まずくない？」

「ううん。来ないよ。大丈夫」

少し慌てていたカオルにそう言うと、（そっか。よかった）と笑っていた。

「今日さ、本当は一緒に食べようって思ってたでしょ？」

ビールまで買ってたくせに、言えがいいのに。もうビール冷えてるよ。飲む？」

お互い目が合い、どことなく真面目な顔をしているカオルに胸がギュツ・・・となった。

慌ててまた自分の手元を見て、料理を続けた。しばらく見られている視線を痛いほど感じた。

（あたし、、、なに引きとめてんだろ。もう・・・）

帰らないでと言いたいのにも何も言えず、お互い沈黙した空気に黙っていた。なんだか熱とこうして部屋に二人で居られることに昔のように感じいつもの自分より寂しくなっていた。

なにか一言いわれると泣きそうで・・・
苦しくて苦しくて・・・

今にも泣きそうな自分を止めることだけに
必死になっていた。

そんなあたしを見てカオルはソツと後ろにまわり

「俺……やっぱ、ダメだわ……。まだ好きだ……」

そう言って優しく抱きしめられた……

取り戻した夜

抱きしめられたまま、黙っていた。

2年以上もクリーニングの袋に入っていたTシャツは新しい香りがあった。

背中に感じるカオルの暖かさに心臓がドキドキしてその音を聞かれてしまうかとも思うくらい騒がしくなっていた。

そのままカオルの方を向き腕を静かにまわしシャツ越しに伝わる体温に体を包まれた。

彼女に悪いと思う気持ちよりも、この腕を離したくないという気持ちのほうが大きかった。

ゆっくりとカオルの手が顔を触り、その手のぬくもりが嬉しかった。お互い小さく笑い、自然と唇が近づいた。

さっきのような触れるだけのキスでは無く、昔のようなキスだった。なにもかもが頭から消えていった……

「まだちょっと熱があるんじゃない？体熱いけど」

そっとカオルの顔を両手で触った。

「どっした？」

カオルの優しい顔を見ながら

もう触れることが無いと思ったその顔をいつまでも触っていた。

昔の自分のしたことを思い出した……

それでも、優しい顔で自分を見るカオルに涙が出た。
流れる涙を優しく手で拭い、瞼にキスをするカオルに
涙が止まることは無かった。

「ありがと……まだ好きでいてくれて……」

「一度だつて嫌いって言ったこと無かつただろ？」

離れていた分のキスを取り戻すかのように何度も何度も唇を重ねた。
何十回、何百回しても足りないと感じながら……

「最後の約束……覚えてる？」カオルの声に顔を見つめ黙っていた。

最後の約束……<お互いフリーなら一回くらいつきあつよ>

最後に笑ってメールをしたことを思い出した。

「覚えてるけど……でも……」

でも……カオルはフリーじゃない。

「覚えててくれたならいいんだ」

「いや！でもっ！これ以上すると、あ、いや、これ也十分アレだけど・・・」

「そのつもりでシャワーって言ったんじゃないの？」

「えーと、それは、あの、そうじゃなくて！本当に気持ち悪いんだなって思って」

「けど、顔はそう言ってないな。俺、分かるもの。まゆがそうしたいときの顔」

「なっ、自分がしたくて言ってんじゃないの？」

「うん。それもある！」

抜け抜けと笑いながら言うカオルに思わず笑ってしまった。

そしてその昔と変わらないニッコリとした顔に、どうしていいのかわからず

黙って顔を見上げていた。

ギョツと抱き寄せられ「あの・・・」と声を出すと、

「何も言っな。特に彼氏のこと」と口を塞がれた。

(いや・・・そうじゃないんだけど・・・)

軽く抱き寄せ、ベッドのある部屋に入るまでの、ほんの数歩の間にお互いの服が床に落ちて行った。

自然とカオルのキスに舌を絡め、息が荒くなった自分を感じた。

首、胸、何度となくカオルの唇が振れ

閉じていた足にすつと足を入れカオルの体が滑りこんだ。
慣れた指先が下半身に下り体がビクツとした。

顔を耳元に寄せ

「濡れすぎだつて・・・」と小さく笑った。

口にされると急に恥ずかしくなり

思わずカオルの耳を引っ張り、怒った顔をした。

「相変わらずそんなこと言われるの嫌いなんだ？」

知っているくせに、そう言つてゆっくりと指を動かした。
その動きに我慢していた声が漏れた。

「ん・・・やつ・・・」

「嫌ならやめる？」

そんなカオルの言葉に答えるのが嫌で話せないように唇を塞いだ。
そのキスを軽く離し、右手で顔を軽く押さえ
顔がよく見えるように少し体を離し、さっきより早く指を動かした。

息が荒くなり、声を我慢することができなかつた。

けど、そんな顔を見られるのが嫌で横を向いたが
また右手で強く正面を向かされ、快感に歪む顔をカオルが少し笑い
ながら見ていた。

「俺、まゆの感じてる顔好きなんだ」そう言つて首筋をユックリ舐
めた。

慣れた指先と、カオルの言葉に頭の中が白くなった・・・
目を堅く瞑り、イキそうになりそのままシーツを掴む手に力が入った。
そんな仕草を感じたのか指の動きを止め焦らすにいいだけ焦らしながら
胸に唇をつけた。

胸元から首筋までユツクリと舌を這わせながら耳元で小さく呟いた。

「もうイきたい？」

体が熱くなりすぎて考えることができなくなりそうなか、
カオルの体にしがみついた。

「指？それとも口？」

恥ずかしくて顔を見れないまま目を堅く瞑った。

「どつち？」

余裕のある声と共に耳に入れてくる舌にまた体がビクツとする。

「んっ、もう、どつちでも、いい、」

おかしくなりそうなくらい夢中でしがみつくと、意地悪そうな顔を
して

「どつちもするけどな！」とニヤツと笑いアツサリとイカされてしまった。

「相変わらず感度良好だな・・・」

「うるさい！エロオヤジ！」

まだいったばかりで体がビクビクしている状態なのに、

「俺、結構・・・根にもつほうよ？」

片足を持ち上げ、グツと力強くカオルが入ってきた。

さつきとは違う快感にまた顔を歪んだ。

「こんなにイヤラシイ体・・・そう簡単に忘れる訳無いだろ？」
意地悪そうにあたしを見下ろした。

「そんな、こと、ない、、、、」
途切れながらカオルの顔を見て言った。

「そんなことあるね。俺がいままで会った女の中でダントツなもの
そう言っでとんどん体を強く動かした。」

直樹の時と違い、自分が自分じゃないと思うくらい激しく感じた・・・

「やっぱりシツクリくるんだよな・・・お前の体・・・」

その言葉に自分でもそう感じた。

自分でもいままで抱かれた人の中でカオルとするのが
一番気持ちいいと思っていた。

ゆっくりと腕から胸を触りながらほんの少し爪をたてた。
その感覚にピクツと体が反応した。

「やっぱまゆはMだよな」そう言って肩を軽く噛んだ。

(そうなのかな・・・) そう思うほどその歯の感覚が気持ちよかつ

た。

「相変わらず、まゆはわかりやすいな。そんなにイキそうなの
バレバレだと、どーしても意地悪したくて仕方無くなるんだよな
あ」

そう言っただけを止め、笑って顔を見た。

「本当に・・・何年経ってもその意地悪は変わらないんだね」

「彼はこんな意地悪しない？」真面目な顔で言われ、
なにも言えず黙って顔を見た。

「カオルだっただけに彼女にこんな意地悪するの？」
また聞きたくないくせに、そんなことを言ってしまった。
その時の顔が少し悲しい顔に見えた。

カオルは何も答えず、激しく体を動かしゃんわりとした空気を消し
た。

罪悪感と激しい快感の中、カオルのちよつと荒い息遣いと
時たま漏れるあたしの声と息遣いが静かな部屋に響いた。

（もう離したくない・・・）そんな思いが頭の中に渦巻き、
ただ夢中でカオルの体にしがみついた・・・

自分でしていることが悪いことだと知っているのに、
そう思えば思うほど、どんどん感じた。

そんなあたしを見て唇を重ね優しく噛んだ・・・

唇が離れ、カオルの動きにすべて身をまかせ

このまま・・・時間が止まればいい・・・

そんなことを考えながら、真っ白になっていく自分を感じた……

「あのおく俺……まだイッてないんだけど」

強く背中に力を入れた手がほどけた時にカオルは笑いながら言った。

「もう疲れたあ、」

「じゃあ、ちよっとだけ時間あげるよ。もう一回くらい頑張って！」
そう言って笑いながら鼻にキスをした。

「昔……俺以外の男としてもつまらないよって言ったけど、
本当につまらないのは俺のほうだな」

もう何度もイッているのに、それでもまだ足りないような気持ちに
なり

カオルの耳を優しく噛んだ。

「ちよ、俺、耳弱いからやめろって」

そう言っただけ笑いながら顔を離そうとするのを軽く押さえ
首筋や耳をゆっくりと舐めた。

首をすくめながら、くすぐりたい顔をしてたが、それでも気持ち良
さそうに

そのまま舌の動きに黙っていた。

「カオルとするの・・・大好き。あたしも忘れられなかった・・・この体」

カオルとのセックスだけは自分が等身大になれる。直樹にはできないことも、カオルには遠慮なくできた。

「やっぱり俺達、体の相性ピッタリだろ？」

「うん。本当にそう思う」

不思議なことにカオルとの最初の夜から、あたしはそう感じていた。ずば抜けてカオルが上手なのかと聞かれれば、そうじゃないかもしれない。

けれど、なにもかもがパズルのピースのようにピッタリだと感じた。たぶんすべての波長が合うのかな・・・そう思いながらカオルに笑いかけた。

「まゆ・・・もう俺以外のヤツとしないって約束してくれないか？」
真面目な顔をしてカオルが言った。

内心、（あたしはいいけど彼女がいるのに二股？）
そう思うと素直に「うん」と言えなかった。

黙ったまま顔を見ていると、

「もう他のヤツにこんな顔するまゆのこと考えるの嫌なんだ・・・俺もしない。だからまゆもするな」

そう言って強く首筋に口をつけた。

（昔・・・こうしてキスマークつけてもらったな）

遠距離で家に帰る時に、帰ってから寂しいからつけて！とせがみ何度かつけてもらったことを思い出した。

首筋に痛いと感じるほど吸い付くカオルに

「ちょっと・・・そこは目立つような気がする」と言つと「だってわざとだもの」と笑った。

同じような所にカオルにも何箇所か吸い付き痕をつけた。

「俺達、ガキみたいだな？」お互いクスクスと笑った。

「約束する。カオルも本当に約束できる？」

「ん・・・できる！」

内心、見たこともない彼女がきつと泣くのだろうと感じた・・・こんなことして、、本当にいいのだろうか・・・そんな不安が体に広がった・・・

そしてまたカオルの動きに体をまかせた。

（カオルがいるなら、どんなに恨まれてもいい・・・）

体がどんどん熱くなり、肩を掴んだ手に力が入り知らないうちに爪をたてそうになつてしまつた。

耳元でわざと呟く言葉に頭が痺れてくる。

「んっ、、もう、、、、」

「もう何？言わないと、、俺わかんないよ」

カオルの意地悪に目に涙が溜まってくる。

焦らされることで、どんとどんと神経が敏感になる……
そして、こんな風になるのは相手がカオルだからと頭が理解する。

カオルの首にしがみつきお互いの頬が触れた……

耳に唇を寄せ、自然と口から今の気持ち溢れ出した。

「カオ……ル……愛してる……」

吐息にも似た消えそうな声で言った……

その言葉と同時にカオルが小さく声を漏らした……

「ふう〜」と大きな息をつきカオルが体の力を抜き上に重なった。

「俺も……」もう一度、優しくキスをして言った。

いままでく愛してる〜という言葉は誰にも言ったことは無かった。
そこまで誰も好きになりきれていなかったのかもしれない……
自分で言った言葉にチヨット……ビツクリした。

「つーか、いきなりそんなこと言うなよ。早くイツちゃうだろ！」

「だって、っ、つい言っちゃったんだもん」

せっかくシャワーに入ったのに無意味なくらいお互い汗をかいていた。

クーラーの風が心地よかった・・・

懐かしいカオルの腕枕はやっぱ誰よりもシツクリきた。

そのままのかたちで何度もキスをして、お互いニツコリと笑った。けど、時間が経てば経つほど、罪悪感が鮮明になってきた。

「こんなこと・・・彼女が知ったら泣いちゃうね・・・」

そう言った自分の目にジンワリと涙が滲んだ。

それは申し訳無くて滲んだのか、行かないでという言葉の意味で滲んだのか

分からなかった。

「それを言うなら、まゆの彼氏だろ・・・」

そう言つてカオルは黙つて上をむいた。

それまでの雰囲気が一転したかのように、二人の間の空気が変わったような気がした。

「彼氏に初めて抱かれた時もいまみたいな感じだった？」

俺のこと全然考えないで「愛してる」とか言った」

少し冷たい言い方でそのまま天井を見ながらカオルは言った。

初めて直樹に抱かれた日をぼんやりと思い出していた。

けど・・・それは今とは違い、カオルのことを考えるのが

辛くて・・・一人になるのが怖くて・・・

そんな思いのほうが大きくて直樹の元に行ったような気がした。

「そんな事無い・・・」

「愛してる」なんて・・・いままで言ったことないもん・・・」

(いまさらだよな……)

部屋が妙にシーンとした感じがした。
今になってカオルのことがやっぱり一番好きだったなんて
言う資格は無いのに……

お互いにも言わずにそのまま沈黙が続いた。

けれど、心の底では(もう自分の側にずっと居て欲しい)
そう考えていた。

黙ってカオルの胸に顔をつけた……

(もう離れたくない……)

さっきあんなことを言ったが、あれはその場のピロートークだった
のでは
ないだろうか……そう思うともう一度この空気の中で聞くのが怖
くなった。

「今……彼氏のこと考えてる？」

昔のように軽く頭に手を乗せながらカオルが聞いた。

「ううん……」

「じゃあ俺とヤツちやってマズいな〜とか考えてる？」

「ううん…… そんなこと思ってない。カオルは？
マズいな〜って思ってる？」

お互い腹の探り合いのようなことをしているような気がした。その言葉にカオルがちよつと笑った。

「思っていないよ。俺、会社で初めて会った時に、もしかして別れてきたのかな？って期待したし……でも付き合ってるよって聞いてそれは違うんだと思った。けど、もし少しでも上手くいってないなら……って、ずっと思ってた」

嘘をバラすなら今なのかな……
そう思いながらカオルの話聞いていた。

「でも……この前彼氏から電話きたじゃない。
普通の顔して会いに行こうとしてるまゆを、どう引き止めようか
考えていたけど、、結局なにもできなかった……
あの日、仕事なんかしてなかったんだよ……
ただ（今ごろ会ってるんだな……）ってそう思うだけで
なにも手につかなかった……」

頭を触っていた手をそのまま動かしながらカオルが言った。
どんだん嘘をバラすきっかけを逃しそうな気分になった。

「おまけに、どんな奴が一度見てやろうって意気込んで行ったのに、
あんなに格好イイの見ちゃったら、、なんだか情けなくてさ。
余裕ある顔で挨拶までされちゃって、、食事まで誘うくらい大人
でさ」

「カオル……彼女とどうなの？」

その問いになにも答えずただカオルは黙っていた。

「大人の男はこんなことしても・・・
きつとまゆのこと許すんだろなあ・・・」
そう言つて撫でていた手でポンツと頭を軽く叩いた。

「俺・・・向田つて人のこと、何度も考えた・・・
なんでまゆなんだよつて、、、
寄りによつてまゆじゃなくてもいいだろつて、、
健吾から電話きて、誘つてゐるつて聞いてから何度も会いにいこう
と思つた。」

けど、まゆは絶対裏切らないつて、、そう信じてた、、」
小さくポツポツと言うカオルの声に胸が痛くなつた。
そんなに苦しませたことに・・・

それと同時に、きつとカオルの彼女が同じ思いをするかもと
思うと嘘をついていることを言うことができなかった。

きつと今なら「もう別れているの・・・」そう言えば
カオルは戻つてきてくれるかもしれない。
そんな見えない自信があつた。

けど、また自分のわがままで知らない人まで苦しめても
いいのかと思うと言えなかつた・・・

散々今夜カオルを独り占めしたくせに・・・
キュツとタオルケットを掴んだ手に力が入つた。
言おうか・・・言わないか・・・頭の中でグルグル回つた。

「まゆ・・・別れてくれるよな？彼氏と・・・」
カオルの声が部屋に響いた。

「カオル・・・別れるの？彼女と・・・」

「俺のことは気にすんなよ・・・じゃ、帰るわ・・・明日健吾が来るから
部屋どうにかしないと。まゆはもう寝るよ？散々イジメて疲れさせた
せた

俺が言うのはなんだけどさ。本当は朝までいたいけど部屋に
健吾のダンボールが届いてすごいことになってるんだ」

スツとベットから立ち上がり、うちに置いていたＴシャツやパンツ
を履き、

「Ｙシャツ・・・頼むな。今度、朝ここから会社行く時に
着るよ。おやすみ・・・」

額にゆっくりとキスをして部屋を出ようとした。

幸せな気持ちと悪いことをしたという気持ちが交差した。

考えれば考えるほど心が痛くなった・・・

こうなることを願っていたはずなのに、不安な気持ちだけが残った。
さつきとは違う苦しい気持ちにまた涙が出てきた。

やっぱり今日だけは側にいて欲しかった・・・

「カオル・・・」ドアに手をかけたカオルに向かって声をかけた。

「ん？どうした」

「今日だけは、、もうちょっと一緒にいて欲しい……」
そう言うあたしの顔を見てベットに座った。

「仕方無いな。泣くなよ！じゃあ、朝早く出るよ。それでいい？」

「うん……そうして欲しい……」

「甘えちゃって」頭をクシャとしながら、ベットに横になった。
安心して胸に顔をつけ目を瞑った。

「もう泣くな……」

そう一言言って頭にアゴが当たるのを感じた。

やっぱり側にいてくれたことに、涙が溢れた……

これで本当に昔のように戻れるのか不安な部分と、

今だけは自分だけのものだと感じることに、いつまでもカオルのシ
ヤツが

濡れていた。

「まゆ、、愛してる……」

カオルの言葉に嬉しくて漏れそうな声を我慢しながらいつまでも泣
いていた。

不安な気持ち

翌日の朝。

少し遅れて健吾が出勤してきた。

朝からカオルが空港に迎えに行き二人で事務所に顔を出した。

昨日わがままを言って泊まってくれたカオルは朝の5時頃に

「眠くて死ぬかもしれん・・・」とフラフラしてあたしの家を出た。

祐子さんが健吾にいろいろと会社の説明を

している間、カオルと二人向かい合ったデスクに座り

お互いあまり言葉を交わす事無く仕事をした。

カオルは結構、普通に話し掛けてはきたが、

どちらかというと、あたしのほうがヨソヨソしい感じで接していた。

一夜明け、罪悪感がどんどん増していた・・・

朝、化粧をする時、鏡を見てあまりの目立つキスマークに

唖然とし、まだ暑いのに秋用のハイネックを引っ張り出し

なんとか隠して出勤した。

カオルの服装も似たようなハイネックを着て暑そうな顔をしていた。お互い目が合いその服装にちよつと笑った。

その笑った顔を見て、背中越しにいる望月さんに見えないように口だけを動かさし、

（昨日よかった？）と何食わぬ顔でいうカオルが小憎らしかった。

呆れた顔をして目線をそらしたあたしを見てニヤニヤと笑いながら

仕事をした。

話が終わり、健吾が二人のデスクの隣に置いた、新しいデスクに腰を降ろし、やっと緊張が取れた表情で話かけてきた。

「そんなじゃ、後はまゆと仕事割り振りすれってさ。

書類は全部やってくれんだろ？俺は動き専門で〜」

「甘い！ きつちり分担させてもらいますからね。

じゃあ・・・健吾の担当は・・・」

書類をパラパラとめくり割り振りをするあたしを見て口を尖らせていた。

その作業を見ながら、隣の力オルに（今日飲みに行く？ダーリン）と冗談を言って笑っていた。

「部屋・・・いつ決めるんだよ？」健吾に力オルが聞いた。

「ん？そうだな〜 でもほら、家電とか全部揃ってるし

別にいいじゃん。ゆっくりで〜」

そう言っただけ健吾はあまり急いで部屋を決める気が無いようなことを力オルに言った。

そんな健吾を見て

（そのほうが・・・彼女が部屋に来ること無いからいいな・・・）
そんなことをポツリと考えた。

「俺だって都合とかあるじゃん。気使って外出もできねーだろ？

早く部屋決めろよ。日曜付き合ってやるから」

「いいよ？好きなところ出かけても。なに？どこ行くの」

健吾の言葉にカオルはハッキリと言わず、

「いや・・・いろいろと・・・」そう言っただけでまた仕事を始めた。

昨日の話が本気なら・・・彼女に別れると言うのかも・・・
そうして欲しいような、でも、もしかしたら別れないのでは？
そんな不安な気持ちにもなった。

その（いろいろ）の中にちゃんと自分が入っているのだろうか。
そんなことを思いながらも、また苦しい気持ちになっていた。

「なにボクとしてんの？」健吾の声で我に返り

「あ・・・ごめん。えーと・・・じゃあココと・・・あとコッチと・・・」

慌てて健吾に説明をした。

「お前等その服ってこっちで流行ってるの？すげえ暑そうだけど
二人の時期はずれなハイネックに冷ややかな視線で健吾が言った。

「え？・・・ほら、あたし昨日風邪で具合悪くなったから、
ちよつと厚着しようかなって・・・」

「俺も、エアコンで喉痛くてさ！その、予防に」

同時に言う二人に

「俺、聖徳太子じゃあるまいし、同時にわかんねって。

まあ、いいけどさ。で、どこだったって？」

自分から話題を振ってきたくせに、サラリと無視して
仕事のことを言う健吾に、（聞けよ！）と思いながらも
そのまま仕事に話を戻した。

健吾が来てくれたおかげで仕事は驚くくらいスムーズに進んだ。
いつもはあんな感じだけど仕事となるとやはり真面目でセンスが良
かった。

その日から定時とはいかないが、ほぼ時間は7時を過ぎること
無く仕事は片付いた。

健吾とカオルはなんだかんだと文句を言いながらも、毎日楽しく
二人で暮らしているようだった。

あの日以来、昔のように朝と夜にカオルからメールが来るようにな
った。

そして、自然とそれを心待ちにしている自分もいた。

夜にいつまでも返信をして、まるで子供のようにウキウキしている
自分がいた。

<そろそろ健吾に怪しまれてる。また明日な>

その文字に<また>と書いてあることにすら嬉しくなっていた。

そして寝るときに決まって、名前しか知らないカオルの彼女を思い
浮かべた。

ただ漠然とだが、（連絡来なくて待ってるのかな・・・）とか

（もうカオルのことなんか忘れちゃって他に誰かいたりして・・・）
とか・・・

勝手に考えては、最後には（でもカオルはあたしと同じようにメー

ルしてるかも)

そう思い不安になった。

昔であればもつとズケズケ言えたのに、今の自分の立場からしては絶対言つてはいけないような気がした。

(うーん。愛人つて感じた・・・) なったこともないのに、そんなことを考えていた。

翌日も定時には仕事を終え、健吾とカオルと3人で会社を出た。

「お前等、俺の歓迎会とかしてくんないの？」

「普通・・・それって自分から言わないよね？」とカオルと笑っていた。

「んじゃ、行くか？」と適当な所で3人で食事をした。

「まゆ、休みとかなにやってんのよ？」とせ暇なんだろう？と言う感じで健吾に

聞かれ、「別に？普通に家にいるけど・・・」と答えた。

「ふーん。そうなんだ。カオルと遊んだりしないの？」二人を見て言われ、

同時に驚き首をブルブル振った。

「そうなんだ？別に遊べばいいじゃん。家も近いんだし」

「まあ、な。うん。今度そうする」

「う、うん。今度ね。今度」とお互い動揺しながら答えていた。

「なんでそんなに驚くの？」不思議そうな顔をされ、

「驚いてないよ。別に」と誤魔化した。まだ健吾にはちよつと言えないと感じた。

「そっういや、部長今週くるな。俺にも「飲みに行くか？」って言うてたけど、

さすがに遠慮するわ。まゆ連絡きたら断っておいて」

「へ？そうなんだ・・・ けど平日でしょ？」

「うん。もう来てるかな？なんにも言っただけなのかな？」

「えーと・・・」どことなく視線を感じた・・・

フツと横を見るとカオルの視線を感じ、その視線が妙に痛かった。

「忙しいとかじゃないの？」そう誤魔化してしらんぷりをした。

「俺、ちよつとタバコ買ってくる・・・」不機嫌そうな顔をしてカオルが席を立ち、

（かー！本当にコイツ！）と健吾を睨んだ。

「ん？なに」

「カオルの前で直樹のこと言わないでよ！」

「うん・・・まゆさ。カオルと、その、最近二人で会った？」いきなりそんなことを言われて驚き、「会ってないけど？」と嘘をついた。

「そっか・・・」それだけ言って健吾は普通の顔をしてビールを飲んだ。

「なんでそんなこと言うの？」

「ん？いやぁ・・・ 見間違いかもしれないから。いいや」

「なにが？」

そう言うつと小声で耳元に口を寄せ、

「カオルさ、首にキスマークみたいのあったんだよな。チラッとしか見えなかったから」

「本当かわかんないけど・・・寝るまで首にタオル巻いてあいつアホだぞ」

「か、彼女じゃないの？どうしてあたしなのよ！」

「ん？そうなのかなあ？」

「それ以外無いでしょ、自分じゃ無理だし・・・」

「いや、そうだけどさ。だってお前にもあったから」

「ええええー！無いから！痣だよ」

子供の嘘より下手かもしれない。

けど、取りあえずそう言っつて誤魔化してみた。

「お前、痣なんかあつたっけ？」

「あ、あるよ！どこのことが知らないけど」

「いや、そこ・・・の。あ、、、それ、お揃いじゃないの？」

「ええええー！次は何？」いきなりチョーカーを見られ慌てて健吾の顔を見た。

ちょうどそこにカオルが戻り、タバコの封を開けていると

いきなりネクタイを揺るめ、Yシャツのボタンを外しチョーカーを見た。

「な、なに！なんだよ」驚いてタバコを反対に銜えカオルが健吾を見ていた。

「ふ〜ん・・・お前等・・・戻ったの？」

ニヤニヤしながら言われ、オドオドとしながらも

「戻ってない！」

「戻ってないもん！」と同時に言っつて顔を見合わせ「うん！」と頷いた。

「ふ〜ん。まあいいけど。お互いいるもんねえ〜」

ニヤツと笑い何も無かったかのようにビールを飲んでいた。

健吾に言ったほうがいいのかな・・・

そう思いながらも、頭の中で「お前、とったのかよ」と言われるんじゃないかと

思うと何も言えなかった。

カオルをチラッと見ると、目が合ったが黙っていた。

「あ、明日の打ち合わせさ・・・」

急に仕事のことを振られ

そのまま、その話しはウヤマヤになった。

助かったのか、そうじゃないのか分からなかった。

帰りにうちの家の前を通り、「じゃ、また明日ねー」と手を振り急いで中に入った。

なんとなく健吾がこれからカオルを責めるんじゃないかと思った。

(カオル・・・健吾になんて言うのかなあ・・・)

そう思いながら部屋でボクとしていた。

そろそろ寝ようかという時間に携帯にメールが入り、それを見ると
<健吾が何も言わないのが逆に気持ち悪いんだけど・・・>と書いていた。

<それは気持ち悪いね。けどしらんぷりのほうがいいんじゃない？>
<返信しておいた。

<そうだな。じゃ、また明日>

そのメールを見ながら、いまさら健吾にまで嘘をつかなきゃならない

関係だと思つと情けなくなつてきた。

このことを知つたら、健吾はなんて言つんだらう・・・
健吾も知つている人なのに、「お前等最低だな」と言われそうだと
感じた。

昔からそんなところにはうるさい所があつたから。

翌日、健吾は別に普通だつた。

(本当にこいつ・・・よくわかんないよなあ・・・)
そう思つたが、何も言われないのをいいことに黙つていた。

その日の昼、倉庫でカオルと二人きりになる時間があつた。

「あのさ、健吾が家決めたら、ゆっくり遊びに行くから。

ちよつと・・・一人にするのもなんだし、それにまゆのどこ行
くつて

言いづらいしき、別に隠す訳じゃないんだけど、

その、まゆの彼氏がハッキリしてからのほうがいいかなつて・・・

「.

「あたしより、、カオルの彼女のほうが、アレじゃない？」

健吾も知つてる人なんでしょ？」

「え、、いや、、その、、うん」

アレってなんだよ・・・自分で言つていて思った。

お互いモヤモヤとハッキリしない言い方をした。

カオルって・・・浮気とかできる人なんだな・・・

もしかしてあたしと付き合つていた時も、コッソリこんなことして

いたのかな・・・
そんなことを思いながら、仕事をするカオルを見ていた。

その次の日。
仕事を終え、家で書類のチェックをしているとインターホンが鳴った。

(なんだよ・・・もう11時なのに・・・)

受話器をあげるとそこにはカオルがいた。

「どうしたの?」

「あ、コンビニ行くなって出てきたんだけど・・・」

「その帰り?」

「いや、、、遊びにきた・・・」

そう言われ、健吾にコソコソしながらも会いに来てくれたのが嬉しかった。

部屋に入り、机の上の書類を見て、

「そんなに仕事好きなんだ・・・ 帰ってからやらなくてもいいじゃん」と

呆れて顔をしていた。

「うん。けど、暇だしねえ。今やっておけば少しは楽かなってさ」
トントツと書類を集めて簡単に片付け、冷蔵庫からビールを出してカオルに渡した。

「ビール・・・って。彼氏来たの?」

「え?来てないけど。カオルが飲むかなって買っておいだした」

テーブルの上を綺麗にして、フツと顔を見ると変な表情をしていた。

「なに？どつしたの」

「いや・・・別に」

「なあに？なんか言いたそうな顔してるじゃない」 言つてよ

「もう彼氏に、言つたの？」

（おっと・・・そつちかよ）

「あゝ。うん・・・けどもう言わなくても、・・・こつち来てから仕事のこと以外では

電話もしないし、その自然消滅になりそう、かも？」

白々しい嘘だなと自分で思った。

「それじゃダメだろ。ハッキリ別れないと、あっちも忙しい人なん
だろ？」

たまにこつちに来た時にまゆの家に来ることだつてあるかもしれないし。

その、もし、そんな話するならできれば、電話のほうがいいけど

「うん・・・そつだね」

そう答えたが、自分の中ではカオルに「彼女と別れた」といわれたら、

適当な嘘をついて「こつちも大丈夫」とか言えばいいかな・・・
そんな程度に考えていた。

ちよつとシーンとした空気の中、側にあつた紙に適当に落書きをして
いた。

なんとなく視線を感じて、自分の手元を見ると
<N・MUKAIDA>とキツチリと直樹のネームが入った万年筆が
素敵なくらいカオルのほうから見える状態だった。

慌ててそれを隠した……が。

「それ見せて」と言われ「やだ……」と後ろに隠した。

ジロツと睨む視線に、「もう……使わない……」とテーブルの下
の書類と一緒にしまった。

「もう使わないとかじゃなくてさ……どうなのよ、本当のと
こは」

「え……あさ。カオルのほうはどうなの？こっちのことばっ
かり言うけど」

「俺え？俺は、その、、大丈夫だよ。いつものことだし」

「いつもって？」

「相変わらずダメじゃないし。そんなもん」

なんとなく目をそらして言った。

「カオルってさ、、彼女いるのに、あんなことできるんだね」

「あんな、、って。お前だってそうだよ」

「あたしと付き合ってた時もあったことある？」

「無いよ！ある訳ないだよ！」

「ふん……」

今、そんなことを言える立場じゃないのに、直樹のことを詰め寄ら
れて

つい口から出てしまった。

「ふんてなに。じゃあ言わせてもらっけどな。俺はお前が向田っ

て人と一緒にいる時、

お前のことずっと想ってたんだぞ？留守電聞いて、仲直りできる
と思って

毎日電話してたんだぞ。なのに、お前なにしてた？」

カオル独特の静かな口調で淡々と言われた・・・

「本当に根に持つ人なんだね・・・」

「当たり前だろ。結局嘘ついた俺が悪いけど、簡単にコロリとあつ
ちに流れて

本当は俺、健吾から聞いてあんなに怒ったこと無かったんだぞ」

目がまた怒っていた・・・

そりゃ怒ることだろうなと思ったけれど、ここで（先に嘘ついたので
誰？）とか言うつと

もつと話しが大きくなると思い、黙っていた。

「まゆ、、、いつ言う気？」

「近いうちに・・・カオルは？」

「じゃあ俺もそのくらいに」

なんて怪しい相談なんだろう。

ペットボトルを持ち、カオルの隣に座りまだ少し怒っている顔を見
ていた。

そのまま黙って浅く座るカオルの背中に顔をつけた。

その温かさにやっぱり安心した。

勝手に離れて、また勝手に戻ってきたあたしのことを受け入れようと
してくれているカオルに、どう謝ればいいんだろう・・・

「まゆ……」
「ん？」

そのまま背中に頬をつけてカオルの声を聞いていた。

「悪いけど、今日はする時間無いわ……」

その声に「しないよ！」と背中を叩き、せっかく謝りの言葉を考えて浸っていた気分がスツカリ冷めた……

「いや、、したくて甘えてるのかと……そりゃ俺もしたいけど、さすがに時間が……」

「そんなことばかりだね……あんだ……」
呆れて顔を見て笑った。

「全部済んだら……その時は一緒に住んでくれる？」

その問いに頷けばきつとカオルは一緒にいてくれるだろう。

人のモノを取る人は必ず取られる……そんなカルマを思い出した。次は自分がそんな目に会うのかもしれない……

その時、あたしは今よりも、もっと辛いかもしれない。

何も言わずに黙ってカオルに抱きついた。

軽く頭を撫でながら、「ちゃんと戻ってこいよ……」

少しだけ笑いながら言うカオルの優しい声を耳元で聞き、その言葉に涙が出た。

そのまま小さく頷き、泣き顔を見せないように肩に顔を寄せた。

やっぱり恨まれても、どんなカルマを背負ってもカオルの側にいたいと感じた……

不信心

健吾が来てから数週間が経った。

「な」。明日不動産屋行こうぜ。付き合っただけからー」
健吾のことをカオルが誘っていた。

「私の体に飽きたのね！ひどい！出ていかないわよ！」

「だから……もうソファで寝るの体痛いんだって……」

冷やかな顔をしてカオルが（勘弁してくれよ……）と言う顔をしていた。

そんな二人を見て裕子さん達と笑っていた。

「だから一緒に寝ようって言うてるじゃねーかよ。大丈夫だって！」

「いや、その言葉にしての「大丈夫」が逆に怖いんだって」
疑った顔をしたカオルに健吾がニヤニヤしながら笑っていた。

「お前ソファで気持ち悪い格好で寝てるぞ？死んでるのかと思って

夜中に顔にテッシュ置いたことあるもん」笑いながら言う健吾に、

「頼むから早く出て行って……俺の息のあるうちに……」

絶るような目で言うカオルに嬉しそうに健吾は

「どうしよっかな」と答えていた。

午後から打ち合せて健吾と外に出た時。

二人の暮らしの話聞きクスクスと笑っていた。

「俺、いびきなんかかいてねーのに、カオルの野郎うるさいんだって！」

「健吾……いびきかくよ？うるさかったもん。昔……」
「マジで？俺、疲れてるんだなあ……相棒が相棒だからな」

当然、自分のことを言われていると思いジロツと睨みながら車を運転する

健吾を見ていた。

これから行く打ち合わせの場所の書類に目を通しながらラジオの曲を口ずさんでいると、何気ない感じで健吾が聞いてきた。

「なあ、まゆとカオルつてさ、毎晩メールとかしてる？」

「えっ！ど、どうして？」

「いや、、いつもカオルがそこそ携帯持つてるからさ」

「さあ？あたしじゃないなあ……」

目を通してはいるはずの書類の字は何一つ頭に入っていなかった。

「お前さ。俺に何か聞きたいこととかない？」

「なにかって？」

「カオルのこととか……カオルのこととか……カオルのこと」と

絶対なにか知っている顔でこつちをチラッと見る健吾に動揺した。

「何が……言いたいの？」ちよつと怒られるような気分で健吾の顔を見た。

「ん？別にい。似た者同士だよなあ……お前等つてさ」

少し笑いながらウインカーをあげた。

「何が似てるって言うの？」

健吾はにやけた顔で前を見ながら、タバコに火をつけ思い出し笑いをしていた。

「俺のダンボールしまおうとしたら、まゆの服とか入った箱見つけたんだよなあ。」

二人で撮ったプリクラとか写真とか、お揃いのキャップとかいろいろあつたぞ？」

「へえ・・・前に偶然会った時にカオルそんなこと言ってたなあ？
なんとなく捨てられないんだって。あたしと別れてからも彼女いたくせに」

よく怒られなかったね」

「部長だつて怒らなかつたじゃん」

「ああ・・・まあね。バレているとは知らなかつたけど・・・」

「部長は大人だからな。そんなヤキモチみたいなこと格好悪くて言えないんだろな」

「ヤキモチっていうか、、関心が無かつたんじゃないかな？」

思い返せば、一度だつて直樹はカオルと言つ言葉を出さなかつた。

あの人は過去のこと是一切聞かなかつた。常に現実しか考えていないんだあ・・・と

思ったことがあつた。

結局、健吾が何か言いたそうな、聞きたそうな・・・そんな感じではあつたが

上手く表現ができなくて、そのまま違つ話を振り話題を濁した。

「お前さ、、、いままで体の相性が合う男っていた？」
「な、なによ！こんな昼間から下ネタ炸裂する気！」
「いや、、昨日カオルとそんな話したら、「合う女とヤツったら誰抱いても思い出す」って
偉そうに言ってたからさ」。女もそうなのかなって」
「そうかも、、ね」

直樹に抱かれていても、やっぱりどこか弾けきれない所があった。大胆になると幻滅されるんじゃないかとか、こんな自分は嫌われるんじゃないかとか・・・
そんな時、あたしはカオルを思い出したことが何度もあった。なぜか分からないけれど、カオルになれば自分を装うことは無かった。
どんな自分を見せても受け入れてくれるという見えない自信があり、同時にあたしもどんなカオルを見ても気にならなかった。

直樹には、引かれることが怖かった。

「それって、、俺？それとも部長？それとも、、カオル？」
「次々と男の名前だすな・・・」
「いや、、お前の男関係は下手に知ってるからさあ」

(誰を抱いても思いだす・・・なんて、、彼女を抱いても思い出してくれたのかな)

見えないヤキモチで胃のあたりがムカムカしていた。
カオルはあたしと離れてから何人の人を抱いたのだろう。

「また眉間にシワ寄ってるぞ」

「えっ！あ、いや、、なんでもない！そういえばさ、、健吾
って部屋探してるの？」

「あ？別に」

「でも、それってそろそろカオルも困るんじゃない？
「なにが？」

まったく気にした様子も無い健吾にそれ以上言えなかった。

健吾はカオルの彼女のことをどう思っているんだろう。もしかして
あたしが知らない所で

カオルは彼女に会いに行っていたりするのかな。

「その、、カオルだって外出したいとかあるかもしれないじゃな
い・・・」

「なら行けばいいじゃん」

「いや、、そうだけど、、」

「けどたまに出かけてるぞ？」

「えっ、、そうなの？」

ドキツとしてそれ以上聞くことができなかった。けど確実に顔は動
揺していて慌てて外を見た。

(やっぱり、、まだ続いているんだ)

嫉妬とかヤキモチとか、そんな次元じゃないモヤモヤに包まれな
がら胸がドキドキしていた。

慌てているあたしを見て健吾が普通に「どうした？」と声をかけてきたのを、

「あ、いや！なんでもない」と誤魔化したけれど、明らかに変な感じだった。

「あ、あのさ。ちょっと変なこと聞いていい？」

「ん？なに」

「カオルの彼女ってさ、健吾知ってるんだよね？」

あたしの質問に健吾は妙に変な顔をして黙っていた。

「カオルの彼女ねえ・・・さあ俺はあんまり詳しくは知らないなあ？」

(嘘ばかり・・・)

黙って顔を見るあたしを見て、お互い黙ったままだった。

「あ、いや、、、いいの。なんでもない・・・」

「あのよ、、、、」

「いい！もういいから！なんでもない！」

「まゆさ、、そのカオルの彼女の存在ってどんな経路で知った訳？」

健吾の言い方に違和感を感じながらも、サラッと気にしていないフリをした。

「え？あ、、、、えーと。ほら、前にサッカーの話あったじゃない？あの時、偶然健吾のパソコン見ちゃって、、いや！盗み見した訳じゃないよ？ただ偶然見えちゃって」

「サッカー？」

「ほら！前にカオルと行くって言っていて、あたしも誘ってくれたじゃない。あの時のメッセで」

健吾はもう忘れているのかしばらく考えている顔をしていた。

その顔がなんだかわざとらしくてイラツとした。

「だからー！その時一緒だったんでしょ？由美さんって人。だから、
、「ああ、名前由美って言うんだな」って思っただけ。それだけ
！」

プイツと外を見て知らない顔をした。

突然健吾が飲んでいたコーヒーを吹き出し、その音に驚いて顔を見た。

「な、なによ！」

「いや、なんでも、ない、、ブツ、、」

「なに笑ってんのよ！だからもういいって言ってるじゃない！汚いなー」

「あゝ。思い出した。あの時のサッカーな。うんうん」

妙にニヤニヤしたまま吹き出したコーヒーを手でふき取り満面の笑みを浮かべながら運転をする健吾を横目で見ながらやっぱり言わなきゃ良かったと思った。

「なにニヤニヤしてんのよ！あたし別にヤキモチとかじゃないからね！」

「分かった。分かった！本当にお前は面白いよな。カオルも面白いわ……」

「カオルが、なによ・・・」
「ん？カオルがイロイロと部長のこと聞くのが可笑しくてよ。アイツ俺を笑い死にさせる気じゃねーかと思うくらい抜群に面白いんだよなあ」

カオルが直樹のこと？

「何を聞くの？」

「いや、お前がこっちに来た後、女の噂無いのか？とか、あんなにイケメンならモテるんだろ？とか」

「へ、へえ・・・」

目を合わせると動揺していることがバレそうで知らない顔をして外を見ていた。

「心配すんなって。バツチリ俺がフォローしておいたから」

「フォロー？」

「ああ。部長はお前一筋だってキチンと言っておいたから！寄ってくる女には「まゆがいるから」って片っ端から断ってる一途な男だって言っておいたからよ！俺に感謝すれよ」

それは、どうかな、

今となつては、それマズイかも、

「あ、そ、そうなんだ。ありがと、」

「いやいや。大事な友達の為だもの。全然気にするなつて。部長はお前が戻るのをジツと

待っているって言っておいたからよ！」

「あ、うん」

やっぱり、、いまさら健吾にカオルと戻りましたなんて絶対言えない。

妙にニコニコしている健吾を見ながら複雑な顔をしていた。

会社に戻り倉庫で商品チェックをしようと思っていると中に入るとカオルが在庫の確認をしていた。

「お。お疲れ」

「うん……」

カオルは健吾の言ったことをどう思っているんだろう。

そして、、あたしに内緒で出かけているってどういっつもりなんだろう。

背中を向けたままチェックをしているとフッとカオルの腕が体を包んだ。

「ちょ、誰か来るってば」

「うん。ちよつとだけ」

ギュッと力を入れる腕に不安と不信感が広がった。

（健吾がいるから、、彼女に会っていないと思ってたのに……）

さっき聞いてしまった言葉になんとも言えない気持ちになりながらカオルの腕を掴んでいた。

クルッと顔を振り向かせ、軽く触れた唇になんとか嬉しさより淋しい気持ちになりながら黙っていた。

「今日さ、まゆの家、、行つていい？」

さっきの話を聞かなければきつと喜んで頷いたのに・

「カオル、、彼女に会つてる？」

「は？なんで」

「健吾が、、さっき」

突然ボタンツ！と音がしてドアが開き、慌てて二人で大袈裟に体を離し違う方向に走つていった。

「ん？どうした」

ダンボールを持ちながら入ってきた健吾に二人で慌てながら

「なんでもない！」と全然関係無い商品を手に取りながら仕事をしていたフリをした。

「それ、、売れてないぞ？」

「えっ！あ、、うん！不良品かなゝって思つて見てただけ！」

「あれ・・・カオル」

「えっ！なんだよ」

グイッと顔をカオルに近づけ健吾がジロジロと顔を見ていた。

「お前、、口が妙に光つてるけど」

「えっ！なにが？」

慌てて口を拭い手についたグロスに更に慌てながらオドオドしていた。

「じゃ、じゃあ！あたし事務所に戻るね」
「俺も〜！」

二人で慌てて倉庫を飛び出しエレベーターに駆け込んだ。

「健吾・・・絶対疑ってるよね？」

「だよなあ〜。やっぱりハッキリしてからじゃないと出られないよな」

「う、うん」

隣でグロスがついていないか口を拭いているカオルを見ながら、
(もしかして別れ話が難航しているのかな・・・)と心配になった。

「まゆ、、、向田さん今度いつこつち来る？」

「え？さあ、、全然聞いてないけど」

「連絡無いの？」

「う、うん」

「そろそろさ・・・キッチンとしないか？」

それって、、彼女じゃなくてあたしを選んでくれるって思っているのかな・・・

「あつちが全然別れる気無いかもしれないだろ？なら、、時間かかるかもしれないし、

できるだけ早めに言ったほうがいいかと思って」

「あ、うん」

健吾の言葉を鵜呑みにしているカオルにそれ以上言えなかった。

「カオルの、、彼女だつてそうかもしれないじゃない」

「俺え？いや、、それは平気だけど」

「そんなこと分からないじゃない！カオルだつて本当はそんな気無
いんじゃないの？」

「なにがだよ」

「別にあたしの結果待たなくなつていいじゃない！本当に別れる気
があるなら伸ばさなくなつて問題無いのに、どうしていつまでもダ
ラダラしてるの」

「ダラダラつてお前なあ！ならお前はどうなんだよ」

「あたしは会つてないもん！」

「俺だつて会つてねーよ！」

「嘘ばかり！」

開いたエレベーターの前に驚いた顔をした祐子さんと望月さんが二
人を黙つてみていた。

「どうしたの？二人とも」

「え、、いや、、なんでも無いです」

「喧嘩するほど仲がいいつて言うからね。俺達は外回り行つてく
るから後はよろしくな」

望月さんがエレベーターに乗り込んできて、慌てて二人で降り祐子
さん達を見送つた。

事務所に入り無言で二人ともデスクに座り黙つて違う方を見ていた。

健吾が戻り口をきかない二人を見て、またニヤニヤしていた。

「なあ、、健吾」

「ん？どうした」

「俺、別に夜に外出なんかしてねーよな？」

「あ？どこに」

「どこって、、、だからしてねーよなって話！」

不機嫌そうなたたしの顔を見て健吾はまた「ブツ……」と吹き出した後に、

「コンビニくらいか？」と笑った。

コンビニ？

健吾が来てから数回カオルがそんな嘘をついて家に来たことを思い出した。

チラツと目が合ったカオルが「そーゆこと！」と一言だけ言ってパソコンに向かっていた。

健吾が煙草を吸いながら二人を交互に見て笑っている顔に、

「あつそ！」と一言だけ言いながらも、少しだけホツ……としていた。

「ごめん、俺ちよつと腹痛い、、、ブツ、、、」

健吾が笑いながら事務所を出て行く姿を見た後、お互い目が合った。

「俺がコンビニって言ってそれくらいの範囲で帰ってこれる所なんてお前の所くらいしか無いだろ」

「……………」

「まゆ……………」

カオルのほうをチラツと見ると真面目な顔をしていた。

「なによ」

「向田さんってさ、、、お前が別れるって言って納得するのか？」

「え？そりゃ、、、すると思うけど」

「お前のこと信じてこっちに來させてくれたのに、、、こんなことになって本当にいいのかな。そりゃ、、、お前が俺を選んでくれるのは嬉しいし、ずっと一緒にいたいけど、、、」

あの人この前会っただけだけど、お前のこと本当に好きだってすげえ思った」

(健吾お・・・なんてこと言ってくれたんだよ・・・)

真面目に直樹のことを考えているカオルに本当のことが言えずに申し訳なくなった。

「お前を見る目が凄く優しかったし、可愛くて仕方無いって感じした。やっぱり大人だなんて思った。お前、、、俺のこと選んで後悔しないか？」

「何よ、、、いまさら」

「あの人と離れているから寂しくなっつてい・・・って感じとかじゃないよな？」

「そんなこと無いよ！あたしのこと信じてないの？」

「いや、、、そういう訳じゃないけど・・・」

不安そうなカオルの顔を見て、きつとカオルは昔のことを思い出しているんだと感じた。

あたしがカオルに会っていない間に直樹に気持ちが動いたことを。

「なら分かった」

「なにが？」

「お前がそれでいいって言うなら、もう考えないようにするよ。俺、健吾からあの人の話聞く度に全部が負けているような気がして、、、自信無かつたんだ」

「カオル……。直樹のことはもう心配しなくていいから。ただ、、あたしが直樹のことハッキリしたらカオルも彼女に別れるって言うんだと思うと、、そんなこととして本当にいいのになって」

「まゆが向田さんにハッキリ言えない原因はそれ？」

「うん……。だって、、もし彼女がカオルのこと大好きで、別れるなんて思ってもいなかったら、、きっと凄くショックだと思っし」

「あのさ、、」

カオルが何かを言いかけた時、健吾が事務所に戻ってきた。

ピタツと話を止め何も無かった顔をして仕事をする二人を見て、健吾はまた小さく、

「やべえ、、、また笑っちゃう」とクスクス笑いながらデスクに座った。

「何がそんなに可笑しいのよ！」

「だって、、、ブツ、、、お前等頼むから俺をそんなに笑わせるなよ……」

ゲラゲラ笑う健吾を横目にカオルと二人でムスツとしながら健吾を
見ていた。

最後の「意見番」

少しだけ暑さが軽くなった日曜日。
お昼少し前まで眠っていた。

なんとなくあの日以来、寝つきが良かった・・・
いままでカオルが彼女と一緒にいるかも、、、そう勝手に思い込み
ザワザワした気持ちになり寝付けないことがあったのに
健吾が来てからそれは無くなり安心して眠れた。

カオルの言葉に彼女と一切会っていないことを知り、不安な気持ちは
無くなった。

でも連絡を待っている彼女のことを少し考えた。
もしかしたら仕事が忙しいから黙ってカオルから連絡が来ることを
待っているのかもなあ・・・

直樹と付き合っていた頃の自分と重なった。
もしもあの頃、直樹がこんな理由で毎日連絡をくれていなかったと
思うと（それは泣けるよなあ・・・）そんなことを考えながら
秋物をクローゼットに入れ替えていた。

携帯が鳴り、クローゼットを閉めて画面を見た。

< 向田 直樹 > そう浮ぶ文字に

（あれ？・・・どうしたんだろう）そう思いながら電話にでた。

「もしもし、、、どうしたの？こんな時間に」

久しぶりな直樹の電話にちょっと驚きながら話をした。

「今日は休み？なにしてるのかなって思ってたさ」

「あ・・うん。休み。特になにもしてないよ？衣替えしてた」

「寂しいくな。まだ日曜に一人なの？」

「もう・・なに？そんな嫌味言う為に電話してきたの？」

また日曜出勤？なのに電話なんて直樹だって暇じゃない・・・」

ちよつと怒った口調で言ったけれど、久しぶりの直樹の声が元気で安心した。

「暇ならちよつと出てこない？今日たまたま一日空いてね。」

もしまゆがまだ彼氏いないなら遊んであげようと思ってさ」

「え？出てこないって・・・こっちにいるの？」

「ん。明日どうしても打ち合わせがあつてね、ちよつとズレて日曜挟んじゃってさ。本当は昨日戻るはずだったんだけど仕事が詰まってね。で、今日は休みになったんだ」

「そうなんだ・・・珍しいね日曜挟むなんて」

カオルは直樹に会うの嫌がるよな・・・でも、もう直樹とはそんな関係じゃないしな・・・そして第一、直樹にどう断ればいいのか分からなかった。

「じゃあさ、近くの駅まで来てよ」

「あ・・・でも。その、」

「まゆに仕事のこと話しておきたいことがあるんだ。
もう変な誘いはしないよ」

仕事のことなら・・・

簡単に用意をして直樹との待ち合わせ場所に向った。

スーツでは無く、普段着の直樹を久しぶりに見た。

「あれ、ちょっと太った？」いつものニッコリした顔で言った。

「ちよっと・・・それって女の子には言わないほうがいい台詞だよ？」

訝しい顔でそう言い返した。

「だってもう気を使っても見返りが無いしさ？」

そう言っつて意地悪そうな顔で笑った。

「じゃ、どこか行こうか？まゆの好きなところでいいよ」

「うん・・・こっち来てから遊びに行くこと無いしなあ・・・

よくわからないから直樹にまかせる」

「そっか。じゃあ・・・適当に行ってみようか」

そう言いながら二人で歩き出した。

直樹とこんな風に二人で遊びに行くことなんて、

付き合っている時でもほんの最初の半年前後だけだった。

後はいつも直樹の仕事に時間をとられることが多かった。

隣で涼しい顔をして歩く直樹を見ながらそんな昔のことを考えていた。

「浅草とか行ってみようか？一度行ってみたいなと思ってたんだ」

「うん。いいけど・・・行ったことないし。でも、あそこって年寄りが行くところじゃないの？TVで見てそんな感じに思ってた」

「だって俺、年寄りだもの？なんかあーゆるーのんびりしたのっていいなってさ」

迷うことなくテキパキと直樹は移動手段を決め、スイスイと慣れた感じで浅草に向かった。

映画で見たような古い店が並ぶ道を二人で楽しく歩いた。思ったより若い人も沢山いるし、外国人観光客も沢山居た。

TVで見て定番な煙を頭にかけたりして、

「すごい〜 本物だ〜」と盛り上がり、大きな提灯にも二人でちよつと大人げないくらい騒いでいた。外人よりもうるさいくらい・・・

一件の甘味屋に入り、

「ちよつと思つたよりも混んでるけど、よかつたでしょ？来てお茶を飲みながら直樹が聞いた。

「うん。思つたより面白〜い」

「仕事はどう？順調？」

「うん。健吾も来てくれたしね。あ、仕事の話って？」

「ん？今聞いたでしょ。順調かって・・・」

「それだけ？」

「それだけ。なんとなくそう言わないと出てこない感じだったしね」

ニコニコ笑いながらも、相変わらずあたしの心の中をアツサリと見てしまう直樹に感心していた。

「今度、京都行きたいな。どう？一緒に行っちゃおう？」
片目を軽くあげ、そんな事を言う直樹を驚いて見た。

「え・・・なに言ってるの？もうそんな関係じゃないし、
京都なんか日帰りできないもの・・・」

「昔のまゆなら」「うん」てすぐ言ったよな。俺、相当嫌われたみたいだね。

付き合う前だってきつと困った顔して最後には行くって言ったよな」

「別に嫌ってないけど・・・でももうそんな関係じゃないもん。
そこまで見境い無しだと思っ？」

苦笑いをしてそう言った。

「ん？そうは思わないけどさ。もうそんなとこ行くチャンスなんて
無いかなと思ってね。

俺、来年から海外に転勤になるんだ。戻りはいつかわからないし。
もしかしたら、もう戻らないかもなっ・・・」

「えっ！海外ってどこ行くの？」

「タイにうちの支店ができるんだよ。あっちで店舗を見ながら
現地で直接買い付けしたほうが安いからね。

やっぱり統括はちよつとまだ早かったみたいだし、
自分から希望だったんだ。もう東京に出張もこれが最後。

まゆに会うことも、もう無いかもしれない。それもあって電話し
たんだ」

どう言葉をかけていいか少し困った。

もう直樹には会えないんだ・・・

そんなことを思いながら黙って顔を見た。

「もう会えないと思うと旅行くらいいいかなって考えてる？その顔は」

ニツコリと笑いながら言った。

「ううん。そこまで都合のいい女にはならない」

「あら・・・残念」

「あっちにはいつ行くの？」

「んー・・・たぶん3月に入ったらかな？それまでは会社に缶詰の予定。」

それ聞いて、まゆを連れて行くって思ってる人もまだいるんだよ？

笑っちゃうよな」

「直樹・・・大丈夫？寂しくない？そんな海外に一人なんて」

「寂しいって言ったら一緒に来てくれるの？」

「そんな気無いくせに」

海外転勤かぁ・・・もし付き合っていたら一緒に行ったのかな・・・あの時、仕事を辞めて直樹の家に黙っていることを選択したならきっと今回をチャンスに結婚とかしたんだろうな・・・

「あたし玉の輿を蹴ったみたいだね」

「だから言ったじゃない。こんな良い男振るなんてありえないぞ？

でもタイだけだな。これがNYとかなら、格好もつくけど

アジアだしなあ・・・」

「じゃあ、今度から愚痴はメールで聞いてあげるよ」
そう言つてパソコンのメールアドレスを手帳に書きその部分をちぎつて渡した。

「もう毎日書いちゃうよ。それもタイ語で・・・」
「読めないから・・・」と二人で大笑いをした。

店を出て少しだけ浅草の町をまた歩き、電車で都心に戻つた。
公園のベンチに腰掛け、目の前の鳩に餌をあげている直樹を黙つて見ていた。

少しずつ暗くなる空を見て

（今日で直樹を見るのも最後なんだなあ・・・）そんなことを思った。
いろいろあつたよなあ・・・

小さい鳩に餌をあげたいのに、大きいのが横取りをするのを怒りながら必死になっている直樹を横目で見た。

「あゝあ・・・結局アイツ食べられなかったなあ・・・

トロイっていうか、なんていうか、まゆみだい。

もう夕方で鳥目だから解散した・・・」

そう言いながら手をパンパンと払い隣に座つた。

「で。なんか悩みあるんじゃないの？」

いきなりそんなことを言う直樹をビツクリした顔で見た。

「どうして？別に・・・ないけど・・・」

「仕事のことじゃないなあ？その顔は・・・男だな？」
ニヤツとして笑った。

「ねえ・・・いつも思ってたんだけど、どうしてわかるの？」
「なんだろ？なんとなくね。で、もう聞いてあげられないよ？」
言うなら今だよ。「俺のことやっぱり好き」って言うなら
爪に入った餌を取りながら言った。

「やっぱ当たってないや・・・偶然か」

「嘘だつて。で、もしかしてマツのこととか？」

「えー。それはナイなあ・・・」声を出して笑った。

なんとなくその悩みの元がカオルだとは言いづらかった。
そのまま爪をいじる直樹を黙ってみながら笑っていた。

「矢吹さんとどうなった？」

いきなりカオルの名前を言う直樹に驚き「えっ！！」と声が出た。

「あれから進展あった？」

「うーん・・・まあ、ちょっとだけ、ね」

なんだか今の状況を言うとき軽蔑されてしまうんじゃないかと思うと、
それ以上言うことができなかった。

「まったくまゆもモタモタしてるよな。こっち来てからどのくらい
経った？」

「うーん・・・半年は経ったよね。でも、まさか同じ会社なんて
思わなかったもの」

「俺は知ってたけどね」

「えっ！？なにそれ」

「いや・マツに聞いたんだ。ほら、前にマツとまゆがデスクで大喧嘩したことあっただろ。」

あの時、実は聞いてちゃってたんだよね。今度の会社にそのカオル君がいるってこと。

だから、、、、きっとまゆはこっちに来たら彼と元に戻るって思ったんだ。

「もう邪魔しちゃダメですよ」って言ってたよ・・・マツ」

「そうだったんだ・・・」

「マツさ、、大事にできないなら別れて欲しい」って真面目な顔で怒ってた。

けど、、彼がいるなら、尚更行かせたくないなって、、俺も意地になっちゃった」

「知ってたのに、、行かせてくれたんだ・・・」

「俺なりに頑張ったつもりだったけど、まゆがどうしてもって言ったからさ。」

でもほら、今日でもう会うこと無いかもしれないしさ。

ちゃんと素直に彼に気持ち伝えたの？」

「うーん・・・ あたし彼に直樹と別れたって言ってないの・・・」

彼、彼女いるみたいだから、いまさら直樹と別れて東京に

来たって言えなくて。でも、彼女と別れるって・・・

だからあたしも別れてって。あたしは問題無いけど、

彼女が可哀相かって。そんな感じで今はどうにも動きが

とれない状態なんだあ。けど、もう本当はお互いハッキリしてる

のかもなあ。

ただ、、スッキリしない付き合いになるのかなとかね・・・」

その話を聞き、直樹はやれやれ・・・と言う顔をして
こっちを見ながら口を開いた。

「好きなら取っちゃえばいい。相手が別れるっていうなら別れて
もらえばいいじゃない。まゆだって本当はそれ望んでるんだろ？
他に好きな人がいる恋人と一緒にいるのが本当に相手は
幸せだと思ってる？そんな義理で一緒にいられて。
好きなほうに気持ちが悪くのは当たり前なんだって」

直樹らしい意見だな・・・
理論的っていうか、、なんていうか、、

「なぐんで。俺もそうだったけどね。でも、結局まゆの気持ちは彼
に傾いただろ？そんなもんなんじゃないかな」

「うん・・・」

そうだけど、、
カオルには側にいて欲しいけど、、
ハッキリとしないあたしを見て、直樹は真面目な顔をした。

「じゃあ彼のこと諦めちゃいなよ。気楽だよ？もう彼のことは忘れ
ちゃいな。

俺と別れられないって彼に言えば彼も諦めるよ。

今、返事するならもれなくタイに行けちゃうかもよ。

彼の顔見るからまた流されるんだよ。もう軌道に乗ったろ？

まゆの変わりにマツもいる。あっちに行けば俺のサポートをお願い
する。

今度はまゆの仕事信じるよ。一緒にいこ。さ、どうする？3分だ

け時間あげるよ」

お互い目が合い「プッ！」と吹き出した。

「ごめんね・・・直樹」

「だろ？こんな好条件でも動かないほど好きなら、
もうどうしたらいいか、自分でわかってるよね」

「うん・・・正直に言う。今日、帰ったら連絡してみる。ありがと・・・」

「ん。そうしたほうがいい。思ったことは口にしないと、
伝わらないって言っただろ。以心伝心なんてそうそう無いよ」

ニコニコした顔で「じゃ、そろそろどこかで食事して帰ろうか」
そう言っつて腰をあげた。

「ねえ・・・あたしがさつき直樹に着いていくって言ったらどうしたの？」
歩きながら笑っつて聞いた。

「ん？それは困るなあ。。俺、ミス・タイランドと結婚しようと思っつてるから。」

キスしか褒めない人と結婚できないよ。男としてショックだし」
そう言っつて皮肉を言った。

最後に二人で食事をして、駅で別れた。

「じゃあ・・・元気だね。もう会えないと思ったたら寂しいけど、ミス・タイランドとの結婚の報告待ってるね」

「ああ。あつちは細身で眼鏡がモテるらしいよ？」

まゆも新婚旅行で来たらしいよ。その時はガイドのふりして案内してあげるから」

「そうだね。じゃ、その時はお願いしようかな・・・」

直樹、本当にありがと。直樹のこと大好きだった。憧れた甲斐があった」

「また(だった)なんだよな。俺ってそんなに魅力無いのかなあ。俺もあんな風に独りにして悪かったけど、まゆのことは本気だったよ。」

でも、やっぱり気使ってたろ。この綺麗な顔立ちが緊張させちゃうんだな」

「きつと直樹と一緒にいれば不自由な生活はしないで分かってるけど、」

どうにも家でじっとしているタイプじゃないみたい。もっと家庭的なおとなしい人

見つかるといいね。仕事をほどほどにすれば、直樹は誰よりも完璧だよ」

「そうだなあ・・・それは分かってるんだけどね。いつまでも心が少年なのよ俺は。」

たぶん俺達ってそんなとこ似てたのかもな。だから理解してくれ

るって安心してた。

まゆに不満無かったよ。ありがとな、楽しかった」

そんな冗談を言い合いながら直樹にさよならを言った。

こつちを振り向かないで、軽く手を振り歩く直樹の後姿を見送った。

「すぐ彼女見つけちゃうんだろうな　あんなにカッコイイなら・

・
放つとかないなタイ女が・・・って、自分で言うなよ、綺麗な顔
立ちって・・・」

家までの道のりを歩きながら、カオルにどう言おうか考えた。

いつも流されるように相手の気持ちを優先して、自分から大きな行動を

あまり起こさない自分にはちょっと荷が重いと感じながらも、今回ばかりは自分で

キチンとしなきゃな・・・

歩きながら携帯を取り出しカオルの番号を探した。

ドキドキする気持ちを飲み込むようにカオルに電話をかけた。

呼び出し音が鳴るたびに鼓動が激しくなり

このまま急いでボタンを押して切ってしまいそうになった。

「もしもし・・・」聞きなれたカオルの声なのに、胸が痛くなった。

「あ・・・今って暇？」

「うん。やっと不動産めぐりから開放されたところ。」

どうした？なんかあった？」

「うん・・・ちょっと会って話したいなって思って。ダメかな？」

「ダメな訳無いじゃん。あとから家行くよ」笑った声で
そう言うカオルに内心ホツとした。

そのカオルの声の向こう側で健吾が「なに？だれ？どこ行くの？」と
連打で聞く声が聞こえた。

そしてその声に混じって女の人の声も聞こえた・・・
「え？どこいくの」と・・・

奇跡とタイミンケ

電話の向こうに聞こえた女の人の声に体が冷たくなった。

「あとから家に行くよ」そう言ったカオルの言葉に

「え？どこいくの？」そう聞いた女の人の声がいつまでも耳に残った。

「あ・・・あの、、もし忙しいならいいの！」

また急に逃げの姿勢の自分が出た。

「え、、いいよ？忙しくないから」

「でもお客さんでしょ？」

本当は（彼女来てるんでしょ？）そう聞きたいのに一枚オブラートで包んだような言い方をした。

「いいんだ。そっちから誘ってくれないと俺も出にくいし。

じゃ、後から行くから」小声でカオルは電話を切った。

この前の話は嘘だったんだろうか・・・

途端にさっきの勢いは消え、あつちにもこっちにもいい顔をするカオルが浮んだ。

（もしかしたら・・・このままバレなきゃ二股しちゃえ）とか

思われてるのかもしれない・・・

落ち込んだ気持ちのまま家に戻った。

浅草で直樹に買ってもらったお土産のグラスやお菓子が入った袋をテーブルに置き、黙ってその袋を見つめた。

(こんな時・・・直樹ならどうするのか・・・)

あたしも「別れたら自分のどこに来たら？」とか格好をつけたらあたしの時のようにカオルも少しプレッシャーを感じてくれるのかなあ)

昔、直樹にそう言われたことを思い出した。

「彼と別れたら俺のところにおいで」余裕なことを言った直樹のことを

思い出しながら考えていた。

もう直樹に頼ることはできないよなあ・・・

もう会うこと無いんだから・・・

まだ今日なら東京にいるから頼ったほうがいいのかなあ・・・

どんどんネガティブに暗くなった。

そしてまた気楽なほうに逃げようとする自分を嫌だと思った。

傷つきのならば、、このまま泣いてばかりになるなら、、

いっそ直樹に頼ったほうがいいのか・・・

自分でそう思いながら、なんて自分勝手なんだろうと思った。

しばらくしてインターホンが鳴り、カオルが来た。

「もう嫌になるくらいアッチコッチ見て回ってき、せっかくの休日
が潰れたよ・・・」

でも、いい所見つけたから。まだ2週間後になるけどな。それまでちょっとまた会いにくいけど、来週の休みはどこか行こうか？なんとか健吾に言い訳するよ」

笑顔で言うカオルの顔を複雑な顔で見た。

「どうしたの変な顔して。あ……なに？浅草行つたの？へ〜って……一人で？」

お土産の袋に書いてあつたく浅草の文字を見てカオルが聞いた。

「直樹と……さつき会つたの……」

カオルの目を見ないで言つた。なんとなく目が見れなかつたのは直樹と会つたという後ろめたさでは無くカオルに対しての不信感だつた。

「えっ、こつち来てたんだ。って……二人で浅草とか行つたんだ？」

そのまま黙つて袋を見ていた。

「あの……さつき部屋に女の人いたよね……あれって由美さん？
ここでまた逃げる訳にはいかない……
そう思つてカオルの顔を見て聞いた。」

「あ……うん。そう」

「もう帰つたの？」

「いや、健吾といるけど。それよりなんだよ。呑気に観光かよ。どうなつてんだよ……」

声は普通のトーンでも顔は怒っていた。

その態度にムツときた。

自分だって呑気に彼女を呼んで健吾と3人で仲良く不動産巡りをしていたくせに。

「カオルのこの前の言葉って嘘だったんだね。あたし・・そんなの信じてバカみたい。すっごく悩んだのに！」

「なにが嘘なんだよ。嘘ついてんのそつちだろ。なにが「約束する」だよ！出来ないならそんなこと言つなよ！」

お互い険悪なムードのまま黙って立っていた。

「で。なに？話つて。俺にわざわざ彼氏と浅草行ってきたって自慢したかったの？それなら俺もう帰るけど・・土産もいらねーぞ」
冷たくそう言ってこつちを見た。

「どうしてそんなこと自慢する為にわざわざカオルのこと呼ぶ？そんなこと呼んだんじゃないわよ！それにカオルにお土産なんか買わないよ！ちゃんと言おうと思って、、そう思って電話したのに！」

泣きそうになったけど、なんでも泣けばいいと思われるのが悔しくて我慢した。

「なにを？やっぱり彼氏と別れることできませんって？あの日のことは単なる浮気だから彼氏に内緒にしてくださいって言いたかったの？ならいいよ。俺、言わないから」

そう言っただけでクルリと玄関のほうを向いて歩いて行った。

<浮気>と言われてカチンときた。

自分じゃない！そう思い玄関で靴を履くカオルに向って

「あたしカオルみたいに付き合ってるのに浮気なんかしない！前の時だって、もう終わりだと思ったから、そう思ったから辛くて直樹のとこ行ったのに。今回だって浮気じゃないもん！もうとっくの昔に別れてるもん！バカ！」

怒って手元にあったクッションを投げつけ玄関に通じるドアを思い切り閉めた。

玄関を開ける音はいくら耳を澄ませて聞こえなかった。

しばらくシーンとした後、思い切り締めたドアがカチャ・・と開き、カオルがソロソロと顔を出した。

「あのさ、俺の聞き間違いじゃなければとっくの昔に別れたとっけで聞こえたんだけど」

「もう帰っていいよ。早く彼女の所に帰れば？あたしも言わないから、この前のこと。」

あたし達、体の相性いいもんね。ちょっと浮気してみたくなかったんでしょ？忘れるから！」

視線をそらして違うほうを見ながら言った。

「ちよ、お前、バカにすんなよ！俺は付き合ってる時、浮気なんかしたことねーぞ！」

ムツとした感じで声を大きくし、こっちに歩いてきてカオルがそう言った。

「へ〜！ この前のは浮気じゃないんだ？

カオルの浮気ってどうすれば浮気なんだろうね？

なにが愛してるよ！信じらんない。いいからもう帰ってよ！」

昔だってこんなにお互い怒って喧嘩なんかしたこと無かった・・・
あたしもカオルの嫌がることを言わなかったし、カオルだって
声を大きくして文句を言うことなんか一度も無かった。

「さっきいきなり怒って悪かったって。もう少し頭冷やして冷静に話しようって。」

「さっきの話本当？もう別れてるって。じゃあ今日なんで会ったの？その、向田さんに」

低姿勢なカオルの顔を見て、このまま帰してもきつと
後々気まずいのも困るので少し冷静に話しをしようと思った。

「直樹とはもうこっちに來るって決めた時に別れてたの。」

で、今日直樹がこっちに來るのがもう最後だって。

あたし達、もうそんな関係じゃないから、仕事のこと

お世話にはなってるけど、ただそれだけだから。

それに・・・来年海外転勤になるから、もう会うこと無いだろう・・・って

だからそれもあつて最後にちょっと一緒に直樹が行つてみたいって言う所に遊びに行つただけ！」

冷静に言おうと思ったが、ちょっといつもより声が大きかった。

「じゃあ・・・もう別れてかなりになるってこと？」

俺に偶然会った時も、もう別れてたの？なんで嘘ついたんだよ」

「だってカオル彼女いるって思ったし、そんなこといまさら格好悪くて言えないよ」

そう言っただけとカオルの顔を見た。
気の抜けた顔をして

「お前・・・馬鹿だな」

呆れた顔をして言った。

こんな時にあらためて言うことかよ！そう思ったが黙っていた。

「で・・・さつきから言ってる俺の彼女のことだけどぞ」
その言葉に黙って顔を見ていた。

「お前、気がつかないの？あの部屋見たり普段の俺見てて？」
「なにが？」

「どー見ても彼女がいそうには見えないうぞ・・・ってこと」

「だって今、家にいるんでしょ？サッカーだって行ったんでしょ？
この前、夜にだって電話きたじゃない！この場におよんで嘘つくの！」

「へ？まさか・・・由美のこと言ってるの？」

くまさかよってなんだよ！そう思いながら訝しげな顔でカオルのこ

とを見ていた。

「お前・・・会ったことあるだろ？由美。

うちの妹。去年からこつちに出てきたんだよ。

なんかさ、健吾とちよくちよく会ってるみたいで今日も一緒だったんだ。

まさか・・・勘違いとかしてないよな？由美が彼女だって」

そのまさかだと言うには、ちよつと重たい空気だった・・・
散々、眠れなくて悩んだ相手が妹だったなんて・・・

「お、思っけてないよ　そ、そんなこと・・・」

シーンとした空気の中、頭の中で考えた・・・

（結局・・・カオルの彼女っていないの？妹って由美ちゃんて言うんだ・・・

別に聞いたことなかったもんなあ・・・あ！だからこの前健吾が笑ってたんだ！）

力が抜けてソファアにボンツと座った。

隣の空いたスペースに同じくカオルも無言で座った。

「ねえ・・・どうして彼女いるなんて嘘言っただの？」

「だって・・・花嫁修業なんていきなり言われたら、

つい見栄張っちゃった・・・いないなんて言える雰囲気じゃなかったし」

「デイズニールランド行くまで嘘言っただろ？」

「それはあ、、、、デートの定番ってそんな感じかなって。だって

信じただろ？」

また脱力が強くなった・・・

「健吾・・・」

カオルがポツリと呟いた言葉にハッ！としてカオルの顔を見た。

「また健吾知ってたんだな全部」

そう言っただけカオルが（やられたー）と言う顔をして少し笑った。

「アイツ・・・口堅いな？そう思うと」

「うん、でもきつと心の中でワクワクしながら黙ってたんだろね・
」

「俺がずっとまゆのこと忘れられないって健吾知ってたのになあ・
」

「あたしも・・・まだカオルのこと好きって健吾知ってたのになあ・
」

二人で前を向いたまま呟いた言葉に目が合った。

「アイツ応援してたんだか、そうじゃないのか分からん奴だな」
「うん、」

二人でそんな健吾のニヤニヤした顔を思い浮かべ力無く笑った。

だからこの前もなにも言わなかったんだ・・・
あんなにバレそうなのが Continuing もニヤニヤしていたんだ。

「俺のどこ、戻ってきちゃう？」

ニヤツと笑いこっちを見てカオルが言った。

「戻ってきてほしい？」

同じような顔をして言い返した。

「戻りたいなら戻ってもいいよ？どっちでもいいよ」
そう言っソファァーに寄りかかった。

「そうなんだ・・・ 直樹がタイと一緒に行かないか？って。
カオルが戻ってこなくていいって言うなら行っちゃおうかなあ」
せっかくカオルのそこ戻ろうと思ったけど・・・」
ちよつと残念そうな顔で前を向いた。

「ちよ、待てよ！来なくていいなんて言っないじゃん。
ったく・・・もつと素直になれよなあ」
ジロツと睨みながらそう言っ肩に手をまわした。

ちよつと笑いながらそのままカオルに寄りかかり、

「もう離れない・・・ 今度は仕事辞めろっ言われたら
素直に辞める。カオルの実家にも行く。もうなんだっ言っこと
聞いちゃう！」
そう言っ抱きついた。

「やっぱ俺って・・・奇跡を呼ぶ男だなあ

こんな頑固な女、なんでも言うこと聞くって言わせるんだから
そう言っただけで満足げな顔で、古臭い映画のようにアゴを触り変な芝居
をした。

「俺ももう離さない。長かった〜 2年半だぞ？」
そう言っただけで抱きついた体に力を入れた。

カオルの携帯がいきなり鳴りお互い抱き合ったまま、
片手でカオルが電話に出た。

「どこにいるんだよ？もしかしてまゆの所？」

ちよつと響いた健吾の声が携帯から聞こえた。

「ああ。俺、今日帰らないわ。なんならその部屋お前にやるよ。
由美のこと頼んだぞ。じゃ、あとは邪魔しないでくれな。
それと、長々と意地悪してくれてありがとうな！」

「え？もしかして、バレた？」

「お前なあ……。つたく、」

「だっただけでお前等見ているとバカみたいで可笑しくてさ。お互い勘違
いして鈍感なんだもの。」

俺じゃなくても、「コイツら・・・アホだな」って思うぞ？社長
達と賭けてただけだな。後一ヶ月遅かったら、俺全額もらえた
のに。ちえつ、」

「部長達もグルかよ・・・」

「当たり前だろ？ばーか！ま、上手くいったなら良かったな。じゃ、ほどほどに」

携帯を閉じ、二人で顔を見て「なんだかな」^とと弱い笑いをした。

「でも、カオル。こんなに待ってたってこと？もしかして
会わなかったかもしれないのに」

「いや？でもちゃんとした彼女は　たしかまゆと別れて
半年くらいしてからちよつと居たかな？あんまり乗り気じゃ無か
ったけど。」

でも、またいつもの感じですぐ別れちゃった。俺、マメじゃない
から。

で・・・その次の年は夏にちよつとまたヤス達とナンパとかし
て遊んで

ま・・・それほど真面目に待ってた訳でもないかな？」

その言葉に思い切り顔を抓った。

「ちよつと・・・まだそんなことしてるの？」

最低　なにそれ？なにが長かったよ！」

「いや、痛いって、、でもほら、まゆだって仲良くやってたん
だろ？」

回数にしたらまゆのほづがヤッって・・・」

話の途中でもっと強く頬を抓り、少しねじって指を離した。

「痛ったあゝでも彼女いたら浮気しないってば。
なんだよ・・・しおらしくしてんのさっきだけかよあ・・・」
赤くなつた頬を撫でながら言った。

「なんだか信用ならないなあ。そんなに簡単にポンポンと
抱けるもの？好きでもないのに」

「気合の入れ方が違うだろよ！

ナンパの女にはキスはしない。俺のポリシーだから」
そう言つて大げさに何度もわざと音をさせキスをした。

「もうそんなことしない？」

いつでも抓れるように準備をして頬を親指と人指し指で挟み
少し睨みながら聞いた。

「しないって。俺ももうすぐ30だぞ？それ限界だろお。

それに、、あんまり楽しくなかったし。もう絶対しない。
誰を抱いてもまゆのこと考えた。まゆも・・・もうダメだぞ」

そして離れていた時間を縮めるような長いキスをした・・・
沢山悩んだし、沢山泣いたし、そして・・・なにより
これからも沢山カオルのことを好きになると思った。

最初は文字しか知らなかったカオルがいまこうして目の前にいる。
ちよつと遠回りしたけど、やっと自分の場所を見つけたような気が
して

安心した気持ちになれた。

「まゆ・・・矢吹梨緒は現実になりそう？」

唇を離し、カオルが笑いながら聞いた。

「ん。現実にしてね」ニッコリ微笑んで返事をした。

「うわぁ・・・俺、今のプロポーズ最高お・・・」
そう言ってまた唇を重ねた。

すべての偶然とタイミングに感謝した。

あの時期に直樹と別れたこと、祐子さんがこの仕事に誘ってくれたこと、

そして、まだカオルがずっと好きでいてくれたこと、

自分の中でカオルのことを好きでいたこと・・・

一本の回線が導いてくれた、この奇跡を・・・

健吾が意地悪しなきゃもっと早くに片づいたけど・・・

<FIN>

奇跡とタイミング（後書き）

最後まで見ていただいた方、ありがとうございます。後半で「あ、もしかして」って気がついた方も多かったと思いますが、キーワードは「似たもの同士」ってことで（^^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9668e/>

もっと側において（続・ネット恋愛）

2010年10月14日14時58分発行